

9609 | space
Design

スペースデザイン ISSN 0563-0991
第384号1996年9月1日発行
毎月1回1日発行
昭和40年2月5日第三種郵便物許可

SD

デンマーク・モダンハウスの最盛期

The Heyday of the Modern House in Denmark

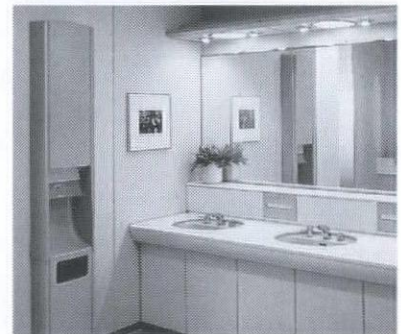
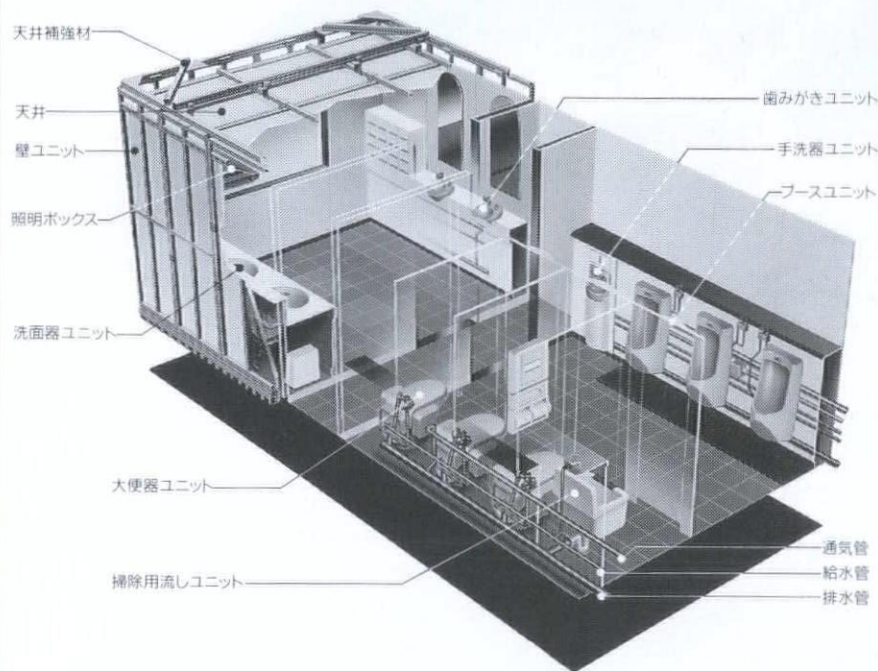
イエメン：山上の都市と塔の家
Yemen: Mountaintop Villages and Tower Houses

暑さも、寒さも、二オイも感じない。
それは、快適を感じているのだ。



(熱学をつきつめると、環境の未来が見えてくる。) 快適とは、人に不快な要素を与えないこと。この実に当たり前のことのために、私たちはさまざまな工夫をしています。たとえば、ドーム球場。大規模空間の温湿度、気流を制御し、快適なコンディションでプレーを演出。その他にも、工場、空港、テーマパークやコンサートホールなど…。オーダーメイドのシステムで、みなさまのニーズにお応えします。

アメニティなトイレ空間を 一括設計施工します。



■均質な仕上げ:配管、仕上げ材等はあらかじめ現場に合わせ、工場で加工、出荷。また、各部材に調整機構が設けられています。

■脱臭機能: オゾン脱臭と排気脱臭の2つの方式でトイレのニオイを追放します。

■快適機能を充実: 効率的な洗浄や器具にふれずに洗浄できるノンタッチ機能付き。

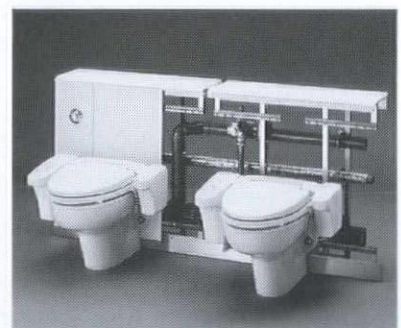
■簡単なメンテナンス: 着脱式の前面板(ライニングユニット)など、TOTO独自の構造で点検・修理等の作業性を向上させています。さらにリニューアル時にもメリットを発揮。

■掃除がラク: 凹凸の少ないデザインです。

■工期の短縮: 13職種におよぶ従来工事の設計・施工段階の作業を簡素化、養生の手間もなく、工事管理に余裕も生まれます。

■施工の省力化: 従来の床下ではなく、床上配管方式のユニットを組立てるだけですから、手配や段取りの手間を削減でき、トータルコストが軽減されます。ユニットのみもお引受けいたします。

■耐震性: 独立構造により抜群です。



トータルな視点からの快適さ

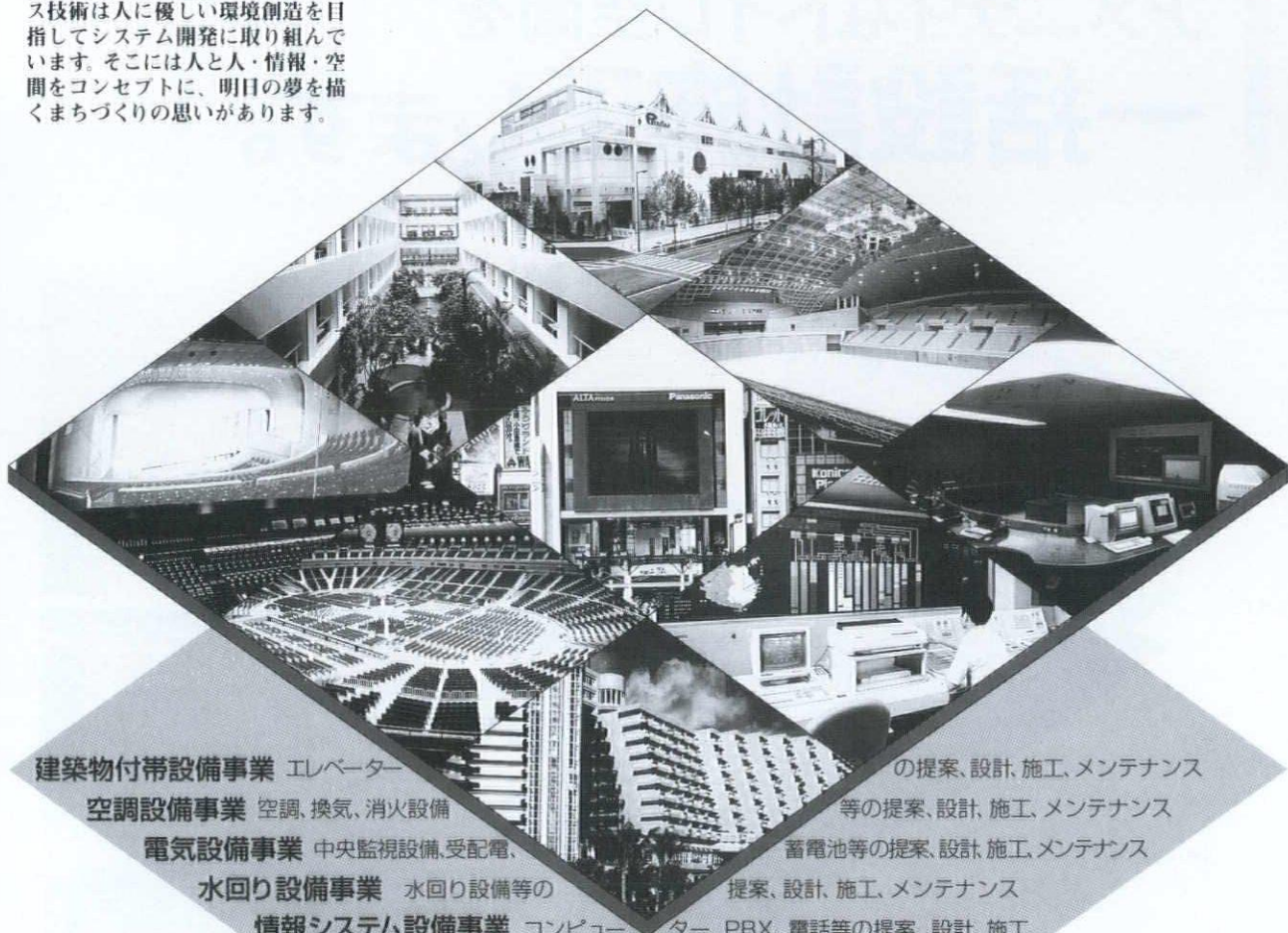
TOTOシステムトイレ

カタログご希望の方は、〒107 東京都港区赤坂7-3-37 東陶機器株式会社 広告宣伝「システムトイレ」係まで住所・氏名・電話番号を記入のうえご請求ください。

National/Panasonic

私たちは快適をシステムにしてお届けします。

松下電器産業の建設エレクトロニクス技術は人に優しい環境創造を目指してシステム開発に取り組んでいます。そこには人と人・情報・空間をコンセプトに、明日の夢を描くまちづくりの思いがあります。



建築物付帯設備事業 エレベーター

空調設備事業 空調、換気、消火設備

電気設備事業 中央監視設備、受配電、

水回り設備事業 水回り設備等の

情報システム設備事業 コンピューター、PBX、電話等の提案、設計、施工、メンテナンス

映像・音響設備事業 映像、音響システムの提案、設計、施工、メンテナンス

まちづくり事業 都市再開発、施設開発、環境創造の提案、設計

の提案、設計、施工、メンテナンス

等の提案、設計、施工、メンテナンス

蓄電池等の提案、設計、施工、メンテナンス

提案、設計、施工、メンテナンス

FLAPS、羽ばたくという意味をもつ新キーワード「AV & CC FLAPS」は映像・音響・情報通信システム・食品流通・照明・空調・水管理・搬送とさまざまな設備システムの融合により真の快適環境を求め夢の実現へと願いをこめて事業展開を進めていきます。



松下電器産業株式会社

建設システム営業本部 ☎03-5500-7504

北海道支店 ☎011-207-7722

東北支店 ☎022-711-3551

新潟支店 ☎025-246-1031

関東支店 ☎0286-37-2241

神奈川支店 ☎045-651-5051

建設システム営業本部中部支店 ☎052-951-6010

長野支店 ☎0262-26-3990

北陸支店 ☎0762-23-1121

静岡支店 ☎054-247-5155

建設システム営業本部関西支店 ☎06-949-2111

中国支店 ☎082-247-5272

四国支店 ☎0878-26-1711

九州支店 ☎092-431-1100

沖縄支店 ☎098-869-2926

AV & CC FLAPS

AUDIO VISUAL COMMUNICATION COMPUTER FOOD LIGHT AIR&AQUA PASSAGE SOFTWARE&SYSTEM

日本アス仕様

それぞれの味を生かし

防水仕様をすべて濃縮!!

メルタン21

カスタムEE

NPシート

ベストロン

NS防水

カナート



総合防水メーカー

日新工業株式会社

営業本部 103/東京都中央区日本橋久松町9-2 ☎03(5644)7211(代表)

東京	☎03(5644)7221 (代表)	福岡	☎092(451)1095 (代表)
千葉	☎043(245)0201 (代表)	札幌	☎011(281)6328 (代表)
横浜	☎045(316)7885 (代表)	仙台	☎022(263)0315 (代表)
大阪	☎048(642)5811 (代表)	広島	☎082(294)6006 (代表)
名古屋	☎06 (533)3191 (代表)	高松	☎0878(34)0336 (代表)
	☎052(933)4761 (代表)	金沢	☎0762(22)3321 (代表)

広告についてのお問合せの際は<SDを見て>と御明記願います

スポーツ、イベント、コンベンションなど、多様な用途に対応するドーム空間は
地域の活性化、新しい街づくりの中核をなす施設として全国各地で注目を集めています。

しかし、さまざまなイベントを成功させるためには、

高度な機能はもちろん、ひとびとを包む快適かつ創造性に満ちた空間が求められます。

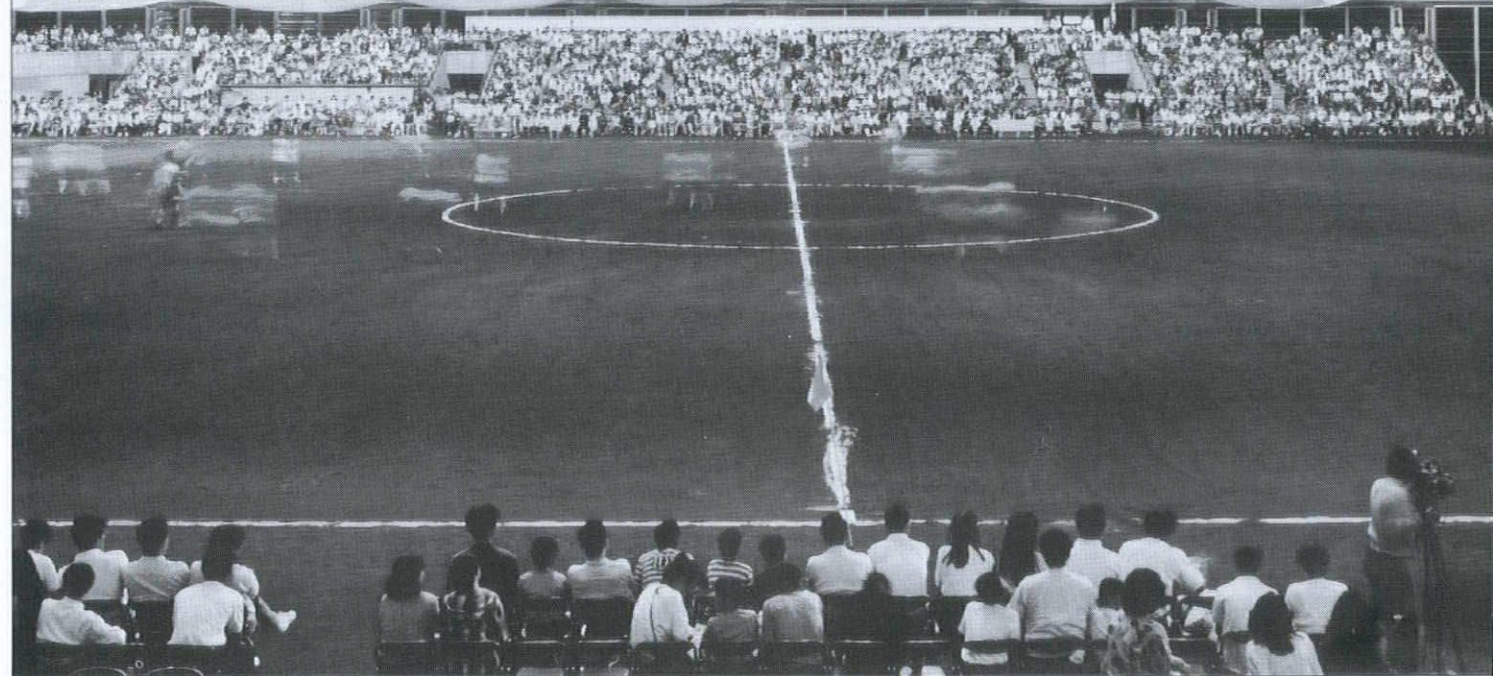
これらの要求に応え、カジマは数多くの大空間建設で培った実績と先進技術を結集し、各種ドームを開発。

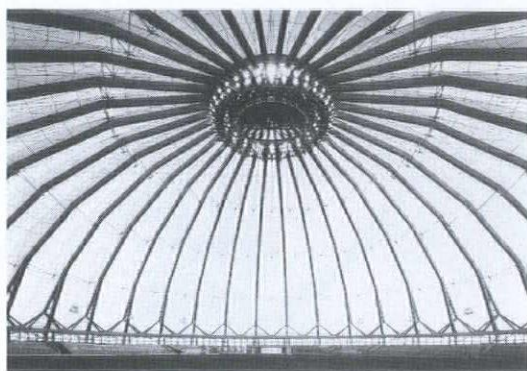
それぞれの地域、用途、目的にもっともふさわしいドームを提案、実現してきました。

すでに、これらのドームでは、野球やサッカーなどのスポーツやコンサート、文化・産業イベントなどが開催され、

ひとびとにダイナミックな空間体験と大きな感動を与えています。

熱中大空間

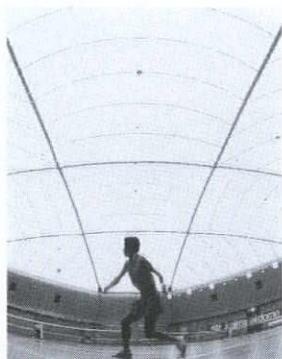




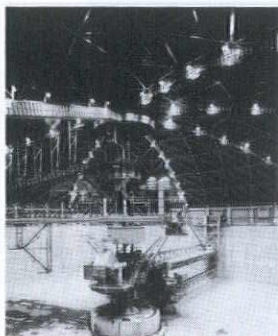
出雲ドーム(木造ドーム)
大空間に日本の伝統美を生かした木造とスチールによるハイブリッド膜構造。



あきたスカイドーム(スーパーパラソル・ドーム)
自然光を透過する膜屋根とスチール造のスーパー・スペースアーチによるハイブリッド膜構造。

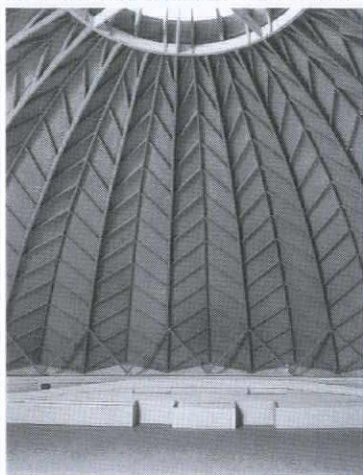


クリエイティブ・テニスガーデン千葉(エアドーム)
膜屋根を空気で支えるため超大スパンにも対応が可能、戸外のような明るい大空間。



竹原火力発電所貯炭場内部(ラメラドーム)
安全性・経済性にすぐれ、あらゆる用途に対応できる鉄骨ドーム。

信州博覧会グローバルドーム(木造ドーム)
国産から松材による大断面集成材をはじめて採用。



新国技館(スチールトラス)
多様な設計条件にフレキシブルに対応できる豊富なトラス技術ラインナップと建設実績。

大空間の安全を支える 確かな技術。

強風や地震、火災、温度変化などに対し総合的な観点から最良のものを採用。コンピュータを駆使した構造解析や各種シミュレーションなどにより究極の安全性確保に努めています。

大空間をドラマチックに演出する 照明・音響技術。

スタジオ・コンサートホールなどの豊富な設計・施工実績をもとに最新の実験設備による実験・研究を重ね、それぞれの用途に応じたクオリティの高い照明・音響システムを提供しています。

より快適な室内環境をつくる 空調技術。

大型模型による温度分布シミュレーションや観客席における気流の実測を重ね、これらのデータを基に、最も快適な室内環境実現のための空調設備をトータルシステムで組み込みます。

in 鹿島

KAJIMA CORPORATION

本社：〒107 東京都港区元赤坂1-2-7

お問い合わせは

建築技術本部 (03)3404-3311(代)

四季宴会

KARUIZAWA
MEETING
& PARTY



軽井沢
ホテル 鹿島/森

ホテルオークラチェーン

ご予約・お問い合わせ:
ホテル 鹿島/森 予約係
☎ 03(3478)6220
現地 ☎ 0267(42)3535(代)
FAX: 0267(42)5335



Classical Elegance in Tokyo

19世紀初頭のヨーロッパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。
ドアマンに迎えられホテルに一步脚を踏み込めば、あなたの新しい物語がはじまります。

モダンを楽しみ、ヨーロッパを想う 東京都現代美術館宿泊プラン

■期間 ■1997年3月31日まで

※ただし12月28日～1月4日を除く※美術館の休館日は、毎週月曜日（祝日の場合は翌日）となっております。

ホテルから東京都現代美術館へ、徒歩10分。現代美術をゆったりと楽しみホテルで優雅に憩う、そんな心の贅沢を十分に満喫できるプランです。

お一人様料金

1室1名様利用（シングル）	¥16,500
1室2名様利用（ツイン）	¥13,000
1室3名様利用（トリプル）	¥11,500

※1泊朝食付・美術館入場券（常設展）・お土産・サービス料込み、税別。



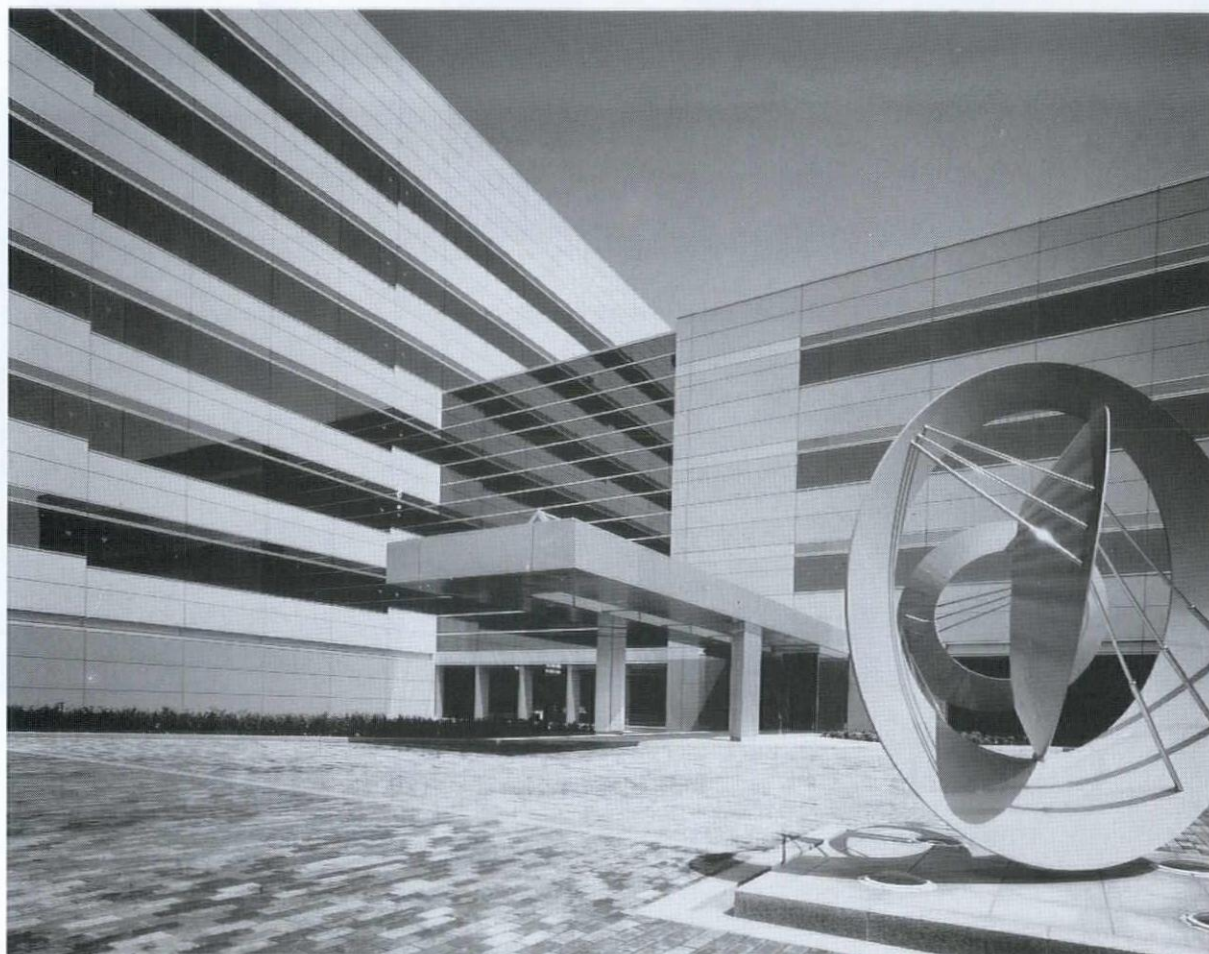
株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

ホテル イースト21東京

〒135 東京都江東区東陽6-3-3 TEL 03(5683)5683(代) FAX 03(5683)5775
地下鉄東西線「東陽町駅」より徒歩7分。東陽町駅～ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

大興物産の海外建材シリーズ

No.4 ガラス



埼玉・バイオニア鶴ヶ島総合研究所

大興物産では、米国・ガーディアン社の製品をはじめガラスの国際調達を推進しています。

この製品のお問い合わせは、大興物産株式会社・海外建材事業本部へどうぞ
〒107 東京都港区元赤坂1-3-4 TEL.03-3423-2511 FAX.03-5474-6386

建設資機材の総合商社

鹿島グループ

大興物産株式会社

本店 〒107 東京都港区元赤坂1-6-4 安全ビル

本店 ☎(03)3423-2511 FAX(03)5474-6076
東京支店 ☎(03)3423-2511 FAX(03)3423-1915
横浜支店 ☎(045)212-3925 FAX(045)212-3996
名古屋支店 ☎(052)961-6171 FAX(052)961-6179
大阪支店 ☎(06) 762-5661 FAX(06) 762-1074

札幌営業所 ☎(011)231-6841 FAX(011)222-4074
東北営業所 ☎(022)219-6861 FAX(022)219-6867
関東営業所 ☎(03)5632-6717 FAX(03)5632-6719
北陸営業所 ☎(025)247-2286 FAX(025)243-5248
広島営業所 ☎(082)249-9221 FAX(082)249-9270

四国営業所 ☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722
九州営業所 ☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996
シンガポール
オフィス ☎65-3440590 FAX65-3446714

あなたのそばに、
私はいます。

HUMAN ELECTRIC ENGINEERING NAKADATE

Type of Operations

●General Electrical Work ●Internal / External Wiring for Lighting & Power ●Electrical Work
for Power Stations & Substations ●Design, Execution & Management of Telecommunication Work

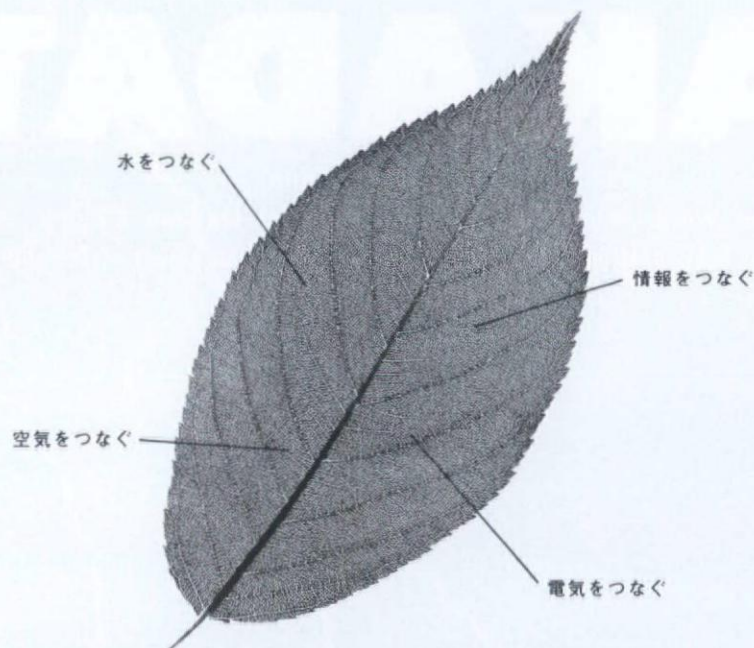
テクノロジー&システム
 **中立電気株式会社**

〒160 東京都新宿区新宿1丁目13番12号 TEL. 03(3356)3356 FAX 03(3356)2511

ビルの、工場の、街の、 すみずみに、つながろう。

私たちの仕事は、ビルに、工場に、
街に、生命を与える葉脈として、
そのすみずみにつながっています。
もっと、人が快適になる環境へ。
総合設備業の
リーディング・カンパニーとして、
先端の技術で、高度な未来を
提案し続けます。

あなたと快適をむすびます。



住友電設株式会社

大原本社 〒550 大阪市西区阿波座2-1-4 Tel 06 (537) 3400
東京本社 〒105 東京都港区芝2-2-17 Tel 03(3454) 7311

営業種目：電気設備／空調・給排水・衛生設備／
プラント設備／情報通信設備／電力流通設備／その他

建築設備の一役を担う

電気設備工事

最新の技術と信頼される施工



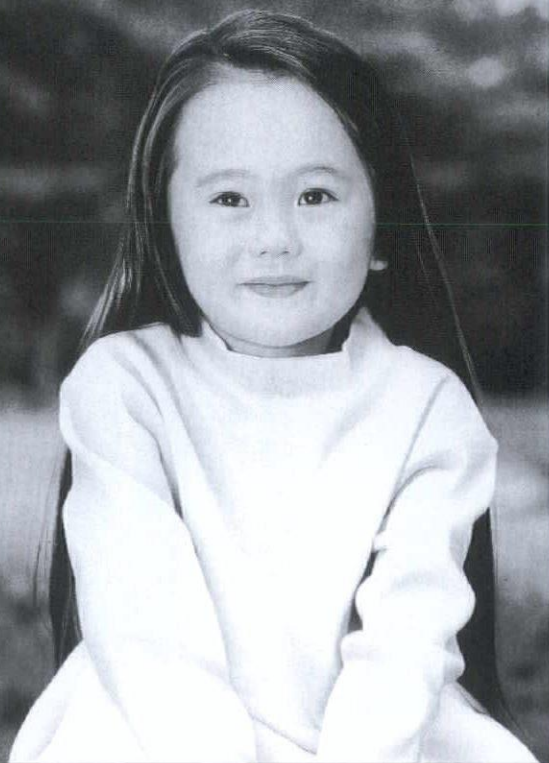
大栄電気株式会社

代表取締役社長 伊藤 赳

本社 東京都中央区銀座3-7-10 TEL 03(3562)0311(大代表)

支店営業所 大阪、名古屋、北海道、東北、北関東、東関東、神奈川、
浜松、神戸、四国、中国、九州、沖縄

自然より自然に、
あなたを包みたい。



あなたの、いちばん心地良い場所はどこですか。

きっと、多くの方が、

大自然の中をイメージされることでしょう。

私たちは、そんな快適さをあらゆる建物の内に

創造していきたいと考えています。

人間は、あくまでも自然の一部。その事実を大切に、

新しい最適環境を創造していきたい。

もっとナチュラルに、

いつもあなたのそばに、ダイダンです。

Always With You.



「僕のうちにも、もうすぐCATV。」

■情報通信メディアの明日を創る——ここにも、きんでん。

光通信やCATV、携帯電話……これら情報通信の総合設備にも
先進の技術力が光っています。

きんでんは情報・エネルギー・環境の各分野にわたって、
人と技術の調和を目指した総合設備・エンジニアリング事業を展開。
社会と暮らしのさまざまな場面に、きんでんの先進技術が活かされています。

あつ、きんでんだ。

「人にも地球にも

大切なエネルギーだから。」

■安全に安定してエネルギーを供給する
設備とシステムづくり——ここにも、きんでん。
地球環境に優しく、経済的なエネルギーの開発と
有効利用の実現に向けて、日夜取り組んでいます。



「マルチメディアは簡単になるんだ。」

■情報化社会を全方位でサポートする——ここにも、きんでん。
これまで個別だった音声・データ・映像の配線を統合したり、
光ファイバ融着技術等の新工法に取り組むなど、
多面的なネットワーク環境を構築しています。

「システムインテグレーションで、人に優しい。」

■繊細に感性豊かにシステムを制御する
——ここにも、きんでん。
多様なオフィスビルや工場・環境と生産体制に対応した、
人間中心のシステムづくりを開発・提案しています。

「良くなるね。街も人も。」

■ビルでオフィスで地域社会で、より快適な環境を創る
——ここにも、きんでん。
地域冷暖房プラントなどの環境設備。オフィス空間の機能性・快適性を提案する内装設備。
これらの多面的で総合的な設備事業を展開しています。

「海の向こうでも

活躍してるんだって。」

■地球上の各地域におよぶ海外工事の実績
——ここにも、きんでん。
1950年代に始まるきんでんの海外経歴。
習慣や国民性の異なる世界各地でも、
キメ細かな活動が続けています。

株式会社 **きんでん**

本店 〒531 大阪市北区本庄2丁目3番4号
東京本社 〒141 東京都品川区東五反田5丁目25番12号
国内事業所16カ所／海外事業所12カ所／国内関係会社19社／
海外関係会社4社／海外合弁会社6社

鹿島出版会

東京都港区赤坂6-5-13
電話 03-5561-2111 (代)
振替 00160-2-180883

年間定期購読料

25,000円 (特別定価号+送料込み)

SDバックナンバー寄庫店

〔東京〕
八重洲ブックセンター
03-3281-8203
三省堂本店(神田)
03-3233-3314
書泉ブックマート
03-3294-0011
紀伊国屋本店 03-3354-0131
大塚堂書店 03-3463-0511
〔大阪〕
旭屋書店本店

福々堂 06-443-0167
〔札幌〕
旭屋書店 011-241-3007
〔横浜〕
有隣堂本店 045-261-1231
〔京都〕
木曜堂書店 075-231-3036
〔大学生協内書店〕
東北工業大学 東京工業大学
法政大学工学部 早稲田大学
理工学部 関東学院大学

9409 思考と建築・都市：アメリカ東海岸の新たな動向 1950円
B. シャーデル&ギブニス、マイケル・ソークキン、他。文：松田雄一、他。〔「手法」から「縁起」へ〕吉川油無寄宿舍〕TAO ARCHITECTS/野田俊太郎。写真：堀内広治

9410 トロハの適した構造と空間 1950円
鉄筋コンクリートを表現の素材として追求したエドアルド・トロハの遺作を紹介。〔芸術都市への蘇生/イタリア・シベリナを試み〕地蔵で全壊した同市の復興プロジェクト

9411 シティ・ターミナルの空港建築 3500円
世界22の空港を挙げ、ターミナル・ビルに技術的、デザイン的可能性を探る。シャルル・ド・ゴール、スキポール、ヒースロー、ソウル・メトロポリタン、関西国際空港、他。文：ディヤン・スジック、他

9412 SDレビュー1994 1950円
第13回SDレビュー誌上発表。荒木正彦、Jビザル+Pルーゲ、吉松秀樹、石黒由紀+田坂繁、遠藤秀平、城戸麻和佐、中村勇太、他。〔国際競作プロジェクト/オンヴィエシム孤児院〕

9501 山本理顕 3000円
作品：緑園都市、岩田山町立総合中学校、簡易性老人デイケアセンター、保田窪第一団地、他。写真：北嶋俊治、大野敏、論文：山本理顕、宇野求、T.ヘネガン、翻訳：横田彦十+植田実+山本理顕

9502 南イタリアのバロック建築 1950円
地中海の島シチリアとプリア地方サレント半島のレッチェを中心に、南部イタリアのバロック建築を紹介。掲載都市：パレルモ、シラクサ、他。写真：小野一郎。文：竹山博英、長谷川正光、岡田哲史

9503 集合住宅の現風景 1950円
近年、集合住宅を多く手掛けてきた建築家たちの代表作・近作を紹介する。文：作品：荒木正彦、遠藤剛生、大野秀敏、富永謙、松永安光、元倉真琴。座談会：植田実+室伏次郎+松隈洋

9504 テクノスケープ 3000円
テクノロジーが作り上げた造形や景観を通して、建築・都市デザインへの新たな視線を提示する。文：宇野求、岡河貢、永瀬雅、A.ロジェ、他。座談会：中村良夫+三谷徹+宇野求、東京湾岸マッブ

9505 メガ・アーキテクチャ 1950円
巨大建築を多く手掛けたポール・アンドルーの新作紹介。シャルル・ド・ゴール空港、TGV-REX駅、他。対談：安藤忠雄+P.アンドルー。〔神戸外国人居留地の形成とその展開〕文+構成：坂本勝比古

9506 デジタル・アーキテクチャの可能性 1950円
インタビュー：原広司、伊東豊雄、N.M.ディナリ、他。CAD研究室将来の可能性：植田研究室、両角・位奇研究室、他。〔自然と共存する家具〕写真：浅川敏

9507 柳澤孝彦/美術館の空間とディテール 2700円
作品：東京都現代美術館、富岡市立美術館、郡山市立美術館、他。文：鈴木博之、内藤廣、青木淳、大野秀敏。座談会：宇佐美圭司+柏木博+柳澤孝彦。写真：村井修

9508 まちのパブリックスペース 1950円
人々の日常生活と密着した公共施設である交番・公衆トイレ・駐車場・橋・公園などを、アトリエ作家の近作からみる。作品21点。文：中川理、仙田満。オンライン座談会：青木淳+中川理+花田佳明



9509 丹下健三
最新作シンガポールの超高層ビル(UOBプラザ)、新宿の新たなスカイラインを構成する〈新宿パークタワー〉を中心に、東南アジア、ヨーロッパ、国内のプロジェクトを通して丹下健三の現在を紹介。3800円



9510 環境に呼応する建築：シーザー・ヘリの最新作
近年、海外での活躍が目立つヘリの最新作を紹介。〔ランドマーク・グラフィティ——「タワー・アート in 通天閣」ワナキュラーを電脳都市展」より〕1950円



9511 長谷川逸子：1985—95
過去10年に渡る主要作品を網羅し、長谷川逸子の現在を紹介。作品：山梨県フルーツミュージアム、新潟市民文化会館他、全30作品。論文：ピーター・クック、他。対談：多木浩二+長谷川逸子 3000円



9512 SDレビュー1995
第14回SDレビュー誌上発表。由田徹+岡本美術、李錫男、トム・ヘネガン+キテクチュア・ファクトリー〔Villa Romana: ローマのヴィラと庭園〕〔水戸岡鋭治のトランスポート・デザイン〕1950円



9601 都市づくりを仕掛ける建築家たちの実践
地方自治体主体のまちづくりプロジェクトを紹介。事例：くまもとアートポリス、クリエイティブTOWN岡山、長崎アーバン・ルネッサンス、白石メディア・ポリス 2800円



9602 建築のメモリア：イタリアの合理主義の流れ
イタリア建築の基調として流れている合理主義の現在を考察。6人の建築家の作品を紹介する。アントニオ・モネステロリ、フランコ・ステラ、他。1950円



9603 アジア同時代シリーズ2 ベトナム建築大博覧
ベトナムの都市と建築：ハノイ、フエ、ホイアン、チャンパ遺跡、ホーチミン。ベトナムの工業団地、ベトナム現代建築事情、他。文：重松豊、中沢信一郎、村松伸、他 2500円



9604 大地と光の変様
オーストラリア建築1788—
1788年入植以来のオーストラリア建築の変遷を追う。〔ネクストジェネレーション in New York: スミスマー+ハークンソンとジョエル・サンダース〕1950円



9605 多様性と調和の建築
ゲルカン+マルクの最新作
コシへの秀作で知られる大規模設計事務所90年代の新作を紹介。〔海と建築——鈴木二の最新作〕物質銀行：佐木島プロジェクト、佐木島の住宅 1950円



9606 建築家の椅子111
19世紀後半から現在に至るまでの建築家がデザインした椅子を111脚紹介。C.H. マッキントッシュ、A. ガウティ、O. ワグナー、ル・コルビュジエ、M. van D. ローエ、C. イームズ、A. ロッシ、他 3000円



9607 再考 建築家土浦竜城
戦前、戦後の作品を紹介しながら、昭和初期モダニズムにおける土浦の再評価を試みる。作品：土浦邸〔第1、2〕〔スタジオ建築計画の集住考〕最新作 FH-HOYA-IIを取りあげながら彼らの設計思想を紹介 1950円



9608 マイケル・ホブキンス
「構造上の表現がクリアな」主要作品を紹介。ホブキンス自邸、イギリス国税局新庁舎、ブラックレーン・ハウス、他〔光と空間の夢を訪ねて：ドナルド・ジャッドとヴォルター・デ・マリア〕文：南條史生 2400円

SD Review

SDレビュー1996

第15回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展

SD Review 1996

The 15th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings

[東京展]

会期：1995年9月18日（水）－9月29日（日）

12:00-19:00

会場：東京都渋谷区猿楽町18-8

ヒルサイドテラスF棟ヒルサイドフォーラム

[大阪展]

会期：1995年10月3日（木）－10月8日（火）

10:00-16:00

会場：大阪府南河内郡河南町東山

大阪芸術大学芸術情報センター展示ホール

●詳細はp.110をご覧ください

1

9

9

SD

デンマーク・モダンハウスの最盛期

編集長：相川幸二
編集スタッフ：
寺田真理子 高木伸哉
山田良 大野由美
飯塚りえ
アドバイザー：伊藤公文発行人：河相全次郎
編集人：長谷川愛子

6	レス・イズ・モアの可能性——デンマーク50年代のモダン住宅を訪ねて	木下壽子
13	デンマーク50年代は最後の黄金時代か?	リズベット・バルスレフ・ヨーゲンセン
18	ニルス・ボーアのサマーハウス別棟	ヴィルヘルム・ヴォリャト
20	グンログソン自邸	ハルドー・グンログソン
26	ソーレンセン自邸	エリック・クリスチャン・ソーレンセン
32	シェランズ・オッデの家	アルネ・ヤコブセン
36	スーホルム I	アルネ・ヤコブセン
40	ケアホルム自邸	ハンナ・ケアホルム
45	インタビュー：ハンナ・ケアホルム	
46	ソリュセヴァイの家	ハラルド・ブラム&モーゲンス・ラッセン
50	試論：デンマーク近代住宅再考	斎藤光代
52	ネアルムヴェンゲ	バツレ・スーエンソン
55	パーセルゴーオン	バツレ・スーエンソン
58	フレデンスボーのテラスハウス	ヨーン・ウッツォン
64	キンゴー・ハウス	ヨーン・ウッツォン
68	50年代のデンマーク・ランドスケープ・アーキテクチュア	マレーネ・ホークスナー
70	アロットメント・ガーデン	カール・テオドル・ソーレンセン
74	週末住宅の庭	スベン・イングバー・アンダーソン
75	ブッディング教会庭園	スベン・イングバー・アンダーソン
6	インタビュー：デンマーク・デザインのルーツを探る	インタビュアー： 木下壽子
	アルフレッド・ホーマン	
	イエンス・ムーラー・イエンセン	
	ポール・ミュギン・イエンセン	
2	職人性と近代性——デンマークのフィフティーズ	三宅理一
5	山上の都市と塔の家	文+写真=
	イエメン：都市と住居の形態学	昭和女子大学芦川研究室
90	シバーム	
96	サヌア	
98	ハジャラ	
100	ロックパレス	
102	コーカバン・シバーム	
104	クーラン	
106	スーラ	

発行所：鹿島出版会
〒107 東京都港区
赤坂6丁目5番13号電話：
(03) 5561-2551 営業
(03) 5561-2555 編集
FAX：
(03) 5561-2561 営業
(03) 5561-2565 編集
TELEX：
02422467 KAJIMA J
振替00160-2-180883番印刷・製本：
凸版印刷株式会社
〒174 東京都板橋区
志村1丁目11番1号
電話：
(03) 3968-5111 案内取次店：トーハン・日販・
大阪屋・大洋社・
葉田出版販売・誠光堂・
鈴木書店・西村書店・中央社定価：1,950円
[本体1,893円]年間直接購読料：25,000円
特別定価号・送料込み表紙：
ニルス・ボーアのサマーハウス別棟
設計：ヴィルヘルム・ヴォリャト
表紙写真：オーレ・アクホイ
表紙デザイン：小泉均

110 SD Review 1996 お知らせ

112 連載：apple tomology
トムの時空形象学 12

内部の謎

戸村 浩

114 照明探偵団：
連続実践講座レポート 7

そそろ歩きの空間——水と光の出会いかた

葛西玲子/LPA

117 新刊紹介

118 書評

120 お知らせ

123 海外建築情報リミックス：ビルディングタイプ その6
「公園——余白の再定義」

Special Feature:

The Heyday of the Modern House in Denmark

Chief Editor: Koji Aikawa
Associate Editors:
Mariko Terada
Shinya Takagi
Ryo Yamada
Yumi Ohno
Rie Iizuka
Adviser: Kobun Ito

Publisher: Zenjiro Kawai
Executive Director:
Aiko Hasegawa

6	The Potential of Less-is-More: Modern Danish Houses of the 1950s Revisited	Toshiko Kinoshita
13	Was Denmark in the 1950s Its Last Golden Age?	Lisbet Balslev Jørgensen
18	Annex to the Summer Residence of Niels Bohr	Vilhelm Wohlert
20	Gunnløgsson's Own House	Halldor Gunnløgsson
26	Sørensen's Own House	Erik Christian Sørensen
32	House at Sjællands Odde	Arne Jacobsen
36	Søholm I	Arne Jacobsen
40	Kjærholm's Own House	Hanne Kjærholm
45	Interview: Hanne Kjærholm	
46	House at Soløsevej	Harald Plum & Mogens Lassen
50	A Reconsideration of Modern Danish Houses: An Essay	Mitsuyo Saito
52	Nærumvænge	Palle Suenson
55	Parcelgården	Palle Suenson
58	Terrace Houses at Fredensborg	Jørn Utzon
64	Kingo Houses	Jørn Utzon
68	Danish Landscape Architecture of the 1950s	Malene Hauxner
70	Allotment Gardens	Carl Theodor Sørensen
74	The Garden of the Weekend House	Sven Ingvar Andersson
75	The Garden of Buddinge Church	Sven Ingvar Andersson
76	Interview: Tracing the Roots of Danish Design Alfred Homann Jens Møller-Jensen Poul Mygind Jensen	Interviewer: Toshiko Kinoshita
82	Craftmanship and Modernity: Denmark in the fifty's	Riichi Miyake

85 Yemen: Mountaintop Villages and Tower Houses

Photo+Text:
Showa Women's University,
Ashikawa Research Institute

- 90 Shibam
- 96 Sana'a
- 98 Hajjarah
- 100 Dar Al Hajar
- 102 Kawkaban Shibam
- 104 Kuhlán
- 106 Thula

110 SD Review 1996

112	Series: apple tomatology 12	Enigma of the Interior	Hiroshi Tomura
114	Symposia on Illumination:	7. Space for a Stroll: Encounter with Water and Light	Reiko Kasai, LPA
117	Book Information		
118	Book Review		
120	Announcements		
123	Eminent Works Abroad: Building Type 6 Parks—The Redefinition of Urban Blanks		

Published by
Kajima Institute Publishing
Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka,
Minato-ku, Tokyo 107,
Japan
TEL:
03 5561 2551 (Management)
03 5561 2555 (Editing)
FAX:
03 5561 2561 (Management)
03 5561 2565 (Editing)
TELEX:
02422467 KAJIMA J
Printed in Japan
This Copy: ¥1,950
¥30,000 a year
¥50,000 two years
Order Form: Page 136
Cover:
Annex to the Summer Resi-
dence of Niels Bohr
Design: Vilhelm Wohlert
Photo: Ole Akhøj
Cover Design: Hiroshi Kojima

特集

デンマーク・モダンハウスの最盛期

Special Feature

The Heyday of the Modern House in Denmark

アルネ・ヤコブセンの家具や、ヨーン・ウッツォンのシドニー・オペラハウスは知られているが、彼らの住宅作品は意外と知られていない。50年代から60年代の初頭にかけてつくられたその住宅は、日照と景観を十分に享受しながら豊かに暮らせる機能的なもので、同時に伝統に根ざしたあたたかみもある。それは、機能主義的なデザイン風土をもつデンマークで、モダニズムが伝統と対立することなく受け入れられた結果である。

「黄金時代」と呼ばれるこの時代の住宅は、家具を含めたトータルデザイン、周囲のランドスケープとの調和を特徴とする完成度の高いものであった。そして、モダン・ハウスのモデルとして世界的な影響力を持つにいたる。

デンマークのモダンハウスは生活の舞台として、いまなお新鮮さを失なっていない。

Single family houses which were designed by established modern Danish architects such as Arne Jacobsen and Jørn Utzon, during the post-war period, are not as well known as their furniture or in the case of Utzon, the famous Sydney Opera House.

In Denmark, where functional design was long established, Modernism had been adapted without confrontation with tradition. Modern houses of the period were of high quality and were totally designed throughout the entire building, including furnishings. Harmonizing the architecture with the surrounding landscape was also an important factor.

Danish modern architecture and design of the '50s and early '60s, often called "The Golden Age", was successful and influential internationally. Modern houses as introduced in this special issue still have a freshness and a strong appeal up to present time.

レス・イズ・モアの可能性——デンマーク50年代のモダン住宅を訪ねて

木下壽子

この夏、1年ぶりにデンマークのルイジアナ美術館を訪れる機会を得た。初めてこの美しい美術館を訪れた時の感動が鮮明に蘇る。それは、新鮮な驚きのなかに何ともいえぬ懐かしさが入り交じった不思議な、しかし、さわやかな感動だった。

ヨーゲン・ボーとヴィルヘルム・ヴォリャトによって1958年に設計されたルイジアナ美術館は、コペンハーゲン郊外の海岸に面したなだらかなランドスケープのなかに文字通り溶け込んでいる。今回のデンマーク旅行の目的は、黄金時代と呼ばれた50年代のモダン住宅を訪ねることにあったのだが、その合間を縫って、再三ルイジアナ美術館に足を運んだ。戦後、まずは小規模な住宅建築において育まれたデンマーク独自のモダニズムが、スケールを変えてこのルイジアナ美術館に結実しているように思えたからである。

50年代という時代

第二次世界大戦がようやく終焉し、復興と発展を共通課題に活気とオプティミスティックな空気に満ちていた1950年代。それまでモダン・ムーブメントの周縁にあり、ヨーロッパ大陸の中央でル・コルビュジエやバウハウスによって示された建築・デザインの新たな思想を吸収することに懸命だったデンマークは、50年代に入るとまさに黄金時代と呼ぶにふさわしい興隆を見せ、モダニズムの新たな局面の芽生えとデザイン王国デンマークの誕生を世界に印象づけた。この50年代がいかに活気に満ちた幸福な時代だったかということは、この時代を実際に共有した世代の人々の話から生き生きと伝わってくる。

この活気と希望に満ちた50年代に若き建築家として活動を開始し、その後、デンマークを代表する建築家として世界的な評価を得るに至ったシドニー・オペラハウスの設計者ヨーン・ウッツォンは、当時を回想して次のように述べている。

「私はあの時代、50年代に戻りたいと思う。あの時代に建築家として育ったということがいかに素晴らしいことかを当時の人間に強調

するために。デンマーク・デザインは世界の共通語になった。……活気に満ちたオプティミズムとともに、我々のメッセージは理解され、受け入れられた。世界が求めている新たなものをデンマークが創造し得るという事実。私にとってこのような環境は、国際的な視野に立って創造活動を行う勇気と熱意を与えてくれる計り知れない力となった。この時期の重要性を強調してしすぎることはない。この時期に若かった我々は、自分達は何でもできるという不思議な気持ちに満ち、世界の一員となる上でこれらのデンマークの価値観を引き継いだのだった。戦争が終わったということは多くを意味した。おそらく我々にとって、最後の戦争であろうあの戦争が。そして世界はより開かれたものに思えた……。

(建築をデザインする上で)拠り所とする経験は実に様々だが、この50年代の強いオプティミズムの感覚はとくに重要であり、私はこう自問自答するのである——今日我々は、どのような生活のために活動しているのか、と¹⁾」。

50年代のモダン住宅

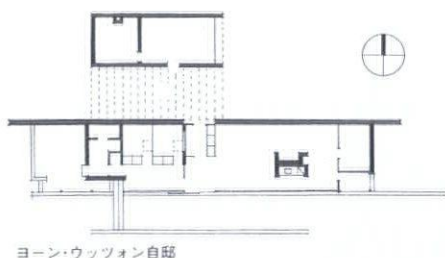
建築・デザイン分野で世界的に注目を集めたデンマークの50年代だが、その中心となったのは、住宅建築、とくに一戸建ての個人住宅と、そのインテリア・デザインを支えた家具、照明器具といった工業製品だった。小規模な住宅建築分野で優れた作品が生み出されたのは、戦中・戦後と、建築家達が大規模なプロジェクトに関わる機会に恵まれなかったこと、当時、住宅不足が深刻な社会的問題のひとつであり、これに取り組むことが建築界の大きな課題であったことなどに起因する。デンマークの建築家達は、1930年代に吸収し、戦争中、困難を余儀なくされながらもずっと温め続けてきたモダニズムの思想を、戦後、一気に住宅建築やインダストリアル・デザインに注ぎ込んだのだった。

50年代のデンマーク建築家達にとってインスピレーションの源となったのは、アメリカのフランク・ロイド・ライトやミース・ファンデル・ローエ、そしてフィンランドのアルヴァ・アアルトであり、伝統的な日本の住宅

建築だった。戦後のアメリカは、自由と進歩の中心であり、何よりもあのミースがいる国だった。当時、デンマークの若い建築家は、こぞってアメリカに出かけていったという。ウッツォンも2度、ミースに会いにアメリカを訪れている²⁾。また、行き詰まったインターナショナル・スタイルに地域的なアイデンティティを融合し、スカンジナビアのモダニズムが市民権を得る過程で最も貢献したアアルトは、近代スカンジナビア・デザインの父としてデンマークでも高く評価され、影響力をもった。さらに彼らは、建設システムを一定のモジュールによって規定しながらも、豊かで変化に富んだ空間を生み出すことが可能であること、近代的なデザインと伝統的なクラフトマンシップが共存し得ることを伝統的な日本建築から学んだのだった³⁾。クノログソン自邸、ソーレンセン自邸、あるいはルイジアナ美術館など、50年代を代表する作品には伝統的な日本建築の特質がモダンに翻訳され、巧みに応用されている。

しかし、デンマークのモダン住宅が優れた質を獲得する上でもっとも重要な背景となったのは、すでにそこに機能主義的伝統が存在していたということだったのではないだろうか。北欧の厳しい自然環境に加えて、天然資源に恵まれなかったデンマークには、機能的で無駄を省いたシンプルなデザインにこそ美を見出すという伝統があった。“Less”が“More”であるという思想を、彼らはもともと持っていたのである。1930年代に中央ヨーロッパから移植されたモダニズム、ファンクショナルイズムは、このような伝統と何ら対立することなく、すんなりと溶け込んでいったに違いない。

加えて、第二次世界大戦によってモダン・ムーブメントの中心地との繋がりが一時期とだえたことは、独自のモダニズムが発展する重要な要因となった。さらには戦争による建築材料(特にコンクリート)の不足は、必然的に伝統的な構法、材料の見直し、活用を促した。こうして、モダニズムの追求と平行して伝統が継承されていった。結果として、デンマークでは戦後、独自のモダニズムが生ま



ヨーン・ウツォン自邸

れたのである。

この独自のモダンイズムを支えたもうひとつの重要な要因に、建築と共鳴したコンセプトでデザインされた家具、照明器具といった工業製品の存在がある。その多くが建築家によってデザインされたということが、建築とインテリアの統一性というデンマークのモダン住宅の優れた特質の背景にあった。これは、新しい思想に基づいてデザインされた建築にあった家具や照明器具が市場にほとんどなかったために、建築家が建築のみならず、すべてをデザインするしかなかったという状況があったからだ、建築家によってデザインされたこの時代の家具や照明器具の中には、今も根強い人気を保っているものが多い。

こうして50年代に生み出されたモダン住宅のもっとも純粋なプロトタイプは、ウツォンの最初の自邸である一家族用住居、グンログソン自邸、ソーレンセン自邸などに見出せよう。シンプルなモジュールによるオープンな平面計画、徹底した機能性の追求、身近な構法や材料の応用、統一感のあるインテリア・デザインなどが共通した特徴であった。そして、これらのプロトタイプは、その後、例えばウツォンの〈キングー・ハウス〉のようなより大規模な住宅計画やルイジアナ美術館など住宅以外の建築に、スケールを変えて応用されていった。

モダン住宅の今日的意義

歴史的に見れば、戦後のデンマークにおいて、19世紀の後半以来追求されてきた工業化社会における中流階級の住宅のモデルを創出するという近代的な課題**に対するひとつの答えが示されたと考えられないだろうか。社会のマジョリティを占める一般庶民が、経済的かつ質の高い住空間と日用品を獲得し得る可能性を、デンマークのモダン住宅は示しているように思えるのである。

今、20世紀半ばのモダン住宅を振り返ることは何を意味するのだろうか。私見だが、今回デンマークのモダン住宅を訪ねて感じたことは、単に懐かしさや現在に対する否定的な感情から旧き良き時代を振り返るというのでは

なく、今やすでに伝統の域に達したこの時代の建築を我々が今後どのように継承し、一般の建築に還元していくかを考えることの重要性だった。そして、半世紀前のモダン住宅が我々の目にこれほど新鮮に映る背景には、今日の日本の建築・デザインが抱える、コンセプトそのものの不健全さや現実的な問題とのズレといった、根本的であるだけに深刻な問題があるように思えた。

デンマークで様々な人とこの時代について語り合ったなかで最も印象的だったのは、50年代に確立された伝統を継承し、それをさらに発展させていこうとする彼らの堅実な姿勢であった。“Less is More”の思想が今も、あるいは今だからこそ有効であることを、彼らは確信しているのである。

見納めにと、デンマークを発つ前日に再びルイジアナ美術館に足を運んだ。ランドスケープと建築とアートが一体化した心地良い空間を歩きながら、この建築から受ける新鮮さと懐かしさ、あるいは静かに身体と感覚に語りかける理屈抜きに素晴らしい空間の所以をぼんやりと考えた。そして、旅の終りに、ようやく自分なりの答えを見つけられたように思う。

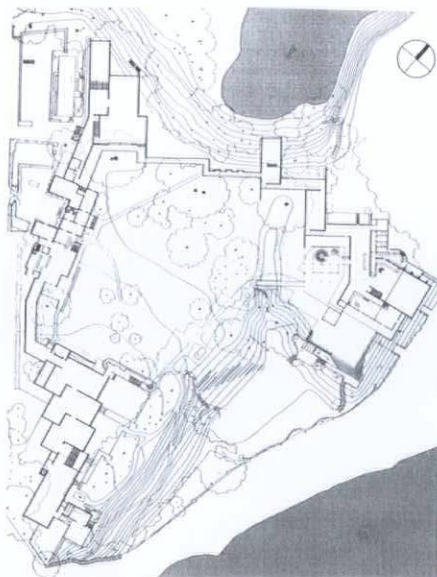
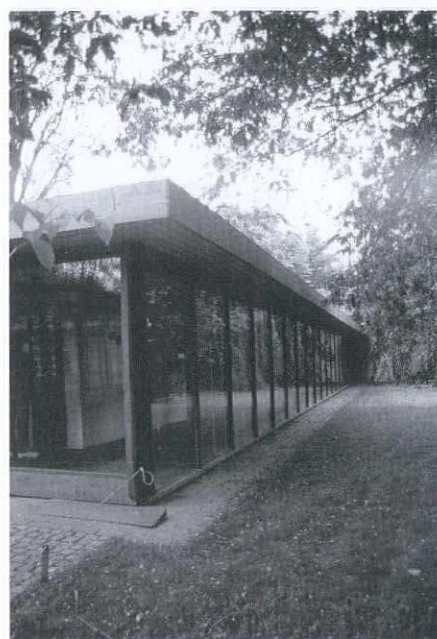
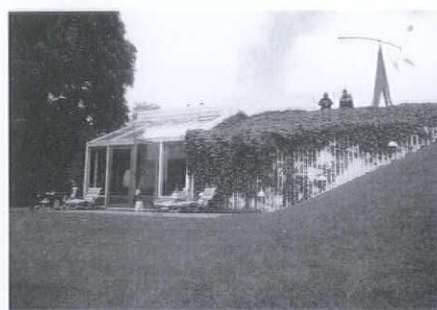
●きのした・としこ／ロンドン大学大学院

* 1: “Living Architecture”, No.14

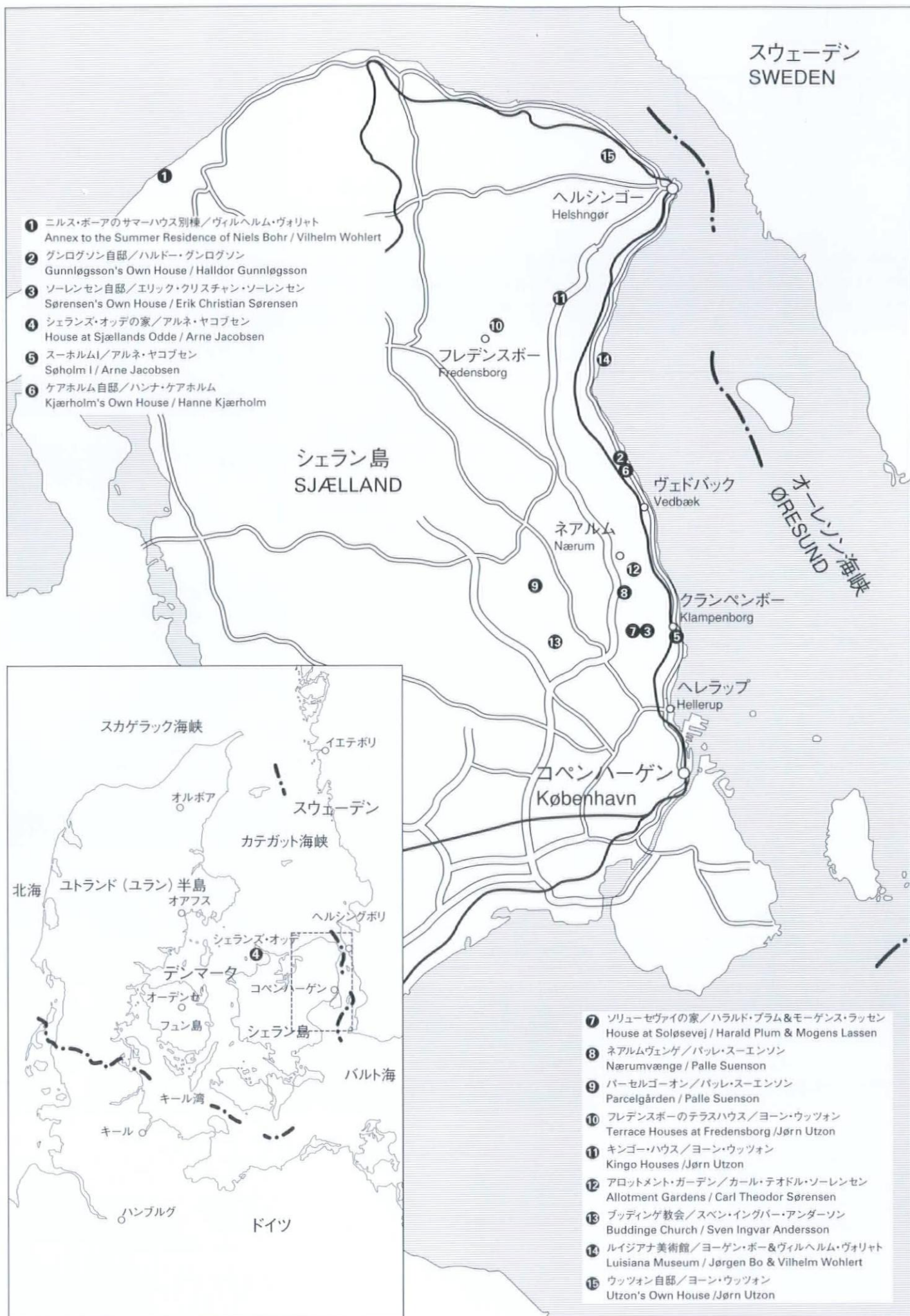
* 2: “Living Architecture”, No.14

* 3: 建築史家のヨーゲンセン氏によると、当時デンマークの建築家達はブルーノ・タウトの『日本の住宅と日本人』やノーマン・F. カークワースの『日本建築の形態と空間』など、ヨーロッパ人の目から描いた日本建築の著書を熱心に研究したという。

* 4: すなわち、19世紀後半のイギリスにおける「ドメスティック・リヴァイヴァル」および「アーツ・アンド・クラフツ」運動に端を発し、『英国の住宅』の著者、ヘルマン・ムテジウスによって具体的に提起された、中流階級に小住宅のいかに満足を見出すかという問題。



ルイジアナ美術館、写真提供：木下壽子



スウェーデン
SWEDEN

- ① ニルス・ボーアのサマーハウス別荘 / ヴィルヘルム・ヴォリャト
Annex to the Summer Residence of Niels Bohr / Vilhelm Wohlert
- ② グンログソン自邸 / ハルドー・グンログソン
Gunnlogsson's Own House / Halldor Gunnlogsson
- ③ ソーレンセン自邸 / エリック・クリスチャン・ソーレンセン
Sørensen's Own House / Erik Christian Sørensen
- ④ シェランズ・オッデの家 / アルネ・ヤコブセン
House at Sjællands Odde / Arne Jacobsen
- ⑤ スーホルム I / アルネ・ヤコブセン
Søholm I / Arne Jacobsen
- ⑥ ケアホルム自邸 / ハンナ・ケアホルム
Kjærholm's Own House / Hanne Kjærholm

シェラン島
SJÆLLAND

ヘルシンゴー
Helsingør

フレデンスボー
Fredensborg

ヴェドバック
Vedbæk

ネアルム
Nærum

克蘭ペンボー
Klampenborg

ヘレラップ
Hellerup

コペンハーゲン
København

オーレン海峡
ØRESUND

スカゲラック海峡

スウェーデン

カテガット海峡

北海 ユトランド (ユラン) 半島
オアフス

ヘルシングボリ

デンマーク

オーデンセ

フン島

コペンハーゲン

シェラン島

バルト海

キール湾

キール

ハンブルグ

ドイツ

- ⑦ ソリュセヴァイの家 / ハラルド・プラム & モーゲンス・ラッセン
House at Soløsevej / Harald Plum & Mogens Lassen
- ⑧ ネアルムヴェンゲ / パル・スーエンソン
Nærumvænge / Palle Suenson
- ⑨ パーセルゴーオン / パル・スーエンソン
Parcelgården / Palle Suenson
- ⑩ フレデンスボーのテラスハウス / ヨーン・ウッツォン
Terrace Houses at Fredensborg / Jørn Utzon
- ⑪ キンゴー・ハウス / ヨーン・ウッツォン
Kingo Houses / Jørn Utzon
- ⑫ アロットメント・ガーデン / カール・テオドル・ソーレンセン
Allotment Gardens / Carl Theodor Sørensen
- ⑬ ブッディング教会 / スベン・イングヴァー・アンダーソン
Buddinge Church / Sven Ingvar Andersson
- ⑭ ルイジアナ美術館 / ヨーゲン・ボー & ヴィルヘルム・ヴォリャト
Luisiana Museum / Jørgen Bo & Vilhelm Wohlert
- ⑮ ウッツォン自邸 / ヨーン・ウッツォン
Utzon's Own House / Jørn Utzon



フレデンスボアのテラスハウス



キンゴ-ハウス



グンログソン自邸



キンゴローハウス

デンマークの50年代は最後の黄金時代か？

リズベット・バルスレフ・ヨーゲンセン／訳＝浅野光一

デンマークにおけるモダニズムは、北欧の他の国々に比べ、よりはっきりとした方向性をもちながら進展した。その理由はいろいろあるが、過去の建築を研究したり、国民が過去の社会の変化を理解しそれに敬意を表したこと等が、当然の理由として挙げられる。その根底には、国民的哲学者として、かつ国民学校の創設者として知られたN.F.S.グルントヴィ（1783-1872年）が、国民に対して、次のような考え方を植え付けていたことにも依る。それはつまり、確立された個人の人格に対して尊敬の念を抱くことであり、今なお国の法律にも、また政治家の選挙民に対する対応の中にも反映されている。「国民にとっての健全なる教育は、黒い大地にとっての太陽の輝きにも値する」と、生徒達は学校で謳ったのであった。

デンマークは数多くの島を持ち、農業を営む国でもある。自然景観の特徴は、内陸氷河の浸食により形成された丘や谷が見られることだが、それらは比較的フラットで、最も高い山でも標高147mでしかない。与えられた建築の素材としては、砂、氷河の運んできた石、そして、粘土程度しかない。人々は、強風や寒さから身を守る必要があり、明かりや、陽の暖かさを求めて集まり住んだのである。何につけても「極端な偏り」や、「熱狂」と言ったものはない。平坦な国土に象徴されるがごとく、何事においても誇張が見られない。全てにおいて、高価過ぎても、贅沢過ぎても、高慢に思われてもいけない。低い太陽の鈍い光、頻繁にかかる霧などのために景観の持つコントラストは、抑えられてしまう。しかし、ここで映し出される微妙なニュアンスが、日ごとに、微かな変化をもたらすのである。中庸的な表現や、高価でもない素材などを駆使せざるを得ない状況の中から、人は素材の持つ性質とその効果を学びとる必要に迫られたり、また造形物の詳細部分が、人の視覚に訴えることの重要性をも認識する必要があった。

やがて、国の状況によく適合し、しかも、表現において慎重な進展を見せた新しい時代が到来した。例えば、コペンハーゲンの王立

芸術アカデミーの学長でもあった、建築家カイ・フィスカー（1893-1965年）は、それを「機能的伝統」と呼んだ（*Arkitekten*, 1950.5-6号, p. 69-100）。この未成熟の機能主義は、大学の教師達の間では重要視されることはなかった。彼らは、従来の伝統的なスタイルを死守せねばならず、機能主義などは単なる新しい形式主義にしか写らなかった。

第二次大戦後、フィスカーはアメリカの友人達との交流を再開した。前述の記事の中で彼は、アメリカの経験主義的な建築に関する論文を載せ、自分が特に「湾岸スタイル」に強い印象を受けたことを述べている。このスタイルは、ルイス・マンフォードによると、「独自に成長してきたパイオニア的建築の中のひとつが受け継がれたもの」である。このグループに属する建築家には、ジョン・ハワード、B.メイベック、グリーン兄弟などがいた。これら大物の作品や、F.L.ライト本人とその作品に触れることが、1930年以来、デンマークの建築家達にとっての、アメリカ旅行の目的であり、大戦後もそれは続いたのであった。彼らの作品には、ユニークな手工芸的な特徴が見られ、日本からの影響も見えて取ることができ、多くの賞賛を浴びたのであった。デンマークの多くの建築家たちは、ブルーノ・タウトの『日本の住宅と日本人』（1938年）を読みふけた。さらに、ライトの弟子で帝国ホテルの完成後日本に定住した、アントニン・レーモンドをも詳細に研究した（*Architectural Detail*, 1938）。アメリカでは、ミースや、グロピウスにまで、彼らの探究心はおよんだ。古風なヨーロッパ建築も、イタリアの山岳都市や広場も、ローマの大建造物までも、彼らは、新しい視点で観察し直した。また、パリに行けば、フランス政府も心のゆとりを見せ、多くの我が国の学生達に、劇場や、博物館、さらに食堂でのチケットまで与えてくれたのであった。

*Arkitektur*誌の記事「次の段階」（1950年3月号）を読んで、フィスカーは、今世紀の真ん中を期に決意を新たにした。新しい、より人間的なモダニズムは、過去の経験を基

盤にしその上に成り立つべきものである。フィスカーは自分の生涯を通じて、教育というものをより進展性のある方向へ、確固たる信念を持って導いたひとりの指導者であった。彼は自分の講義の中で、世界中から撮り集めたスライドを見せ、形式に拘らない過去の経験から造り出された新しい建築を紹介していた。

新しい事を発見すると我々は、過去概念の中に類似することを探してまず認識する。その時、我々は自らの知覚世界を自覚する。発見することは、再認識することである。デンマーク建築界の理論家の中で、グルントヴィ派で、エンジニアかつ工匠であった、ピーター・ヴィルヘルム・イェンセン・クリント（1853-1930年）は、自分の過去10年間の講義をまとめて、1911年に、『建築工匠学校』と題して出版した。その中で、永遠の真理を力強い言葉で次のように述べた。「我々は、対象物やその拡張りや、素材などに潜む本質、その時代の要求を見極めるべきであり、決して過去の決められた様式に陥ることなく、昔から受け継がれた貴重な価値ある本質を充分研究し、その上に、我々の独自の様式を生み出すことが大切である」（1901年）。「ごく普通の建物を建てるのに、わざわざ堅苦しい規則を作るようなものである。古い形態の住宅に関して言えば、例えばオリジナリティを求めず、ただ堅実さを求め、しかも我々の時代の要求するものを心得ている優秀な棟梁を使えば、住宅の新しいタイプをつくることはできる。繰り返しの技術は、確かに新しいものをつくる芸術同様、大切なことではあるが、あくまで手工芸技術者のためのものであり、創造的芸術家にとっては、満足できることではない。革新すると言うことは、創造を基本とする芸術家のみが、成し遂げ得ることである。」（1909年）。

もうひとり、理論的に影響を与えた建築家に、カール・ピーターセン（1874-1923年）が挙げられる。アーキテクテン誌に掲載された「材質の持つ効果」（1919年）、「コントラスト」（1920年）などの論文は、広く多くの人に読まれた。

彼は、国内のニュークラシズムより、むしろ中国や日本など、アジアからの工芸品に強く惹かれ、工芸博物館へ通って多くを学び取った。例えば、木の材質に合った使い方、組み込み方、陶器の形態や艶の出し方、色彩の使い方などであった。その後彼は、「我が国の今の時代には、線や形態に明確なクラシズムも見られないし、東南アジアの、表面の材質感や色彩の使われ方すら見ることもできない」と嘆いた(1910年)。

一方、イェンセン・クリントの息子のコーレ・クリントは、かつてアジアのジャワ島に滞在した時期に、カール・ピーターセンの言葉や思想を自分の作品の中に具現化していった。さらに国内に戻り、王位芸術アカデミーで教鞭をとりながら、より進展させていった。フィスカーは、当時のクリントの研究室を「クリント学派」とまで呼び、そこで初めてデンマークの機能的伝統を見たのであった(Arkitektur-DK, 1963年, p.37-80)。

それは、強い日本の伝統の影響を受けており、デンマークの過去の伝統を新しく塗り替えるものであり、新しい息吹を吹き込むものであった。他方に、シェーカー教徒の作品の質素な特徴がデンマークの風土にマッチし、その影響も少なからずあった。

1911年、若き建築学生であったカイ・フィスカーは、コペンハーゲン旧地区にある、1700年代の建物の実測調査を行い、友人と共に論文を発表した。それはまるで、新しい時代の鼓動を感じさせる声明文のようでもあった。

「室内の各要素は、直接的でまた素直に関係付けられており、洗練された感覚でまとめられている。例えば、板パネルと見切り部分、フラッシュ戸と框戸、豊富にあしらった色彩の数々などすべてが、各室内の性格付けを積極的に担っており、大工、建具工、石工など、皆がそれぞれひとつの空間に対し各自の配慮を見せ、パターンの変換や、リズムカルな繰り返しや、金物類に至るまで各要素が関係付けられた仕上がりになっている。そこでは無駄がなく、機能の本質を素直に表現し、それと見て取れる形態を強く打ち出しており、過

剰さは抑えられている。各部分は、技術的な明快さを見せ、その部分の目的に最大限かなったものである時に、その最高の価値を持つのである」と、フィスカーと友人達は、ここで彼らの目標として求めていた方法を、定義付けたのであった。「古代の石の斧や、デンマークの伝統的農家の配置や、教会の平面計画や、大砲の持つ形態などの全てに隠された意図、コンセプトは、時間を超越した価値を持つのである」(1953年、故ポール・ステグマンに贈る言葉)。この精神は、彼の教育の中で一生貫かれたものであった。

アカデミックな建築家達は、名もなき工匠達が、幾世紀にもわたる古き価値ある知識を結晶させた作品を、実測調査することに専念した。ハーフトィンバー造りの文化には、モデュールに対する考え方が生まれた。例えば、1間毎に牛や、ベッドが割り当てられていた。ミース・ファン・デル・ローエは、この文化圏から来たひとりであった。彼が木を鉄に替えてファサードを割り付けたのは、この理由からだっただろうか？(フィリップ・ジョンソン著『ミース・ファンデル・ローエ』MOMA, 1978年)。誰もが時代に答えて、古き知識をより良く新しいものへと書き換えてゆく。国際的な技術革新も手伝って、才能ある建築家達は、創造者となり得るが、忘れてならないのは、建てられる場所に対する認識である。この認識こそが、建築をより人間的なものにし、理解されるものにする。近代化の流れの中で、この真実が忘れ去られてしまった。

廃墟と化した世界を復興した際、再度戦争の起こらない、そして、すべての人々が住宅を持てるような、新しい改善された民主的社會をつくるべきであった。ただ、アメリカだけが、この条件を満たす枠組みをつくることのできたと、アルヴァ・アアルトは考えた。楽観的見方が拡がり、建築に人間性を求めた建築家フィスカーは、フィンランドのアアルトや、アメリカの友人達、ローレンス・B.アンダーソン、ビエトロ・ベルーチ、ウィリアム・W.ウースターなどに、その人間性を見たのであった。建築の内包する社会的意義に対して、

ルイス・マンフォードは、スカンジナビアのそれは高く評価できるものであることを認め支持していた。

戸建住宅は、この世の個人に与えられる唯一の安らぎの空間であり、天国の楽園の具現化されたものである。戦争の悲惨さが、心の安らぎの場所を得る欲求をさらにかりたててしまったのであろうか？ 農業国デンマークでは、小さくとも土地を持つことの意義は大きく、形式的にも自分の存在感や、安心感を満たしてくれる。良い例として、小さな家庭菜園が挙げられよう。土地なくして農民は、生きてゆけない。最も都会的な生活者ですら、サマーハウスを買い求めた。

1950年代古典的発想の源にあるプロポーションに対する執着は、いまだ生きていた。手工芸技術者は、必要な知識は備えていたし、造作大工は、現場でつくり上げる腕もあった。しかし、プレファブリケーション化や、総合管理システムや、完璧な利潤計算といったものは、いまだ計画段階だけの考え方であった。人間性がより勢いを増して発展することが最優先であった。調和と手工芸的な質へのこだわりは、建築家の目標でもあり、手職人達の誇りでもあった。古き黄金時代の理想は、時代の要求と共に、新しい技術をともなっていた。また、50年代、建築やデザインを学ぶ者たちは新しい情報の源を知ることなく、ただ遠近を問わず研究旅行へと出掛けることを奨められてきた。「もし君たちが、新しい結果を得たければ、新しい物の観察をしなさい。外国語を学び、過去の歴史から国や民族について研究し、真実に基づいた知識を得なさい。そうすることにより、君達は、日々刻々と、人々を結び付けている絆が、より短くなることを知るであろう」(P.H.マレー著、『デンマークの歴史』、1755年、アヴァン・プロボ、p.28-29)。当時もそうであったように、多くの若者達は新しく観察を始め、ナショナリズムの行き着く先は行き止まりであることを理解したのだった。真の価値は、インターナショナルな認識の中にあり、かと言って、風土を無視するのではなく、逆にその価値を認め、それぞれの

リズベット・バルスレフ・ヨーゲンセン
Lisbet Balslev-Jørgensen

芸術史家

1928年 スウェーデン、ヴァーステロスに生まれる

1948-49年 ストックホルムのインダストリアル・
アート学校所属

1964年 コペンハーゲン大学、芸術修士

1964-69年 コペンハーゲン、ソルヴァールゼン美術
館のミュージアム・キーパー

1969-95年 デンマーク王立芸術アカデミー建築
ドローイング室司書官

現在、ホーンベックに居住



ベラ・ヴィスタ・ハウジング／アルネ・ヤコブセン



SASホテル／アルネ・ヤコブセン

特性を生かした答えを見いだすことにあったのである。

1952～53年にモーゲンス・ラッセン（1901-1987年）は、ハラルド・プラムと共にゲントフテのソリュエセヴァイ12番地に一戸建住宅を建てた。敷地は、急な南傾斜に位置し、建物自体は、テラスを設け地形を合わせて段差を付けてある（*Arkitekten*, 1955, p.28-31）。作者いわく、「我々デンマーク人は、太陽の光を求めて集まる。地中海地方では逆に太陽を避ける。そこに大きな違いがある」。居間からは、大きなガラスの引き戸越しに庭が広がり、主婦の仕事場からも、囲いのある小庭に出入りができる。この住宅は、ラッセンの1940年作の克蘭ペンボアのヴィドオウアヴァイ24番地に建てられた、小さな作品のバリエーションのひとつである。庭と住宅の平面の関係や、建物の材料等は、前述の小作品と同じ軽量コンクリートブロックと木材である。これらふたつの材料は、大戦中にも入手できたのだ、とラッセンは答えている。

シンメトリーや形式上の秩序に縛られた考え方は、自由な生活パターンの流れを妨げるものであった。それらの考え方は、家長制度の中から生まれたものであり、個人が集まる集いの場として機能させるには、邪魔な規則であった。ラッセンの建築では、柱を含め建物の基本的形態からは、形式的秩序は見られなくなった代わりに構成要素の持つ機能が現れて取れた。ラッセンは、空間の持つバランスを研究し、追究した。それは、お互い補足し合う空間を組み合わせ、密接に関連付け、調和させることにより達成された。例えば、屋外空間は屋内と同じ位置付けで考えられた。別の言葉で言い表すならば、「陰と陽」の関係とでも言えようと、彼は言う。「空間を体験するには、その場に居合わせる必要がある。光は、常に変化してゆき、低い太陽も良く考慮された窓によってコントロールされるべきだ」。ラッセンの住宅は、家族や友人が集まって楽しく食事を作り、食べ、くつろぐ空間が冬の暖炉であったり、夏のテラスであったりと、よく演出された空間になっている。

ラッセンは、ブルーノ・タウトの書物をよく見ており、特に、ノルウェーかスイスのどこかに建てられるはずの「山中の茶室」のパーズに惹かれた（1942年p.176-図318）。そのコピー版とも思われるスケッチが描かれ、デンマークの週末住宅となったが、実現はされなかった。その他にも、タウトの本から天井や木柱や引き戸といった要素が引用された。内と外の空間の捉え方を、日本の伝統的建築の中からも学び取った。しかし、すべてデンマーク人の自然観を考慮に入れた、ひとつの小宇宙をつくり、堀の外の醜い世界を見せない自分だけの空間を求める方向へと流れた。特に大戦後には、その傾向がより強まり、道路側のファサードはより閉ざされ、庭の堀は高くなり、隣家に対してはより密に植栽を施した。ラッセン自身は自分なりのランドスケープに対する哲学をもって、必要に応じて庭師を使った。

アルネ・ヤコブセン（1902-1971年）は、オーレソン海峡とブナ林に囲まれた克蘭ペンボアでその子供時代を過ごした。ここには、彼は学校や住宅を数多く残し、1950～52年には、5戸の連続住宅〈スーホルム〉を建てた。自分達は、1番端の庭に接した住戸に住みついた。モーゲンス・ラッセンは、どちらからと言うと、自分の創造活動や仲間と楽しんだ貴重な時間を体験させてくれる空間の条件を追究し、一方、アルネ・ヤコブセンは、自分自身が自然との触れ合いの中で得た最高の喜びを空間の中につくり出したのであった。本来ヤコブセンは、画家になることを夢見、画家の目で自然を捉えていた。両者とも、確固たる理論を振り回すのではなく、自らの経験を基に自分達の考えを実践させていった。若き時代のふたりにとって、ル・コルビュジエはラッセンの、パウハウスはヤコブセンにとっての、それぞれの師として研究をしてきた。

連続住宅〈スーホルム〉では、過去の自作のオーレソン海峡を臨む白亜の町に見られたコントラストは、もう見られない。ここでは、白塗りレンガの代わりに、比較的多孔性の黄色レンガを使用している。このレンガは、時

間と共に灰色を帯びた落ち着きを見せ、色彩や材料は、自然のままにその趣を変えるのである。南東の位置には、300㎡程の庭園があり、年間を通じての色彩や生育に配慮した、多くの種類の植栽を施した。そこには、彼の色彩の園、生きた絵画が造られ、季節により移り変わる彩りや生育を楽しませてくれた。植栽は、何度となく多くの種類が植え変えられた。遠景には、オーレソン海峡の拡がりのなかに、船や鳥が霧に包まれた水平線の彼方に浮かび上がっていた。この様な情景が、〈SASホテル〉のロビーでも体験できる。一種の無重力の浮遊感をつくり出すアイデアの源になったのではないだろうか。ホテルの客は、天井に散りばめられた照明の星の下に、ヤコブセン作の椅子〈スワン〉に身を沈めると、この感覚に浸れる。明るさを抑えた壁や床に囲まれた広い空間の中で、音もなく〈スワン〉が回る。SASホテルの緑灰色の外壁は、晴天の下では周囲の建物を映しだし、霧のなかにあっては、建物の材質感や色彩は一転して別の様相を映し出す。これはまるで、彼の庭の笹やデンマークでは、海浜でよく見かける緑の海浜草を思わせる。ヤコブセンと共に長年一緒に作品を手掛けてきた庭師のクリスチャン・ピーターセンは、彼に、植栽の色や種類だけでなく、生育の条件等も教えてきた。また、彼も自ら、ヴェアルースのリネヴァイ48番地に、日本庭園を持ち、ヤコブセンに多くのインスピレーションを与えてきた。

50年代の戸建住宅の傑作の多くに見られる特徴に、隣家との視覚的な隔離が挙げられる。自然に囲まれた住宅は、自由と安らぎを人に与える。建築家ハルドー・グンログソンは1958年に、また、ハンナ&ポール・ケアホルム夫妻は1960年にそれぞれ自邸を建て、双方共、オーレソン海峡を臨む位置に建つ。彼らは、日本の伝統的手法を取り入れており、またこれらの作品においても、建築と自然とを同等に価値のある要素として、強く関係付けている。海や海浜植物は、大切にされなければならないことは、ヤコブセンや前述の作品を見れば、よく理解できることである。ヨーン・

ウッツォンは、ブナの保存対象地域の森の中に、同じく自然と海を素材に住宅を建てた。ミース的な構成を見ることが出来るこの住宅は、1952年完成した。大戦中、ストックホルムに滞在していた彼は、ノルウェーの建築家アルネ・コースモと交流があり、1944年にふたりは、お互いの考えを交わす中で自分の意図を、構造的な詳細と全体に、いかにシンプルな表現方法で、最大限の効果をもたらすことができるかを話し合っていた。しかし、実際には多くの建築家達にも、この単純な真実を解き明かすのに時間を要した。ウッツォンは、自然との研究の中でこの問題を取り組み続けた。

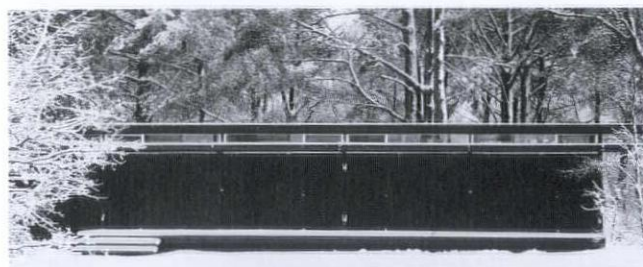
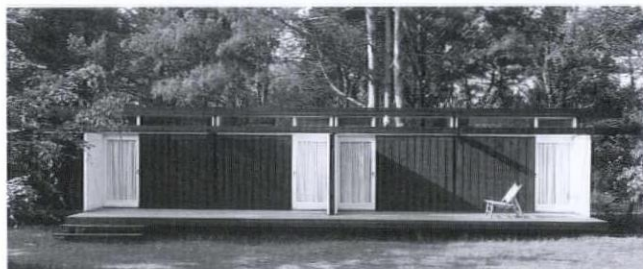
カレン&エッペ・クレメンセン夫妻は、1954年にゲントフテのソルバックヴァイ57番地に、平屋の住宅兼事務所を建てた。ここでも道路に面したファサードは閉ざされ、庭に面して、また隣家の見えない方向には、ガラスの大きな引き戸が設けられ、開放的な平面をもち、内装には木質の材料が使われ、当時の住宅では当然要求される内容を満たしていた。暖房の費用はまだ安く、広いガラスの引き戸は、部屋の空間を庭にまで広げた。色彩の選択では、微妙な変化が付けられ、1930年代に見られた明快な色使いは、そこにはもうなかった。ヤール・ヘイヤーと共同でこの夫妻は、1958~69年ヘルシンゴーに労働者組合の国民学校〈LOスクール〉を完成させた。白塗りの建物群が、北にオーレソン海峡を臨む広大な緑の自然のなかに、小さな村となって出現した。ヨーゲン・ボーとヴィルヘルム・ヴォリャットのふたりは、1958年フムレベックの町に美術館〈レイジアナ〉の第1期工事を完成させた。展示された美術品を媒体に、人のつくった建築物と、海峡を臨む広大な緑の自然との間に、永遠のつながりを持つ内と外のふたつの同等の価値をもつ空間が、視覚的に密接に関係付けられている。個々のディテールと全体とが融合されており、そこへ海という要素が加わって、空間は無限に広がりを見せている。海こそこの感覚を与えてくれる。人は自然の一部であり、自然は人の偉大なる師であると。

1950年代には、デンマークに新黄金時代が訪れた。住宅や学校など発表されたデザインは、次々とその真価を表した。黄金時代、それはC.C.L.ヒッツフェルトが著書『造園芸術の理論』(I-V巻、ライプツィヒ、1779-1785)の中で、デンマークのシェランド地方の自然の美しさを賞賛したのと同様に、この時代をそう表現できるのである。目を自然に向けてみると、その中で生活の喜びを、まざまざと見せ付けられるほどの風景が広がっているのである。自然は、人間がどんな芸術をもってしても、つくり得ない庭園をここにつくり上げてしまったのである。とにかく、コペンハーゲンからヘルシンゴーまでの海峡に沿った旅ほど、美しくしかも変化に富んだ自然は、他に思い浮かばない程である。当初、人々は郊外の自然の中に自分達の独自の小さな自然をつくり、そこに住むことを夢見たことから、郊外の戸建て住宅は、それなりに十分な距離をおいて建っていた。しかし、50年代にはその密度を増し、人々の夢を満たすために、庭のレンガ塀や植栽によって空間を造り出すために、建築的に巧みな技法を多く生み出す必要があった。自然という胎内で、自分だけの世界に浸ることへの潜在的欲求から、次に外の世界に飛び出し、新しい物を見たいという欲求を目覚めさせたのであった。過去の伝統への隷属的な模倣は、創造的なエネルギーをも麻痺させてしまう、と言う事実は明らかになった。

●Lisbet Balslev Jørgensen/建築史家、デンマーク王立芸術アカデミー司書

デンマーク・モダン・ハウス

The Modern House in Denmark



ニルス・ボーアのサマーハウス別棟の四季に応じた変態。各室に横開きと縦開きの雨戸がついており、これらの開け閉めによって違った建物になる。デンマーク近代住宅は、たとえばこんなふうに機能的である。写真提供：Wohlert Arkitekter A/S

ニルス・ボーアのサマーハウス別棟 ティスヴィル、1957

設計：ヴィルヘルム・ヴォリャト

Annex to the Summer Residence of Niels Bohr, Tisvilde, 1957
architect: Vilhelm Wohlert

この別棟は、デンマークの物理学者でノーベル賞受賞者（1922年）であるニルス・ボーア教授の宿泊客用ゲストハウスとして設計されたものである。この建物は、まさにユニークである。特に4m²の大きな「雨戸」が、縦軸を中心に回転させる普通のドアと違って、縦じまのように上端で吊られているだけの、ただの「箱」であることを考えるとなおさらである。

この家に込められた力は随所に見られる。まずは、敷地に対する配置の仕方が絶妙であること。ゲストは、一定のプライベートな空間を確保しながら、母屋との視覚的つながりは決して妨げられることがない。さらに、この別棟は最適な材料を使ってあり、タールの濃色と白ペンキ塗りの木材による対比的な色使いも母屋とよくマッチしている。しかし、最大のポイントは次の2点である。

第1に、ガラスドアとシャッターという単純なシステムが生み出す多様性である。ゲストの人数や雰囲気、季節、天候などによって、いろいろと左右対称や非対称の形が出現する様子は、まさに単純さに秘められた奥深さである。

第2に、この別棟は長手方向に配された3つの連続した基礎によって地所の上に持ち上げられている。これは一種の台座であり、もともとは日本のような気候の国のものであって、デンマークのように寒い国のものではない。しかし、これによって建物は地面から離れて漂い、軽快さ、優雅さ、現代性といった印象が生まれる。設計者であり、ルイジアナ近代美術館のデザインで有名なヴィルヘルム・ヴォリャト教授によれば、この種の基礎を選んだ理由は、敷地が道路側から家に向かってわずかに傾斜していたからだそうである。それにしても、避暑地の家とは元来現代的なものである。建物の下空間が、それを如実に語っている——つまり、地面と建物との間の関係が中和され、無効になっている。——だからこの家は、簡単に移動できるのである。

この別棟は現在もボーア家の所有になっており、保存状態も良好である。

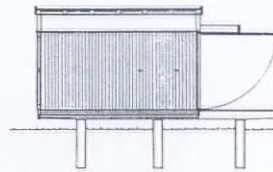
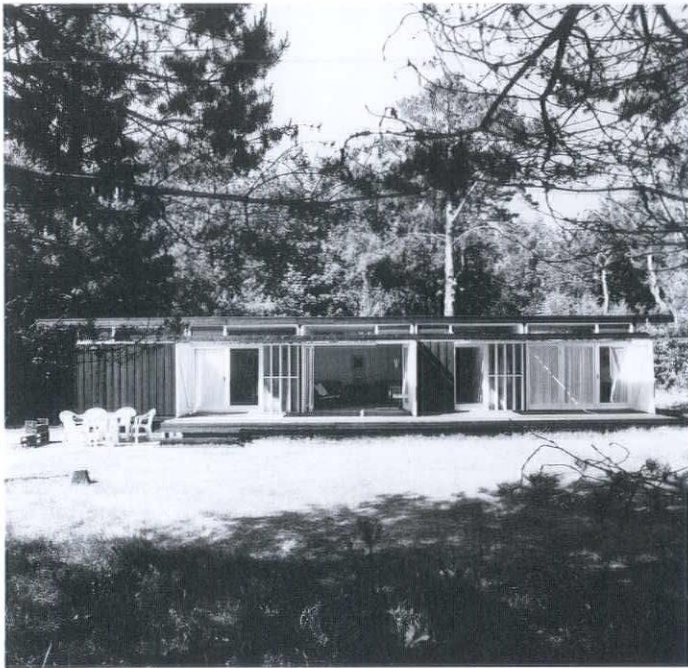
（レネ・クラル）



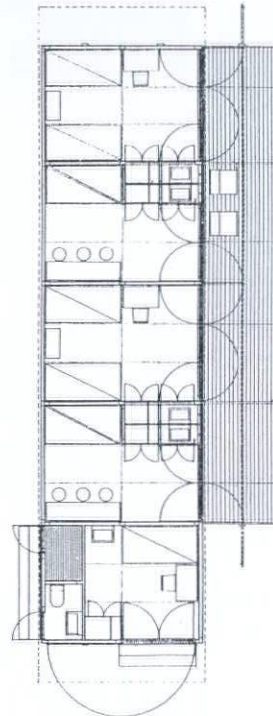
ヴィルヘルム・ヴォリャト
Vilhelm Wohlert

1920年 コペンハーゲンに生まれる
1938年 デンマーク王立芸術アカデミー
入学

1948年 設計事務所開設
1968年 デンマーク王立芸術アカデミー
教授に任命される
現在、クランペンボーに事務所を構える



5つのゲストルームからなるサマーハウスの小さな離れは、ティスヴィルの林のはずれに位置する。テラスからアクセスする4つの部屋と、妻方向からアクセスするメインルームからなる、濃いステイン仕上げの板材に覆われた木造建物である。

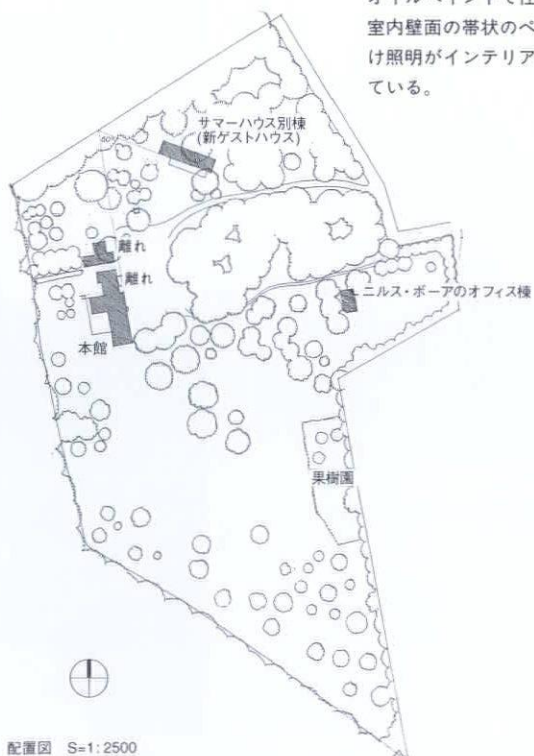


冬の間は完全に閉鎖され、天候の変化から建物を保護するためにすべての雨戸が閉じられる。夏期には、全ての雨戸と窓が完全に開けられ、あたかも洗練された家具のようである。ガラスドア部分の水平方向に開く雨戸は、開戸時にそれ自身が各ゲストルームに続くテラスを区分する間仕切り壁となる。大きな吊り雨戸は、夏の間日差しをよける連続する庇として水平に固定される。また、ガラスドアは内部の間仕切り壁へ回転させることができるので、その結果、寝室とテラスの関係は全くオープンになる。

ガラスドアの部分は庇をもたないので、室内へ直接日差しが差し込む。この別棟は、春と秋は週末の休みのために利用され、その間ガラスドア部分の雨戸のみが開放されるが、ガラスドアとハイサイドライトからの日差しが十分室内に入り込む。

また、寒い期間でも建物は厚い断熱材によって守られ、室内は電気ラジエーターによって暖めることができる。すべての家具や建具、雨戸の内側は白いオイルペイントで仕上げられており、室内壁面の帯状のペイント模様と壁付け照明がインテリアのポイントになっている。

平面図 S=1:200



配置図 S=1:2500

グンログソン自邸 ルングステッド、1958

設計：ハルドー・ヤコブ・グンログソン

Gunnløgsson's Own House, Rungsted, 1958

architect: Halldor Jakob Gunnløgsson

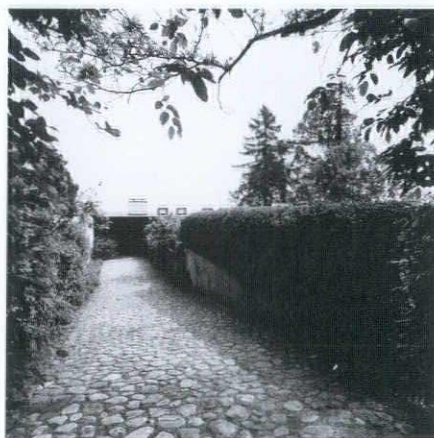
コペンハーゲン近郊の海岸沿いの敷地に、1958年に建てられたこの住宅は、建築家、ハルドー・グンログソンの自邸である。黄金時代と呼ばれ、デンマークの機能主義的伝統に基づいた独自のモダニズムが生み出された50年代を代表する個人住宅として知られている。また、ウッツォンの最初の自邸やソーレンセン自邸と並んで、50年代のモダン住宅のプロトタイプのひとつとして位置付けられている。

きわめて日本的なエントランスを入ると、まずはボール・ケアホルムの家具によってシンプルにまとめられた書斎とリビング・スペースが収められている開放的な空間に到る。暖炉やキッチンを巧みに配すことによって、オープン・プランでありながら、場に性格を与えている。落ち着きのある雰囲気を作り出すデザイン手法には、考えぬかれた高度なシンプルさこそ美しいという、デンマークのモダン・デザインの精神が貫かれている。

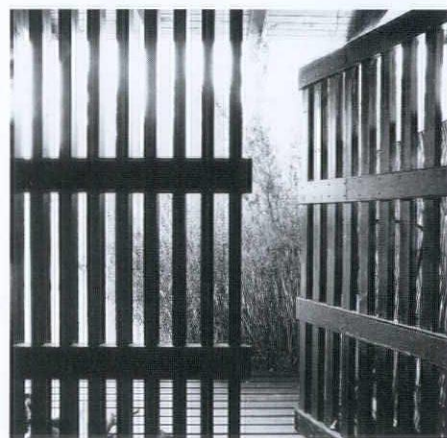
さらには、柱と梁の軸組による2×2mのモジュールの徹底、スライディング・ドアによるフレキシブルな空間構成など、伝統的な日本の住宅建築をモダンに翻訳し巧みに取り入れている点は、日本建築に多くを学んだデンマーク50年代のモダン住宅の特徴を顕著に示している。

およそ40年たった今も、この住宅は当時と変わらぬ機能性と美しさを保っている。機能、デザインともに高度な完成度を実現したグンログソン自邸は、まさに近代建築史の中の隠れた名作といえよう。設計者のハルドー・グンログソンはすでに他界したが、現在もグンログソン婦人がひとりでここに暮らしている。

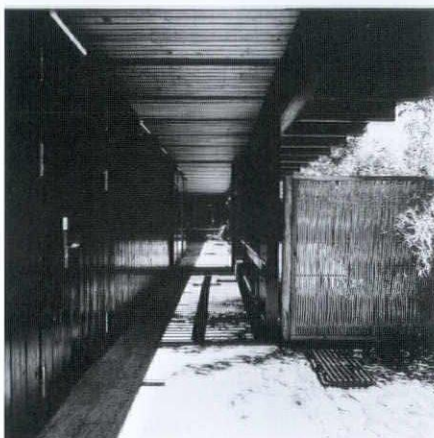
(木下壽子)



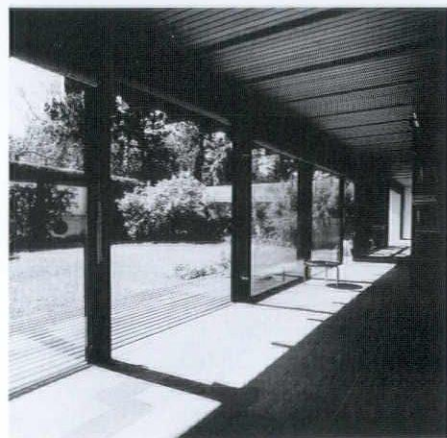
エントランス通路



玄関脇の中庭に通じる格子戸



玄関扉を開けた入口付近



居間から中庭を望む

ヤコブ・ハルドル・グンログソン
Jakob Halldor Gunnløgsson

1918年 フレデリクスベルクに生まれる
1937年 デンマーク王立芸術アカデミー
入学
1942-44年 スウェーデン、ストック
ホルムで勤務

1944-52年 バッレ・スーエンソン教授
の設計事務所で勤務

1952年 ヨーン・ニールセンと共同で
設計事務所を開設

1957年 デンマーク王立芸術アカデミー
教授に任命される

1985年 死去





居間。奥にコア・クリントの照明、ポール・ケアホルムの椅子。右に暖炉

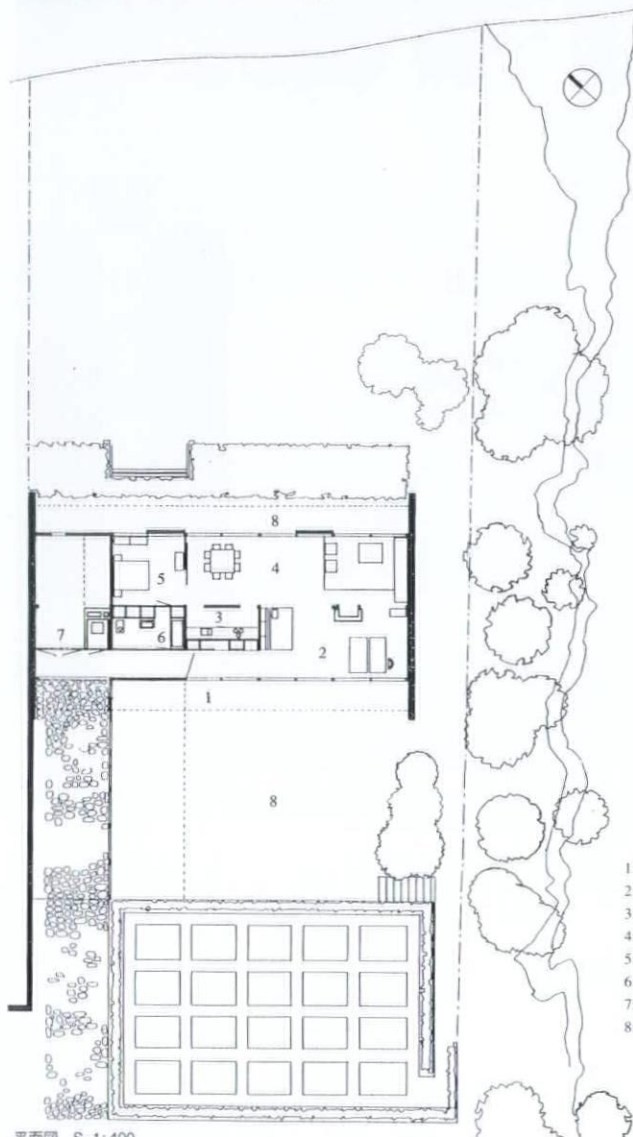


玄関先の通路。右に中庭。奥にポール・ケアホルムの椅子

住宅は海岸の傾斜地とストランドヴァイ（幹線道路）にまたがる、東西に細長い敷地に位置する。長方形の建物の大きな東側開口部は海に開かれ、一方、西側の開口部は庭に面している。開口部はいずれも大きなガラスの引き戸によって、テラス部分との開放的な連続がもたらされている。また、ロールブラインドや引き戸によって、任意に空間を閉ざすことも可能である。東側のテラスからは海が一望できるが、テラスからだけではなく実際は家のどの場所からも海を見ることが可能である。妻側の白い無窓の両壁面間は、木の柱と梁の軸組により、2m×2mのモジュールが徹底されている。濃いステインで塗装された梁間は、無塗装のもみの小割材で仕上げられ、アクセントのある天井デザインとなっている。形式的に厳格な構造であるにもかかわらず、

このオープン・プランがつくり出す、各ゾーンが持っている住宅としての機能は明確で、そのため、形式的で厳格な構造の割には、空間の表情は豊かである。

また、洗練された材料とシンプルな色彩効果が、ポール・ケアホルムやアルネ・ヤコブセンの家具とともに、レベルの高いインテリアデザインを生み出している。木部は濃いステイン着色、内部の壁と建具は黒ワニスつや出し仕上げ、引き戸はライトグレー塗装、レンガ積みの暖炉は白塗装となっている。床は明るいグレーのスウェーデン大理石で仕上げているが、床下には暖房用の配管が埋め込まれており、大理石はその熱効果を高める役割を果たしている。また、テラスには塩分を浸透させた板材を用いている。



平面図 S=1:400

SD9609
24



寝室。ロール・カーテンはグンログソンのデザイン。



ソーレンセン自邸 スムーテヴァイ、1955

設計：エリック・クリスチャン・ソーレンセン

Sørensen's Own House, Smutvej, 1955
architect: Erik Christian Sørensen



オフィスのあるウィングの外観

エリック・クリスチャン・ソーレンセン
Erik Christian Sørensen

1952年 設計事務所開設
1961年 デンマーク王立芸術アカデミー
教授に任命される

1922年 コペンハーゲンに生まれる
1942年 デンマーク王立芸術アカデミー
入学

現在、シャルロッテンブルグに事務所
を構える

1948-49年 マサチューセッツ工科大学
建築学科講師



居間から中庭を望む



玄関ホールからオフィス棟への入口を見る。壁にはめ込まれた収納家具もソーレンセンのデザイン



玄関ホールの居間へ通じる扉。内部と外部の壁面の仕上げが同じで連続感がある

E.C.ソーレンセン教授は、作品数が少ないにもかかわらず、ある時期の2～3世代にわたる学生たちにとって非常に重要な地位を占めるデンマーク人建築家のひとりである。

また彼は、デンマーク建築において保守的な価値を代表する人物である。彼の作品にはいくつかのルールがある。著書“On Forms”（1957年）で、彼は建築における真の「価値」について次のように述べている。「第1に、材料の特性は建築技術やその用いられ方にきちんと表現されなければならない。第2に、建築は斬新さを狙うために、伝統的に継承するものを否認してはならない。なぜなら歴史は我らの現実のひとつなのだから」。

前者の例として、ソーレンセン自邸では、例えば荷重壁や持ち上げた組立式デッキ、そして周囲を囲む壁などが、それぞれ明解で独自の表現をするために離れて設置されている。これはグンログソンの自邸や共通の友人ポール・ケアホルムの家具にも用いられている手法である。それは、エレメントは目的とする機能に応じて表現し、材料はその性格や特性に応じて表現することである。

後者について言えば、彼は伝統と近代性を絶妙なバランスでうまくまとめている。例えば、大きな窓パネルは新しい技術、新しい知識の賜物である。日照の少ない国では、住民は常に光に飢えており、したがって、大パネルによってもたらされた透明感は、全体の空間にも非常に効果的に取り入れられている。また、公共の庭と南側のプライベートな庭とは、はっきりと区別され、敷地境界線に設けられた2重の生け垣は、外からの視線を完全に遮る「壁」をつくっている。

ソーレンセン自邸は、ヘレバークにあるウッツォンの自邸（1953年）と同等の重要性をもって語られたことはない。しかしソーレンセンは、ウッツォンによってほとんど完成の域まで達せられていたアイデアやフォルムのさらなる繰り返しには興味がなく、だからこそかえってこの家の独自の個性を、自分の好きなように作り上げていくことができたのである。

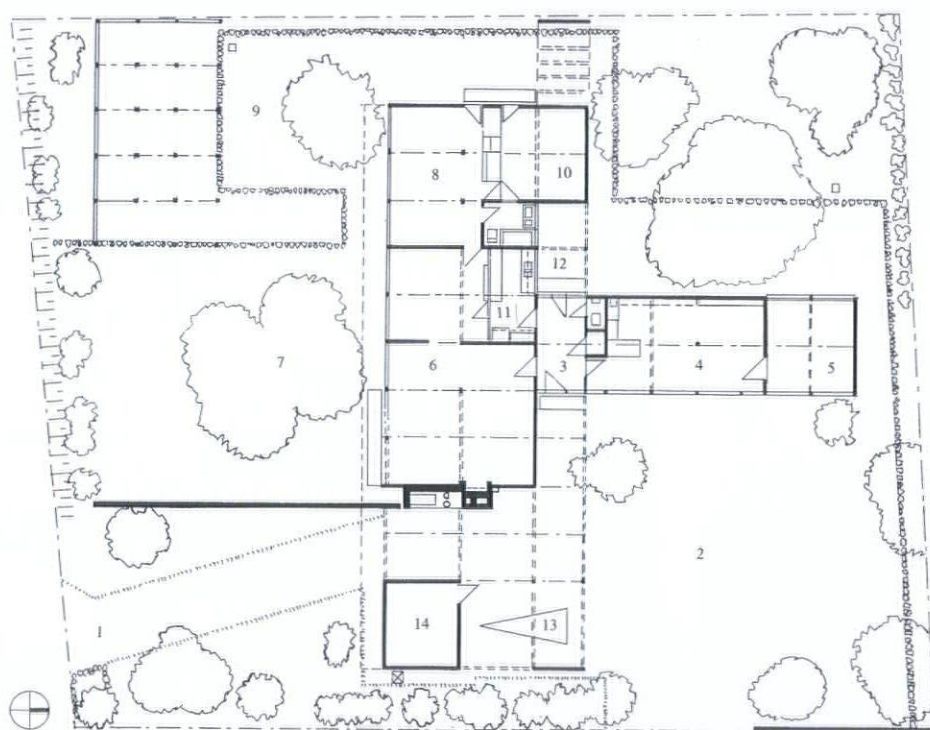
（レネ・クラル）



引き戸を開け放し、中庭と連続する居間



居間



平面図 S=1:350

- 1: アプローチ
- 2: 前庭
- 3: 玄関
- 4: アトリエ
- 5: 書斎
- 6: 居間
- 7: 屋外生活空間
- 8: 子供用寝室
- 9: 子供遊び場
- 10: 主寝室
- 11: キッチン
- 12: 屋外食堂
- 13: 駐車場
- 14: 倉庫

この住宅は、コペンハーゲン北部の森に囲まれた地域に位置し、スムーテヴァイという名の小さな道に面している。

躯体は、木材と大きなガラス窓という単純な材料で構成されており、それが視覚的なシンプルさにもつながっている。そして、そのデザインはミース・ファン・デル・ローエ、マルセル・ブロイヤー、リチャード・ノイトラのようなアメリカ建築の伝統に影響されたものである。

この住宅の最大の特質のひとつは、自然との融合である。大きなガラス・パネルは一部が引き戸であり、庭へのアクセスとなっている。寝室や子供部

屋からも、この庭に直接出ることができる。住宅の延長として構成された庭には、生け垣によっていくつかの区画がつくられ、移り変わる眺めを楽しむことができる。スムーテヴァイからのアプローチは閉鎖的で、駐車スペースを含む中庭に達して初めて開放的になる。ここはオフィスへとつながるパブリックなスペースである。オフィスの西側には専用のテラスが確保されている。プライベート・エリアは庭に向かって開き、何年にもわたり緑を茂らせた庭により隔絶された雰囲気が漂っている。

構造的にはシンプルな柱梁構造で、

必要に応じて仕切りを配することのできるモジュラー・システムに従っている。また、各々違った機能をもつ建築の部位は、その違いが目で見えてははっきりわかる。60㎡のオフィスと128㎡の居住エリア、併せて188㎡の内部スペースに対し300㎡の屋根が架けられている。深い軒は夏には日陰を、春と秋には室内に日差しをもたらす。板でカバーされた保温のためのラジエーターが、換気の際に開閉可能なシャッターの背後に配される。居間の中央には暖炉が置かれ、暖かい空気を循環させるための対流システムが備えられている。

もうひとつの特質は、トップライト

から降り注ぐ光で、人工照明が組み込まれた天井に沿って細いガラス・パネルがきめ細やかにデザインされている。照明と家具はデンマークを代表するデザイナーであるハンス・J.ウェグナー、ポール・ヘニングセン、ヨーゲン・ガンメルガードらによるものである。

1年を通し季節を追ってこの住宅に住み働くことは、とても素晴らしいことである。人々は冬でも厳しい気候から守られ、ほとんど庭で過ごすような感覚を味わうことができるだろう。

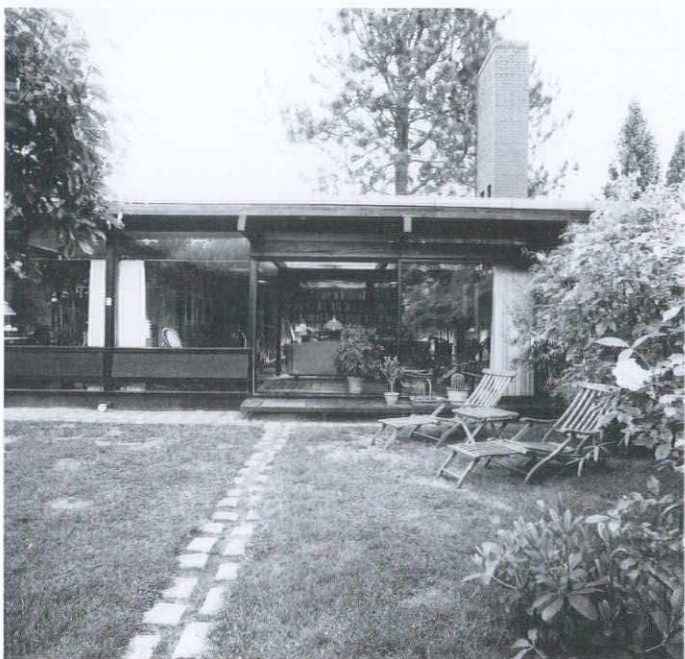
(フィン・クリストファーセン)



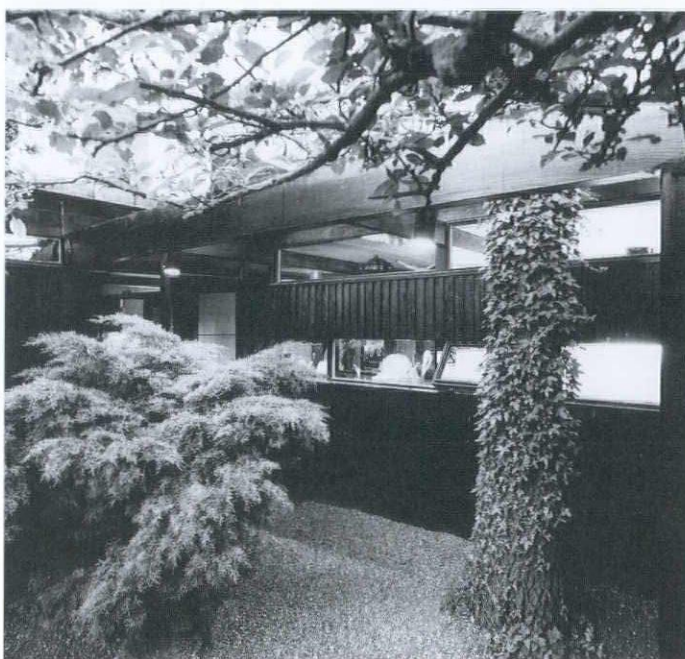
玄関。外灯と左の壁面は、外部から内部そしてまた外部へと連続する



オフィス・ウィングの奥の庭



中庭から居間を望む



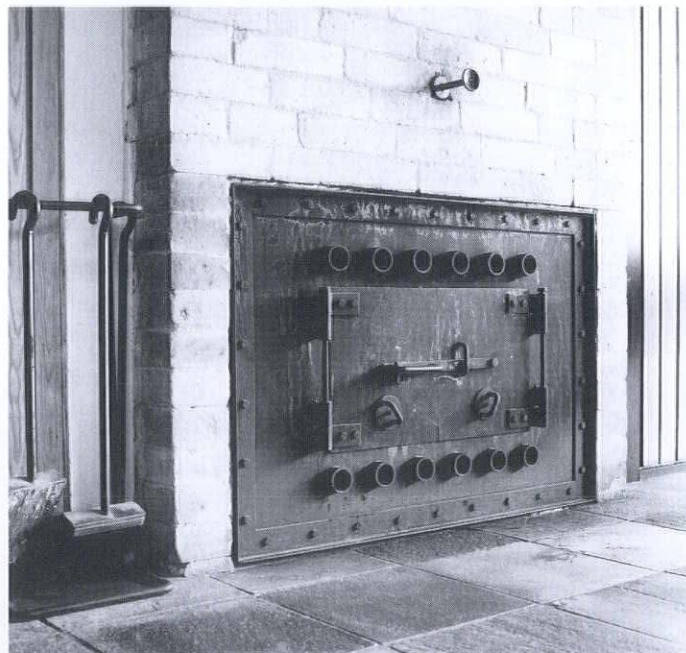
厨房裏の屋外食堂付近



バスルーム



オフィス



居間の暖炉

シェランズ・オッデの家 シェランズ・オッデ、1957

設計：アルネ・エミール・ヤコブセン

House at Sjællands Odde, Sjællands Odde, 1957

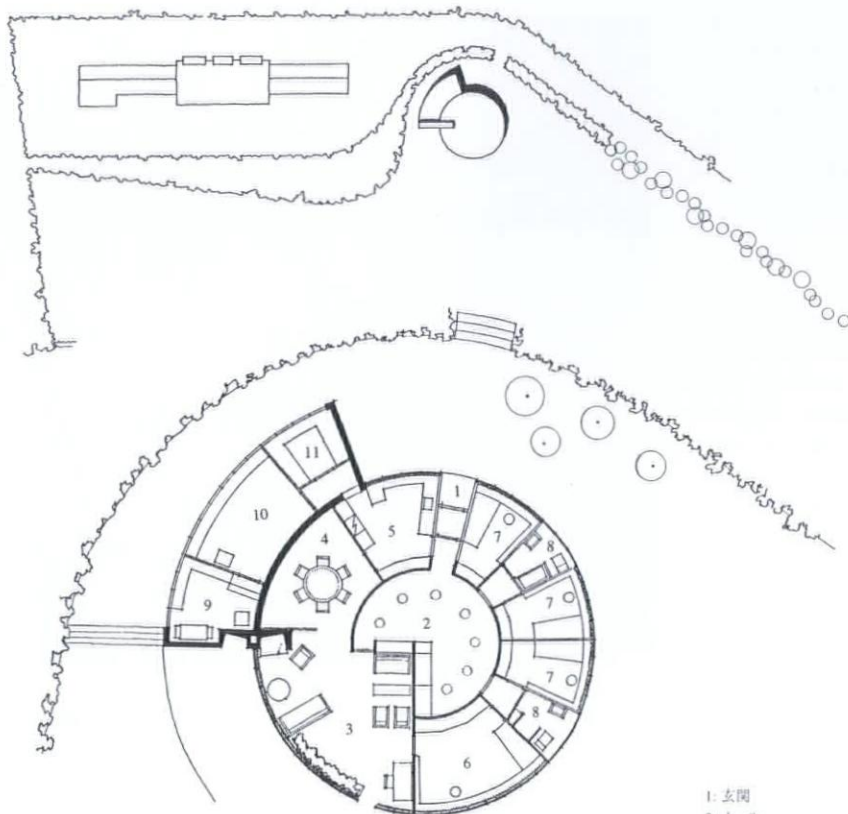
architect: Arne Emil Jacobsen



アルネ・エミール・ヤコブセン
Arne Emil Jacobsen

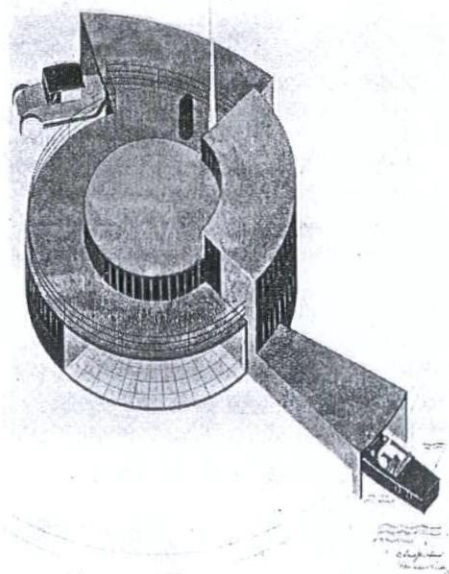
1902年 コペンハーゲンに生まれる
1924年 テクニカル・スクール卒業
1924年 デンマーク王立芸術アカデミー入学

1927-29年 コペンハーゲン市建築理事会勤務
1929年 設計事務所開設
1956年 デンマーク王立芸術アカデミー教授に任命される
1971年 死去

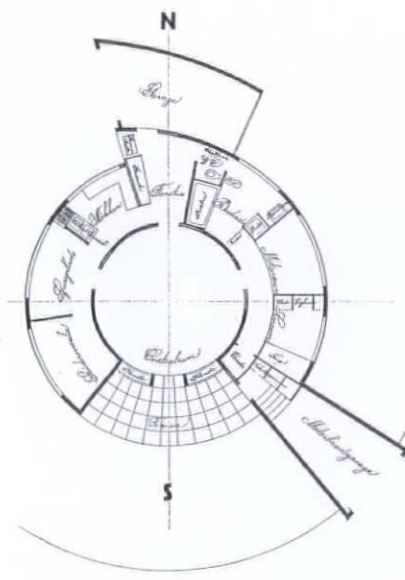


平面図 S=1:300

- 1: 玄関
- 2: ホール
- 3: 居間
- 4: 食堂
- 5: キッチン
- 6: 主寝室
- 7: 子供部屋
- 8: 浴室
- 9: ボイラー室
- 10: 洗濯室
- 11: 納戸



〈未来の家〉アクソメ



〈未来の家〉平面図 S=1:300

「外庭の円形が、アルネ・ヤコブセンの最も重要な作品のひとつである住宅の円形プランの要因である」。これが、この住宅に対する適切な説明であるとは到底思えない。

興味深いことに、ヤコブセンは1928年の〈未来の家〉のコンペティションに、彼の友人であり同僚でもあるフレミング・ラッセン（1902年生まれ）と共同で参加し優勝している。その条件は、「理想的な住宅をつくること。現在の技術的限界や法律から生じる現実的な障害が取り除かれたと仮定して、自らが望ましいと思う方法で設計せよ。インテリアは慣習的なものとは異なった構成にせよ」というものだった*2。

この住宅が1929年にデンマークで紹介されたとき、出版関係には多分に懐疑にとられたにせよ、非常に評判になった。因みに機能主義はスカンジナビアにおいて、1930年のストックホルムでの展覧会で最初に紹介されたといわれている。これよりも1年早くコペンハーゲンに機能主義が紹介されたのは、おそらく地理的にヨーロッパに近かったためと思われる。

このコンペでヤコブセンとラッセンは、機能を配置する最も効率的な解決として円形プランを導入した。〈未来の家〉の部屋は、中央スペースから放射状に方位に従って構成されていた。しかし、〈シェランズ・オッデの家〉と異なっているのは、円のカーブが外側になるに従ってゆるくなっており、螺旋状の軌跡を描いていることである。この工夫は、〈シェランズ・オッデの家〉よりもダイナミックである。〈未来の家〉には屋上にヘリコプター、ガレージに自動車、地下室にスピード・ボートが備えられており、この初期の繊細なプロジェクトをさらに印象的に見せている。この同じ起源をもつふたつの住宅の円形プランに関する疑問は、おそらく提起すべき問題ではないのかもしれない。（レネ・クラル）

*1: Jacobsen, A. Hus på Odden, Arkitektur, 1957, 6, pp.179-183

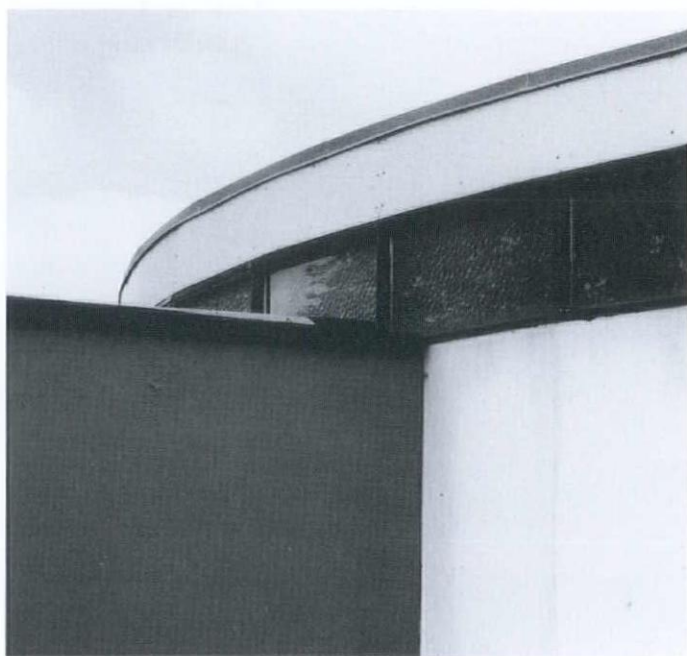
*2: Jacobsen, A. & Lassen Fl. En fremtidens bolig. Arkitekten Ugehæfte, 1929, 38, p.178

1943年初め、アルネ・ヤコブセンは、シェラン島北西部の半島の土地にヘンリクセン一家のための薫製場を設計した。また彼は、これとのつながりで、同時に彼らのために海を臨む崖の上に住宅も計画していた。当初クライアントは住宅建設を延期したが、1956年になってヤコブセンと再び連絡をとり、計画を再開するよう依頼した。この時点でクライアントはもはや眺望に興味をもっておらず、その代わりに強風を遮る家を望んだ。デンマークの平坦な地形は1年を通して強風の原因となっており、それは木々の傾き具合からも察することができる。そこでヤコブセンは当初外部円形プラザとして計画されていた平坦な低地に住宅を移した。これが、この住宅の円形プランの理由だといわれている。しかし、このよう

なユニークで、デザインのすべてを決定してしまうような形態の説明としてはいささか単純すぎる*1。

円形の住宅の中心はホールである。ここから各部屋がキッチン、北、寝室は東、書斎は南、居間は西といった具合に、それぞれの機能に合った方角に放射状に広がっている。前室、ランドリー、ボイラー室のような副次的な部屋は、ふたつの主な円の外側に扇形に置かれている。円形住宅の興味深い点は、各部屋が日光を最大限生かせるように連続して配置されていることである。もうひとつの課題は、日光を採り入れることであった。構造的には薄い鉄板と機密性の高い断熱材からなる外壁材が組み合わされた鉄骨造である。

(レネ・クラル)





スーホルム I クランペンボー、1950-55

設計：アルネ・エミール・ヤコブセン

Søholm I, Klampenborg, 1950-55

architect: Arne Emil Jacobsen

スーホルムの最初の住棟は、第二次世界大戦の次の年に入念につくり上げられたものである。参戦した他の国々と同じように、デンマークも信じられないほど貧しかった。建築材料、特に鉄の不足は深刻だった。そのため住宅は小さい窓のついたブロック造の在来工法で計画されることが多かった。節約は必要な美德だった。おそらく、このことがスーホルムの地味で控えめなデザインの理由であろう。だが、ヤコブセンは1933-34年にすでに、スーホルムから数分歩いただけのところにあるベレヴィスタで非凡な表現を行っている。ベレヴィスタは、デンマークで最初の機能主義的プロジェクトのひとつであり、パウハウスの白い地中海スタイルを取り入れている。それとは反対にスーホルムでは、慎重な控えめさとわきまえた礼儀正しさが表現されている。

興味深いことに、アルネ・ヤコブセン自身はスーホルムに住んでいた。このプロジェクトが少し制御され過ぎているとすれば、彼自身の庭は反対に十分に革新的だった。それぞれの住戸には怠惰な家人でも十分手入れできる程度の、実に小さな庭が用意されていた。ヤコブセンは住戸のファサードと平行にカラマツの生け垣を植え、自分の庭をさらに小さなユニットに区切った。そして、その小さなユニットにあらゆる種類の植物、すなわち球根植物、草、低木、観賞植物、竹などを植えていた。このようにして彼は、さまざまな季節の花と草木の個性を楽しんでいた。ヤコブセンは実に300種類以上の草木を植えていたのである。その結果この庭の複雑さが、建築の実直な性格にコントラストを与えることとなった。

(レネ・クラル)

* 1: Jacobsen, A. Søholm. *Arkitekten Månedshæfte*, 1951, 12, pp. 181-190

* 2: Nicolaisen, Å. Stor arkitekt lille have. *Bo Bedre*, 1965, 9, pp. 24-29, 120 & 123



居間から階段室を望む



食堂。アルネ・ヤコブセンのテーブルと椅子。その上の照明はポール・ヘニングセン。正面にはめ込まれた食器戸棚は、ヤコブセンが自邸用にデザインしたもの。他の住戸には無い



2階予備室から居間を望む。正面の収納家具もヤコブセンのデザイン



キッチン。収納家具はすべてヤコブセンデザイン

コペンハーゲンから北に車で30分くらいのクランペンボーに、スーホルム・テラスハウスは立地している。近くにはスウェーデンとデンマークを分かつ海峡である美しいオーレンソン海が臨める。1946年、アルネ・ヤコブセンはスーホルムの最初の敷地計画をすでに行っていた。そこにはもともと王政時代から貴族のヴィラが建っていたが、ひどい老朽化のために取り壊された。この建物が土地の名前の由来となっている*1。

この敷地のために2種類の2階建ての住居棟が計画された。南側にまず5つの住戸が連結して配置された。各住戸の面積は約110㎡で北側の住棟より20㎡小さくなっている。これは1946年当時、政府の住宅ローンが最大面積を110㎡に設定していたためである。

3年後に法律は改正され最大面積が130㎡まで引き上げられた*2。

最初の住戸タイプでは居間が2階に、寝室、その他すべての部屋が1階に置かれた。海に面する大きな窓からオーレンソン海の素晴らしい眺めを楽しむことができる。ヤコブセンは各住戸の位置をずらしながら配置することにより、すべての住戸に個別の眺望と日光を供することに成功している。これは当時としては新しいことであった。スーホルムは、今では淡いグレーに見えるが、灰色味がかった黄色いブロックで建てられた。また、バルコニーの部材はすべて同じ色で、木材は白く塗られている。敷地内の建築物は、条例によりあらゆる変更が禁止されている。

(レネ・クラル)



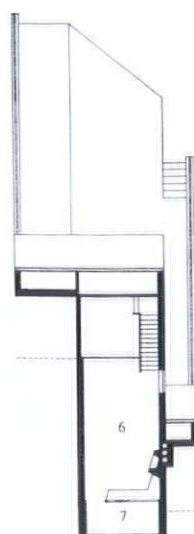
居間の暖炉



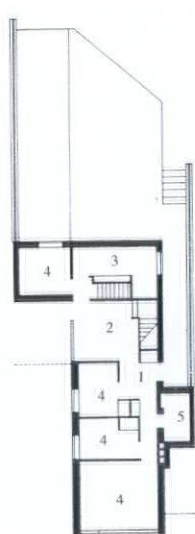
ヤコブセン自邸の庭



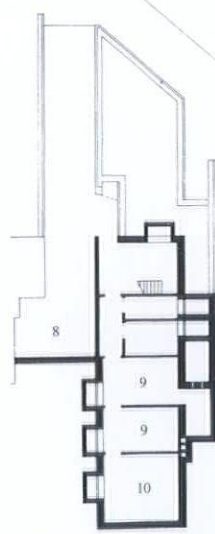
庭からヤコブセン自邸の住戸を望む



2階平面図 S=1:400

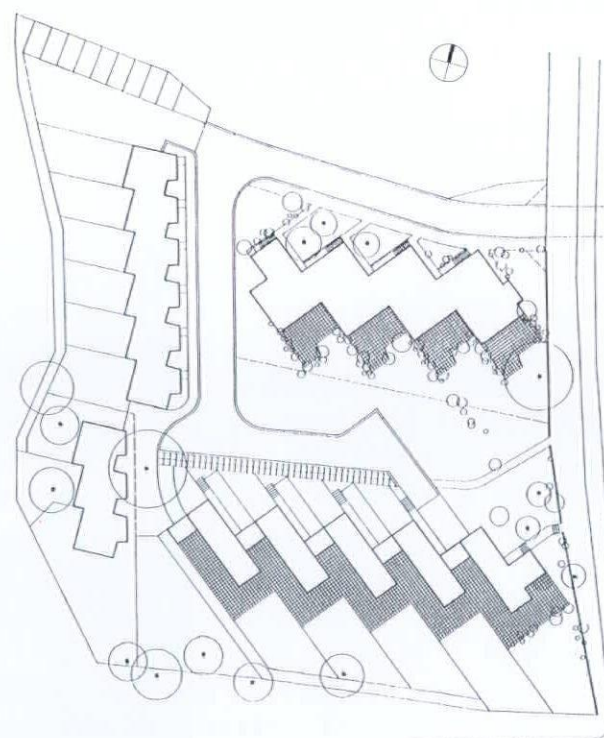


1階平面図



地階平面図

- 1: 玄関
- 2: 食堂
- 3: キッチン
- 4: 寝室
- 5: 浴室
- 6: 居間
- 7: バルコニー
- 8: 車庫
- 9: 納戸
- 10: ボイラー室



配置図 S=1:3200 南側が第1期のスーホルムⅠ、北側が第2期のスーホルムⅡ、そして西側に第3期のスーホルムⅢ

ケアホルム自邸 ルングステッド、1963

設計：ハンナ・ケアホルム

Kjærholm's Own House, Rungsted, 1963
architect: Hanne Kjærholm

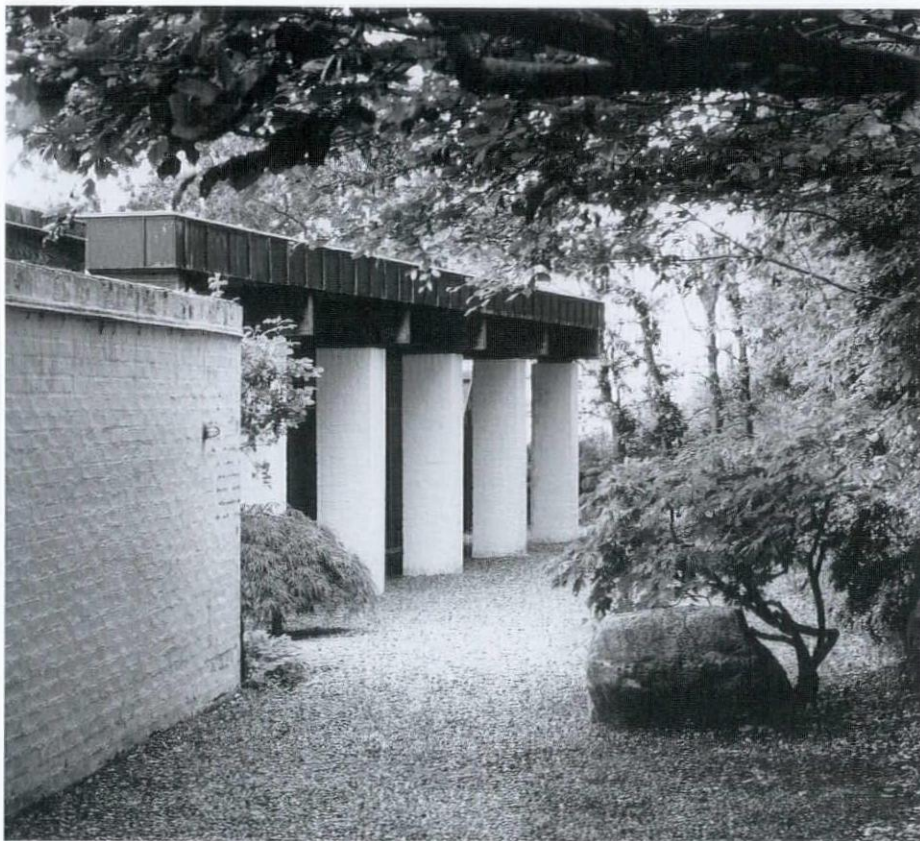
この住宅は、コペンハーゲンから北へ車でおよそ30分、ラングステッドの海岸沿いに1963年に建てられたケアホルム夫妻の自邸である。王立芸術アカデミー教授でデンマークを代表する女性建築家として知られるハンナ・ケアホルムが29歳の時に手掛けた作品で、家具は、著名な家具デザイナーである夫のポール・ケアホルムのデザイン。

左右対象のプラン、白く塗られたレンガの角柱によって特徴付けられたファサードなど、きわめて古典主義的な手法が用いられているが、レンガと松の白木という素朴な材料の扱い方などによって、実際には非常に心地良い、温かみのある空間となっている。

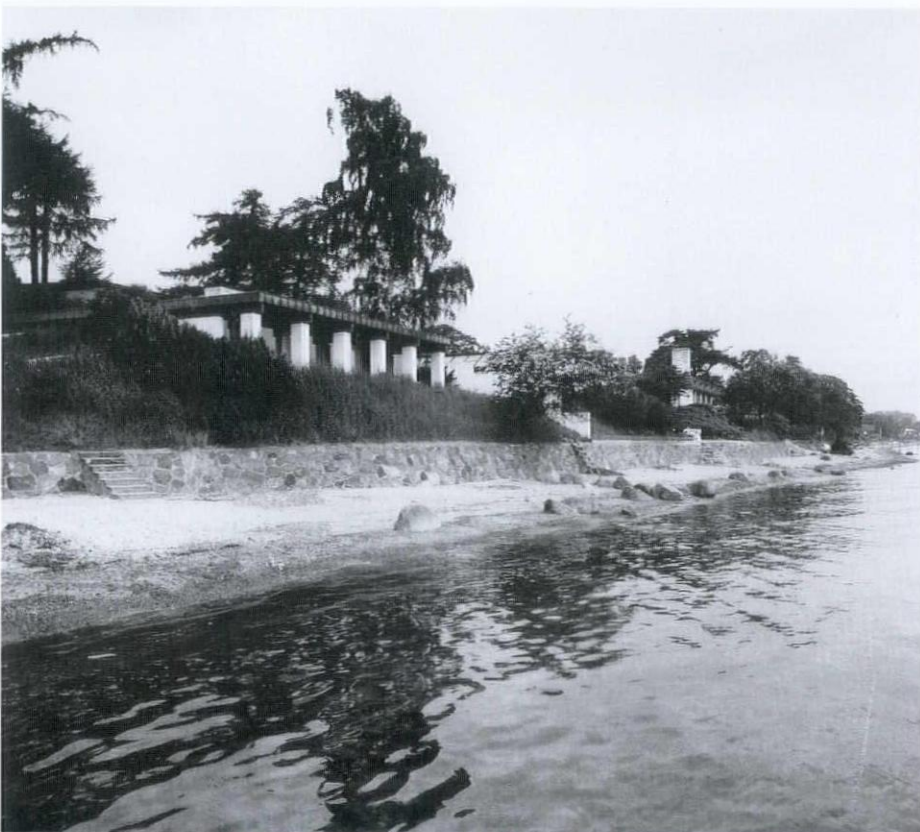
平面構成はいたってシンプルで、ほぼ正方形に近い平屋根に覆われた空間は、海岸側、道路側ともに6本の角柱で支えられ、内部空間はちょうど中央でふたつに分けられている。海岸側は、オープンな空間の中にダイニングルーム、リビングルーム、書斎が収められている。また、道路側の空間は6本のコラムによって5つの空間に分割され、寝室、キッチン、バスルーム、仕事部屋が収められている。エントランスは、左右対象に来客用と子供用のふたつが設けられている。

当時、新たに開発された海岸沿いのこの美しい住宅地の一角を、幸運にも手に入れることができたケアホルム夫妻は、数軒先にあるグンログソン邸やその他の50年代に生み出された優れたモダン住宅のプロトタイプを参考にしつつ、このシンプルで機能的な住宅を設計したのであろうか。ハンナ・ケアホルムが29歳という若さで手掛けたこの自邸は、60年代を代表する個人住宅として高く評価されている。

敷地が美しい海に面しているという好条件を、どうデザインに取り入れるかが重要なテーマだったと、ハンナ・ケアホルムは語っていた。海岸側の深い軒の下に設けられた素朴なテラスには、夫のデザインしたシンプルな椅子がさり気なく置かれている。いつまでも明るい穏やかな夏の日を、静かな海を眺めながらこの飾り気のないテラスで過ごす。これこそ、ケアホルムが表現したかった真の生活の豊かさなのだろう。(木下壽子)



エントランス通路となっている壁面と、入口側の列柱



海側の周辺



ハンナ・ケアホルム

Hanne Kjærholm

1958年 設計事務所開設

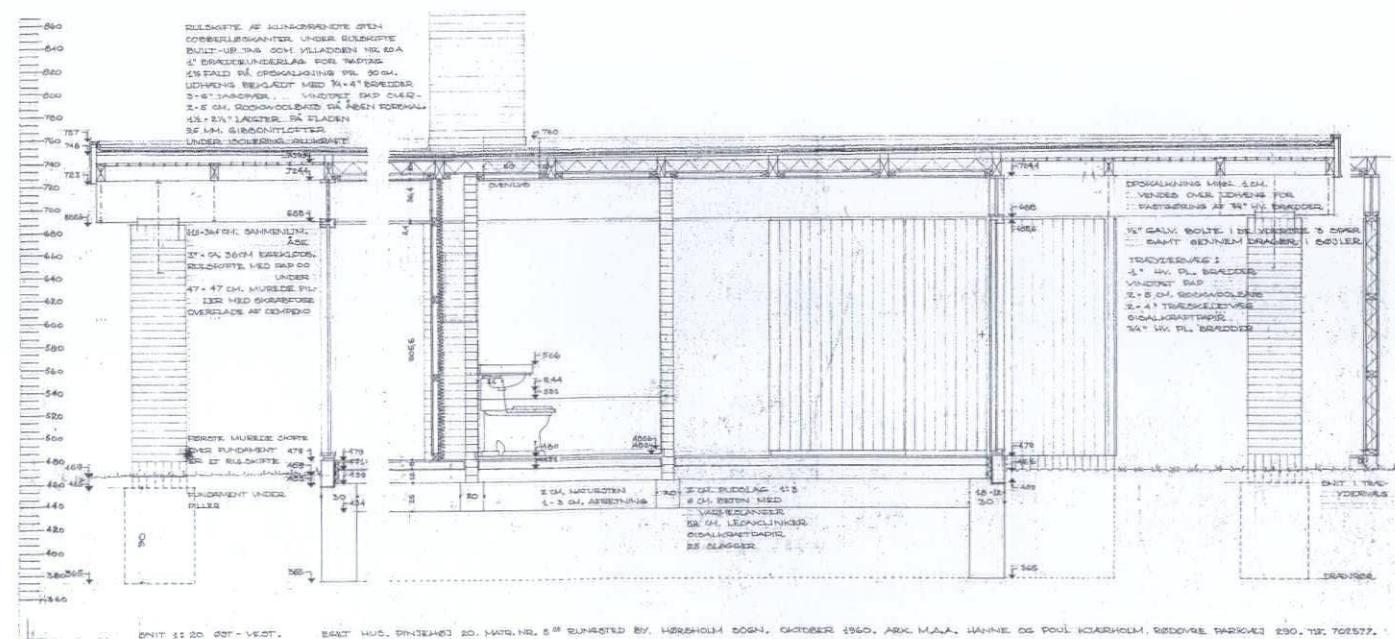
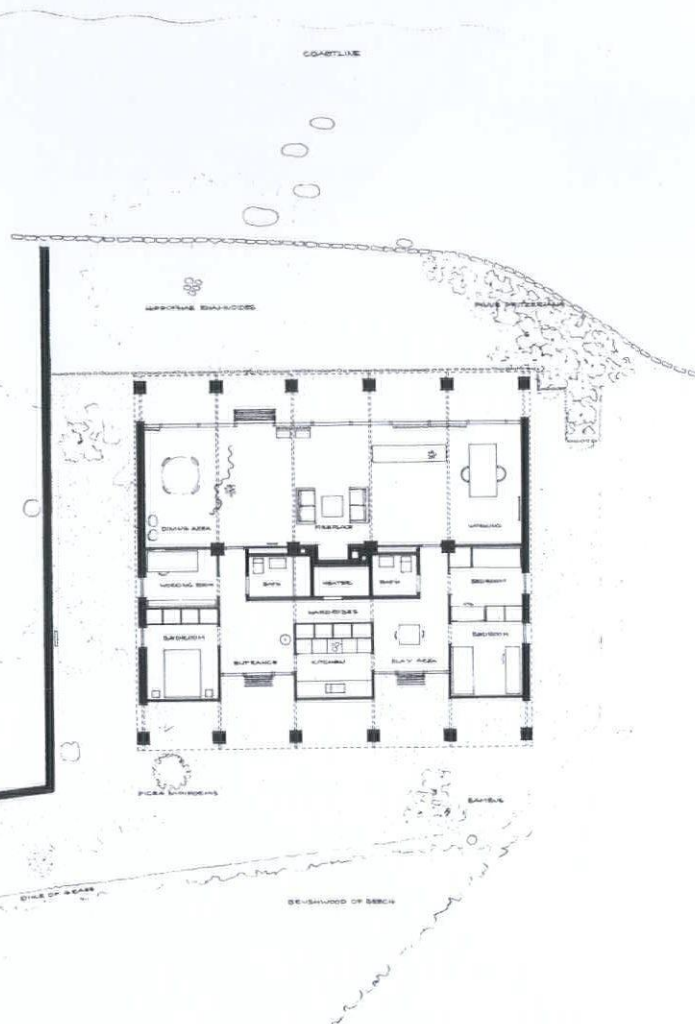
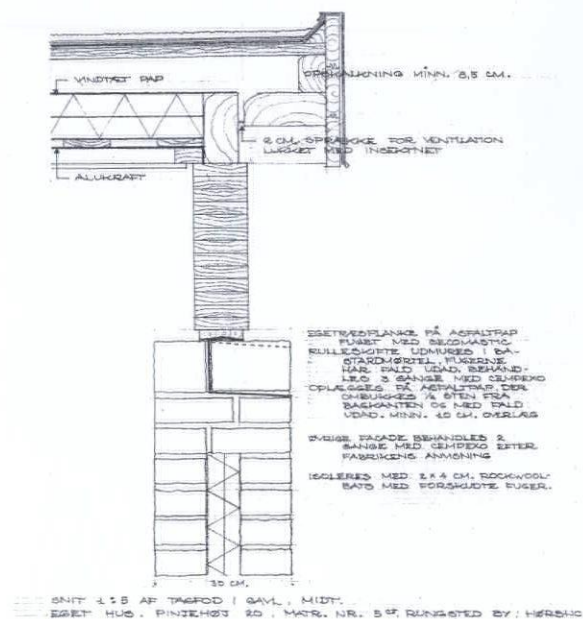
1989年 デンマーク王立芸術アカデミー
教授に任命される

1930年 ヒューリングに生まれる

1938年 デンマーク王立芸術アカデミー
入学

1956年 デンマーク王立芸術アカデミー
卒業

現在、ルングステッド・クストに事務所を構える

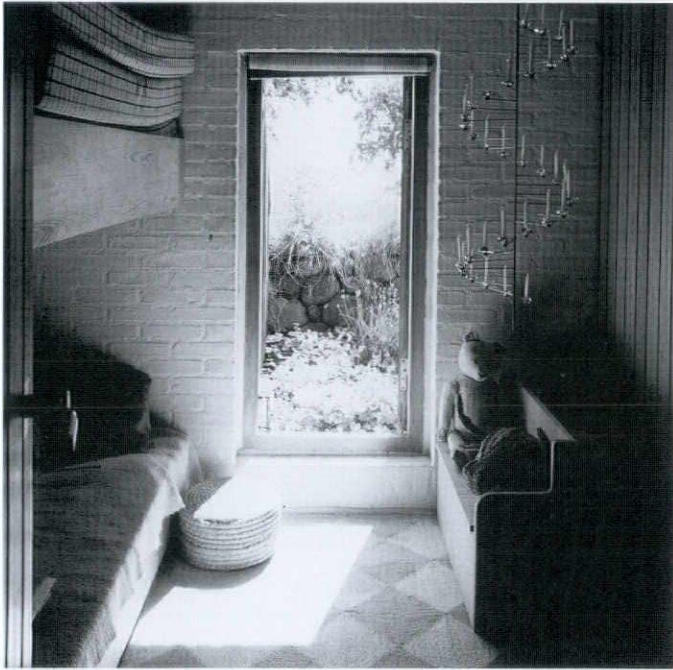




海側テラス



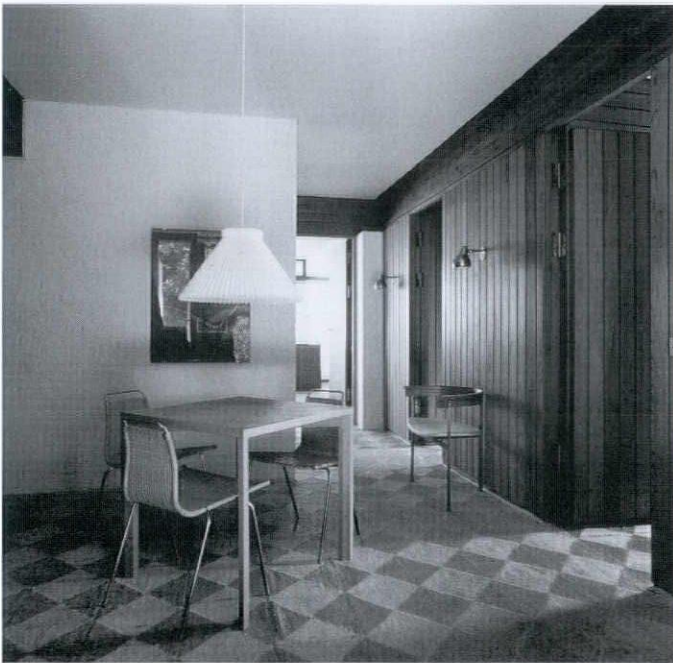
居間



子供室 1



子供室 2



プレイ・エリア。右が子供室、左が厨房



玄関ホール

ハンナ・ケアホルム

インタビュアー：木下壽子

まずは、建築家としてのケアホルムさんのバックグラウンドについて伺います。なぜ建築に興味をもたれたのか、受けてきた建築教育、御自身の作品などについてお話しいただけますか。

私は、とてもリベラルな家庭環境の中で育ちました。特定の宗教に縛られることもなく、あらゆる芸術への理解と愛情に包まれていました。もともと農家の出身だった私の父は技術者で、パリ、ロンドンなどで学び、非常に国際感覚の優れた人でした。私たち兄弟は、父の出身地であるユトランド北部のヨーエンという小さな町で育ちましたが、この地域は、空がとても明るいことで知られるユニークなところで、多くの画家も住んでいました。しかし同時に、非常に風が強く自然が厳しいところでもありました。私が育った環境、つまり、とてもリベラルでインターナショナルな家庭環境と大自然に囲まれて育ったというバックグラウンドは、その後の私の思想や仕事に大きく影響していると思います。

私はとても自然を愛しています。金儲けやファッションに興味を持つより、歩いたり、泳いだりということに幸せを感じます。このような環境に育った私にとって、建築家の道を歩むことはきわめて自然なことでした。

建築家としてどのような教育を受けられたのですか。

まず、王立芸術アカデミーの建築学科に入学し、コースを修了後大学院に残りました。この大学院では当時ヤコブセンが教えていましたが、彼は教師としての才能はまったくありませんでした(笑)。大学院修了後、教師としてアカデミーに残り、それ以降現在まで、建築教育に携わっています。

ケアホルムさんがアカデミーで建築を学んでいた時期は50年代でしたね。戦後のデンマーク建築界はどのような状況でしたか。

私が大学を終えたのは1957年ですが、当時は、これから発展していこうという活気に溢れていました。建築についていえば、特にアメリカの影響が大きかったように思います。

この自邸は、ケアホルムさんが29才という若さで設計され、60年代のデンマーク建築を代表する住宅建

築となったわけですが、設計されたとき何か特別な思い入れはありましたか。

当時の私にとって自邸を設計するということとは特別なことではなく、とても自然なことでした。結婚して子供がひとりできたときに、運よくこの敷地を購入することができたので、私達はすぐにこの家のデザインを始めたのです。

この自邸のデザインに関して、家具デザイナーであるご主人はどのくらい参加されたのですか。

彼と互いに相談しながら、建築そのものは私がデザインし、家具はポールがデザインしました。ダイニング・テーブルとその椅子を始め、これらの家具の多くはこの家のためにデザインされたものです。

自邸のプランニングについてご説明いただけますか。

敷地が海に面しているということ、そして私のすべての作品に使われる「柱」がテーマの中心でした。基本的にはこの建物は柱と梁の構造で、屋外の柱に架かる大きな梁が全体を覆うというアイデアでした。一部の柱と防火が必要な外壁以外は、すべて木が材料として用いられています。

プランは、シンメトリカルという点で非常に古典的です。エントランスがふたつありますが、ひとつは訪問客用、もうひとつは子供用です。このふたつのエントランスは、子供達が幼かった頃にとってもうまく機能しました。

この住宅はとても住みやすい、住むのが簡単な家です。30年以上たった今でも非常によく機能しています。掃除も楽ですし、延べ床面積が170㎡ですから、広すぎず、狭すぎず、ちょうどよい広さです。

デンマークでは建築・デザインを説明する言葉としてファンクショナル(機能的)という言葉が非常によく耳にしますが、機能的であるということに何か独特な価値観があるように思います。

デンマークでは、美というものを機能的なデザインのなかに見い出します。日本人もそういう意味ではファンクショナル(機能主義者)と言えるでしょう。日本の伝統的なデ



ハンナ・ケアホルム

ザインというのは高度に機能的であり、同時に美しいからです。我々は伝統的にファンクショナルリストですし、現在でもそれを信じています。デンマーク以外を見ても、ファンクショナリズムというのは30年代だけでなく、現在また復活しつつある思想だと思います。

50年代のデンマークのモダンハウスには、伝統的な日本建築の影響が色濃く反映されているように思うのですが、ケアホルムさんご自身は当時、日本建築を特に意識されていたのですか。

この自邸を設計したすぐ後に、王立芸術アカデミーのゴールド・メダルを決定するコンペがあり、幸運にも私がそれを獲得しました。当時私は35歳でしたが、その賞金で初めて日本を訪れました。伝統的な日本のデザインのシンプルさ、物を大切にする精神、優れたクラフトマンシップ、細やかな心遣いなどを以前からとても素晴らしいと思い、関心があったのです。そして日本が今も古い物を大切に守り続けているのは素晴らしいことです。

その後の作品に日本建築からの影響はありましたか。

日本建築から学んだものは非常に大きかったと思います。引き戸やプロポーションなど、様々な点で影響を受けました。

ケアホルムさんの建築哲学というのはどのようなものでしょうか。

重要なことは、地域や伝統といった自分が属しているものに対して正直であるということだと思います。最初に言いましたように、私は空が明るくて自然環境が厳しいユトランドの北部という地域に属する人間であり、その環境が私の思想や作品に大きく影響しています。また、日本とデンマークが隣国といっても過言ではないほど、ますます世界が小さくなってゆくなかで、自分たちの伝統を大切にすることは非常に重要だと思います。それは単に伝統を守るということではなく、それを今日的に解釈し、応用させながら受け継いでいくということです。例えばこの家も、材料やライフスタイルなど多くの点で伝統を今日的に翻訳した結果なのです。

(於：ケアホルム邸、1995年8月)

ソリューセヴァイの家 イェアースボー、1954

設計：ハラルド・プラム & モーゲンス・ラッセン

House at Soløsevej, Jægersborg, 1954
architect: Harald Plum & Mogens Lassen

モーゲンス・ラッセンは、デンマークが生んだ最高の建築家のひとりである。ラッセンがデンマークのル・コルビュジエと言われるのも、あながち理由がないわけではない。彼は1920年代、デンマークが新古典主義や新しい愛国的ロマン派理論で沸き立っていた頃に、建築家としてスタートした。1928年、彼はパリに行き、その滞在中にル・コルビュジエと知り合っている。ラッセンは、このスイス生まれのフランス人建築家の下で仕事をしたことではないが、1930年代からの初期の住宅設計のいくつかには、彼が手本としたこの偉大な人物の影響、特にシュトゥットガルト・ワイゼンホフの〈ワン・ファミリー・ハウス〉(1927年)からの影響を読み取ることができる。

初期の頃に最も影響を受けた人物への忠誠心が変わることはなかったが、彼は疑いなく彼自身の作風を作り上げていった。そして、デンマークの伝統をインターナショナル・スタイルとして通用するまでにしていったのである。それが、この〈ソリューセヴァイの家〉によく表れている。

またラッセンの最も有名な他の作品のひとつは、コペンハーゲンの北にある高級住宅の一角にある。この地域は、もともとコペンハーゲンの古い要塞の一部だったが、軍事上の変遷に伴って住宅用地として譲渡されたものである。1938年以降、10戸の住宅がここに建てられ、うち5戸をラッセンが設計している。その中の1戸は、アルネ・ヤコブセンとフレミング・ラッセンの円形の〈未来の住宅〉とよく似ているように感じられるが、アイデアそのものは、実は全く別のところから出たものである。つまりラッセンは、以前この敷地に建っていた円形の砲塔の古い基礎をそのまま住宅に利用したのであって、そこから建物の円形でダイナミックな外形が生まれたのである。

モーゲンス・ラッセンは、言わば完璧な建築家であった。基本的に彼は小規模な住宅しか設計しなかったが、それには台所や椅子、その他様々な工芸品のデザインも含まれていたのである。このまきに世に知られざる建築家の作品をじっくりと研究することをお勧めする。
(レネ・クラル)



モーゲンス・ラッセン
Mogens Lassen

1901年 コペンハーゲンに生まれる
1924年 テクニカル・スクール卒業
建築を独学
1926年 エドワード・ハイベルク設計事
務所勤務

1926年 トゥゲ・ファス設計事務所勤務
1927-28年 パリのクリスチャニ&
ニールセン構造事務所勤務
1932年 設計事務所開設
1987年 死去



居間



居間

この住宅は、子供のない夫婦のためのものである。従って全体の機能構成は、いわゆる伝統的な家族生活を中心としたものではない。その代わりにモーゲンス・ラッセンは、南向きの窓を大きくとった書斎に重点を置いた。居間と台所はひとつにまとめられ、双方の機能を満たすためにゆったりとした広さをとり、上のテラスへと通じている。

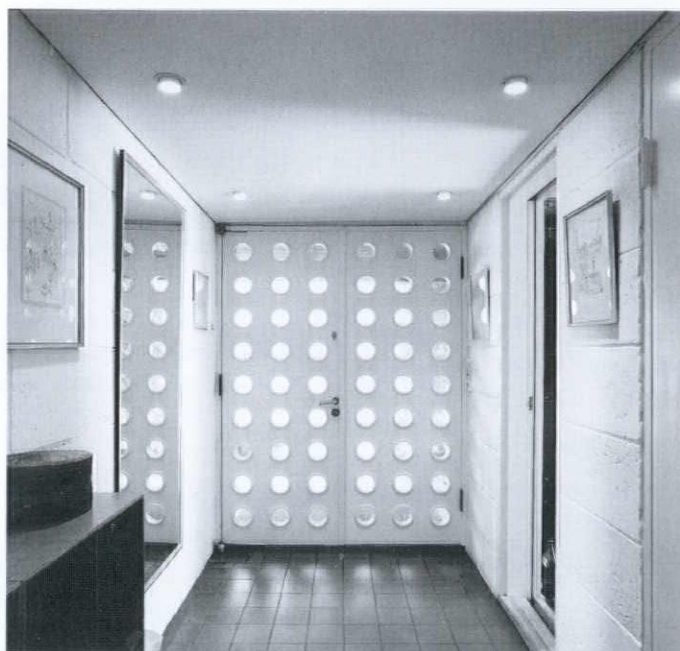
家は、フンデソエ・ムア湿地に向かって急傾斜になった敷地の頂上に位置している。そのため、建物は斜面に沿って階段状になっており、どの部屋からも素晴らしい眺望を楽しむことができる。言ってみれば家の詳細は、実際には部屋のレイアウトと窓の大きさによって決定されていったのである。

この家は、デンマークで初めて暖房用に電力を用いた住宅例のひとつである。そのため、内外壁には断熱材がふんだんに用いられ、中空壁は50cmというそれまでにない厚さとなった。構造は多孔性コンクリートを用いているが、屋内部分ではさらに仕上げなしの木材を用いている。床は地面に直に載っており、15cm×15cmの赤く焼いたスラブ覆いで仕上げてある。このような完璧なディテールを追い求める姿勢は、同じような素材への直観と、優雅で熟練した光の扱い方を見せた60年代の篠原一男の作品を想起させるものである。

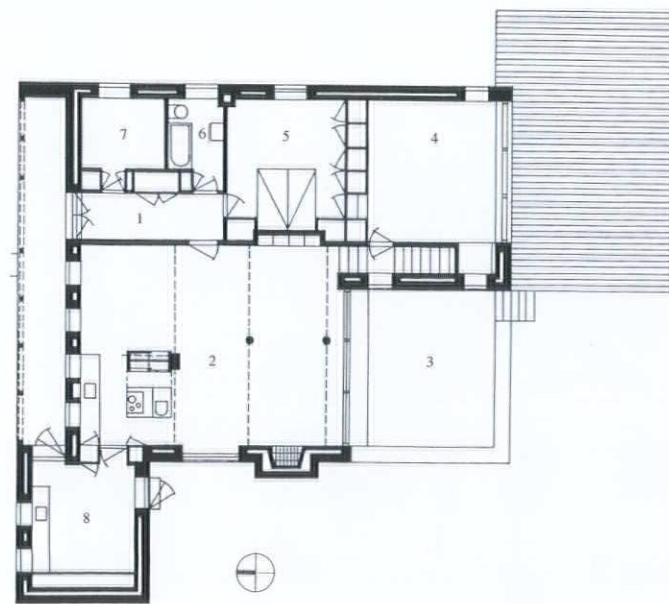
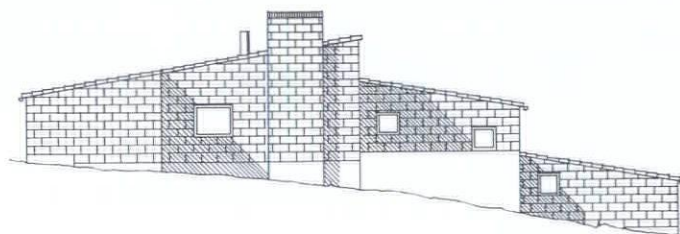
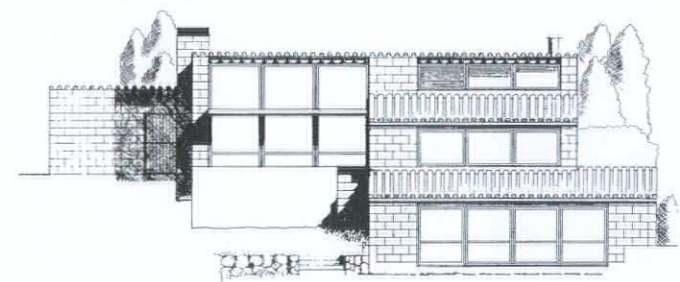
(レネ・クラル)



居間へ上がってくる階段室



玄関室



平面図 S=1:250

- 1: 玄関ホール
- 2: 居間・キッチン
- 3: テラス
- 4: 書斎
- 5: 寝室
- 6: 浴室・トイレ
- 7: 客間
- 8: 洗濯室



試論：デンマーク近代住宅再考

斎藤光代

ライトと近代住宅

暗い第二次世界大戦が終わると、デンマークの建築家の間で、アメリカ合衆国への関心が高まった。アメリカに留学した若手の建築家達は、ライトの建築と「湾岸スタイル」の建築を手土産に帰国する。彼らが持ち込んだ建築には、日本建築の洗練した木造建築と柱梁構造の影響も見られ、それは新鮮なインパクトだった。

従来の家は、四方を壁にしっかり守られ、個人の生活、プライバシーを守るものだ。開口を大きくとったアメリカのオープンハウスは、今までの住宅概念から逸脱するものだったろう。また木造建築について言えば、東南アジア諸国の木造住宅より、洗練された日本の木造が注目を浴びた。

オープンハウス

デンマーク人は、二言目には「居心地のいい家」(Home Comfort)という。この国の人の理想の家は、安楽椅子のあるコーギー・コーナーで、脇の小さな窓から外が覗ける「居心地のいい家」。瓦屋根に煙突、均整がとれて、てらいのない住宅で、周囲の自然や環境に調和するよう考えられている。

しかし、50年代の住宅には、コーギー・コーナーは見当たらない。安楽椅子はキャンパス・チェアに替わっている。生活を守る住宅は、そのシェルター機能を放棄し、オーガニック(有機的)に自然のなかへ流れ出す。寒い気候から人々を保護してきた北国の住宅の壁は、突如としてその壁を開く。屏風のごとく開閉する壁に、もはや窓穴は見えない。

屏風壁の間に大きなガラスがはめられ、ガラスは内と外の境界を否定して自然を室内に招き入れる。いや、室内が自然の一部になる。今までの自然との「調和」は、さらに自然との「融合」となる。自然こそは、デンマーク人が愛してやまないもの、言ってみればナショナル・コンセンサスである。

終戦後の希望に満ちた時代には、人々は未来と技術を信じていた。「新しいもの」=「進歩」だった。だからこそ、時代が違えばとても受

け入れられないはずの近代住宅がこの国にもすんなりと受け入れられた。

時代の温度

建築スタイルは時代の体温のようなものである、とピーター・ブローベア氏は言う。50年代の近代住宅は、セントラル・ヒーティング、車2台、共働き、技術の進歩と輝かしい未来を信じられた時代の体温。戦後の繁栄を謳歌した明るいデンマークの名残りのものだ。一方に日本的なものの影響がみられる。といっても、日本様式の猿まねではない。日本の伝統工芸、建築のもつ機能性が、デンマーク人のめがねにかなない、そのシンプルな造形に彼らは魅了された。近代建築には、パウハウスに見られない日本タッチがうかがえる。

日本的なものとデンマーク的なもの

ニルス・オーレ・ルンド氏、前オーフス建築大学学長によれば「日本的なものとクラシズムの比率はいろいろ変化したが、本物でロジカルなものを大切にするデンマークの伝統は引き継がれた。デンマーク建築では、シンメトリーはアシンメトリーに勝り、ファサードは常に大切だった」(『ノルディスク・アーキテクチュア』ニルス・オーレ・ルンド著、1993年)。

またルンド氏によれば、ウドセン自邸(1956年)は、そのコンポジションがフランク・ロイド・ライトに近いが、日本の影響がより強く表れているのは、建築家クレメンソンの自邸(1954年)である。一方、この時代の代表的建築となっているルイジアナ美術館は、一般に日本の影響の濃い建築といわれるが、彼はよりミース・ファン・デル・ローエに近いという。

フラット・ルーフに巨大ガラスのはまった近代住宅は、デンマーク中に広まった。国民のデザインへの関心が高いと言われるデンマークでも、建築家自身が設計した住宅の数は知れているが、これら建築家の設計した住宅は、一般住宅のプロトタイプとなって国中に波及するケースが多い。

近代住宅の後退

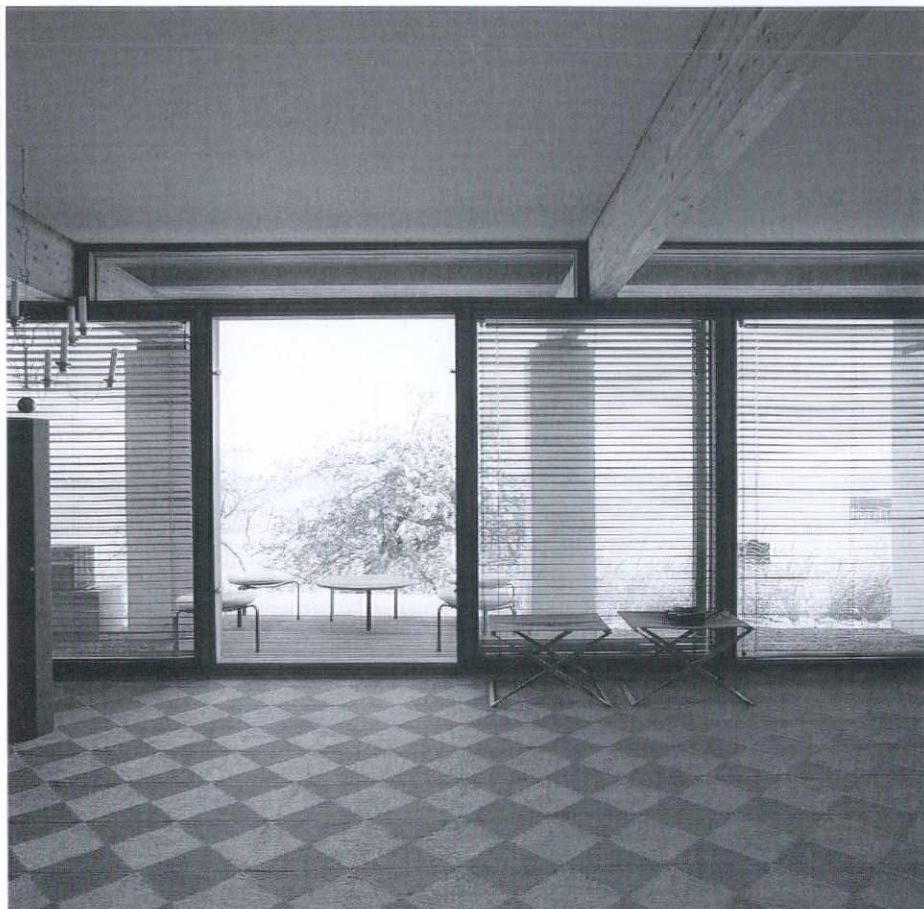
しかし、1968年の学生運動、1973年のオイルショックを体験すると、この未来の象徴たる近代住宅が、何となくちぐはぐに感じられてきた。1950~60年代のオープンハウスは、浮世の社会問題からかけ離れた、コペンハーゲン北部の有閑階級の住宅でしかない、という批判が出はじめる。同時に国策として省エネルギーを進めるデンマークでは、1977年に建築基準法が改正され、大型ガラスの住宅が不可能となった。

1970年代後半から1980年代にかけては、スペインなど南ヨーロッパに見られる大きく開口部を取った近代住宅は夢物語で、エネルギー節約の風潮の真っ只中で時代錯誤に映った。近代住宅を学ぼうと王立芸術アカデミーに来る学生に、もうああいう住宅は建たない、と教授達は言う。近代建築の担い手であった人々がそんなことを言うのは奇妙だが、その理由は「建築基準法上建てられない」という素気ないものだった。

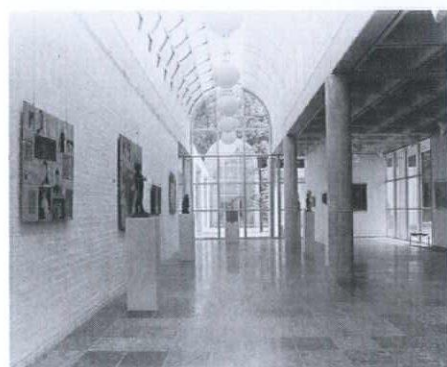
批判

それどころか近代住宅は、ブルジョワの住宅とレッテルを貼られた。近代住宅は素朴かつシンプルなライフスタイルを提唱しているものの、その前提としてゆとりとした敷地と魅力的な自然が必要だ。この国で一般庶民が購入する土地の広さは700m²程度で、この面積は自然と融合する近代住宅を建てる規模ではない。

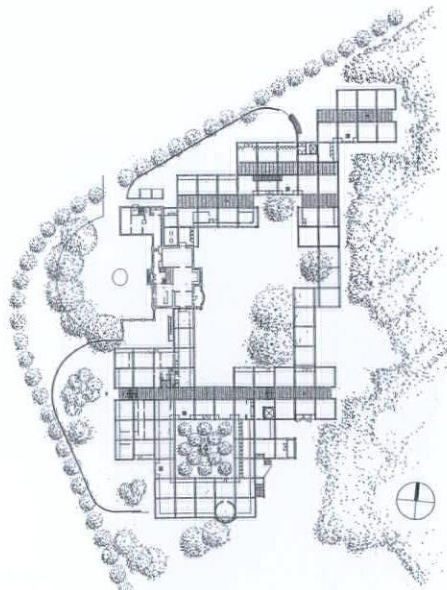
日本の影響を受けたアメリカ建築は、自然派デンマーク国民に即座にアピールしたが、住宅の中で展開される生活様式は、というとその影響は疑わしい。西欧の家には、宝並べのように、家具やらアンティークやら絵画を陳列する癖がある。それに反して近代住宅は、過剰を除き、シンプルなインテリアを求めるのであろうが、そのような近代住宅にふさわしい生活スタイルを意識改革として行っていたわけではない。デンマーク近代住宅はその革新的デザインほどには生活そのもののフィロソフィを用意できずにいた。そのため、1968



ケアホルム自認の居間から海を望む。大きな開口から自然がふんだんに取り込まれる



ホルスタブロー美術館／ハンナ・ケアホルム設計



ホルスタブロー美術館平面図

年以降、チンゴード住宅の設計で知られる社会派建築家バンコンストンらが台頭すると、議論さえなく近代住宅派は退却した。

しかし、デンマーク建築独自の確固とした材料さばきと機能主義、プロポーションの確かさを武器にこの優秀な近代住宅の建築家たちは、引き続き次の流れのなかで大きな仕事をしてゆく。例えば、ハルドー・グンログソンの外務省ビル、ハンナ・ケアホルムのホルスタブロー美術館、などである。

原点と今後

自然は最高の秩序を有し、人間は自然の一部である。自然から出て自然に帰る。自然が論理的であるように、人間も論理的に行動する。自然の材料を大切に、空間を機能的に扱うのがデンマーク建築である。建築は自然に抱かれるものが望ましい。このことはデンマークの、あるいはデンマーク建築の共通項となっている。デンマーク人の自然は、日本人が考えるもの以上に、無垢の自然を指していることが多い。外国建築の流れから影響は受けるが、この揺るぎない基盤がデンマーク建築をデンマーク建築たらしめている。

近代住宅の再評価がなされる理由のひとつに、ポストモダン、デ・コンストラクチュアリズムの行き詰まりが挙げられよう。これはデンマークでも同じことが言える。妙に裏にしたり表にしたり屈折したスタイルを見た後では、素直でオープンな近代建築が今すがすがしい。考えてみれば近代主義に説得力があったのは、当時彼らは未来を信じていたからだ。行き先に不透明感の漂う今の時代、近代主義の再評価がただのスタイルに終わらないようお願いしたい。今、建築に求められているのは流転する「スタイル」ではなく、「フィロソフィ」ではないだろうか。

●さいとう・みつよ／在デンマーク、設計事務所PLAN主催

ネアルムヴェンゲ ネアルム、1951-61

設計：パルレ・スーエンソン ランドスケープ・デザイン：C.Th. ソーレンセン

Nærumvænge, Nærum, 1951-61

architect: Palle Suenson landscape architect: Carl Theodor Sørensen



パルレ・スーエンソンの建築は、この国において最も異彩を放つもののひとつではないかもしれないが、最も上品な作品のひとつであることは確かである。彼の住宅は大変控えめであり、上質で抑制された形と素材からなっている。それはモーゲンス・ラッセンの建築にも言えるかもしれないが、ここではさらに大胆に、また独創的に幾何学が使われている。

「大胆さと独創性」は、スーエンソン教授の場合、誠実さと静穏さと全体のセンスによって置き換えられている。彼の建築は、1950年

代におけるデンマークの伝統と文化と、そして多分にデンマーク人の一般的な生き方を再現している。それは小国であり、均整がとれており、平和であり、そして建築の上にもその証しを留めようとする。

スーエンソン自身1940年の講義^{*2}で、優れた建築の基本原則について述べている。彼の新しい論点は、「デザインに法則を打ち立てることはもはや不可能である。なぜなら、建築はすでに多義的になり過ぎているからである」ということであつた。そして彼は、「しかし、

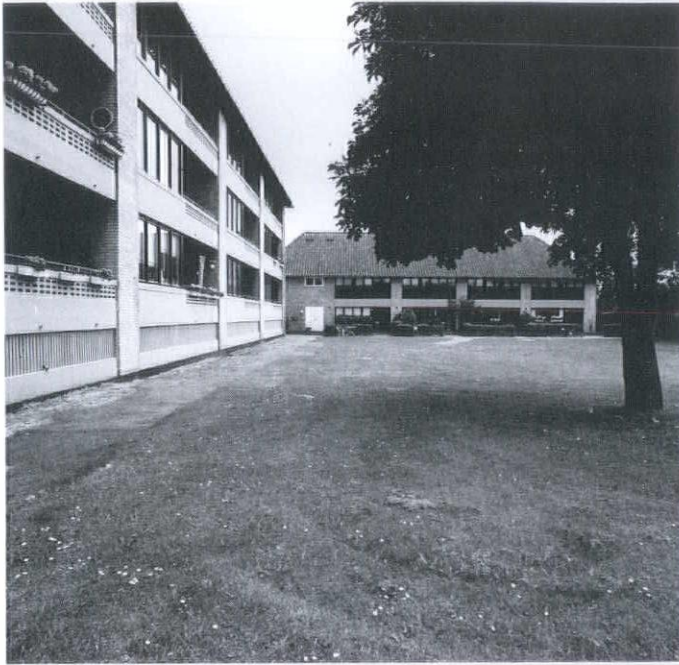
優れた建築を互いに結びつける不変のファクターがある。それはすなわちクオリティである！」と語っている。これこそが、スーエンソンの建築のエッセンスとなっているのである。（レネ・クラル）

^{*2} 2: Suenson, P. Forelæsning til professor Kkon kurren 1940. Crone, J. C. & Hancke, P. (Eds.) *Arkitekten Palle Suenson*. Christian Ejlers' Forlag, 1987, pp. 49-57

パレ・スーエンソン Palles Suenson

1904年 フレデリクスベルクに生まれる
1922-25年 大工の習練を積む
1923年 デンマーク王立芸術アカデミー
入学
1925年 S.C.ラーセン&カイ・フィスカ
設計事務所勤務

1927年 カイ・ゴットロブ教授の設計事
務所勤務
1930年 設計事務所開設
1941年 デンマーク王立芸術アカデミー
教授に任命される
1987年 死去



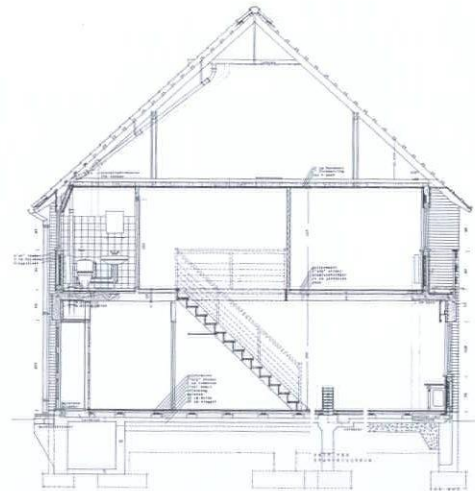
スーエンソンが13年間設計を続けた「ネアルムヴェンゲ」は、3階建の住棟と2階建のテラスハウスからなる340戸の賃貸住宅で構成されている。この集合住宅はコペンハーゲンの北、小さな郊外の町ネアルムに位置する。敷地の周囲は太い幹線道路に囲まれているものの、これらは威圧的には見えてこない。

このプロジェクトは、堅実でわかりやすく、奇を衒った表現は無い。しかし、50年代の精神と、純粋にデンマーク的な何かを表現している。大変慎ましやかなデザインで、控えめに表現されていると思われる。配置計画は非常に厳格であり、建築にも意外なディテールやエレメントは見当たらない。一方、区域全体では非常にうまくハーモニーがとれており、統一感がある。特に2階建のテラスハウスは、レンガおよびコンクリート造の柱梁構造が外に見え、その間に茶色くステイン塗装された木造壁がはめられた構成の中に、

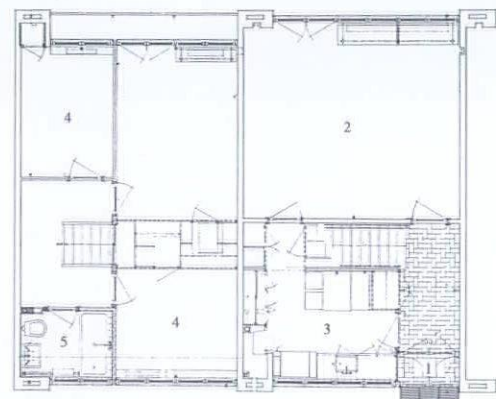
堅実さと伝統を表現している。最も簡単な方法で、建築家は小さい面積(Cタイプで約76m²)を最大限有効に使用できるようにしている。

「ネアルムヴェンゲ」は実にひとつの小社会を成している。ここでは、住民は食料や衣料品から道具類や陶磁器にいたるまで何でも購入することができる。映画館や保育園、オフィスもある。黄色いタイル張りのレンガ造の柱、鋳造研ぎ出しのバルコニー、赤い瓦の寄せ棟屋根を全体的に使用することによって、セツルメントの統一感が強調されている。その方法において、「ネアルムヴェンゲ」はアヴァンギャルドよりもむしろ、アノニマスで伝統的な建築に起源しており、それ故に非常に典型的なデンマーク・スタイル*1を表現しているといえる。(レネ・クラル)

*1: Crone, J.C. & Haneke, P(Eds) *Arkitekten Palles Suenson*. Christian Ejles' Forlag, 1987

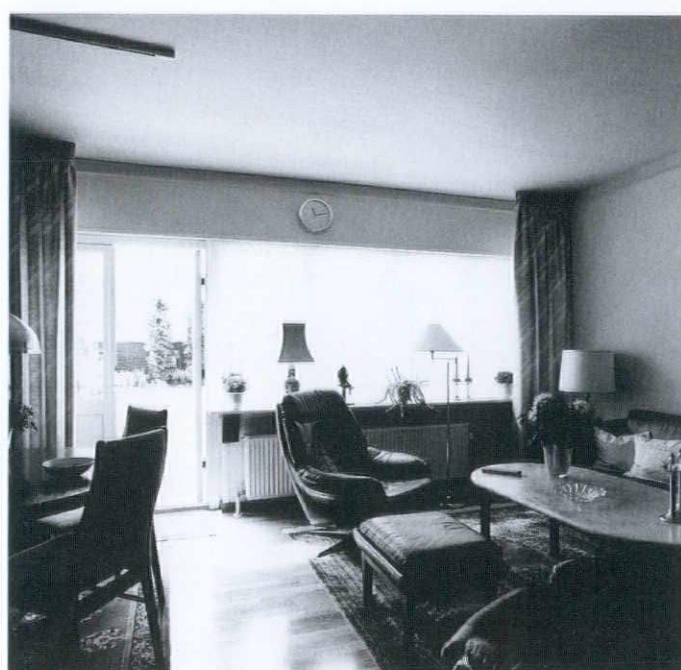
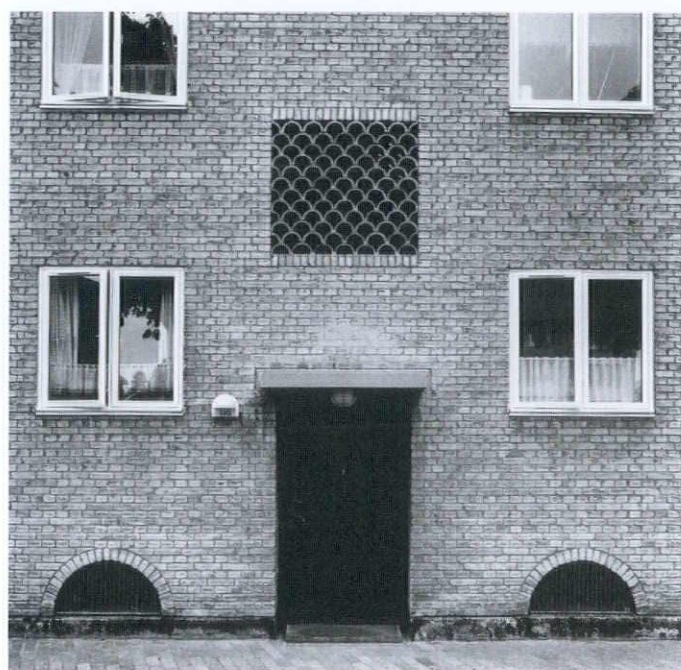
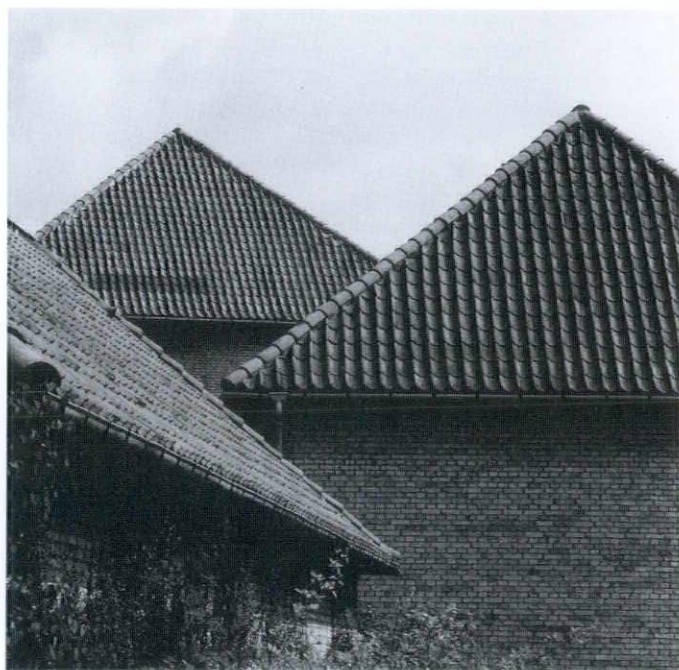


断面図 S=1:175



平面図 S=1:175

- 1: 玄関
- 2: 居間
- 3: キッチン・食堂
- 4: 子供部屋
- 5: 浴室・トイレ



パーセルゴーオン ホルテ、1950

設計：パルレ・スーエンソン ランドスケープ・デザイン：C.Th.ソーレンセン

Parcelgården, Holte, 1950

architect: Palle Suenson landscape architect: Carl Theodor Sørensen



パーセルゴーオンにおいて住宅のセツルメントが初めて建設された。配置計画は、明確に認められた近隣住区内^{*2}を、社会的集合化の理念によって形成したものである。セツルメントは、居住地域における社会的集合という明確なデンマークの理念を表わしている。

この建築には、スーエンソン独自のデザインの実験的要素はない。これは5年前に終息した第二次世界大戦の刻印を受け、常識にコントロールされた建築であることは明らかであった。テラスは、外観に対してまっすぐに設置されており、そのことは人々にとって建物とうまく適応していること以外に何も主張

していないのである。

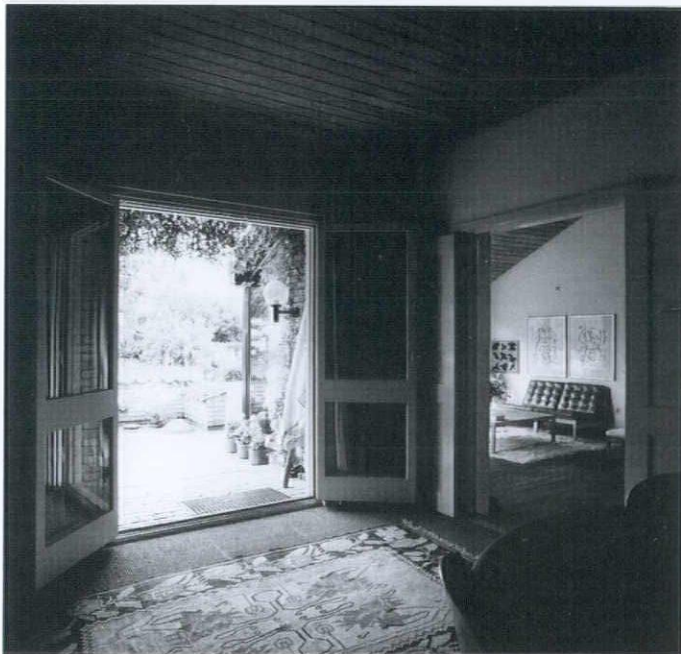
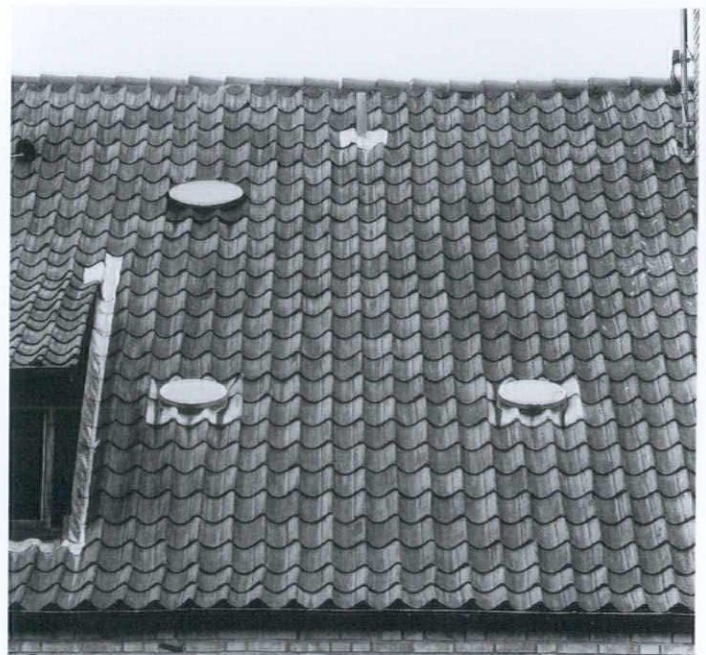
特にスーエンソンの大きなプロジェクトにおいて、彼のスタイルは技術者の様相を呈している。彼の材料と構造に対する健全な扱いは、コンクリートと建築材料が専門であった有名な技術者エドワード・スーエンソンの息子であることに起因している可能性がある。

〈ネアルムヴェンゲ〉と〈パーセルゴーオン〉はどちらを見ても、コミュニティのための良い機会を居住者に与えようとする意図がすぐにわかる。その理由は、プロジェクトの効果が、住棟と住棟の間で緑り広げられる生活に表れているからである。社会的可能性への関

心は、デンマークにおいて決して新しいことではない。すでに1853年のコレラの大流行の後、新しいタイプの近隣住区が建設され、共同生活とプライベートな生活との間に非常に繊細なバランスが保たれた。これがスーエンソンの維持し続けた伝統なのである。

(レネ・クラル)

* 2: Ørum-Nielsen, J. Længeboligen, Kunstakademiet's Forlag Arkitektskolen og Arkitektens Forlag, 1988 pp. 282-303



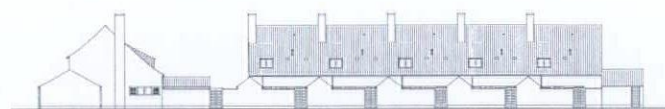
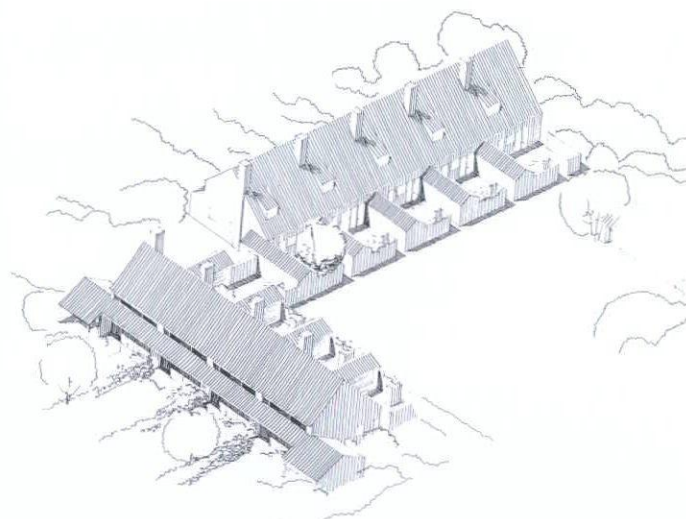


建築とランドスケープがいかに密接に関係しているかを示すには、スコレパーケン（1952～54年）とパーセルゴーオンのプロジェクトが実に良い例である。パーセルゴーオンは、1950年に職人組合のために建設された。住宅はスーエンソンがデザインし、一方外構は、ランドスケープ・アーキテクトの中の第一人者であるC.Th.ソーレンセンが計画を練った。彼は敷地の主要部分を共同活動のための場とした。テラスハウスのすべてのグループは、車のアクセスのための大きな広場をもち、また別にふたつの大きな共有広場をもつ。

全部で66戸の賃貸住宅を有し、それは7～9戸の住宅からなる8つのL字型のグループにより構成されている。L字型の構成は農家のスタイルではなく、

伝統的なテラスハウスの形態である。スーエンソンは、リビングルームの中に日差しを入れ、共有広場にはより親密な雰囲気をつくり出すことを試みている。各住宅の前面には付属の建物のあるプライベートな前庭が配され、反対側には庭に向かって小さなテラスが据えつけられている。建築材料は黄色いレンガと赤い瓦を使用している。建物は優れたプロポーションをもち、例えば扉や窓の形において堅実で調和的なデザインがなされている。これがデンマークのランドスケープ*1との深い調和をもたらしたプロジェクトをつくりだしている。（レネ・クラル）

* 1: Crone, J.C. & Haneke, P(Eds) *Arkitekten Palle Suenson*. Christian Ejles' Forlag, 1987



立面図 S=1:750

フレデンスボーのテラスハウス フレデンスボー、1962-63

設計：ヨーン・ウッツォン

Terrace houses at Fredensborg, Fredensborg, 1962-63

architect: Jørn Utzon



〈キングー・ハウス〉と〈フレデンスボーのテラスハウス〉の両方に通じる基本的な考え方は、実はかなり非デンマーク的なもので、特にデンマークの伝統的な家屋配置の仕方とはかけ離れた考え方が基になっている。伝統的なデンマーク式の建て方では、建物は公道に直接面し、プライベートな空間は裏側に配するのが一般的である。だから、たとえば道路に対して閉じたファサードや立方体の外形、内側に設けられた中庭といった形は、まるで地中海沿岸の国々から取り入れたもののようである。

それでも、〈キングー・ハウス〉や〈フレデンスボーのテラスハウス〉は、非常にデンマーク的ではある。それは、材料や土木技術が北欧の伝統に深く根づいたものだからというわけではなく、むしろ次のふたつの理由からである。第1は、ランドスケープと建物との関係である。家々の地形とのつながり方、その土地の特性や個性の尊重の仕方などは、自然に大きく依存している農業国においては非常に分かりやすく、しかも理にかなっているのである。第2に、デンマーク人の非常に内気な性格を表現している。概して、デンマー

クの人々は、会合等では公平・寛大で形式ばらず、他人に親切的な国民性であると思われている。それは確かにそうなのだが、しかしある部分で、明確な一線が引かれていることも事実である。つまり、プライバシーに関しては、確実に守られなければならない。デンマーク人は、あまりよく知らない人々に対しては一定の距離を保とうとする。こういった理由から、これらの家々の控え目な外観は、デンマーク人にとって結局はそれほど奇異に感じられない。(レネ・クラル)

ヨーン・ウッツォン Jørn Utzon

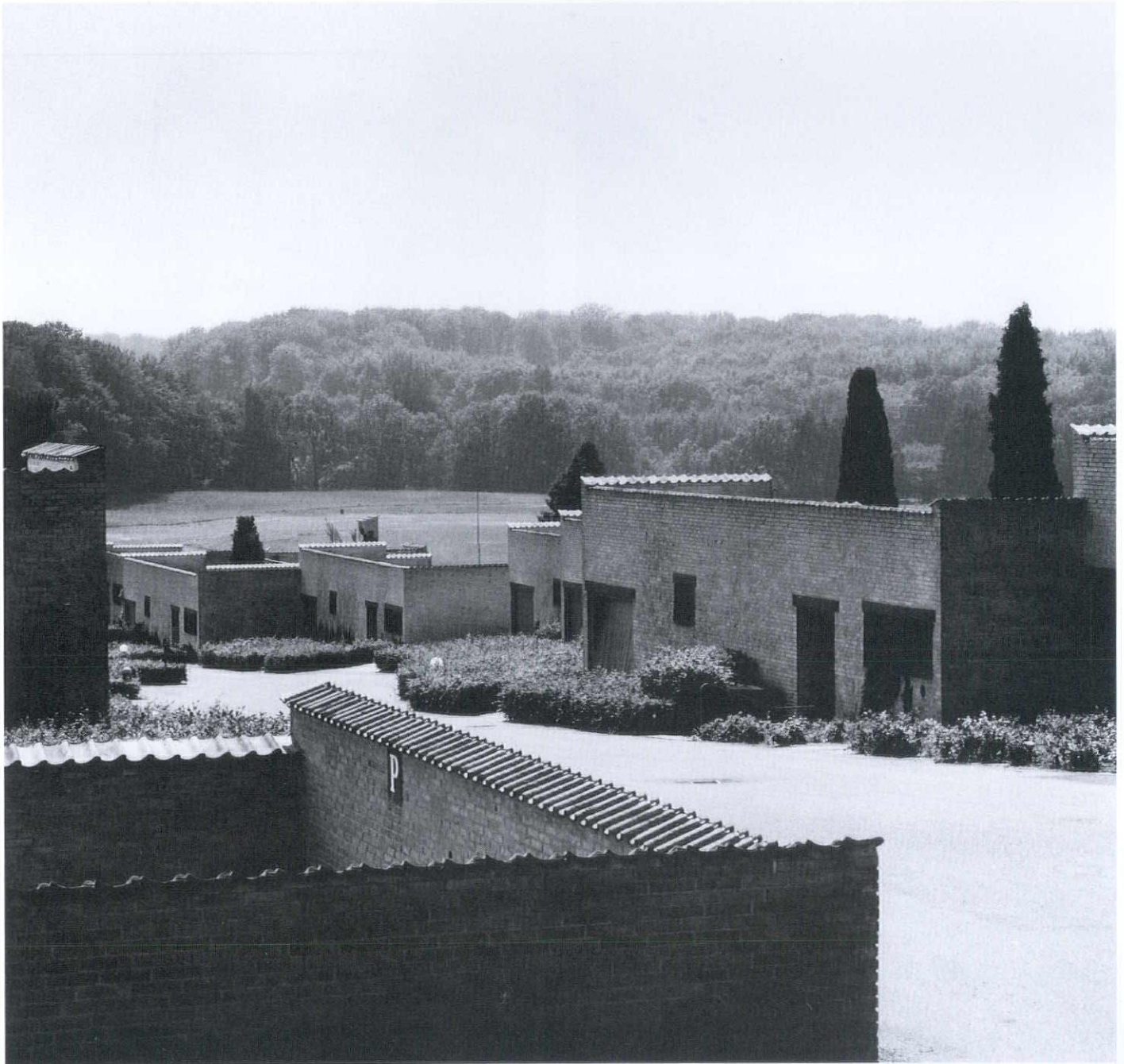
1918年 フレデリクスベルクに生まれる

1937年 デンマーク王立芸術アカデミー入学

1942-44年 スウェーデン、ストックホルムで勤務

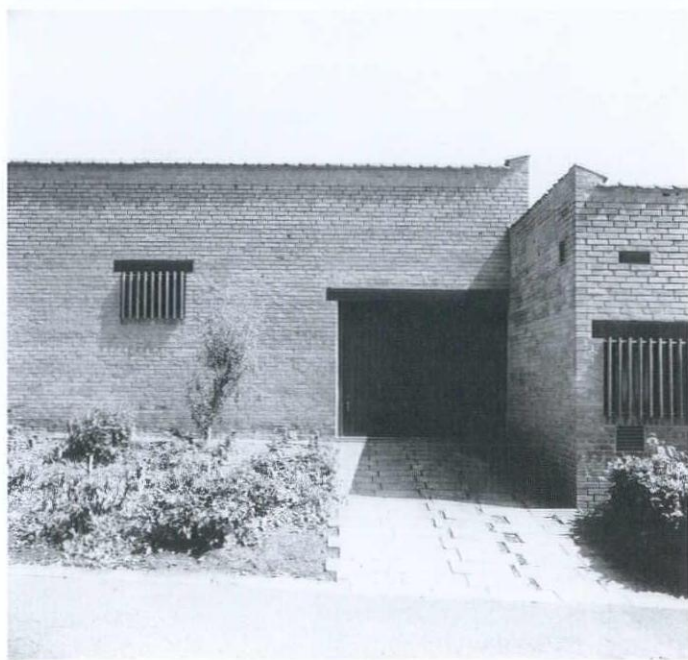
1945年- フィンランドのアルヴァ・アアルト事務所で勤務

1943-47年 トビアス・フェイバーと共にいくつかのコンペに参加
現在スペイン、マジョルカ島の自邸に居住している





住戸のテラスから望む外部の景観



これは、長い外国生活を送った末にデンマークに帰ってきた人々のためにつくられた住宅郡である。これによってテラスハウスが、年輩者だけでなくどの世代にも対応できるものだということがよくわかる。ここはヘルシンゴーの〈キンゴー・ハウス〉と並行して1959年に開発されており、そのため、これらふたつの作品の間には数多くの類似点がある。そういった中でみられる顕著な違いは、フレデンスボーのテラス・ハウスの敷地の方がかなり傾斜がきつくと、住戸が水平・垂直の両方向でその起伏に沿っているという点である。それによって地所全体に、自然の地勢を尊重した非常にダイナミックなシーケンエンスを供する形となっている。住戸はどれも、木々や花々、そしてのどかに放牧された牛たちの美しく安全な風景を、すべての住民が共に分かちあえるように配されている。

住戸は2タイプある。ひとつは平屋建てL字形の住戸で、そこには中庭と、

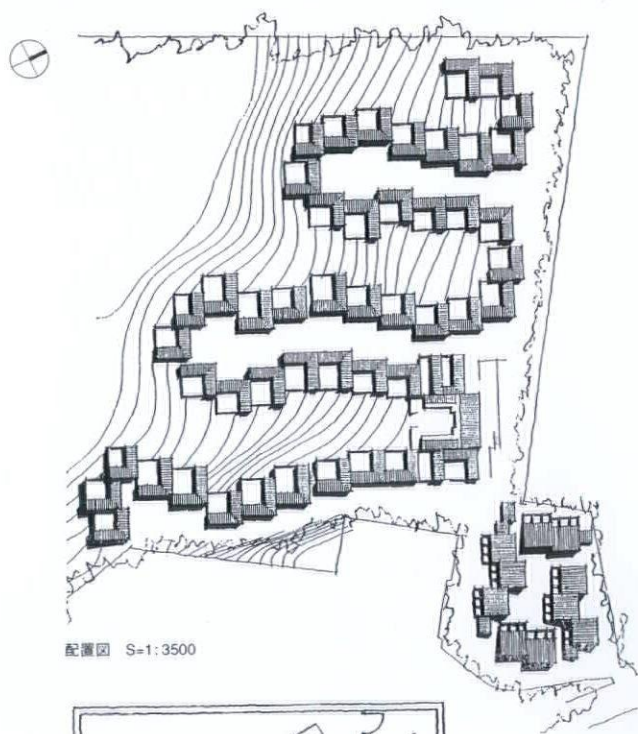
それを公共スペースから仕切る2枚の壁がある。もうひとつは2階建てのテラスハウスで、これは基本的には独身者用である。住戸の間を通る道路は細い小道でオープンスペースとつながっている。これはフィンランドの建築家アルヴァ・アアルトのランドスケープの扱い方と似ていなくもなく、ウツォンが第二次世界大戦直後に彼の下で働いていたことを考えると、あながち不思議ではない。ただし、ここでも材料は典型的なデンマークのもので、黄色い煉瓦、灰黄色のパンタイルに粗削りの木材などが用いられている。

敷地の北側には、レストランと会議室および図書室のあるクラブセンターがある。ここには、さらに来訪者が宿泊できるゲスト用アパートも備わっている。クラブセンターは、住民が共に集い、様々な活動を楽しむ場となっている。

(レネ・クラル)



住戸のテラス



配置図 S=1:3500



平面図 S=1:350

- 1: 食堂・居間
- 2: 寝室
- 3: 浴室
- 4: キッチン
- 5: 物置
- 6: 車庫



居間





キングー・ハウス ヘルシンゴー、1958-60

設計：ヨーン・ウッツォン

Kingo Houses, Helsingør, 1958-60
architect: Jørn Utzon

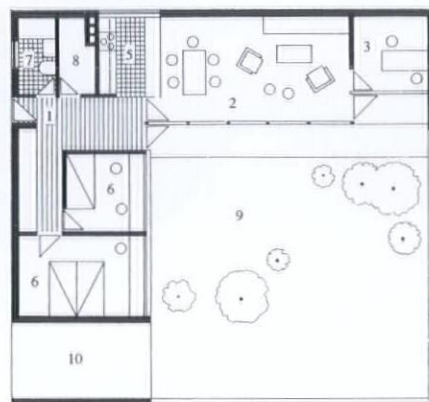
ヨーン・ウッツォンは、おそらくデンマークにおける最も有名な建築家である。彼は1918年、造船技師の息子として生まれた。実際、子供から少年期にかけての彼の夢は、海軍士官になることだった。友人である大学時代のトビアス・フェイバー教授によれば、彼がコペンハーゲンのデンマーク王立芸術アカデミーで学ぶことになったのは、ほんの偶然からだったという。それまでの彼の関心は、海だったのである。ウッツォンの最も有名な作品は、1957年のコンペで優勝したシドニーのオペラハウスだが、すでに1953年には後に国民的な住宅となる戸建住宅への手掛かりを残している。それが、オープン・プランを初めて取り入れたヘレベックの自邸である。この自邸の基本的なアイデアは非常に日本的で、内部は広々とした開放的な1部屋だけで、それを移動可能な壁で仕切るというプランである。この考え方についてウッツォンは、住宅というものは例えば、インディアンのような、慎ましやかなライフスタイルを表現するべきだ、と述べている。彼が日本について言及していないのは不思議としか言えない。ともあれこの自邸は、本特集にも収録されているハルドー・グンログソンやエリック・クリスチャン・ソーレンセンらの自邸といった重要な作品にも大きな影響を及ぼすこととなったのである。(レネ・クラル)



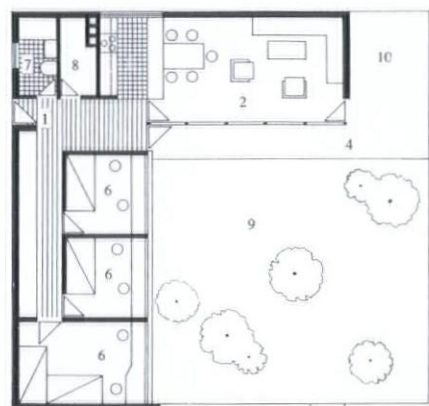
敷地内街路



キッチンから居間を望む



Aタイプ平面図 S=1:250



Bタイプ平面図 S=1:250

- | | |
|---------|---------|
| 1: 玄関 | 6: 寝室 |
| 2: 居間 | 7: 浴室 |
| 3: 書斎 | 8: 暖炉設備 |
| 4: テラス | 9: 中庭 |
| 5: キッチン | 10: 車庫 |

ヨーン・ウッツォンは1959年、コペンハーゲンから北へ約50kmの町ヘルシグーにある小さな湖の近くに、60戸のテラス・ハウスを設計した。これが〈キングー・ハウス〉である。この町は、シェイクスピア劇「ハムレット」の主人公の城クロンボーがある地として有名である。

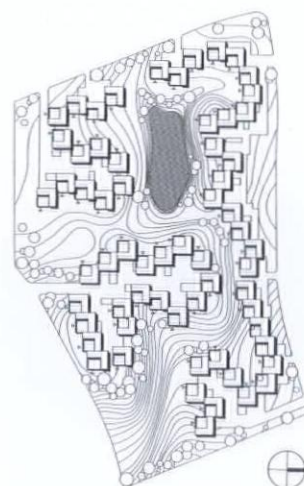
ウッツォンが設計したのはもちろん城ではなく、シンプルで慎ましかった住まいの居住エリアである。元になったのは1952年のコンペ案で、それぞれの住戸が敷地の形状に合わせて、住まいとしての場と日照と景観を最大限に享受できるよう考慮されている。ここでウッツォンは、同一の「エレメント」の繰り返しでありながら、それを徹底的に追求することによって「単純さの中の多様性」をつくり出すことに成功したのである。ウッツォンは、このアイデアを引き続きエキスパンション・システムへと発展させてゆき、ほんのいくつかの主要コンポーネントを追加するだけで、その組み合わせの種類は一気に広がっていった。このよ

うな付加式建築の最も有名な例は、ジェッダのスタジアムと、バウスヴェアのインテリア、そしてスペイン、マジョルカの自邸等がある。

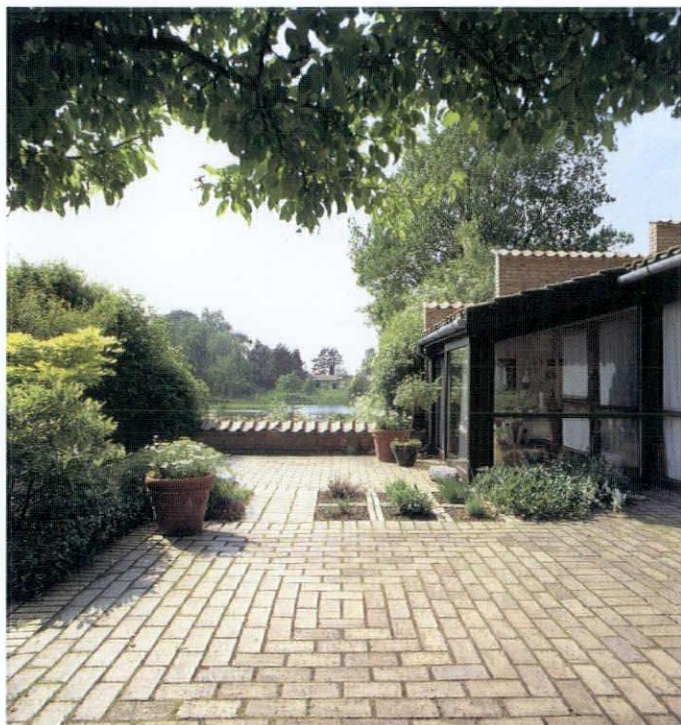
プランは正方形が基本である。ふたつの辺で居住部分を構成し、対面する角は公共エリアとの間の隔壁となっている。中央には各戸専用の中庭があり、同時に林や広場のある広々とした公共スペースへの眺望も確保されている。機能的な構成は従来の原則に従いつつ、どの部屋からも中庭を眺められるようになっている。使用材料は典型的なデンマーク風のもので、壁やパンタイル、屋根、煙突等に黄色いレンガを用いている。

このプロジェクトにおける最大の長所は、おそらく景観への溶け込み方であろう。住戸はどれも地形にうまく適応しているが、配置に高低差をつけたフレデンスボーの場合とは違って、皆同じレベルに建てられている。

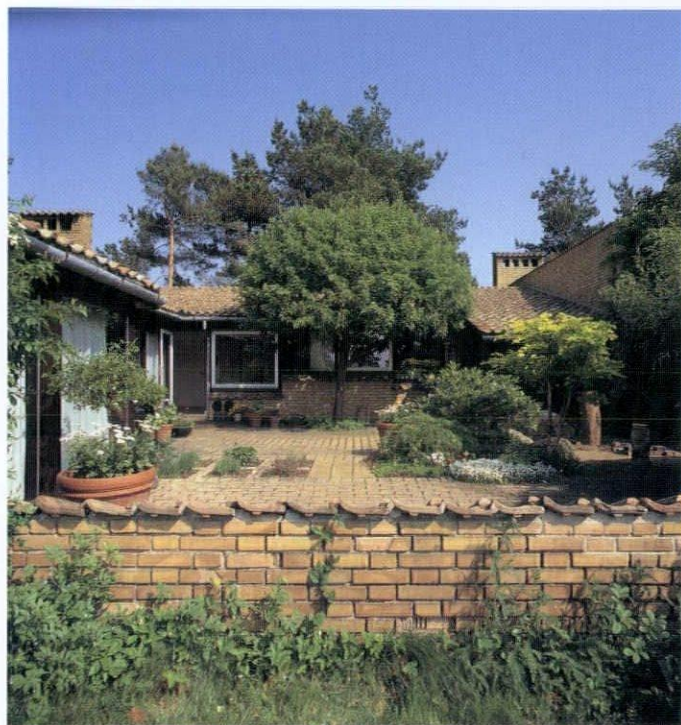
(レネ・クラル)



配置図 S=1:6000



テラス



テラス



居間



テラスへの入口



50年代のデンマーク・ランドスケープ・アーキテクチャ

マレーネ・ホークスナー／訳＝中津秀之

時代背景

いつの時代にも、その時代特有の価値観や美意識というものが存在する。モダニズムの時代におけるそれは、誰もが生まれながらに自由であること、若しくは自由を勝ち取るための想像力を持っているということであった。

まず、モダニズムにおけるランドスケープ・アーキテクチャを次のふたつの理念によってまとめてみたい。ひとつは、形態を強く主張することによる単純明快で理解しやすいデザイン、もうひとつは神話や自然の営み、農地の形態といったものから引き起こされるデザインである。前者に属するデザインには、人間のつくり出した物がいかに美しいかが重要となり、後者の概念においては、自然界に存在する物の美しさをいかに利用するかが最も重要となってくる。

1930年代の民主主義的思想は、自然や田園を描写した絵画の中に読み取ることができる。ところが、社会資産が拡充する1950年代の終わり頃から、人工的につくられたものが美しい物であるという新たな意識が広がるにつれ、庭園における思想も変化していった。いつの時代も友達のようにつきあってきたはずの自然が、人間がコントロールしなければならない厄介者として扱われるようになっていったのである。

戦後、アメリカが世界の関心を集めるようになるにつれ、外部空間と内部空間が密接に関わり合ったライトのオーガニックな建築や、装飾を排除した幾何学的なプロポーションの中に美を追求するミースの建築も、デンマークの建築家達の知るところとなる。これらのデザイン概念は建築だけでなく、ガーデン・デザインにも影響を与えている。例えば、フィリップ・ジョンソンのデザインしたニューヨーク現代美術館のスカulpture・ガーデンは完全に人工的かつ建築的なアイデアに基づいてデザインされている。

洗練された農村風景的ランドスケープ

森や広場、牧草地の広がり、そして生け垣や小川の流れといった農村のつくり出すものを、画家や詩人、建築家達は最初見ているだけであった。しかしデンマークにおいて、ランドスケープ・アーキテクトであるG.N.ブランド

は、これらの郊外に広がる農村風景をガーデン・デザインに取り入れた。季節の変化と共に移り変わる風景をデザインのヒントとするランドスケープ・アーキテクト達は、自然や時間をデザインすることを学んでいった。デンマークの農村風景的ランドスケープは、いつもその伝統的な手法によってデザインされていた。カール・テオドル・ソーレンセンはランドスケープをパラメーターとするモデルを作り上げた。彼の言うランドスケープ・デザインとは、建物の外部にあり、人工の物だけでなく自然をも超越するものである。またそれは、その地域特有の自然条件や風景の種類、さらには農業生産プロセスによって影響される生産力や機械の能力、労働力の方式がつくり出す造形物として扱われるべきであると主張した。灌漑が必要な国々は、用水システムの形式化をランドスケープ・デザインの特徴としてきた。例えば、フランスにおいては川辺の風景がバロック・ガーデンとなり、イギリスの田園風景は伝統的な庭園様式へと昇華されていった。

アーベンラー市では、市役所と競技場の間にある平坦な牧草地の中を、ポプラ並木に縁取られた運河が直線状に貫通している。そして歩道は洪水で水没しないように盛土され、斜面には土の流出を防ぐために植栽されている。ポプラは高水位に強く、成長も早く低価格な樹種である。明快な形態は、いつもカール・テオドル・ソーレンセンを魅惑した。オランダに新しく造成された干拓地の防風林やダムや運河だけでなく、バロック庭園の並木道やデンマークの田園地帯における林が織りなす風景、それらの影響によりモレア運河(1949-53年)が生まれた。

ベラホイ・オープンエア・シアター(1950-51年)もまた農村風景からそのインスピレーションを得たと思われる。斜面に階段とテラスをデザインすることで、空間を視覚的に農地から浮き上がらせる。これにより、斜面の下方で何が行われているかを見ることが容易となり、ギリシアの劇場にいるような錯覚を、多くの人に与えることができる。カール・テオドル・ソーレンセンによるこのモダン・デザインは、建築廃材による人工的な丘と荒廃した公園から移植したライムの木の列植によ

って完成した。

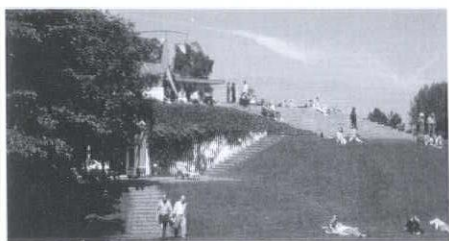
ランドスケープ・アーキテクトであるスベン・ハンセンは、フィンランド人建築家によって設計されたグローストロップのコペンハーゲン市営ホスピタル(1950年コンペ実施、1952-58年建設)の、折りたたんだような建築のランドスケープをデザインした。それは、あたかも氷河によって動かされた巨大な岩石が、デンマークの地表上に深い傷を刻み込んだようなデザインである。人々の記憶にこの物語を刻み込むように、地表面は深く彫り込まれ谷間を形成している。その外側の斜面にはオークの木々が植栽され、交通量の激しい環状道路とのバッファーとなっている。ニセアカシアの林が落葉すると、小さな公園や花壇、彫刻庭園や池によって彩られた現代絵画のような景色を建物から鑑賞することができる。

スベン・ハンセンはヒレロッド・チャーチヤード(1956年)において、氷河のイメージによる波打つランドスケープをより一層強調した。これは陰陽のムーブメントにより特徴づけされたもので、16mあるスカンセバックから谷まで続くデザインとなっている。デザインのベースとなる楕円形は、通路、生け垣、溝によって等高線がなぞられ、生け垣に縁取られた墓石が大きな楕円に続き、斜面上にテラスを形成している。

シェイプへのこだわり

ネアルムのアロットメント・ガーデンでは、生け垣に囲まれたいくつもの楕円空間が芝生の斜面に並べられており、それぞれの楕円の中には小屋が置かれている。楕円形に植栽された生け垣の内側では園芸植物の成長が促され、伸び放題となっているのに対して、生け垣の外側はきれいに刈り込まれている。カール・テオドル・ソーレンセンのデザイン・コンセプトは、デンマークの野生植物を自由に成長させることによってデザインを表現することであろう。

チボライン・チボリ(1958年)では、アイヴィン・ランキルが三角形のフォームを引用することで、1950年代におけるデザイン・アイデアをまとめあげた。ここでは、現代の子供達にとって、教育的な彫刻を散りばめた公園が必要か、という疑問によってプロジェ



ルイジアナ美術館のランドスケープ 写真提供：山崎あかね

クトが進められた。そして、フェンスが立っていても、床の模様やパーゴラの屋根があらうとも、全てが三角形をモチーフとしてデザインされている。この三角形は施設設計だけでなく、空間の構造にも引用されており、それぞれの三角形は、複雑に入り込んだ分子構造のように、お互いがせめぎ合うことで安定しているかのようである。これらの幾何学形態とは対照的に、アカシアやカラガナの木々が、砂地や石像の上に、日本庭園のように柔らかな影を落としている。

ホーセンのヴィトス・ベアリングス・パーク公園の中に計画された幾何学庭園は、形態の操作より機能を追求することにより多くのことが成し遂げられるはずであった。そこでは三角形、四角形、五角形、六角形、七角形、八角形、円形、楕円形といった空間が、アイビーに覆われたブリック・ウォールやブナの生け垣によって創出されている。それは、あたかも緑に覆われた街か、芝生の絨毯の上に出現した建物のような印象を、見る者に与えるはずであった。別名、ミュージカル・ガーデンとも呼ばれたカール・テオドル・ソーレンセン設計によるこの公園は、後にヘアニングにおいて実現され、現在はミュージアム・パークの一部となっている。

クランペンボのスーホルムにあるアルネ・ヤコブセンの庭園（1950年）は300m²しかないが、芝生と平板と地被植物によって計画された。極端に刈り込まれたカラマツの生け垣が300種類の植物をまとめあげており、あたかも個々の植物がそれぞれ違った微小な気象を持っているようにも見える。この中に一步立ち入ると、地被植物を踏みしめ、小さな部屋のような庭園、うっそうと茂った竹類の灌木、そして森林のような植栽の中へと導かれて行く。1階のダイニングから眺めると、この庭園のプランがステッキをモチーフとしてデザインされたことが理解できる。このアイデアは、ヤコブセンがデザインしたムンケゴース・スコーレン（学校）（1948年）やトムス・ファクトリー（1960年）でも見ることができる。

1950年代になって、庭は平坦部が重要な要素となっているヤードへと変わっていった。そこでは全てが重要なデザイン要素として扱われており、自然の要素は、日本庭園のよう

マルレーネ・ホークスナー Marlene Hauxner

ランドスケープ・アーキテクト

1942年 ヘルルッブに生まれる

1965年 デンマーク王立芸術アカデミー入学

1970-72年 ランドスケープ・アーキテクト、ヨーゲン・ヴェスターホルトのもとで勤務

に水や石、刈り込まれたエキゾチックな植物によって極限にまで抽象化されていったのである。そして、自由に伸びやかな自然を表現することは影を潜め、人工的に手が加えられるようになっていった。

自然感の構築と建築家達の自然感

インターナショナル・スタイルに対するムーブメントとして、経験主義がイギリスで起こった。このムーブメントにおいて、ヨーン・ウッツォンとトビアス・フェイバーは経験、知覚的印象、感情を重要なキーワードとする独自のプログラムを提唱した。彼等の主張は、視神経と精神こそが空間、形態、光と影、色を考える上で最も研ぎ澄まされなければならないものである。そして表現においては、形態やコンポジションが単純であればあるほど、理解しやすく、見る者に強い影響を与えというものであった。インスピレーションというものは、決して機能によって多様化されたスタイルや絵画から得るのではなく、建築や自然の表情、ヴェルサイユ宮殿のシンプルなキューブや生け垣、地面のパターン、野生の植栽といったものから得るべきである。なぜならこれらの風景は、数え切れない程の小さなエレメントによる空間、材料、形、色によって無限の豊かさをつくりあげているからである。そして、家々の連なりが風景の中に溶け込んで見えるのは、人工のものでありながら、すでにその地形や植生にアジャストしているからである。

森や海岸、草原の境界に目を向けると、ある一定の秩序が潜んでいることに気がつく。それは、限られた数の自然の要素が無限に繰り返されることで、風景を特徴づけていることに他ならない。これらのことから、土地のジョイント部分にこそ敷地を考える上で最も重要な起爆剤が隠されており、建築の形態を考えることは、チョコレートとチョコレートジョイント部分をすり合わせながら、ひとつの固まりに作り上げてゆく行為と似ていると考えるようになった。

ヘルシンゴのキングー・ハウスもしくはルーマーフォーセネ（1958年）におけるチョコレートは、小さな湖を取り囲む小高い丘に建てられた、アトリウムを持つ黄色いレンガ造り

1972-73年 設計事務所Box 25で勤務

1977-78年 設計事務所A5ドローイング・オフィスで勤務

1979年 設計事務所開設

1983年 デンマーク王立獣医学農学大学教授

現在、ヘレベックに居住

の家である。建物の庭側にはシラカバ、ヤナギ、ブナが、道路側にはマツが植栽され、建物を取り巻くように田園風景的なランドスケープが創出されている。

ヨーン・ウッツォンは、〈フレデンスボー〉（1962年）において、建物を鎖状に配置した。この建物の並びは、急峻な地形に連なり、外の牧歌的な風景と内側の敷地との境界となっている。敷地内道路は、建物のように水平に刈り込まれたブナの生け垣によって形づくられている。生け垣の上には、白いランプが浮かぶように取り付けられ、幻想的な雰囲気をつくっている。

〈キングー・ハウス〉と〈フレデンスボー〉のどちらも、ランドスケープ・デザインは、ヨーン・パッレ・シュミットによる。

ヨーゲン・ボーとヴィルヘルム・ヴォリャトは、地形や植生、景色といったコンテクストに溶け込むように建築をデザインしている。彼等は、盲目的に自然を保護しようとするのではなく、積極的に自然を強化することによってランドスケープの質を高めるのである。その結果、個々の部屋が、その部屋特有の景色によって特徴づけられている。このような建物の中と外の密接な関係は、ルイジアナ美術館（1955-58年）において顕著に現れている。これは氷河によって切り立った尾根の上に建てられており、既存の庭園が重要視されたため、それを取り囲むようにホールとギャラリーが融合したような美術館となった。古い樹木や特徴的な地形を残し、建物と庭の関係を注意深く考察することが、デザインのテーマとなった。また氷河が削り取った深い渓谷によって、海や崖と視覚的につながっており、湖や砂浜の素晴らしい眺めをうまく利用してザ・ジャコメッティ・ホールは計画された。低く刈り込まれたマツの植え込まれたレンガのプランターが、力強く直線状に並べられている。ランドスケープ・アーキテクトであるアグネテ・ピーターセンの「色で満たされた建物など考えられない」という主張により、そこが花などによって彩られることはなかった。その代わりに、アレクサンダー・コールドーとヘンリー・ムーアの彫刻が空の青さを強調している。

●Marlene Hauxner/ランドスケープ・アーキテクト

アロットメント・ガーデン ネアルム、1948

設計：カール・テオドル・ソーレンセン

Allotment Gardens, Nærum, 1948

landscape architect: Carl Theodor Sørensen



この庭園は、1940年にコペンハーゲン郊外のネアルムの集合住宅の近隣に計画された、家庭菜園である。緩いアンジュレーションのある敷地に、生垣で囲われた25m×15mの楕円形のユニットが約50箇所ほど点在している。舗装された園路は無く、生垣と生垣の間はすべて芝生で被われ、芝生が生垣の形を強調している。歩くにつれて、生垣が重なり合

いまた離れてゆくその景観のシークエンスは見事である。

各々の生垣の中には小さなコテージが配置されている。庭には花卉、ハーブ、野菜、果樹が栽培されそれぞれ自由に個人のパーソナリティを表現できる。一方外の芝生地は、子供達の遊び場や遊歩道として、パブリックなスペースに利用されている。（望月 昭）

カール・テオドル・ソーレンセン
Carl Theodor Sørensen

1893年 イタリア、アルトナに生まれる
1908-12年 庭師見習い
1915-16年 トーマス・B.スリッジ事務
所で庭師として勤務

1916-22年 ランドスケープ・アーキテ
クト、E.エルスタット・ヨーゲン
センのもとで勤務
1922年 設計事務所開設
1954年 デンマーク王立芸術アカデミー
教授に任命される
1979年 死去

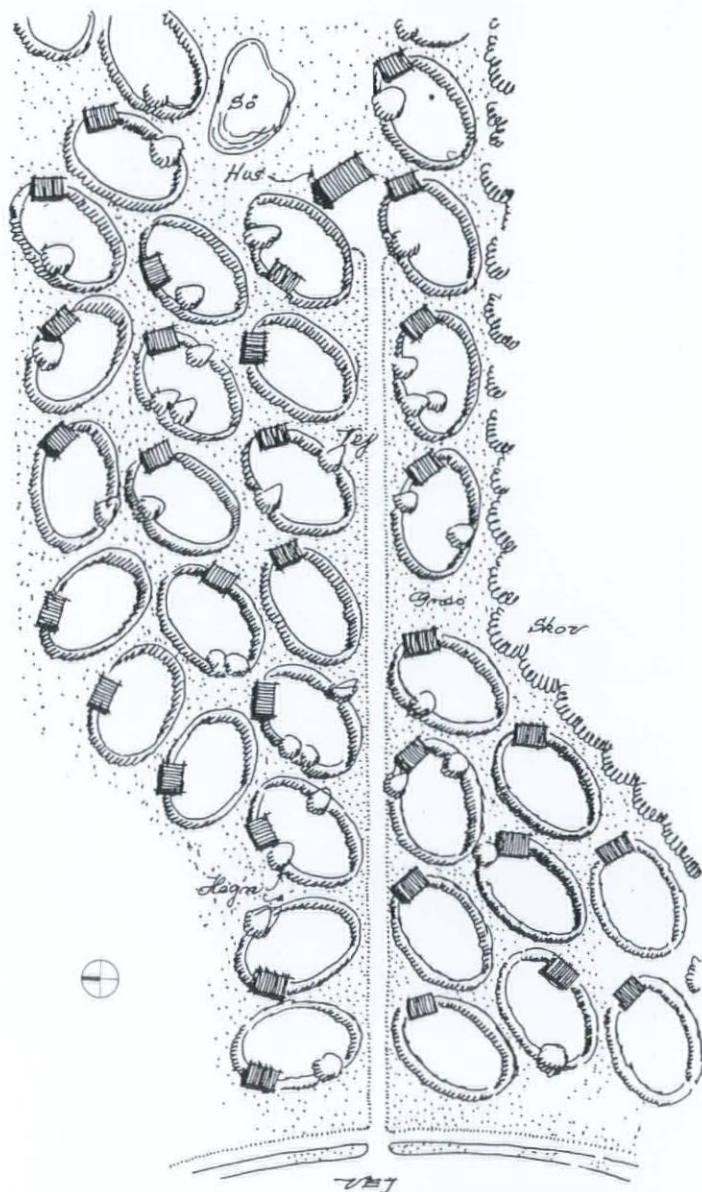
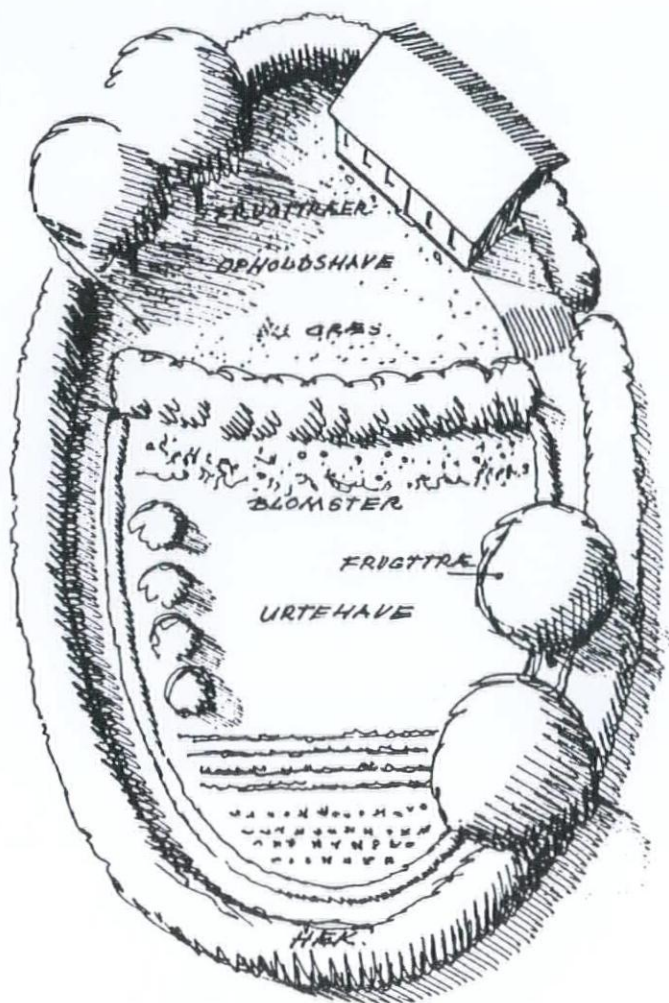


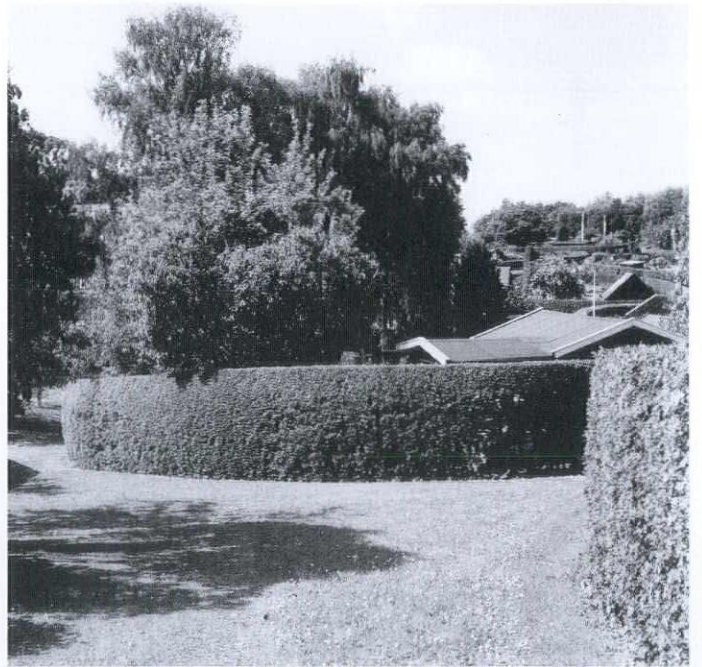
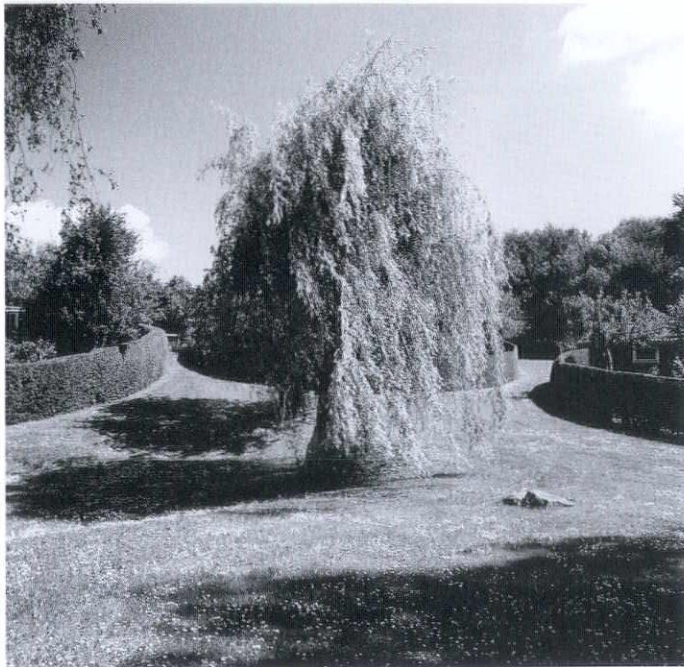
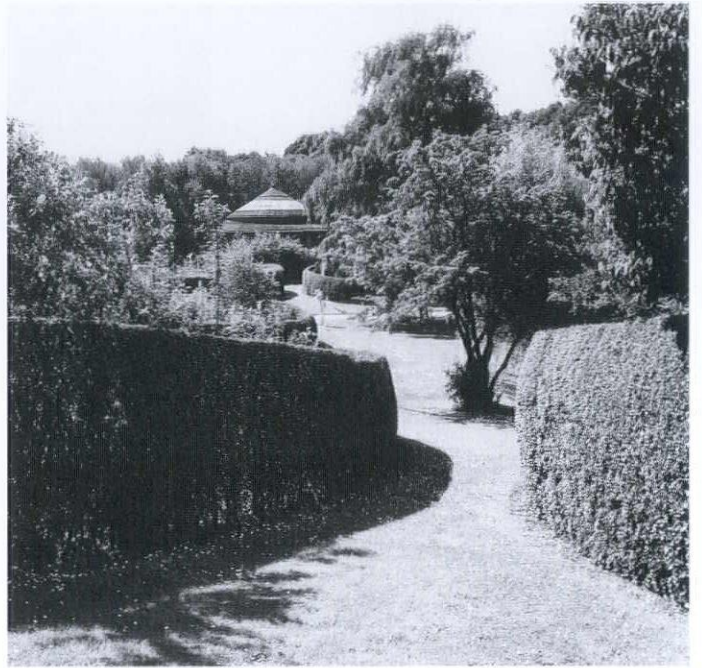


カール・テオドル・ソーレンセンについて

数々の国際賞を授賞し、晩年はコペンハーゲン郊外の高層住宅ベラホイのペントハウスで生活していた。この住宅地のランドスケープ・デザインも彼の作品で、特に野外劇場のデザインは有名である。数多くの著作があり、1931年に出版された『パーク・ポリティック』の中で提案された「アドベンチャー・プレイグラウンド（冒険遊び場）」のアイデアはその後、広く世界のランドスケープ・デザインに影響を与えた。大きなプロジェクトでの作品も多いが、彼にとっては小さな庭の

デザインの方が満足感が得られるという。幾何学的形態のデザインを特徴とし、特に円や楕円を好んで用いる。なかでもユトランド半島のホーセンスにある、ヴィートス・ペーリングス・パークの庭は、三、四、五、六、七、八角形、円、楕円に刈り込まれた生け垣による、緑の部屋の構成で実に見事にデザインされている。材料は多用せず、樹木、灌木、草本を10種類以下に抑え、これを植栽デザインのヴォキャブラリーのベースとしている。フランスの造園家ル・ノートルとG.N.プラントの影響を強く受けている。（望月昭）





週末住宅の庭

設計：スベン・イングバー・アンダーソン

The Garden of the Weekend House
landscape architect: Sven Ingvar Andersson

スベン・イングバー・アンダーソン
Sven-Ingvar Andersson

1927年 スウェーデン、スードラ・
サンドバイに生まれる

1938年 デンマーク王立芸術アカデミー
入学

1954年 スウェーデン農業大学ランド
スケープ・アーキテクチャ
学科卒業

1959年 設計事務所開設

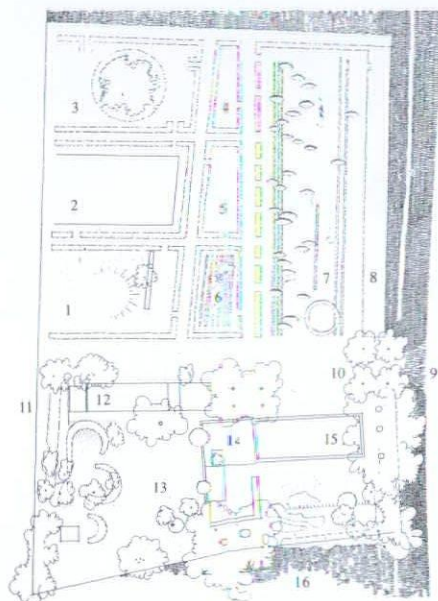
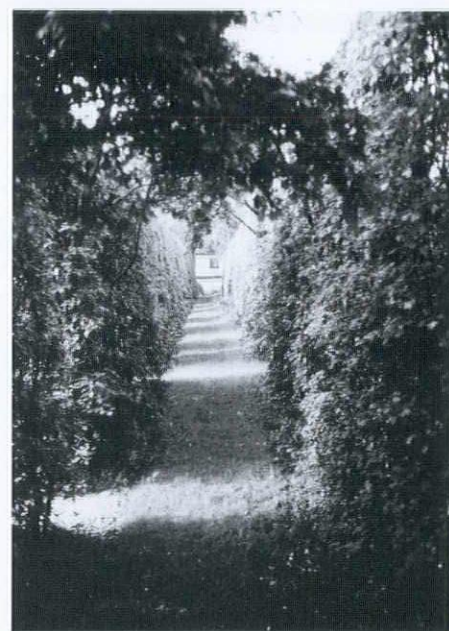
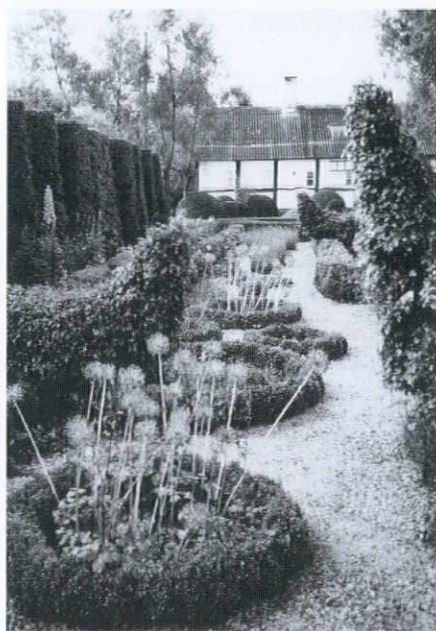
1963年 デンマーク王立芸術アカデミー
教授に任命される

現在、コペンハーゲンに事務所を構える

これは南スウェーデンに計画された、アンダーソン自身の週末住宅の庭である。1965年に1000m²の敷地でスタートし、とりあえず50cm間隔に600本のサンザシ（Crataegus Cuneata）の苗木を植栽し、数年後には生垣のフレームができあがる。敷地は風が強く、よく剪定された生垣で風除けされた7つのエリアに矩形で分割されている。各々のエリアは異なった性格を持っている。

1. ファイアー・プレイスとバーベキュー
2. キッチン・ガーデン
3. 堆肥ヤード
4. スパイス・ガーデン
5. 日光浴場
6. 花卉ガーデン
7. 家禽ヤード

入口に位置する家禽ヤードでは北から南に鶏の形をしたトピアリーが飛び跳ね、草ツゲの刈り込み、大、小のラベンダー・ボール、ハナリソウのカーペット、白、青、ピンクの多年生植物の群植で構成される。想像力と感受性に充ちあふれた庭のカラースキーム（色彩図式）はすばらしい。造園費が極力安価に抑えられた、シンプルで飽きの来ないデザインが維持されている。（望月 昭）



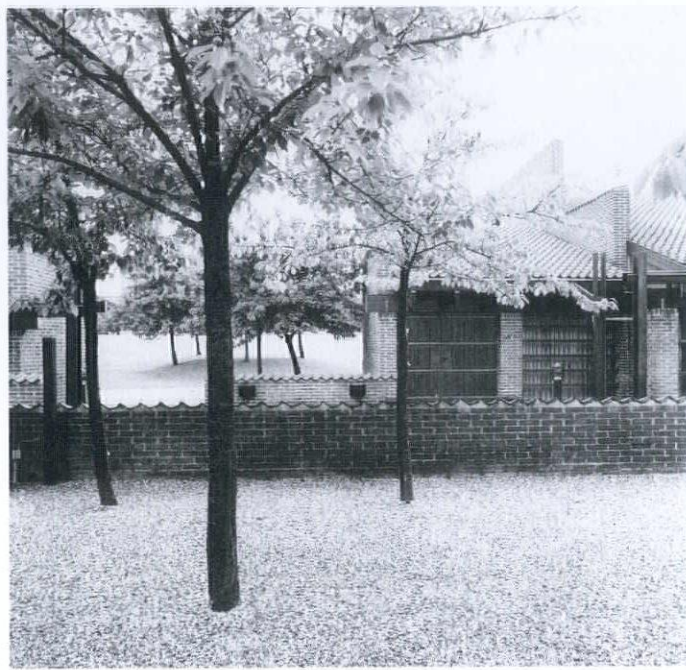
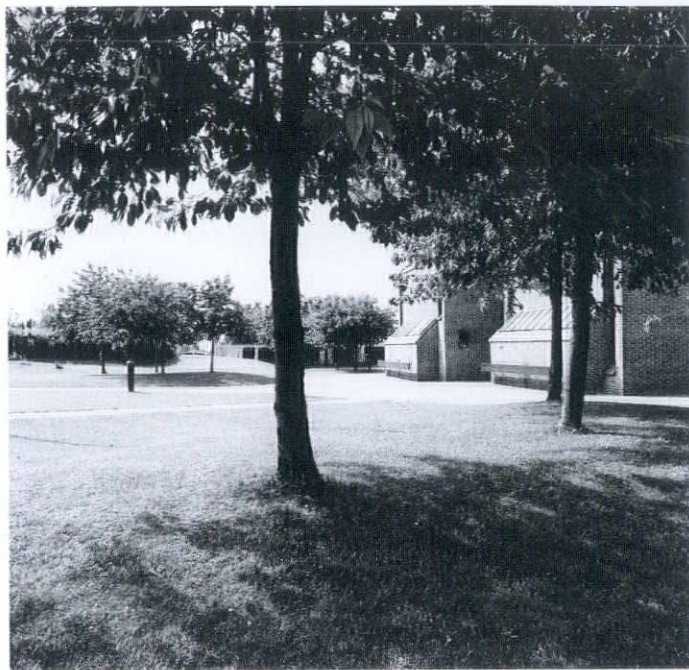
- 1: ファイアープレイスと夕陽のテラス
- 2: キッチンガーデン
- 3: 堆肥のヤード
- 4: スパイス・ガーデン
- 5: 日光浴場
- 6: 花卉ガーデン
- 7: 家禽のヤード
- 8: 高生垣
- 9: 道路
- 10: パーキング
- 11: 野原
- 12: ゲストルーム
- 13: 果樹園
- 14: 馬屋の一部と休憩所
- 15: 本邸
- 16: 放牧場

平面図 S=1:850

ブッディング教会庭園 スーボー、1967

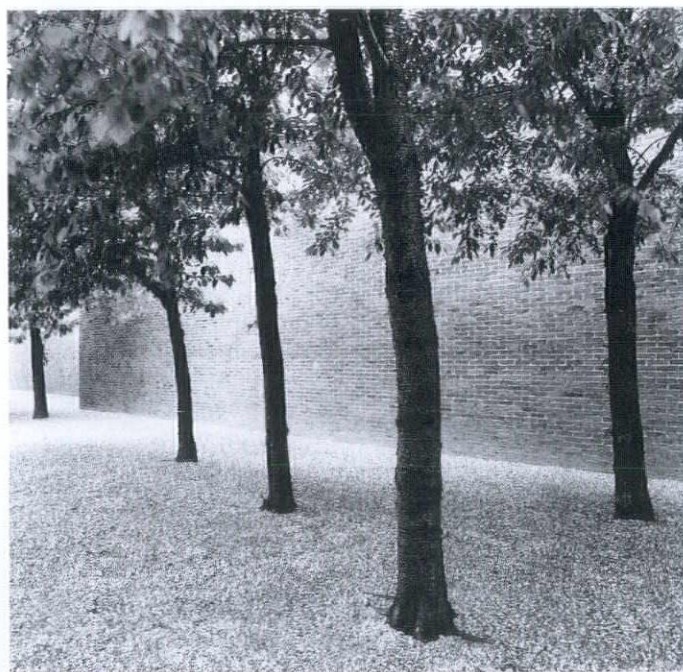
設計：スベン・イングバー・アンダーソン

The Garden of Buddinge Church, Søborg, 1967
landscape architect: Sven Ingvar Andersson



スベン・イングヴァー・アンダーソンに
ついて

作品は、ルンドの装飾美術館コートヤード、フーガネス市庁舎の水と火を使った庭など、公園、住宅開発プロジェクト、個人庭園など多数ある。デザインの特徴は、シンプルで極力少ない材料を用いて変化に富んだディテールを生み出し、最大限の効果を獲得していること。数多くの国際コンペティションに参加し、1972年ウィーンのカールス広場国際コンペで1等入選し、実施され完成している。また1983年パリ、ラ・ヴィレット公園国際コンペでは最優秀賞9作品のうちのひとつに選ばれている。現在、アムステルダムゴッホ美術館、国立美術館等が集まる地区の広場を設計中である。(望月昭)



インタビュー

デンマーク・デザインのルーツを探る

インタビュアー

木下壽子

Interview:
Tracing the Roots of
Danish Design

Interviewer:
Toshiko Kinoshita

機能性と質の高いデザインを特徴とするデンマーク・デザイン。その「質」と「世界的成功」のルーツは、50年代に遡る。ここでは、現在建築、インテリア、インダストリアル・デザインの分野で活躍するデザイナー、メーカーを訪ね、デンマーク・デザインのルーツを探る。



グレンゴソン自邸の居間。コア・クリントとポール・ヘニングセンのランプが使われている。

SD9609
76

アルフレッド・ホーマン Alfred Homann

建築、インテリア、インダストリアル・デザインなど様々な分野で活躍する、現代のトータル・デザイナーにデンマーク・デザインの成功の鍵を尋ねる。



1948年生まれ
1972-79年 ヴィルヘルム・ヴォリャト・オフィスに所属
1976年 デンマーク王立芸術アカデミー卒業
1978年 デザイン・オフィスを開設
1984-87年 Penta Design A/Sと共働
1982-92年 デンマーク建築家協会照明委員会のメンバー
現在、照明器具、家具、建築など、幅広くデザイン活動を行っている

デンマーク・デザインの歴史、現状についてまずお聞きしたいと思います。

基本的にデンマークの建築あるいはインダストリアル・デザインは、農夫的な、ロジカルで単純明快な思考に基づいています。そして、確かに海外からの影響はあるけれども、良い部分のほとんどは50年代に確立されたプロダクトの質やデザイン界の雰囲気というものに多くを負っていると思います。これは単に過去を懐古して言うのではなく、デンマーク人なら誰もが感じることでしょう。

現在日本では1950、60年代のモダン住宅を再評価しようという傾向があります。シンプルで機能的、かつ質の高いデザインといった歴史的な評価を得ているデンマーク1950、60年代の住宅建築および家具や照明器具といったインダストリアル・デザインに、再び注目が集まりつつあるように思います。

同時に、日本とデンマークの両国が伝統的に共通したデザイン思想をもっているというこ

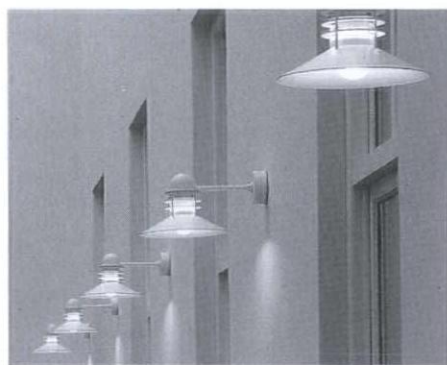
とも、日本人がデンマーク・デザインに高い関心を示す大きな理由でしょう。

興味深いことは、50年代のデンマーク建築家、デザイナーが、日本の建築・デザインに関心を寄せ、少なからぬ影響を受けていたという点です。

全くそのとおりです。この特集で取り上げられている50年代の住宅の多くも、日本の伝統的な住宅に影響を受けています。ここには挙げられていないのですが、ヨーン・ウッツォンの最初の自邸はその最たるものでしょう。

ただ日本の建築、とくに住宅建築の現状を見ていると、もしかしたらデンマークの方が日本の伝統というものを素直に評価し、継承していったのではないかと気さえます。そういう意味でも、われわれがデンマークの50年代の住宅建築から学ぶことは多いでしょう。そこで、なぜデンマークのデザインが、50年代もそうでしたけれども、国際的にこれほど成功し、影響を与え、高い質を維持し得たのか、お聞きしたいと思います。デンマーク・デザインのひとつの特徴に製造業者とデザイナーの非常に親密かつフレキシブルな協力関係が挙げられます。そしてもうひとつは、とくに50年代に顕著でしたが、ヤコブセンのような建築家が建築だけでなく、インテリアも含めてトータルにデザイン・インダストリアル・デザインに大きく貢献していることです。建築家と製造業者あるいはインダストリアル・デザイン界との協力関係は50年代に確立したものでしょうか。

その問いに答えるためには、自分のバックグラウンドに引き付ける必要があるでしょう。私は学生の時、ルイジアナ美術館の設計者であるヴィルヘルム・ヴォリャトの事務所働いていました。私は70年代末に、ルイジアナ美術館の大規模な増築の仕事に関わっていましたが、ヴォリャトは、建築家が住宅建築からドアノブや照明器具といったインテリアまでを同じコンセプトでトータルにデザインしてきた世代の建築家でした。このような建築家の下で働いていたので、独立した後も、建築にまつわるさまざまなデザインとかかわってきました。デザインの理由と目的が重要視されるため、建築家のデザインがインテリアへ及ぶのは自然なことでした。例えば、イタリアのデザインと違うところは、イタリア人はどちらかというと「それが素晴らしいから作る」というロジックですが、デンマーク人は「なぜそれをデザインするのか」という明確な理由がなければデザインを始めません。ですから、自分の建築に合った照明器具をデザインするというのは非常に説得力のある理由なわけです。もしこのようなはっきりとした目的がなく、単に照明器具をデザインするというのであれば、毎日いくつもの異なるアイデアを思い付くでしょう。本当にこのプロダ



ニューハウン・ウォール／デザイン：A. ホーマン／製造：ルイス・ボールセン社 *2



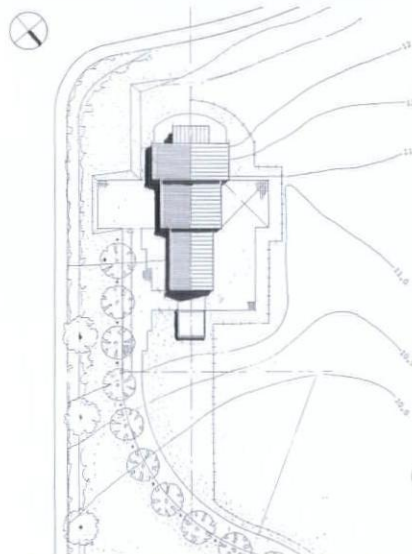
アンサンブル／デザイン：A. ホーマン／製造：フリッツ・ハンセン社 *3



*4



*5



スタルク・ファーム／シェラン島南部の畜舎と住居を組み合わせた複合建築。建築、インテリア、エクステリアすべてA. ホーマンのデザイン

クトを作る必要があるのか、明確な理由や目的はあるのか。もし無いのなら作るべきではないのです。

今の点に関してイタリア・デザインと比較されましたが、このような思考というのはきわめてデンマーク的なものなのでしょうか。

私はそうだと考えています。これも、レス・イズ・モアというデンマーク的な価値観の表れでしょう。以前、ある海外の雑誌のインタビューを受けた時の話ですが、デンマークのマーケティング・プロセスというのは他のスカンジナビアの国とは違って特異だという話になりました。例えば、フィンランド人が豚を手に入れたとしたら彼らは尻尾と頭と脚を除いて胴体を使い、スウェーデン人は頭と尻尾を除いて爪を切り取って脚を少し使い、デンマーク人は尻尾や頭を切り取ってそれをさらに細かく分けて使う。これはたとえ話ですが、伝統的にデンマークは小さな国なので自分達が持っているものは最大限使うという考え方があります。そして、手仕事から工業生産に変化しても、例えば高度な仕上げをするというポリシーに変りはありません。このような伝統的な思考というのは建築デザインにも影響していると思います。さきほど、なぜデンマークのデザイン製品が国際的に成功したのかという話がありましたが、それはやはり質の高さこういったデンマーク的な思想がなぜか今も有効だからなのでしょう。つまり、なぜこの製品を作る必要があるのかということを徹底的に議論し、明確な目的を持って質の高い製品を作ることがデンマーク・デザインが国際的な評価を得た理由だと思います。

建築家によるトータル・デザインの伝統は、現在でも受け継がれているのでしょうか。

例えば、ヤコブセンの弟子達、私よりも上の世代の人達ですけれども、彼らはそういったヤコブセンのデザイン思想を受け継いでいるように思います。ただ残念なことに、現在ではほとんどの事務所が時間的、経済的な制約から建築家がトータルにデザインするということはほとんど不可能な状態にあるというのが正直なところでしょう。

それは違う視点から見れば、デンマークのインダストリアル・デザインが成熟したということなのでしょう。ヤコブセンの時代には新しいコンセプトの建築に見合った家具や照明器具が見当たらず、自分でデザインせざるを得なかったという背景もあったわけですから。

ホーマンさんはそもそも建築家としてスタートなさったわけですが、現在はインダストリアル

ル・デザインの分野で仕事をなさることのほうが多いですね。

私はそもそも建築とのかかわりからインダストリアル・デザインの仕事を始めました。ただ、時間的、経済的な制約がありますから、質の高いものを作っていくためにはどちらかに集中する必要があります。そして今は、非常に順調に仕事が進み、良い仕事のできる環境にあるインダストリアル・デザインの分野で活動しようと決断したわけです。

デザイナーと企業とは、どのようなかたちで仕事を進めているのですか。

それはデザイナーによっても、企業によっても様々です。デザイン・コンセプトにどのくらいの重きを置くかということは企業によって異なります。例えば、ルイス・ボールセン社やフリッツ・ハンセン社は、これまで質の高いデザインを生み出すことに価値を見出してきましたから、デザイナーがコンセプトに重きを置きながら仕事をする環境が整っていますし、彼らがコンセプトづくりに参加することもあります。

コンセプトは、私にとってもっとも重要なものです。コンセプトが真に物を生み出すのであり、デザイン・プロセスはコンセプトに従うのです。私は、デザイナーはコンセプトが最後まで、つまり最終的に製品ができるまで貫かれるよう責任を持つべきだと思います。製品ができるプロセスでの決断がクリスマス・ツリーのように複雑に枝分かれするのではなく、ヤシの木のように1本の真っ直ぐなものであるべきです。デザイナーが、できれば最初から最後までプロセスを管理できる環境があるべきだと思います。

インダストリアル・デザインにとって、それを取り巻く環境と生産技術は切っても切り離せないものですが、その環境と技術は、現在と50年代とを比べると格段の違いがあります。現在のデンマーク・インダストリアル・デザイン界の課題は何ですか。

技術の進歩に伴って生活環境や地球環境が大きく変化していくなかで、インダストリアル・デザイナーとしてのもっとも大きな飛躍は、人々が生活し、働く環境つまりライフ・スタイルをデザインし直すためのコンセプトをいかに発見していくかということだと思います。(於：フリッツ・ハンセン・コペンハーゲン・ショールーム、1996年6月26日)

写真提供：*1,4,5アルフレッド・ホーマン、*2ルイス・ボールセン社、*3フリッツ・ハンセン社

イエンス・ムーラー・イェンセン

Jens Møller-Jensen

医療器具から鉄道まで、インダストリアルデザインの領域で幅広く活躍する王立芸術アカデミーのインダストリアル・デザイン・コース第1期生に、デンマーク・デザイン界の特質を聞く。



1938年 コペンハーゲン生まれ
1962年 メディコ・テクニカル・インストゥルメントに所属
1967年 デンマーク王立芸術アカデミーインダストリアル・デザイン科卒業
1968年 インダストリアル・デザイン事務所開設
1977年 デンマーク・デザイン委員会のメンバーとなる
現在、照明器具、鉄道車両、医療器具など、あらゆる種類のインダストリアル・デザインを手掛ける

イェンセンさんは、インダストリアル・デザインの分野で幅広く活躍されていますが、これまでの経歴を簡単に説明いただけますか。

王立芸術アカデミーでは、ランドスケープデザイン、都市計画、家具デザインなどに続いて1950年代の終り頃、新たにインダストリアル・デザインのコースが設立されたのですが、私はこのコースの第一期生でした。それまではインダストリアル・デザイナーと呼ばれる人は非常に少なく、また彼らは専門的な教育も受けていませんでした。

50年代の終わりに、デンマークではインダストリアル・デザイナーの教育の重要性が認識され始めたわけですね。それまでは、ヤコブセンのような建築家がインダストリアル・デザインの分野でも活躍していましたね。

ご存じのように、ヤコブセンは自分のデザインした建築に合った家具や照明器具をデザインしました。その多くが、今も生産され続け

ています。私も最初はこれに近いかたちで照明器具のデザインを始めました。60年代の始め頃、私は新たに開発された広い地域のプロジェクトに関わっていたのですが、照明器具を選ぶ段階になって、それらがあまりに高額なのに驚きました。私はその半額でできるはずだと主張し、プロデューサーの理解もあって、自分で照明デザインを試みました。結果、価格は3分の1です。この器具は今でもルイス・ポールセン社から販売されています。以来私は照明器具のデザインを始めましたが、そのプロトタイプは自分の手で制作します。光の漏れ具合などは、そうしないとわかりませんから。ここの1階のレストランの照明は、私が製作したものです。食事に来たルイス・ポールセン社の人が気に入ってひとつ持って帰りました。今は製品になっています。

現在もこのようなかたちで、まずイェンセンさんがデザインし、その中からメーカー側が気に入ったものがあれば製造するという順序で新たな製品が生まれているのですか。

依頼されてデザインすることもあります。たいていの場合は、私が自分の自由な意志に従ってデザインします。こうすれば、メーカー側は売れない製品の開発に無駄なお金を使う必要はありませんし、デザイナーとしても1日中会社のために売れる照明器具や家具のデザインのことばかり考えなくてもよい。そして、良いデザインが生まれれば、デザイナーもメーカーも双方が得をするわけです。

こういった、きわめてリベラルで合理的な発想はとてもデンマーク的であり、インダストリアル・デザインを取り巻く理論や構造の明快さがデンマーク・デザインの息の長い成功と人気のひとつの秘訣であるという気がするのですが……。

日本の寺院建築や伝統的な道具を写真で見ることがありますが、これらのデザインこそまさにデンマーク人が好むものです。非常にロジカルで、シンプルで、性能が良い。しかし、現代の日本のデザインがなぜこんなにひどいかわかりません。デザインを取りまく状況が悪いのでしょうか。

デンマークのデザイン・センターで目にした日本の現代デザインは、まるでアメリカ製とも言えるようなデザインでした。日本とデンマークは、北の国であるという点で共通した性格をもっていると思います。明るくてモダンでファッショナブルなイタリア人と違って、デンマーク人は行動する前に非常に慎重に考え、室内での生活を大切にします。これはもちろん気候が大きく影響しているわけですが、イタリアでは室内は清潔で涼しげで

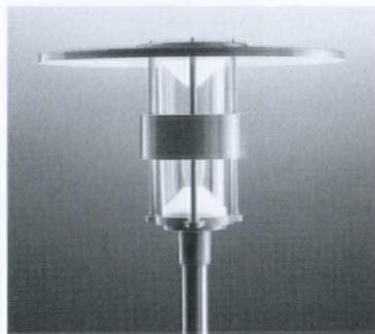
なくてはなりませんし、逆に北欧では室内は暖かく感じられなければならないのです。このようなメンタリティの違いは、当然デザインにも影響するわけですが、日本の場合はあまりにもさまざまな西洋の国々の影響を受け過ぎて、もともと持っていたロジカルな発想がデザインに反映されなくなったのではないのでしょうか。さらにいえば、日本の発想やシステムは複雑すぎ、また変化のスピードも速過ぎるに思います。



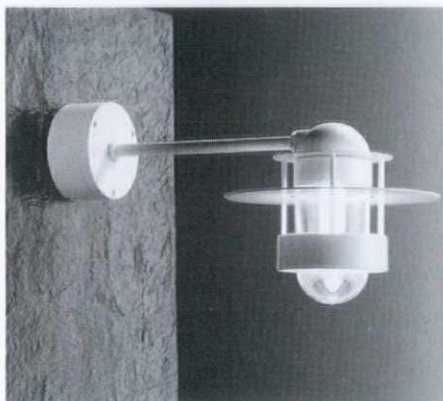
アトリエでプロトタイプを製作する、イエンス・ムーラー・イェンセン*2



ヴィジール・ペンダント/デザイン：イエンス・ムーラー・イェンセン/製造：ルイス・ポールセン社/デザイナー・アトリエの下階レストランに使用されている*3



サテライト・ミニ/デザイン：イエンス・ムーラー・イェンセン/製造：ルイス・ポールセン社*4



オビター・ウォール/デザイン：イエンス・ムーラー・イェンセン/製造：ルイス・ポールセン社*5

日本とデンマークが、意外と多くの共通点を持っていることは興味深いですね。

デンマーク・デザインが日本で好まれるのも、おそらくそういった共通した価値観やセンスをもっているからでしょう。例えば、フリッツ・ハンセンの家具は、アメリカではあまり売れません。彼らが好きなのは大きくてロマンティックなイギリスのヴィクトリアン・スタイルの醜い家具だから(笑)。フリッツ・ハンセン、ルイス・ポールセンの製品は、ドイツ、オランダで高い支持を得ていますが、それはわれわれのスタイルを理解できる、同じ価値観を持った国々だからです。あと、オーストラリアでも売れているかな……。彼らはアメリカ人とは違うし、ウツォンのオペラ・ハウスもあるしね(笑)。

イエセンさんは、照明器具だけでなくインダストリアル・デザインの分野でもかなり幅広く活躍されていますね。

とくに医療関係のデザインが多く、例えば現在は、注射器のデザインをしています。科学者と共同でこれまでにないまったく新しいデザインを、開発中です。また、私が使っているこの杖も、私がデザインしたものです。他のデザインは使えたものではなかったからね。これなら必要のないときはどこにでも掛けられるし、バランスもほら、完璧です(机の上に立てて見せる)。

ひとりのデザイナーがひとつの分野ではなく、デザインの様々な分野で活動するというのは、デンマークでは現在でもかなり一般的なのでしょうか。

多分野のデザインと関わっていくには、技術、材料、およびそれぞれの専門分野に関する深い知識が必要です。例えば、私は医療に対する興味と知識があるからこそ、この分野でデザインすることができるのです。また、良いデザインを生み出す上でひとつの企業に属するのではなく、フリー・ランスで仕事をしているということは私にとって重要です。毎日1日中座って、椅子のデザインだけを考えるなんて……私には無理ですね(笑)。しかし、これだけ技術や材料の進歩が激しく、また若いデザイナーは、大学においてプラクティカルな教育よりも、より理論的な教育を受けているので、昔のように多分野で活動することはきわめて困難だというのが現実でしょう。(於：イエンス・ムーラー・イエセン・アトリエ、1996年6月27日)

ポール・ミュギン・イエセン

Poul Mygind Jensen

日本でも人気の家具メーカー、フリッツ・ハンセン社副社長に、デンマーク・デザインを成功に導いたインテリア産業の諸事情を聞く。



- 1939年 オデンセ生まれ
- 1960年 コペンハーゲンのニールス・ブロック商業大学卒業
- 1960-64年 ドイツとイギリスで修学
- 1964-79年 フランス&スン社、フリッツ・ハンセン社、ケヴィ社などいくつかの大手家具メーカーで勤務
- 1979年 フリッツ・ハンセン社に戻り、国際営業部所属、副社長となる

デンマーク50年代のモダン住宅が優れた質を獲得する上で、建築と共鳴したコンセプトで開発されていた家具や照明器具が非常に重要な役割を果たしたように思います。そこで今日は、フリッツ・ハンセン副社長であるイエセンさんにデンマークの家具デザインについて色々とお聞きしたいと思うのですが、まずはデンマークの近代家具デザインの歴史について簡単に説明いただけますか。

デンマークにおける近代家具デザインの歴史を語るには、まず、クリントに遡る必要があるでしょう。彼は、1920年代に設立されたロイヤル・アカデミーの家具デザイン・コースの創設にかかわった人物のひとりであり、教授でもありました。これは、当時のデザイナーがデザイナーであると同時にクラフトマンでもあった重要な背景のひとつです。彼らはまずキャビネット・メイカーとして訓練を受け、その後家具デザイナーあるいは建築家などの道を選んだのです。クリントは、初の家具デザイン・コースの教授としてウェグナー、モーゲンセン、ケアホルムといった次世

代、つまり、50年代に活躍する優れた家具デザイナーを育てました。このような歴史から、彼はデンマークの家具デザインおよび家具インダストリーの父と呼ばれているのです。また、クリントは最初の機能主義デザイナーでもありました。一時期、戦争によって中断されましたけれども。

しかし戦争中も、例えばファンスのように家具デザインの近代化を考え続けた人物がいました。ファンスは戦前、マットレス会社のマネージング・ディレクターでしたが、ドイツ兵によって強制収容所に送られた人です。彼は強制収容所の中で、ここを出たら何をすべきかを考え続けました。そこで彼は、ベッドのマットレスを小さく切り分ければそこに座ることができる、そのためには木のフレームが必要であると考えたのです。強制収容所から出たファンスは、フィン・ユールとともにデンマークにおける戦後最初の本製家具の会社のひとつを設立します。50年代、ファンスとフリッツ・ハンセンはデンマークを代表する家具メーカーでした。1954年に行われたケルンの国際家具フェアでデンマークから出展した唯一の家具メーカーはファンスだったと思います。もちろん私はそんなに年ではありませんから(笑)、これは同僚から聞いた話しですけれども、会場を訪れたドイツ人達はデザインのあまりの新しさにどう反応してよいのか分からなかったそうです。しかし、この家具フェアがデンマーク家具の国際的な成功のきっかけとなりました。おそらく戦後、皆が新しい発展性のあるものを求めたからでしょう。

デンマーク家具のひとつの特徴に、海外での成功が挙げられますね。

デンマーク人は、歴史的にも常に商人でした。この伝統はバイキングの時代に遡ることができます。彼らはまずあの素晴らしいバイキングの船を造り、海外に出てゆきました。国内には材料となる資源がなかったからです。従って、彼らは材料を海外で仕入れ、それを加工して売るということを繰り返したわけです。このように、歴史的に見てもデンマーク人は海外に出ていくことに慣れていましたから、戦後、国際家具フェアで家具を展示したときも、自分達の作ったものを海外で売るといのはきわめて自然な行為でした。

もうひとつ、50年代のデンマーク家具の特徴といえば、ヤコブセンのような建築家の活躍が挙げられると思うのですが、これはモダンで機能主義的な建築に合う家具やその他の製品が周辺になかったから、建築家自身があらゆるものをデザインするしかなかったと考えてよいのでしょうか。

まさにその通りです。ヤコブセンはいつも、市場にある家具は使えないと言っていました。そして、彼は自分の建築に合った家具をデザインしはじめたのです。1934年に、彼は最初の椅子をデザインしました。これもフリッツ・ハンセンで製造しましたが、この椅子はクランペンボの彼が計画した住宅地にあったレストランのためにデザインしたものでした。しかし、1934年から52年までの間は何もつくられませんでした。

戦争のためですね。

そうです。彼はユダヤ系でしたから、デンマークから脱出しなければならなかったのです。そしてヤコブセンは、ポール・ヘニングセンとともに小舟でスウェーデンに向けて出国したのです。これは偶然にも、ラジオでこのふたりを乗せたボートを漕いだという人物のインタビューを聞いて知りました。戦争中は多くのユダヤ系の人々がデンマークから脱出しなければならず、デンマーク人もこれを積極的に助けました。帰国後、ヤコブセンはノーボという会社の工場の設計を依頼され、工場と共に「アント・チェア」をデザインしたのです。彼が建物だけでなく、椅子もデザインしたのは、食堂のスペースが非常に狭く、要求された人数の人々が食事をするためには既製の椅子では不可能で、新たなデザインの椅子が必要となったからだだったと聞いています。

あのアント・チェアの量産は、戦時中に開発された技術があったから……という記事を読んだことがあるのですが、その点はいかがですか。

確かに、それも理由のひとつです。戦時中、戦闘機の機体の一部は合板から作られていました。フリッツ・ハンセンが、どのような経緯でこの技術を持った人々と接触したのかは分かりませんが、同じ時期アメリカでもチャールズ・イームズがこの技術を家具デザインに応用しようと考えていました。イームズは戦時中、デザイナーとしてアメリカ陸軍に従軍し、骨折した兵士の脚や腕を固定するギブスを合板で作ったのです。実は数週間前、私はダラスでこのイームズがデザインした合板のギブスを見つけ、購入しました。これは1942年製のものです。おそらく、合板の技術はそもそも戦闘機産業から開発されたものだったでしょう。

戦時中に開発された技術が家具に最初に応用されたのが、ヤコブセンのアント・チェアだったのですか。

それ以前に、フリッツ・ハンセンはヴィットとムルゴーというふたりのデンマーク人建築

家と協力して「アックス・チェア」を作りました。これは、デンマーク家具産業の中で合板と無垢の木を組み合わせることができた最初の例でした。フリッツ・ハンセンが、このアックス・チェアを製造するノウハウを持っていたからこそ、ヤコブセンのアント・チェアが製造可能だったわけです。ヤコブセンがフリッツ・ハンセンに来た時、彼はドロ잉グを持っていませんでした。アイデアはあるのだが、自分は3次元が描けないと言ったそうです。そこで彼は、フリッツ・ハンセンの工場で職人と一緒に微妙な角度や曲線を実際の材料を使いながら決定していったのです。

ひとつの工場建築のためにデザインされたこのアント・チェアが世界中で使われ、現在でもおそらく世界でもっとも人気のある椅子のひとつではないかと思うのですが、当初から量産する計画だったのでしょうか。

一般には、ヤコブセンが400脚注文したから製造したとフリッツ・ハンセンでは言われていますが、実際はそれだけではなかったと思います。当時、フリッツ・ハンセンは3代目が会社を継いでおり、彼らはこのような椅子にこそ未来があるのだと確信したのでしょう。

50年代には、ヤコブセンのように建築家がすべてをトータルにデザインすることが一般的に行われていたのでしょうか。

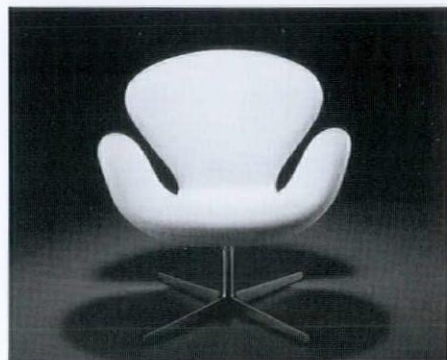
ヤコブセンはきわめて例外的だったといえるでしょう。例えば、ヤコブセンがすべてをデザインした「SASホテル」も、ホテル側としては大きな冒険だったと思います。50年代に活躍した家具デザイナーの多く、例えばハンス・ウェグナーやポール・ケアホルムは建築家ではなく家具デザイナーでした。

ポール・ケアホルムが1950年にロイヤル・アカデミーを卒業した時、当時のアカデミーの教授はケアホルムをフリッツ・ハンセンに紹介しました。彼が非常に才能のある学生だったからです。ケアホルムは1951年に最初の椅子をフリッツ・ハンセンのためにデザインしましたが、残念ながら、当時のフリッツ・ハンセンの人々はこの椅子に特に感心を示さず、ケアホルムは他の家具メーカーと長い間仕事をしていました。しかし10年ほど前、その家具メーカーのオーナーが引退し、フリッツ・ハンセンがケアホルムの家具を引き継ぐことになったのです。

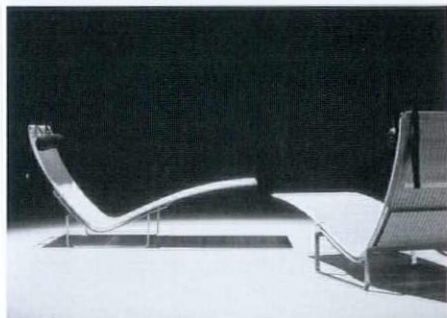
デンマーク家具の国際的成功はウェグナー、ヤコブセン、ケアホルムといった50年代に活躍したデザイナー達によって築かれたといえるわけですが、その成功の理由は何だったのでしょうか。



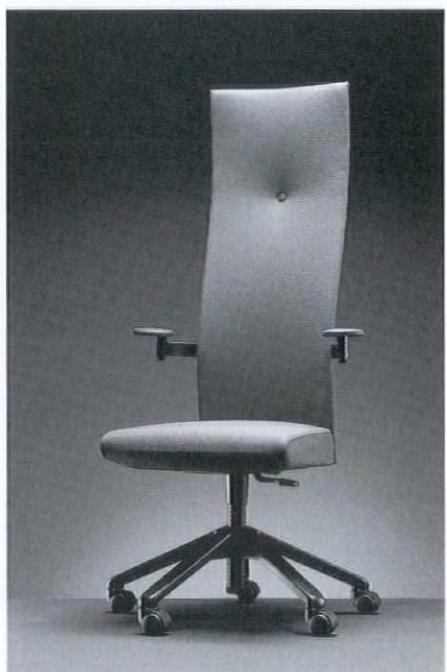
3100 (左)と3101 (右) (アント・チェア) / デザイン: アルネ・ヤコブセン / 製造: フリッツ・ハンセン社 *2



3320 (スワン・チェア) / デザイン: アルネ・ヤコブセン / 製造: フリッツ・ハンセン社 *3



PK24 (ハンモック・チェア) / デザイン: ポール・ケアホルム / 製造: フリッツ・ハンセン社 *4



SPIN-125/325 / デザイン: プルクハルト・ホッツァヘル / 製造: フリッツ・ハンセン社 / 同社の最新製品で、開発に5年を費やした *5

当時の建築家やデザイナー達は、真の機能主義者でした。彼らは周りの人々の好みに媚びることなく、自分達のアイデアを確信できる強さと自身を持っていました。また、この時代の名作の多くは、デザイナーと小さなキャビネット・メーカーの親密な協力関係から生まれたものでした。当時、キャビネット・メーカー達が集まって、年に1度家具の展示会を行い、その年の最新のプロトタイプを展示したのですが、この展覧会にわれわれ家具製造業者が訪れ、気に入ったデザインがあればデザイナーと交渉したのです。

ヤコブセンやケアホルムの場合もそうでしたけれど、製造業者に専属のデザイナーがいるわけではなく、ほとんど偶然に近いかたちで名作が生まれていったわけですね。建築家が自分の設計した建築のためにデザインした椅子がその後も支持され、他の建築にも受け継がれていく……。とても素晴らしいことだと思います。

専属のデザイナーを持たずフリーのデザイナーと仕事をするというのは、われわれの重要な方針です。もし専属デザイナーを持ったとしたら、おそらく彼らはわれわれマネジメント側の人間が好むようなものをデザインするようになるでしょう。これは非常に危険なことです。また、建築家が自分の設計した建築に合ったデザインの家具を製造するのに協力するというのは、フリッツ・ハンセンのユニークさでもあります。

日本ではバブル経済崩壊後、よりシンプルで機能的で人間味のあるやさしいデザインが見直されつつあるように思います。このような流れの中で、デンマークの家具に対する関心が今後も高まっていくのではないのでしょうか。フリッツ・ハンセンにとって、ドイツに続く輸出相手国第2位の日本と長年付き合われて近年の傾向をどのようにご覧になりますか。

バブル経済は、時期は異なるにしろ、どの国もが経験したものです。景気が良い時には、人々はファッショナブルなものを好みました。しかし、このような傾向はここ数年で変わってきていると思います。新しいものを買っては古いものを捨てるというのではなく、何年も使い続けられるものを求めるようになったのではないのでしょうか。そういう意味で、このバブル経済というのは、われわれに重要なことを教えてくれました。

もうひとつの重要な近年の傾向として技術の飛躍的な発展がありますが、技術の発展はデンマークの家具デザインにどのような影響を与えているとお考えですか。

デザイン・ツールや生産技術の発展以上に、新たな材料の可能性というものがもっとも重

要だと思います。宇宙産業において開発されたより軽くて薄い素材というものが、家具にも用いられるようになりました。例えば、アルフレッド・ホームマンがデザインした新しい椅子はそのひとつの例です。この椅子に関しては、われわれからホームマンにデザインを依頼しました。ヤコブセンの椅子よりも進化した椅子が欲しかったからです。しかしホームマンは、最高の木の椅子はもうすでに作られてしまった、この以上のものはできないと言ってきました。そこでわれわれは、誰が「木」の椅子といったのか……と、彼に言ったのです。これを期に様々なアイデアが生まれ、彼のアイデアや形体を可能にする材料を探しました。こうして、APSと鉄というふたつの材料をミックスし、それぞれのフレキシビリティと強さといった長所を生かした新たな材料が家具に用いられ、あの椅子が完成したのです。しかし、この開発には5年という歳月がかかりました。可能性を信じ5年間待つことのできる忍耐力は、フリッツ・ハンセンがもつ強さだと思います。

確かに、その忍耐力とファッションに流されない普遍的なデザインを追求するデンマーク・デザインの姿勢こそ、持続的な人気と成功の秘訣だと思います。他に何か、デンマーク・デザインの成功を支える要因として思い当たることはありますか。

ひとつは、これらの家具デザイナーがデザイナーであると同時にクラフトマンでもあるという点だと思います。例えばウェグナーなどは、ドローイングを描くだけでなく、すべて自分自身でプロトタイプを制作し、非常に頻繁に工場に足を運んでいました。これは彼らがクラフトマンでもあるからです。

それは、デンマークの伝統なのでしょう。あるいはデンマークのデザイン教育の結果でしょうか。

そうですね。しかし現在では、大学を卒業したデザイナーは、クラフトマンとしての教育は受けていません。このような変化に少なからず問題を感じているため、現在われわれはデザイン教育機関とできるだけ関わっていく努力をしています。われわれには学生に、より現実的な知識を提供する義務があると考えているからです。

具体的には、どのようなかたちでデザイン教育と関わっているのですか。

例えば、去年、学校側と協力して学生のファイナル・プロジェクトの課題を提案しました。具体的には、この時は「空港の椅子」というのが課題でした。彼らが卒業した後に、

彼らのデザインを製造するわれわれが、教育に関わっていくことはきわめて重要だと思います。時に学校の教育は理論的になりすぎる場合がありますから。そのデザインが現実的でなければ作っても売れませんからね（笑）。古いと思われるかもしれませんが、われわれはいまだ、ファンクショナリズムは重要だと信じているのです。

話しは戻りますが、デンマーク・デザインの黄金時代といわれる50年代に確立され、現在も受け継がれているデンマーク家具デザインの特徴は何だとお考えですか。

その話をするためには、再びファンクションという言葉を用いなければなりません。50年代のデザイナーは、本当に真剣に機能を考えていました。用途、目的を果たすことができ、質が高く、ファッションではなく、普遍的なプロダクト・デザインを目指しました。これは建築デザインとも共通する思想です。1度建った建築は、その後50年あるいは100年は存在するわけですから、建築デザインもまた普遍的であるべきです。当然、その中にあるインダストリアル・デザインも同時に普遍的でなければなりません。

それでは、デンマークのインダストリアル・デザイナーは建築デザインに対して非常に意識的なわけですね。

優れたデザイナーというのは皆そうです。このふたつは切り離せないものですから。

デンマークでは、建築家が家具や照明器具をデザインするケースが多いというのも納得がいきます。このふたつをひとりのデザイナーが同じコンセプトでデザインすることが最も理想的なわけですから。

フリッツ・ハンセンと仕事をしたデザイナーの多くが、建築家なのもそのためです。これは、ヤコブセンが50年代に確立した伝統をわれわれが受け継いでいることのひとつといえるでしょう。

デンマーク人の徹底した機能の追求、短所を長所に転じる賢明さ、デザインの普遍性を探求する忍耐強さ、そして何よりもシンプルで明快な思考がデンマーク・デザインの質と魅力を支えているのですね。（於：新宿パークハイアット、1996年7月2日）

職人性と近代性

デンマークのフィティーズ

三宅理一

北欧のデザインに対する再評価が始まったようだ。

この2、3年前までは、デンマークだのフィンランドだのと口に出して言ってみても、建築家やデザイナーの反応は今ひとつ冴えないところがあったのだが、昨年くらいからその雰囲気は違ってきた。「スカンジナビア」や「ノルディック」と呼ばれる国々の近代に対して、新鮮なものを見るような目付きで真剣に議論を交わすようになった。近代性、横文字で言えばモダニティの問題が20世紀という大きな枠組みの中で議論されるようになってきたとき、これらの国々の近代が残した「遺産」が、実は大変な意味を持っているということに気が付き始めたのだろう。

いわゆるバブルの時代の建築的、デザインの関心と言えば、イタリアのどこかバロック的な絢爛豪華さや、アングロサクソンのややトリッキーなレトリックに満ちた手法に向かいがちであったが、そうした装飾性に飽きが来たと言うことだろうか。北欧の現代は、不思議なことにそのようなバブリーな時期を経ないで今日に到っているのである。つまり、1950年代のハイ・モダンの時代から唐突な変化が起こらないまま、1980年代、90年代に入っているということである。

一般にスカンジナビアの建築に対して冠せられる形容という、「経験主義的」「共同体的」といったものであろう。概念が先行するとか、修辞に陥るといったことがなく、ともに生活するという事実に対して、ごく素直に対処する術を心得た建築デザインであるの

だ。集合住宅の質が高く、老人福祉や病院計画に優れた成果を見せているのは、そうしたバックグラウンドがあるからである。人口が相対的に少なく、ドイツやロシアという北の大国の影を常に感じながら、自分達の領分をきちんと守り、社会的成熟を果たしてきた地域として、世界の中でも特筆すべき国々である。

そういう前提の中で、デンマークに的を絞ってみよう。

この国は北欧諸国の中でも特に地の利がよく、それゆえに通商立国を是とする歴史的背景を有している。みずからヴァイキングの子孫というだけあって、その行動半径は広く、世界中にデンマーク・ブランドの商品を送りつけている。デンマーク・ブランドといえば当然デザイン性を全面に出したものである。

興味深いのは、そのデザインに対する追究がいつ頃から始まったかということである。このあたりについての詳しい説明はまだなされていない。20世紀デザインの始まりについては、有名なベヴスナーの著書があり、イギリスとドイツがその発祥の地ということになっているが、やや遅れて開始された北欧デザインはそうした歴史からどういうわけか除外されているのだ。

問題は、1930年代から60年代にかけてのこの国のデザイン史についての記述が、今なお未完であるということである。デンマークのモダニズム研究についての第一人者リズベット・バルスレフ・ヨーゲンセン氏（彼女はなぜかスウェーデン人であるが）は、自らの個

人史と重ねて1950年代に強い関心を抱き、ヤコブセンを始めとするデンマークの近代建築家たちの跡付けを行っている。この時代は、今からでは信じられないほど改革的で美しいモダン・デザインを生み出したという意味で、実に多産な時代であった。それも、デンマークだけでなく北欧一帯で共通した現象なのである。

先のベヴスナー的理解に立つならば、19世紀後半にイギリスで繰り広げられたいわゆる「ドメスティック・リヴァイヴァル」が、世界の住宅を書き換えるほどの影響力を持ち、今日まで戸建て住宅のモデルを提供し続けていると半ば断言することができる。このあたりは序文を認めた木下壽子氏の研究によるところが大きい。それと同じような文脈で考えると、その70年後になされた北欧での新しい住宅の動きは、モダン・リビングの戸建て住宅（場合によっては集合住宅を含めて）のモデルを提供し、世界的に強い影響を及ぼしたと言えることができそう。同時代のアメリカのケーススタディ・ハウスの運動もあるが、チャールズ・イームズなどの住宅を見ているとまさに手作りという感じがして、デンマーク住宅の職人性には到底及ばないようなにも思われる。この点は、まだまだ歴史的裏付けが必要ではあるが、若い建築史の研究者が積極的にテーマとして取り組んで頂ければありがたい。

さて、ここで今一度考えてみたいのは、第二次世界大戦後に急速に競争力をつけてきたデンマークのデザイン産業についてである。

1960年代を振り返ってみると、デンマークを始めとする北欧デザインが世界中に溢れており、その機能的でシンプルなフォルムが住宅からオフィスまでさまざまな分野に浸透していたことを覚えている。

例えば、アルネ・ヤコブセンのデザインになる有名な「アント・チェア」(日本ではアリンコ・チェアと呼ばれることが多い)は、1952年のものであり、それが現在までベスト・セラー製品となっている。デザイナーの名は知らなくとも、この椅子の形を眼にすれば誰でも知っているプロダクトであり、それだけ全世界で好まれている。途中アメリカのPL法に引っかかって、三本足から四本足に変えられた経緯はあるが、その名の通り「蟻」の形をしたこの椅子は既に世界史の中に残る傑作であろう。

今回の特集で、フリッツ・ハンセン社副社長のイェンセン氏が述べているように、ヤコブセンを始めとする1950年代のデザイナーたちは果敢に新しいデザインに挑戦していった。重要なのは、戦後のデンマーク経済の興隆に、戦災で荒れ果てたドイツの復興が役買っていたことである。幸運にも戦災を免れたデンマークの産業は、1940年代末から50年代にかけて再建を図るドイツの諸都市にさまざまな資材や製品を送り込んでいた。その結果巨大なドイツという市場を得たデンマークの家具産業は、勢いに乗って新進気鋭のデザイナーや建築家たちに競争力のある製品開発を依頼した。

ヤコブセンの家具を見ていてわかるよう

に、彼らは工業化のプロセスを重んじ、新素材(例えば合板やプラスチック)を積極的に活用して「モダン・デザイン」を生み出していった。ここには戦時中の技術開発を戦後になって民間に転用するという技術のトランスファーの過程を如実に見てとることができるだろう。このことはアメリカ、ドイツ、日本などでも共通するが、例えば航空機の機体用に開発された合板技術を家具に転換したり、軍需産業のために用いられていたさまざまな機械技術を家庭用の電気製品などに移転していくことが、ほとんど町工場のレベルでなされていったのである。

こうした発想は町場の工場経営者の才覚に基づくところが大きく、デンマークの企業群もその例にもれない。もともとデザイナーであった人間がそのまま企業を経営し、製品開発に当たることも少なくなく、それらが今日まで続いているわけだ。

もう一点、デンマークのモダン・デザインの特質は、その考え方が建築から個々のプロダクトに到る、すべてを一貫して意匠するトータル・デザインの思想に基づいていることである。ヤコブセンの一連の椅子は大半が建築と共に計画されたものであるという事実が、その事を明快に物語っている。優れた建築家であったヤコブセンが、専らデザイナーとしての側面のみを評価されるくらいがあるのは、そのトータル・デザインの思想を理解していないが故にと思われる。一度でも彼のオーフス市庁舎から、SASホテル、デンマーク国立銀行の建築を眺めたことのある人な

ら、この点を即座に了解してもらえらるだろう。

1950年代のトータル・デザインと言え、ドイツ系のミースやブロイヤーなどがひとつの典型を表しているが、その事と地場の産業基盤とはさほど関係がなさそうである。他方、デンマークの特徴は、工業化のプロセスと在来構法とが微妙に結びつき、そのバランスの上にデザイン産業が発展を遂げていったところにある。ケアホルム夫妻の方法を見れば、その点は納得がいくだろう。北欧に伝統的なレンガと木という素材の選択は変えず、それらを新しい設計概念に基づいて組み替えていったのである。だから、そこでは伝統的なクラフツマンシップは大いに利用され、工業製品と巧みに溶けあって「近代」の空間をつくりあげることに成功した。その点で、北欧モダンはいギリスのドメスティック・リバイバルのような一定の保守主義の上にアーツ・アンド・クラフツを展開させた動きとは異なり、20世紀的なライフスタイルの転換を成し遂げたといってもよい。ごく素直な意味で、自然環境と一体となり、人間の感性に優しく訴えかける建築である。こうした表現が嫌いならば、工業化の要求する標準化とコストダウンを果たしつつ、在来構法の心地よさを保った建築といえはよいだろうか。

この40年前の建築とデザインの原理が、今でも色褪せて見えないことそのものが驚きである。

●みやけ・りいち／建築史家、芝浦工業大学教授

Photo Credit

オーレ・アクホイ Ole Akhøj

p.9-12, p.18-25, p.32, p.34-40, p.42-44,
p.46-49, p.51上, p.52-67, p.70-73, p.75,
p.76左

フィン・クリストファーセン

Finn Christoffersen

p.26-31

望月 昭 Akira Mochizuki

p.74

取材協力

レネ・クラル René Kural

マイケル・フル／デンマーク・デザイン・
センター Mikael Fuhr / Danish Design

Centre

長谷川栄子 Eiko Hasegawa

解説文翻訳

尾崎澄子 Sumiko Ozaki

山家京子 Kyoko Yamaga

地図製作

久世 健 Takeshi Kuze

p.8



山岳都市ハジャラ、マナハから5Km。自然地形を利用した城塞都市となっている。

アラビア半島のほとんどは、砂漠地帯が占められていると考える人は多い。しかし、実際にアラビア半島を南下すると、徐々に標高が高くなり、ついに3760mのノビ・チュアッペ山を有する山岳地帯へと至ってしまう。これがイエメンの中央部である。つまり、アラビア半島の南西部を占めるイエメンでは、年間降水量1000mmに達する山岳部を擁していると同時に、海岸線の低地部分では、高温多湿の灼熱の町アデンが位置している。西側の紅海部分はティハマ地方と呼ばれ、やはり、高温多湿の熱帯となっている。

南のイエメンに始まり、北のイラク、ヨルダンに至るいわゆるアラビアは、「砂漠のアラビア」「石のアラビア」と、それに「幸福のアラビア (Arabia Felix)」と呼ばれる地域に区別される。砂漠のアラビアはもちろん、サウジアラビアを中心とした地域を指し、石のア

ラビアは北部のシリア、ヨルダン等を指す。幸福のアラビアとは、緑豊かな国土を有するイエメンの代名詞である。アラビア半島ではイエメンの歴史が最も古く、紀元前8世紀から始まる。これがシバの女王の世界である。イエメンの歴史は、シバの女王の古代から始まり、長いイスラム時代を経て、南北に分断される近代へと至る。北は王制を駆逐した民主勢力によるイエメン・アラブ共和国が、南はイギリスを排除してアラブ世界初の社会主義国家イエメン民主人民共和国が独立する。そして南北対立の時代が30年ほど続き、その間に激しい内戦が3度勃発したが、最終的に1990年南北統一がなされ、現在のイエメン共和国が成立した。ちょうどベルリンの壁が崩された年と呼応している。

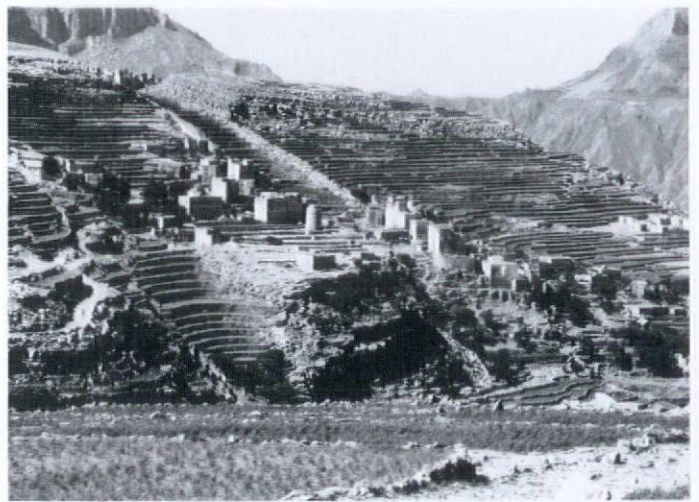
歴史が長く、多くの国が興亡し、守りの構えが町の基本的なスタイルとして定着したイ

エメンでは、山岳都市と塔状住居の伝統が染み付いている。山岳地域だけでなく、砂漠地帯でも、塔状のスタイルは失われていない。ある本には、イエメン人はもちろん守りという体制を組む本質を持っているが、それと同時に眺めの良い、高いところに住みたいという願望を常に持っているという記述がある。塔状の伝統が、いつの間にかその利点を好みに変えてしまったのであろう。

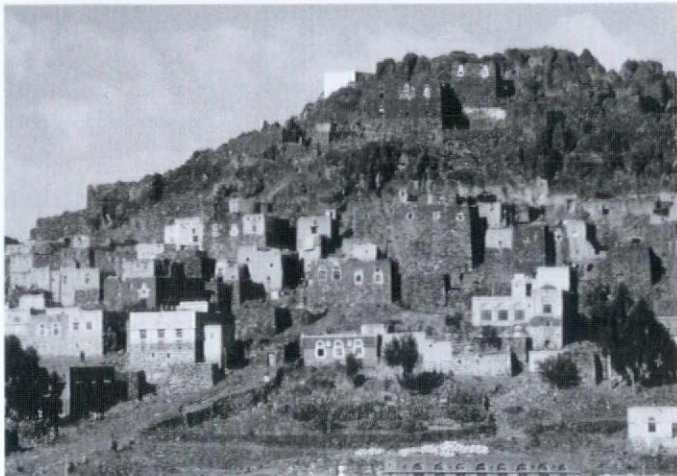
アラブの田舎と称されるイエメンは、世界の本流から取り残され、歴史ある国土がそのまま保存されている。伝統と文化を守り、千年近い年月を経た当時の建築と都市の文化をそのままに見ることのできる生きた博物館である。



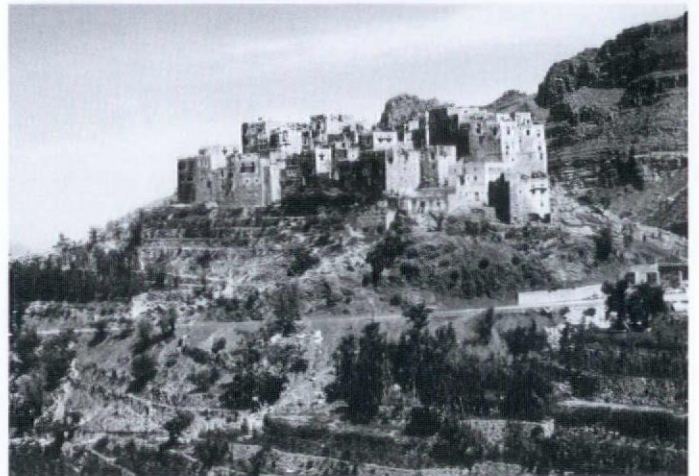
タウィラアの町。岩山にへばりつくように立地。町の中心の通りは長く続くスークとなっている。



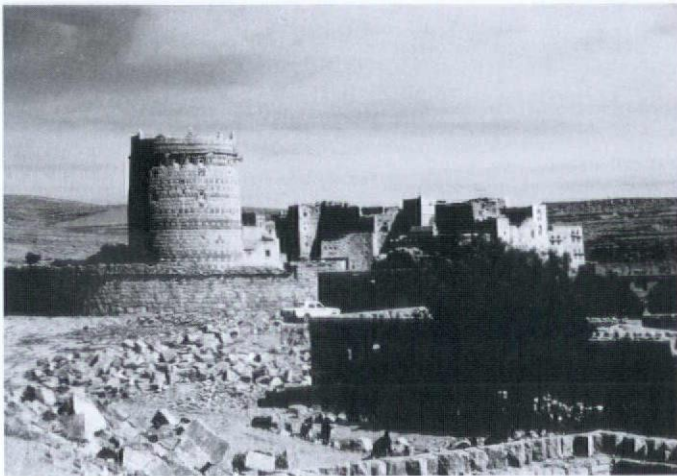
山岳地域の標準的風景。段々畑と塔状住居。



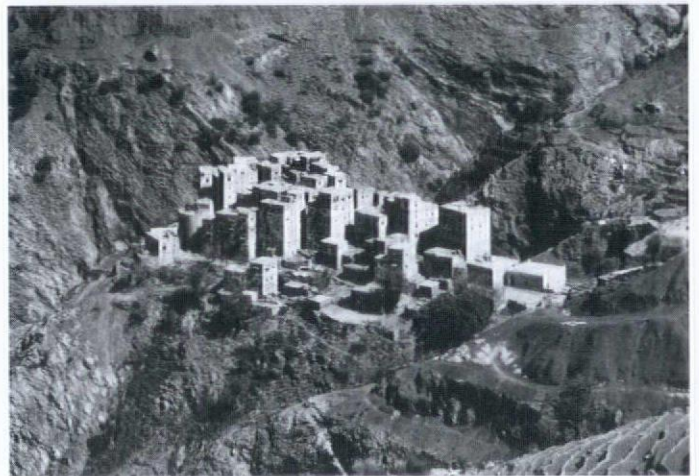
サヌアとアムランの間の町。岩山から湧き出してきたような集落景観。



クーラン周辺の岡の上に作られた集落。自然の城塞景観を作っている。



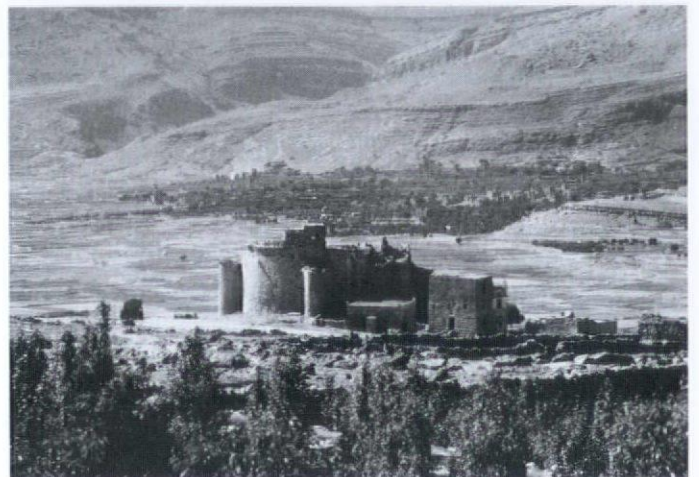
アムランとクーランの間の標高2800mの峠付近の集落。円筒形の建物は監視塔である。



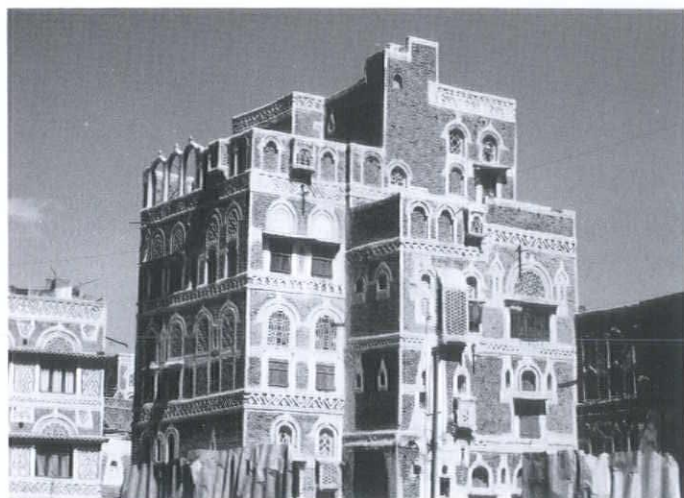
クーランの尾根筋に作られた塔状集落



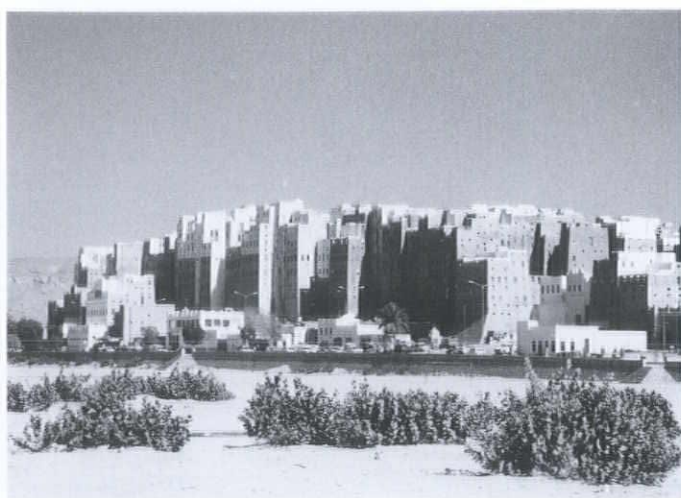
監視塔と住居を一体化した集落景観



城塞集落の景観



サヌアの塔状住居。下層は石積みで上層は日干しレンガ造である。



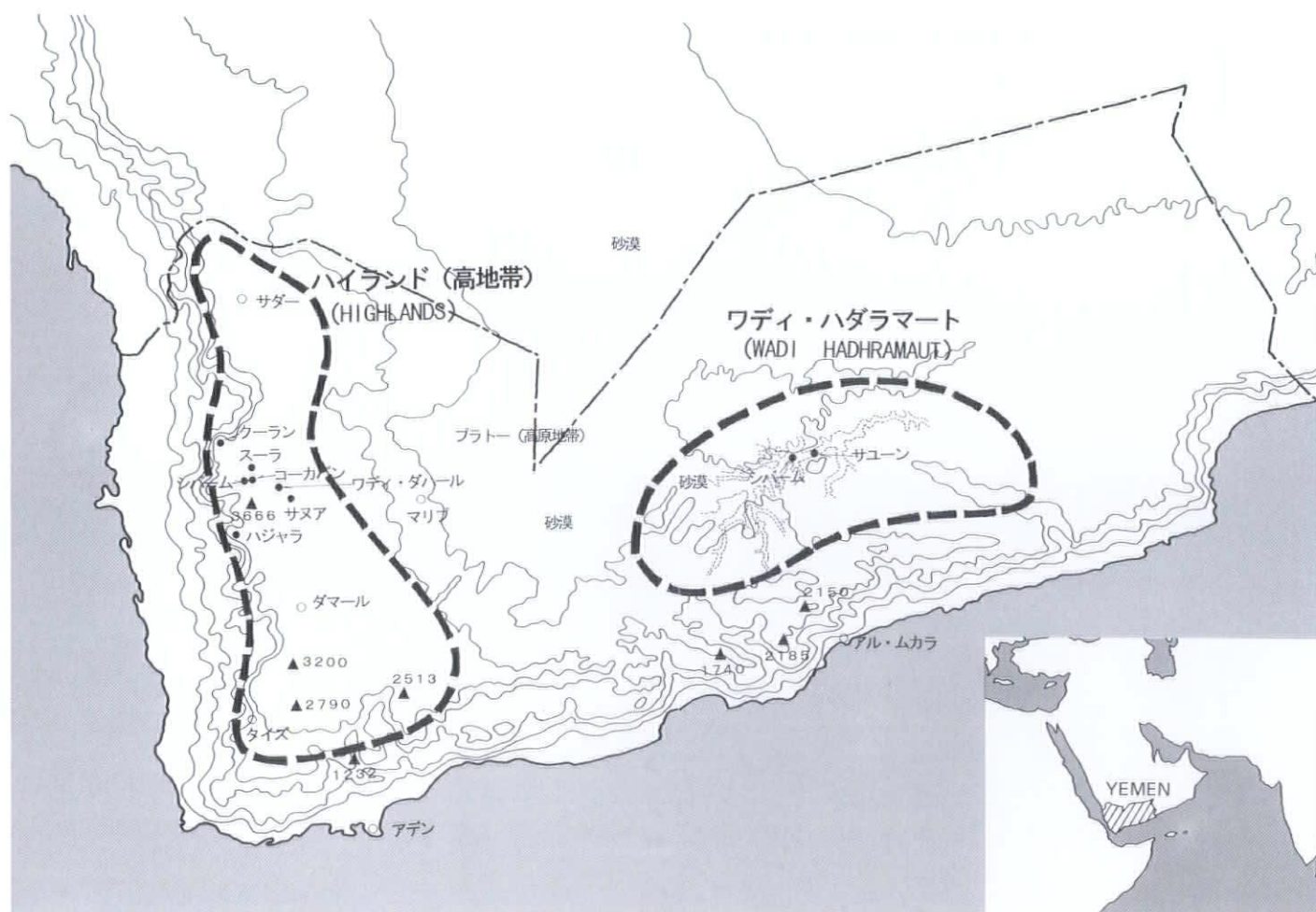
ハダラムートの谷のシバームの塔状住居群

イエメンの風土は4つに区分される。第1は、紅海、アラビア海に接する低地部分で、高温多湿の熱帯である。第2は、サヌアを中心に南北に広がる3000m級の山が連なる中央高原山岳地帯である。第3は、東部地域で、ハダラムートの谷を中心とする砂漠地帯。第4は第2と第3の間に広がる東部丘陵地であり、山岳から砂漠へ移行していく中間地帯である。このように極めて多様な気候を擁し、しかも標高0mから3000m級まで多面的な様相を示している。今回は、第2と第3の地域を対比的に紹介するものである。

建築の材料として使われているものは、石材と日干しのレンガである。山岳地帯の建築はほとんど石材のみでつくられているが、砂漠地帯の建築は、日干しレンガを主体としている。北緯15度付近に位置することにより、高山帯といっても夏期は厳しい日差しが照りつける。塔状住居は、6～8階建て程度のものであるが、それを石積みあるいは日干しのレンガ積みで組み上げていくのである。山岳地帯では、石材で壁面を構成する形態であるが、3000m近い標高の盆地のサヌアでは、日干しのレンガも使われている。6階から8階に

およぶ塔状の建物を安定させるために、下層の2層部分程度を石積みとし、その上に日干しレンガを積み上げる混合の手法もあちこちで見ることができた。

山岳地帯の交通手段は、4輪駆動のジープが圧倒的な多数を占め、日本車のシェアが90%に達していると言われている。段々畑と塔状住居と細い山道のある地域での就学率は低いように感じるが、各所に学校が配置されていて、問題はないとのガイドの弁である。





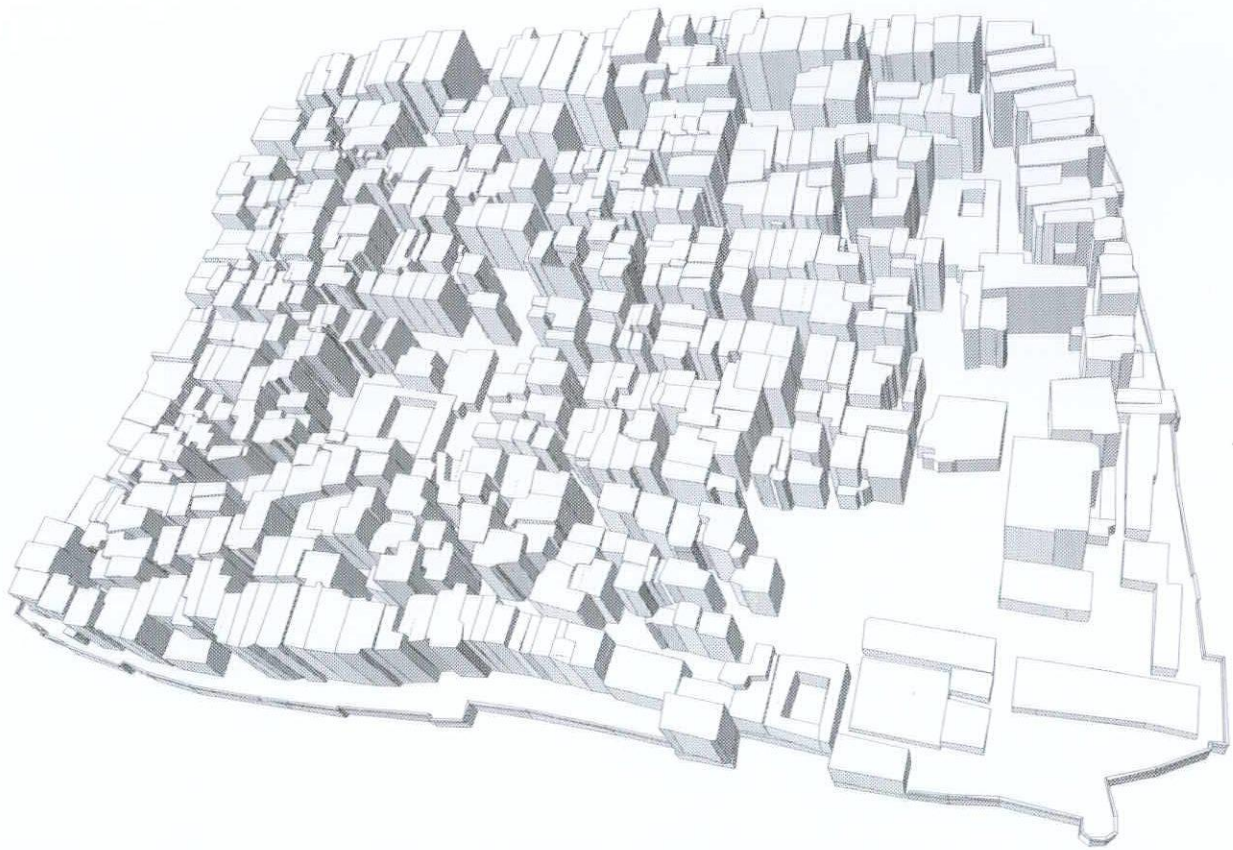
ハダラートの谷は、この地点で約6 kmオアシス部分の中央にシバームは立地。新市街と旧市街の間は雨期に川となるゾーンである。

SD9609



シバーム

SHIBAM



シバームの都市図を元に描いた鳥瞰的透視図である



都市図（出典：MUD BRICK ARCHITECTURE）を元にその空間構成を描いたもの

元の南イエメンは砂漠が多い。ワディ(谷)・ハダラマートとは、全体をつなぎ合わせると長さ200kmにおよぶ巨大な谷筋であり、シバームはこの谷筋の底に立地する都市である。ハダラマートの谷は堆積した砂地でできていて、雨が降れば巨大な流れを作るが、この地域の風土としては砂漠気候に属する。雨期に流れる雨のために肥沃な土ができるのであろう。台地の上は岩盤で人の住めるところではない。谷の幅は2kmから広いところで15kmにおよぶところもある。台地の上と底の谷との標高差は、300mにおよぶところもあり、常に台地が迫っている風景が背景となっている。シバームは、「砂漠の摩天楼」と呼ばれるように建物は5階建てから8階建てがほとんどで、高さは30mにもおよぶ。その主要部分を日干しのレンガで建設しているのである。そのため、下層の壁は極めて厚く、中には部屋よりも壁部分の面積が大きく取られている事例も見られる。シバームは、紀元前4世紀にはハダラマート地域の都として存在した歴史を有している。現在の人口は、新しいスプロール部分を含めて1万人前後のようである。

城壁の内側は、7つのモスクと5つの広場、宮殿とスークとひとつの城門で構成されている。城門脇には学校も配置されている。城壁の内側で自立できる都市となっている。



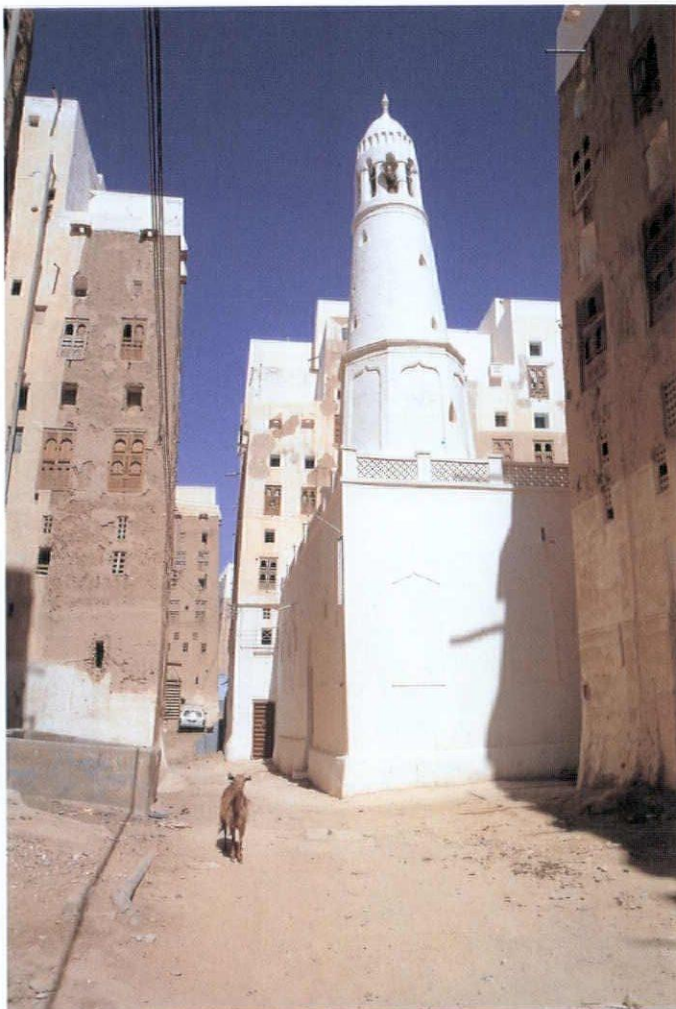
オアシスの領域からシバームの塔状住居群を臨む



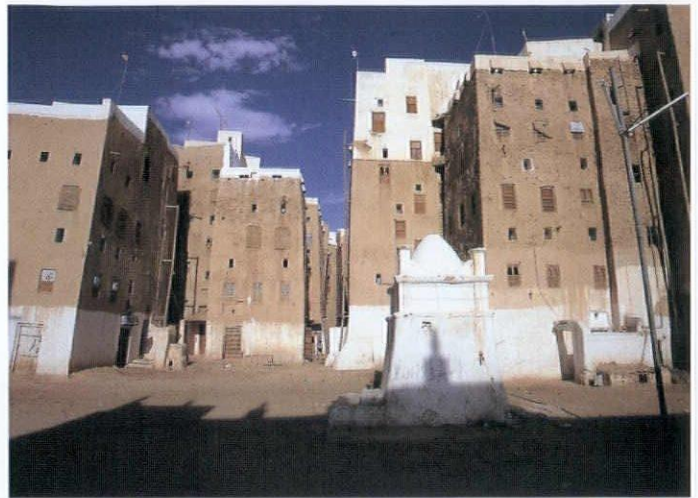
正面の城壁部分に接する塔状住居。上層を白く塗るのは暑さよけである。



旧市街と新市街との間は、川となる領域である。(サユーンからサヌアへ飛ぶ機上から撮影)



7つのモスクの中の一つ、向こう側に広場がある。



中心広場。中央の小さな建物は水場である。

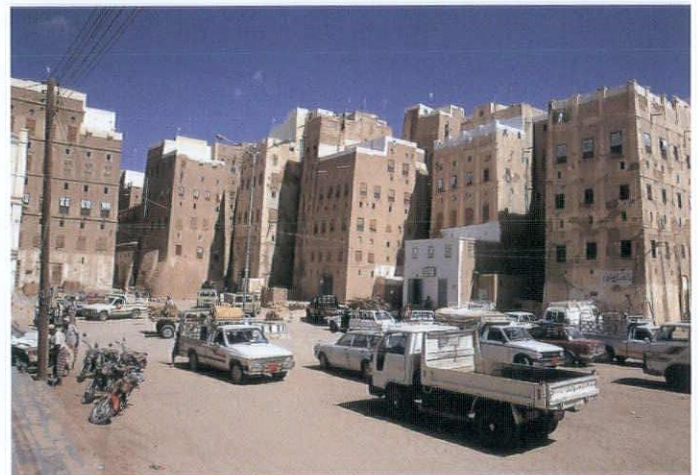


中心広場。右側の建物はグレートモスク（金曜モスクとも呼ばれ、安息日に皆が集うモスク）。

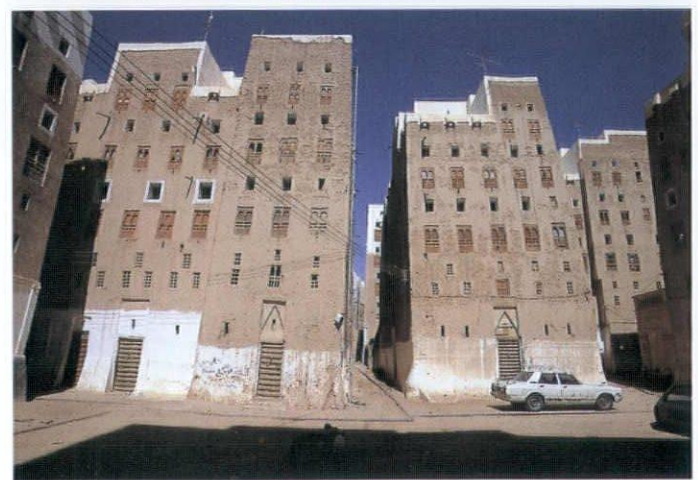


城壁の手前が川のゾーンである

SD9609
92



城門の内側、宮殿前の広場。スーク、学校等が配置されている。



小広場を囲う住棟も6階から7階建てである



ハダラマートの中心都市サユーン。朝日に輝く建物は、スルタン宮殿である。

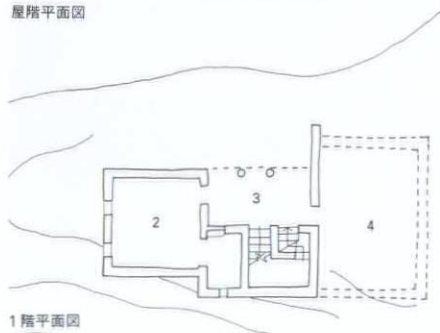


サユーンの宮殿は、今は博物館となっている。太陽は真上に登っている。

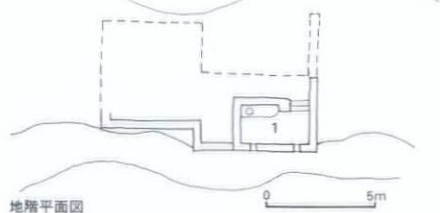
城壁都市シバームの周辺はオアシスとなっており、農家が散在している。新しい家も、古い家も土の住宅である。昔から地域の建設組織があって地域共同体のようにして住居の建設を行っているという。砂漠の気候では、コンクリート造やブロック造は熱を吸収してしまうから適さない。断熱性能の良い土の家が最適とされるため、新しい建築でも日干しのレンガでたくさんつくられている。床は木製の梁を渡して細い木を敷き並べ、その上に泥の床を作る構法が一般的であるが、下図の3層の農家の1階は、太い土の柱をつなぐ土のアーチがつくられている。



屋階平面図



1階平面図



地階平面図



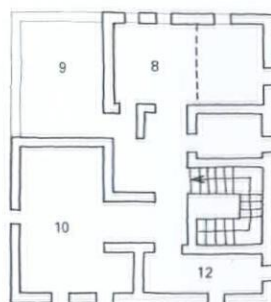
立面図

- 1: キッチン
- 2: 居屋
- 3: テラス
- 4: 以前存在した居屋
- 5: 屋上テラス

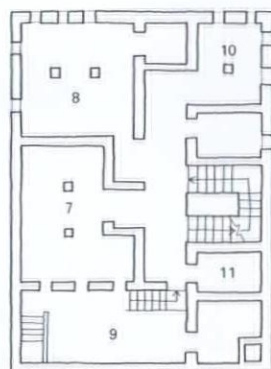


オアシスに立地する小農家（現在は廃壊化している）

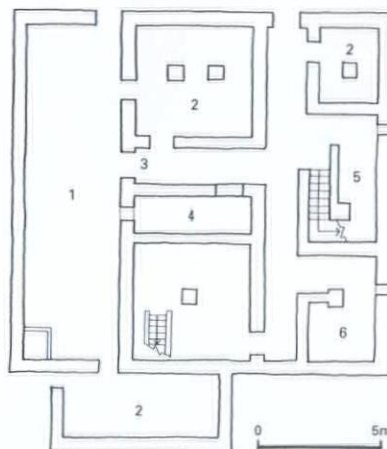
SD9609



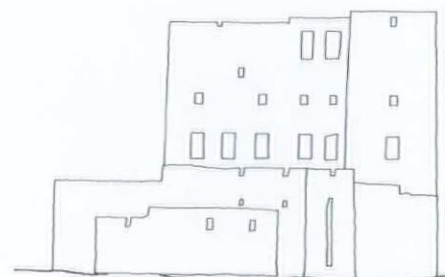
3階平面図



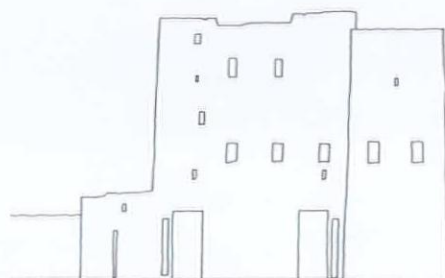
2階平面図



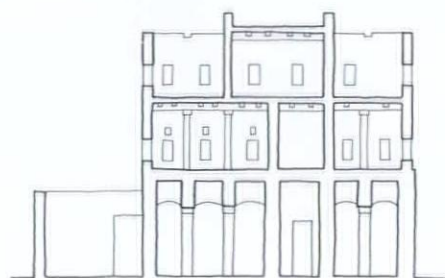
1階平面図



東側立面図



北側立面図



断面図

- 1: 前庭
- 2: 家畜
- 3: 入口
- 4: ストアールーム
- 5: 納屋
- 6: かまど
- 7: ゲストルーム
- 8: サロン
- 9: テラス
- 10: 個室
- 11: トイレ
- 12: キッチン



シバームの周辺の農家（3階建て）、囲われた庭は家畜のためである。



アル・マーウィット周辺の景観。ティハマの低地方向を見る。



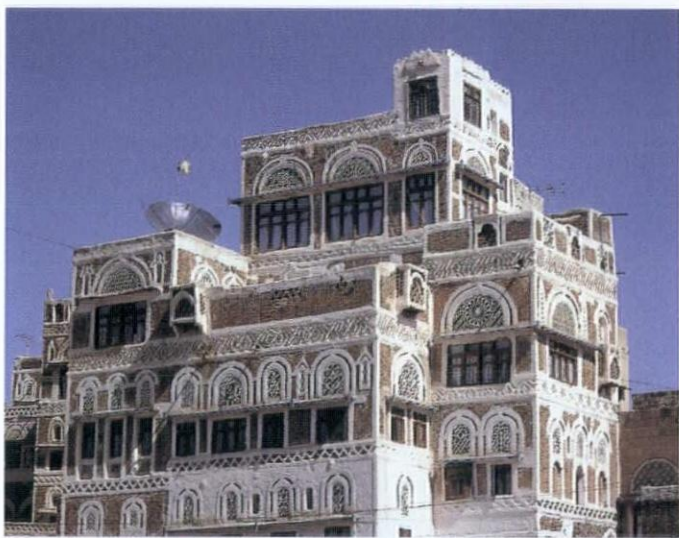
やせた尾根にも塔状住居の集落はへばりついている

サヌア SANA'A

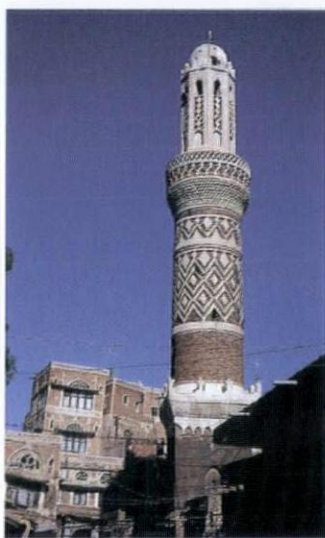
サヌアは、標高2300mの高原盆地に立地する都市で、イエメン共和国の首都である。その中心は政治の中心施設が建ち並ぶターヒル広場である。5つの門と64のミナレットを持つ町オールドサヌアの中心でもあった。しかし、現在のサヌアの旧市街は、ターヒル広場から東側である。サヌアの住居も塔状につくられ、その階数は、5、6階から8階におよぶ。シバームと違うところは、下階2層を石造りで組み上げ、その上層を日干しのレンガで積み上げていく構法である。



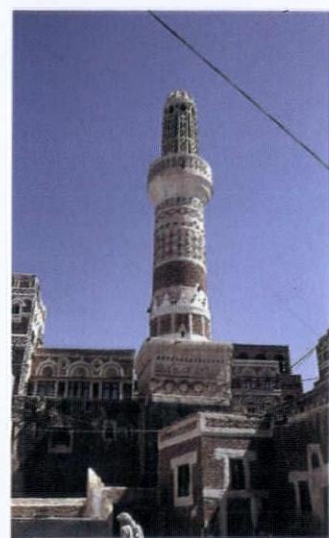
高層住棟が連棟している。思い思いに窓を作っている。



サヌアの標準的住居。半円形はカマリア窓と呼ばれ、色ガラスをはめ込んでステンドグラスとしている。



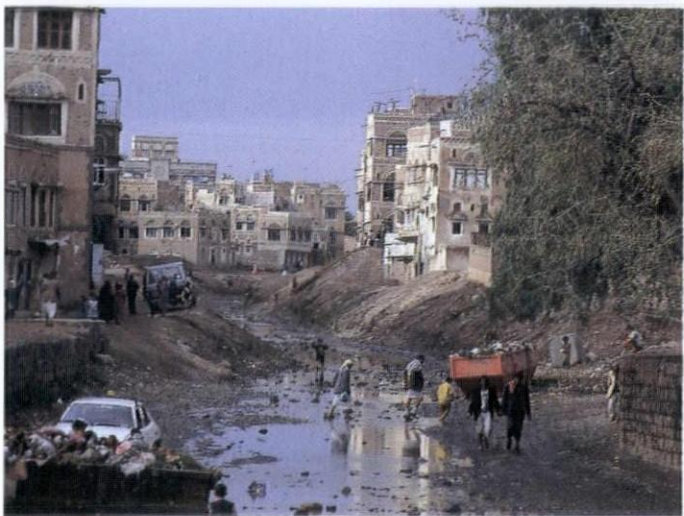
64本のミナレットの一つ。円筒形部分は、日干しレンガで作られている。



漆喰の模様がそれぞれに異なり、個性を示している。



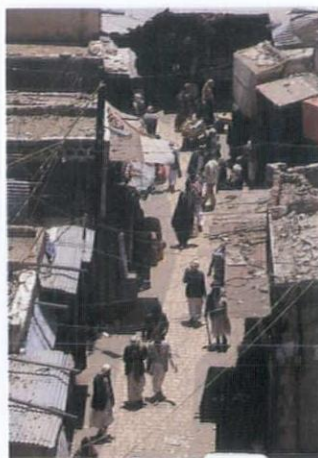
塔状住居群の間に菜園が作られている。自給できる都市の体裁を整えている。



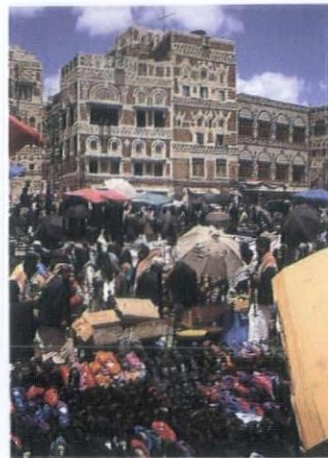
旧市街をぬけるワディは、子供の遊び場であり、車道であり、風道である多目的なバッファゾーンである。



スークゾーンの建物は低層なので上から臨めばその区別はすぐ出来る



スークの通り



金曜日の安息日以外スークは人で満ちあふれている

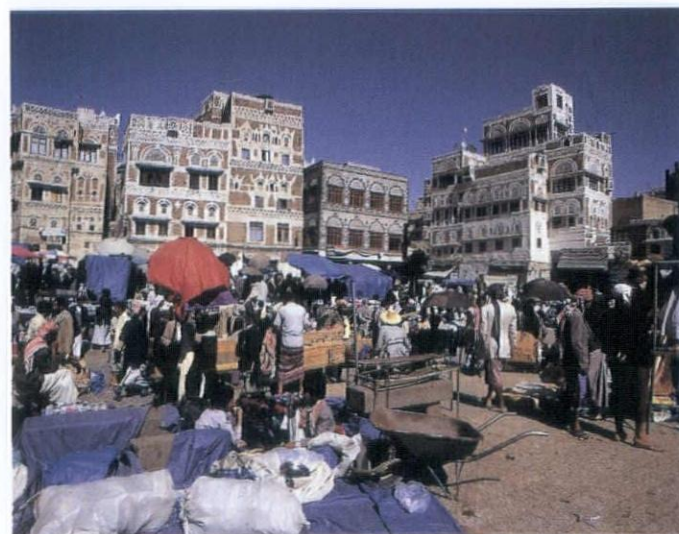


サマア旧市街の構成

旧市街の中心はスークである。グレートモスクを中心に城門から城門へ連続した領域としてスークゾーンが設定されている。高層住棟の間に低層の商業施設が配置され、それぞれの部分に小さな広場が配されている。金曜の安息日以外は、人でごった返す。女性の姿はほとんど見ることができない。



バーバルヤマン（イエメン門）の内側にはバザール広場が位置している



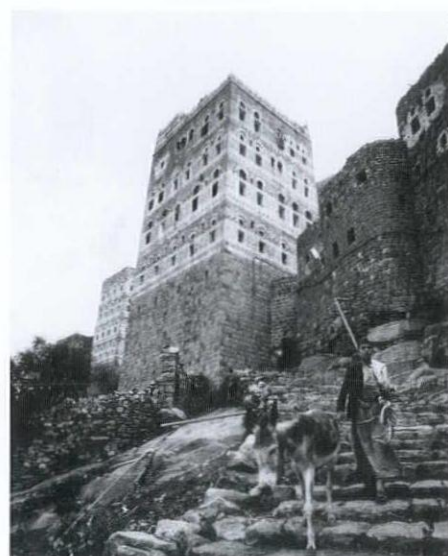
スークで売られるものは日用品がほとんどであり、観光客用のみやげ物は皆無といって良い。



ハジャラ HAJJARAH



アナハから5Km岩山の上に築かれたハジャラの遠望。岩肌と区別がつかない。



ハジャラへの城門へ至る入り口。この1カ所に限られている。



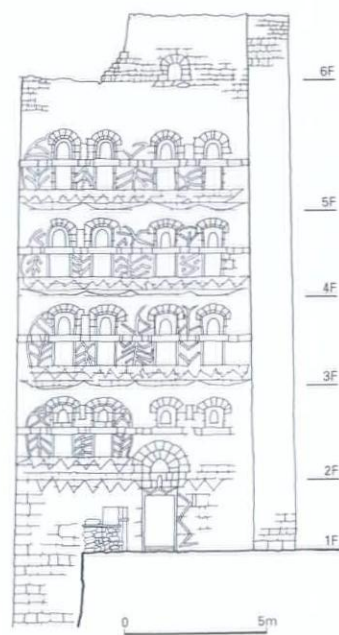
モデル図

ハジャラは、中央高地帯の標高2300mに立地する自然の要塞としての景観を有する山岳都市である。5～6階建ての石造りの塔状住居が林立している。サヌアから西へ50km程のマナハから5kmほどで到着する。林立する塔状住居は遠くから見ると岩肌と区別がつかない。内部の人口は400人ほど。要塞の内部は、入り組んだ細い路地と建て込んだ塔状住居がひしめき合っており、車は中へ入れない。1番高い部分に広場らしいものがあるが、内部にモスクはない。城門はひとつ、しかも石で

組まれた堅固な城門である。塔状住居の中の排水系統は、現在は配管を通して多くのものがあるが、昔は、建物に石造りのダクトが組み込まれている形式となっており、上階部分にもトイレが配置されているものがある。山岳都市であるため、水は天水を溜める貯水槽が重要な意義を持っていたが、現在はポンプアップして城壁内のそれぞれの住居の近くに金属製の貯水タンクを設置している。

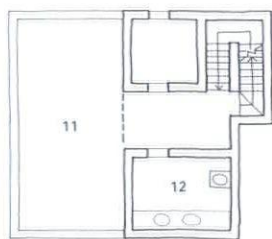


地域内配面図

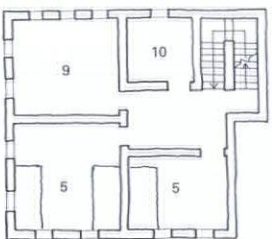


立面図

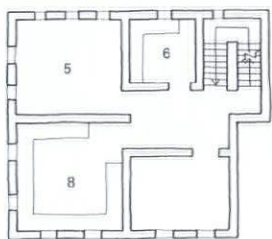
6階平面図



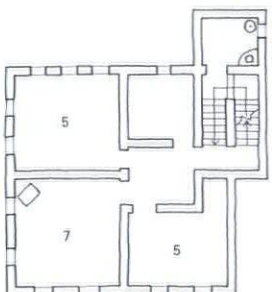
5階平面図



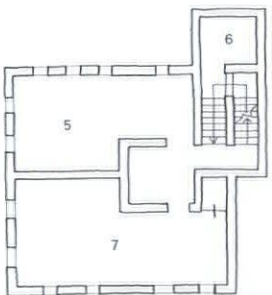
4階平面図



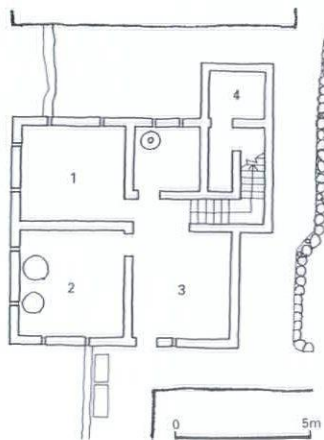
3階平面図



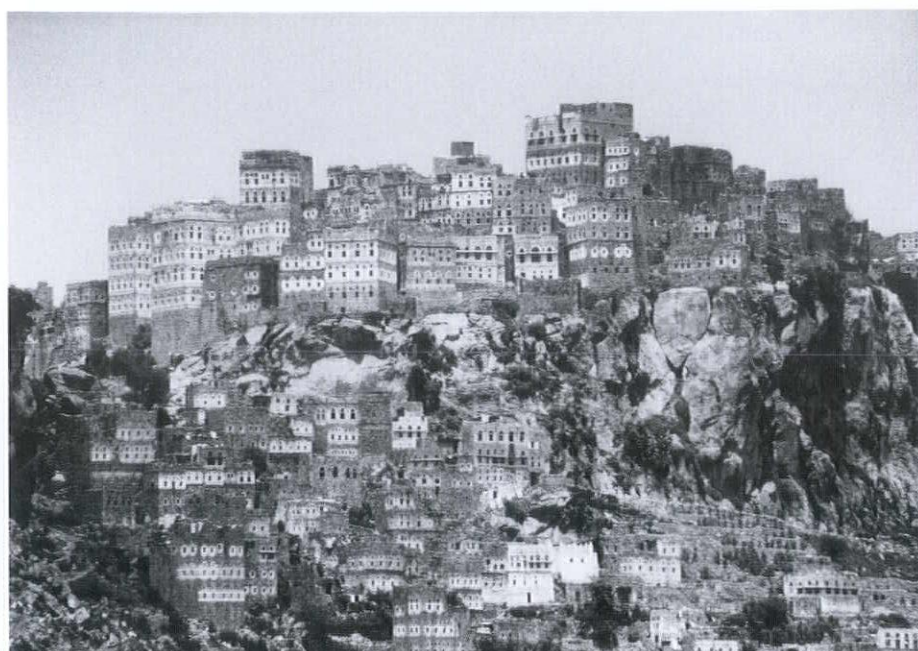
2階平面図



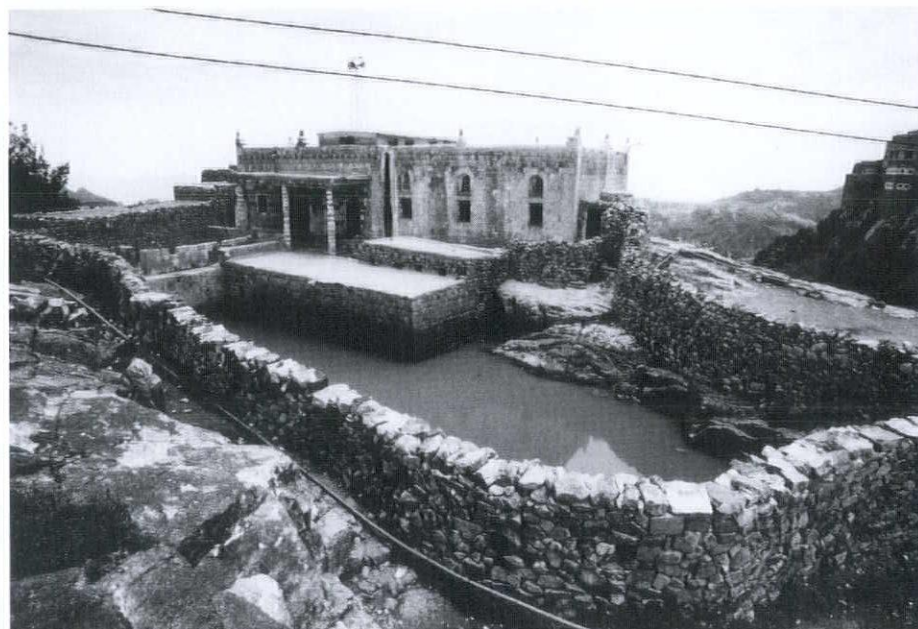
1階平面図



- | | |
|------------|------------|
| 1: ストックルーム | 7: 居間 |
| 2: 粉引 | 8: カートルーム |
| 3: 玄関 | 9: ダイニング |
| 4: オールドバス | 10: トイレ・バス |
| 5: ベッドルーム | 11: 屋上テラス |
| 6: バス | 12: キッチン |



石造の塔状住居がひしめき合っている。下側の部分はスプロールであろう。

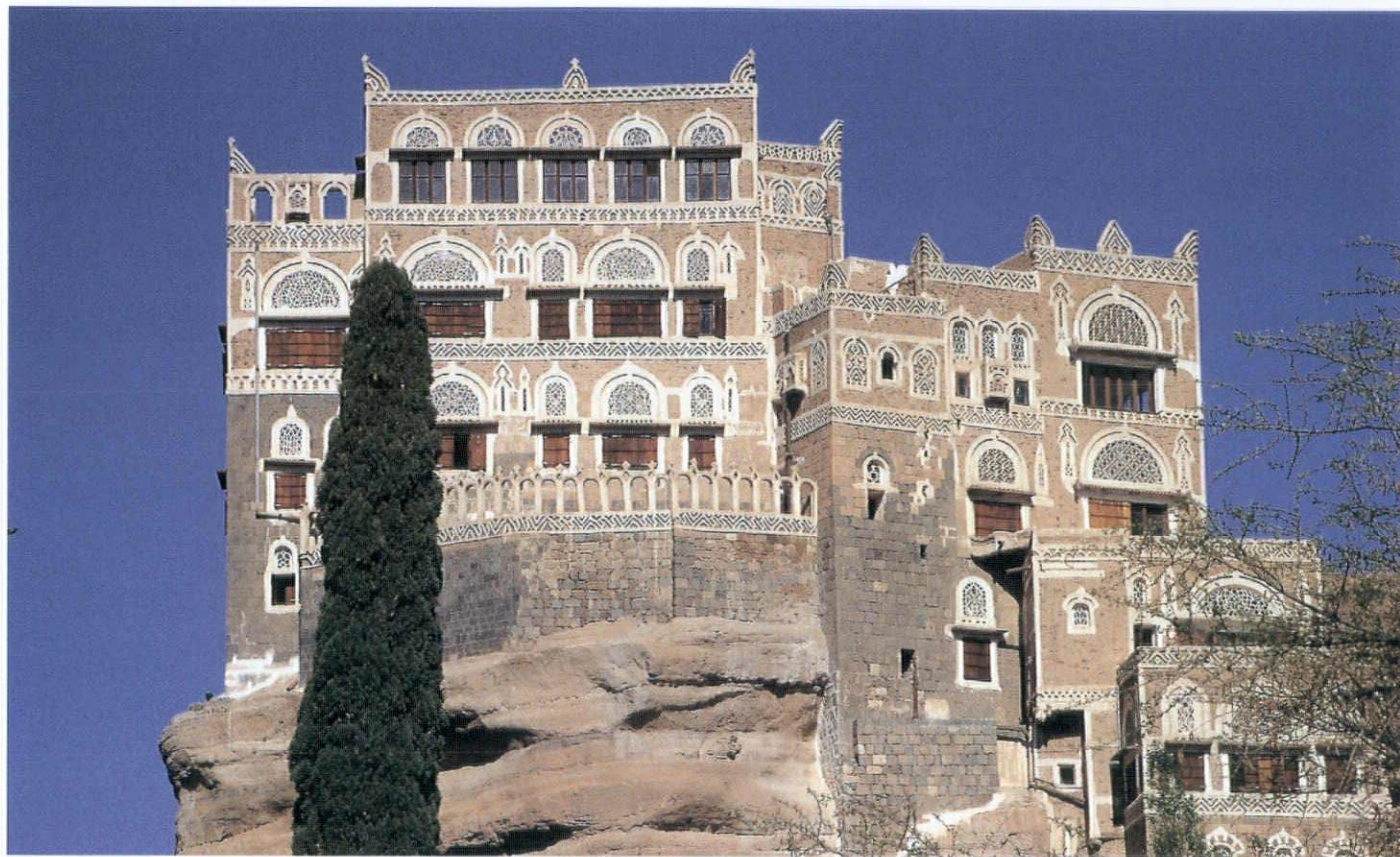


城塞の中にはモスクはなく、反対側の丘の上に立地している。天水を貯める貯水槽を伴う。

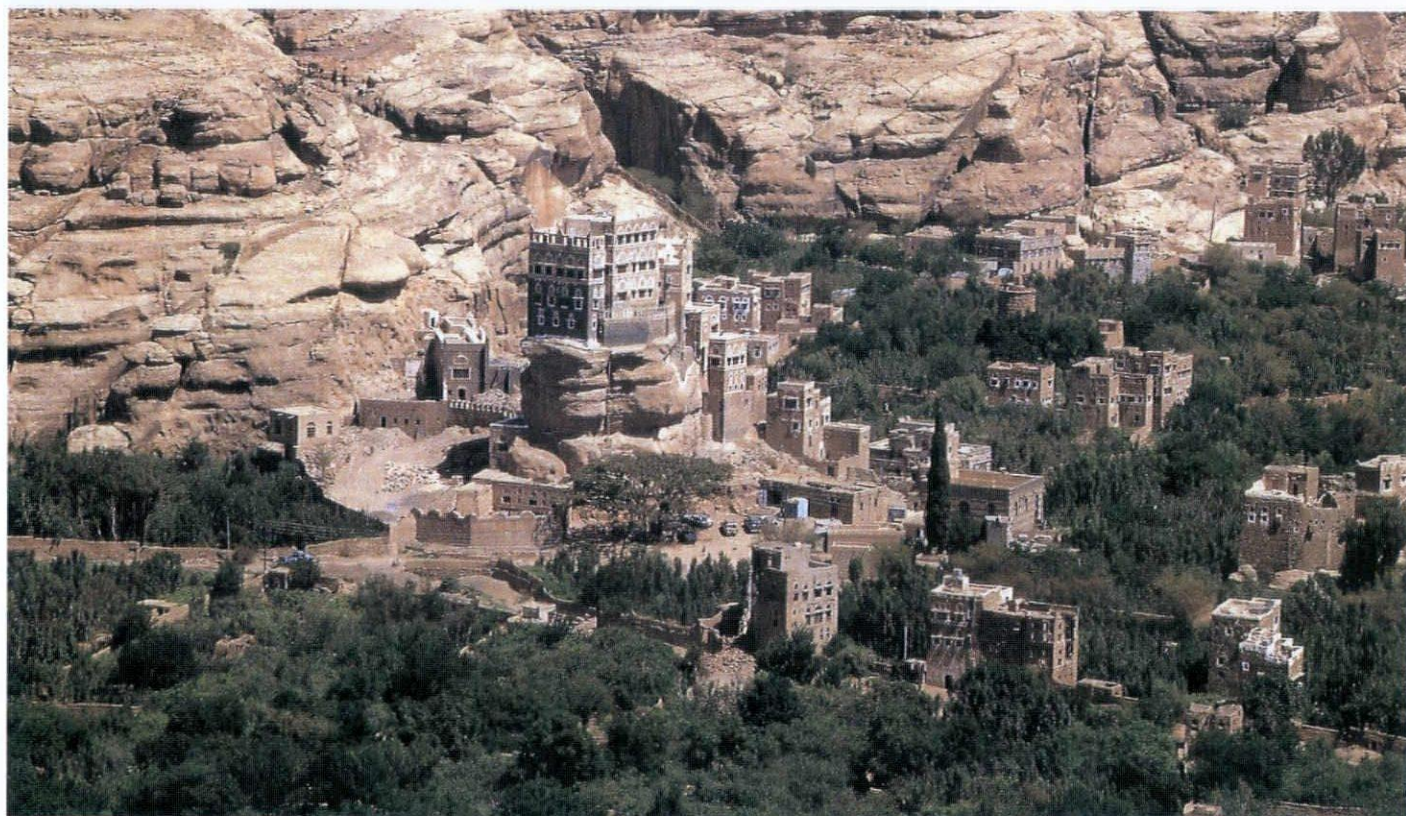


城塞都市部分からモスクの建つ反対側を見る。車はここまでアプローチできる。

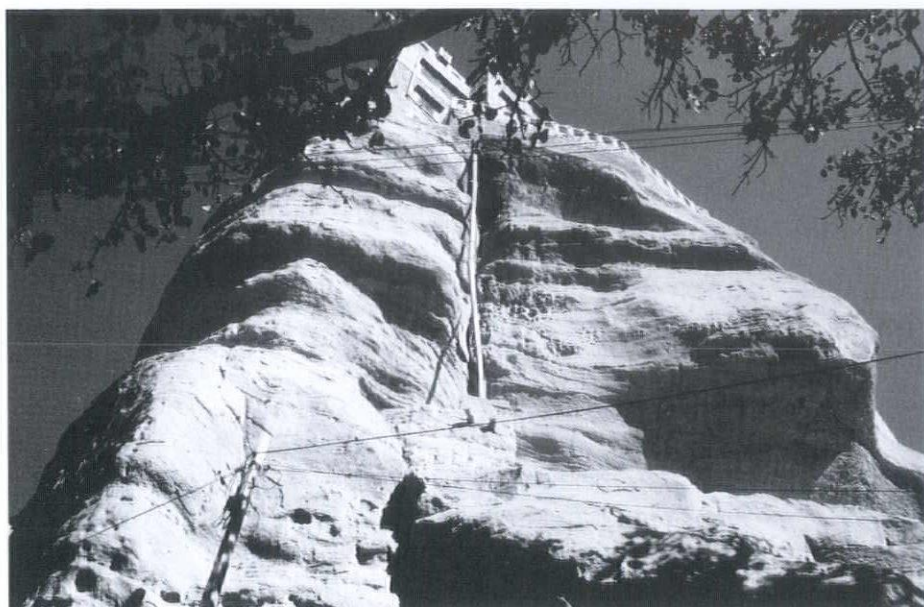
ロックパレス
DAR AL HAJAR



巨大な岩の上にのったロックパレス。整然と並んだカマリア窓に思い思いの透かし枠がはめ込まれている。



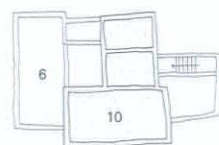
宮殿からは、ワディ(谷筋)の集落を見下ろすことができる。



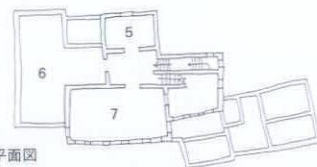
ロックパレスの岩の見上げの景観

ワディ・ダハールに昔のイエメンの支配者イマームのために建てられた夏の別荘、〈ロック・パレス〉がある。文字通り、岩の上に建てられた宮殿であるが、現在は、国が管理して修復保存中である。この宮殿も下層の2～3層分は石を組み上げているが、その上は日干しレンガを積み上げている。大きく取った窓の上にはカマリア窓（半月窓）が並び、

細かい色ガラスを組み込んだステンドグラスとなってインテリアに柔らかな色光を落としている。最上階のサロンから眺める谷は、緑で覆われ、その中にやはり塔状の住居が立ち上がっている。ダハール谷も周りは荒い岩山が立ちほだかり、緑の絨毯との対比が特異である。



7階平面図



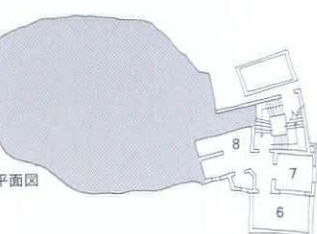
6階平面図



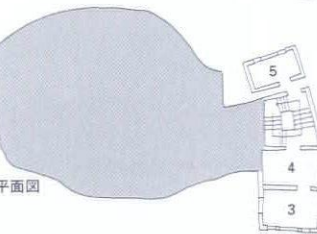
5階平面図



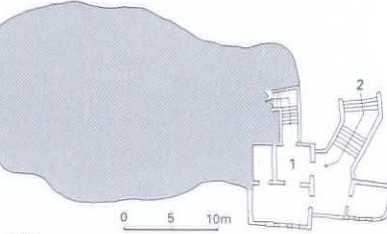
4階平面図



3階平面図



2階平面図



1階平面図

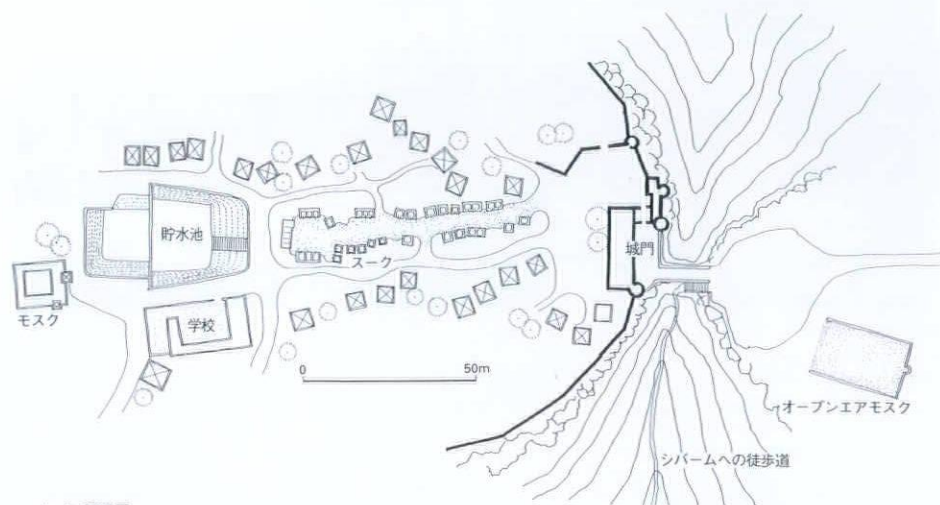
- 1: 玄関
- 2: アプローチ
- 3: 個室
- 4: 前室
- 5: キッチン
- 6: テラス
- 7: サロン
- 8: ストアールーム
- 9: ホール
- 10: ルーフ



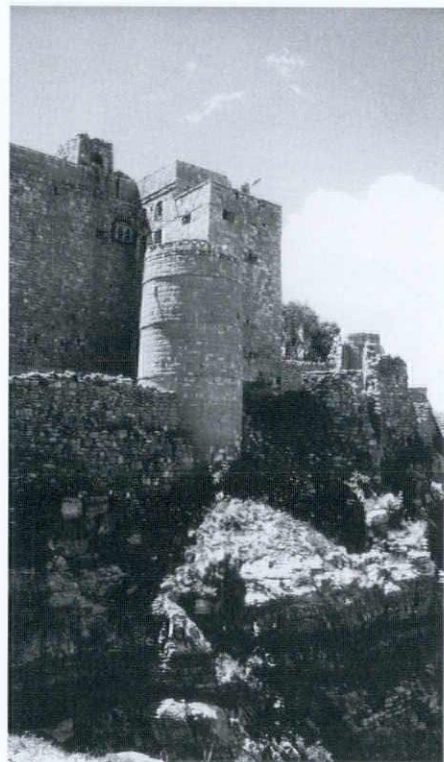
立面図

コーカバン・シバーム KAWKABAN SHIBAM

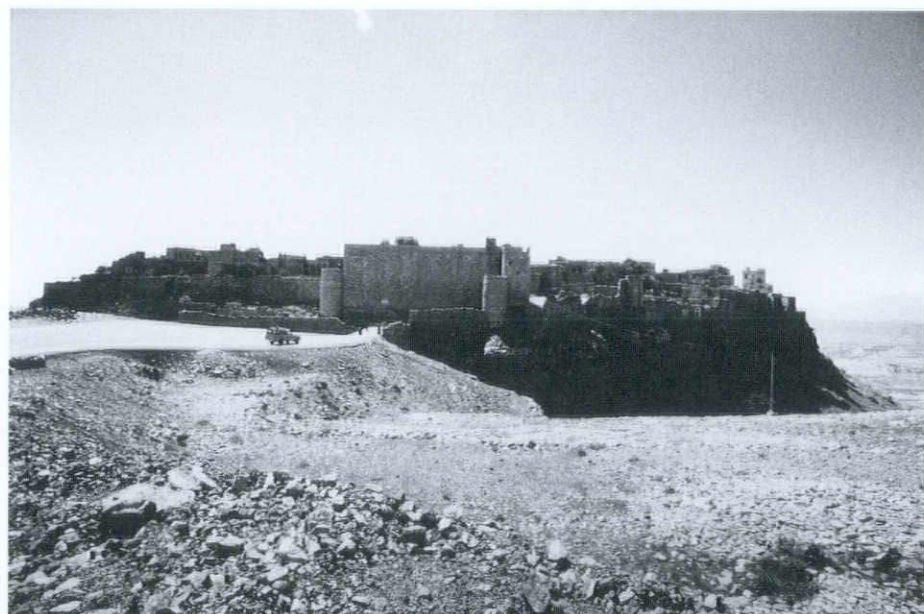
コーカバン・シバームは、中央高地の兄弟都市である。ハダラマートのシバームと同名ではあるが、風景は全く異なる。山上のコーカバンが守りを、低地のシバームが生産を担当したという。上と下をつなぐ歩行のルートが今でも生きているが、立派な舗装道路が外周につきアプローチは簡単になった。



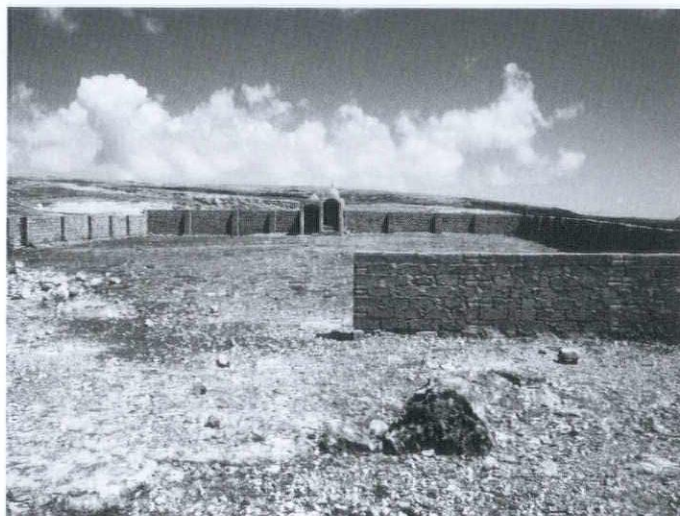
コーカバン配置図



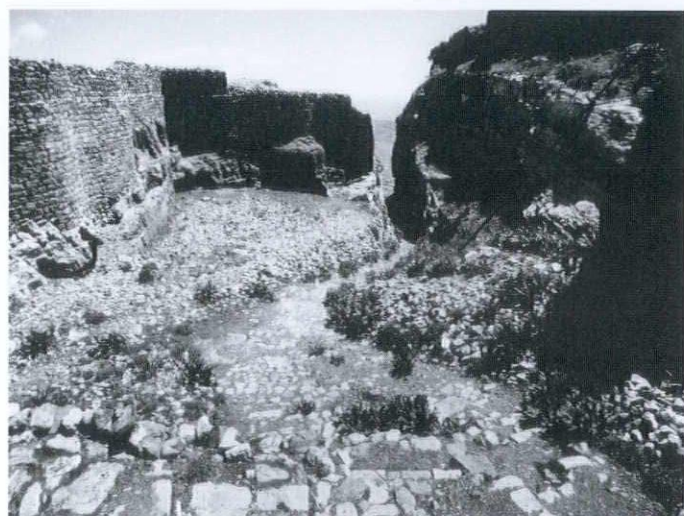
山の上の町コーカバンの入り口となっている城門



城門前は広い台地となっている。今は舗装道路が通じアプローチは極めて楽になった。



城門前のオープンエアモスク



コーカバンから下の町シバームへ降りていく歩行者の山道

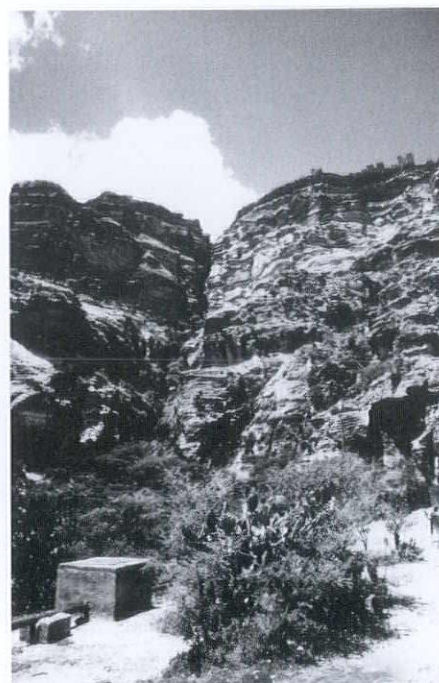


シバームとコーカバンの概念図



シバーム、センターゾーンの構成

山上のため、天水を溜める貯水池が、生きるために不可欠な要素として中央のモスク脇につくられ、全体の中心施設となっている。両都市共に、都市の構造を成す要素は城門からグレートモスクへ至るルートと、そこに立地するスーク(商業)ゾーンである。シバームは、旧市街和新市街を分ける部分に城門があり、住居の形態も若干異なっている。城門の内側にオールドスークがあるが、現在は、城門の外側のスークが活性化され、広い空間のもとで自由に交易を行っている。コーカバンには500人程度の住人しかいないが、シバームは、はるかに大きな市域を構成している。周囲は、平坦な農耕地が広がる。標高差約350m。上り1時間、下り30分を住人はいともたやすく登り降りするという。



下と上を結ぶ歩道の通じている岩の裂け目

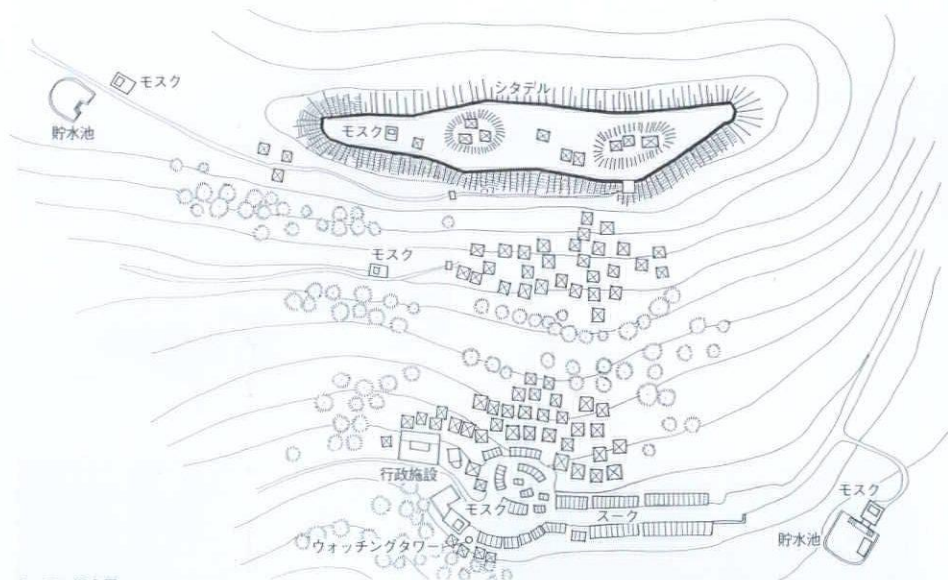


コーカバンからシバームを見下ろした景観



シバームの中心はグレートモスクとなっている

クーラン KUHLAN



クーラン概念図

サヌアから北へ抜ける幹線は、アムラン、サーダを經由してサウジアラビアへ抜けていく。アムランから西へ逸れてホデイダへ抜けるルート沿いにクーランが位置している。山岳地帯であり、塔状住居は石積みでつくられている。周囲は、ネパールを想わせる段々畑が広がり、丘陵地のあちこちに塔状住居の集落が覗いている。クーランでは、尾根筋の南斜面に集落が立地し、最高部にシタデルが配置され、最下部に行政施設とモスク、スークが並ぶ中心地区がある。住居は45度に近い斜面にへばりついている。自然地形としての城塞である。



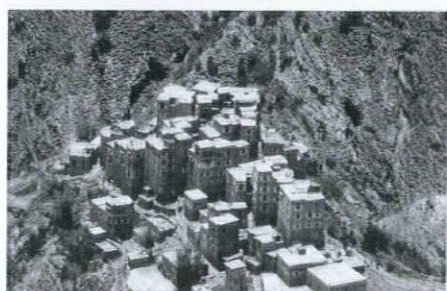
シタデル内にあるモスク



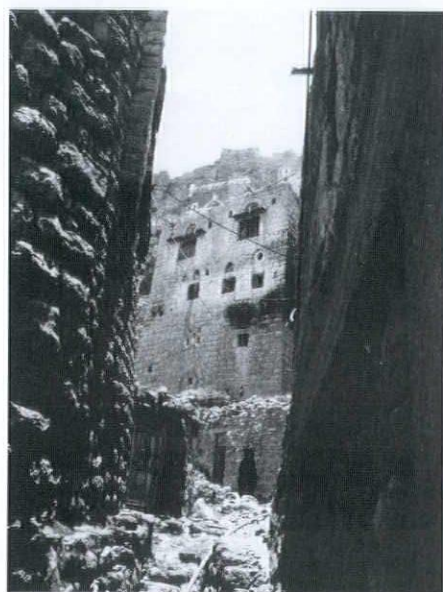
下のモスク、貯水池が併設されている。



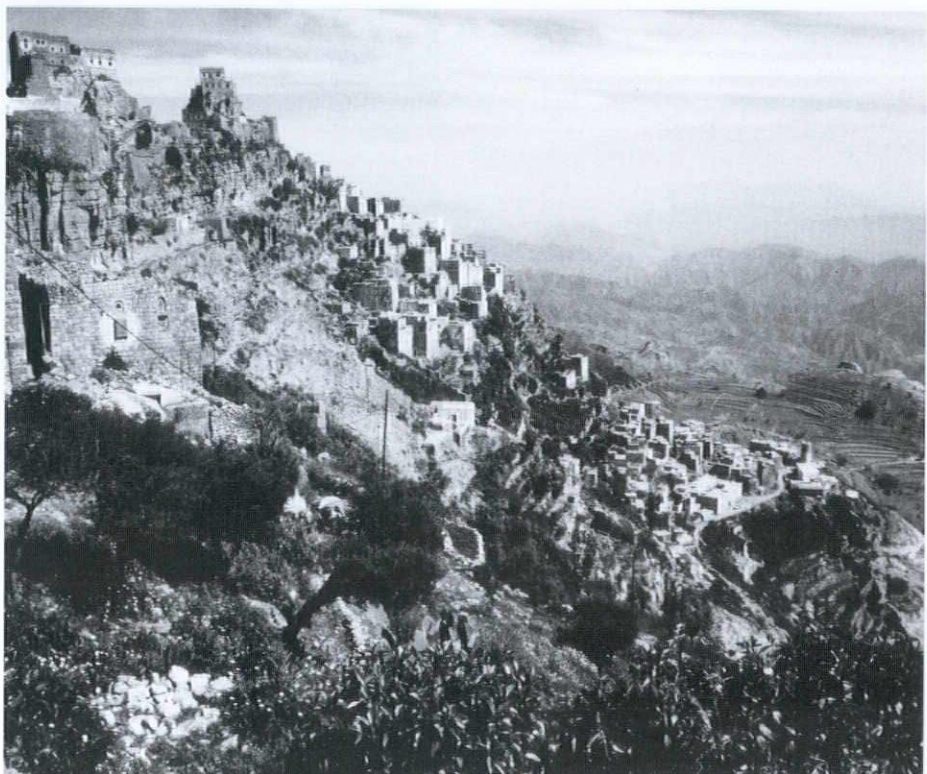
岩肌にへばりつく住居



塔状住居群の集落



スークの通りから上を臨む



山上のシタデルから下の中心モスクとスークと行政施設に至る景観

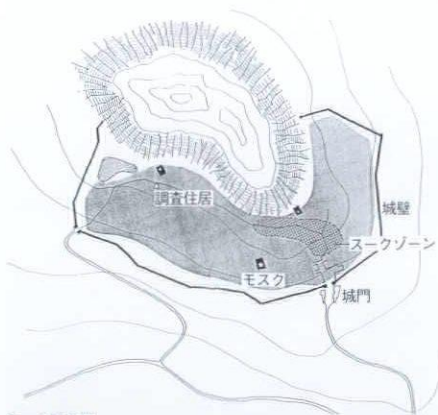


斜面にへばりつく塔状住居

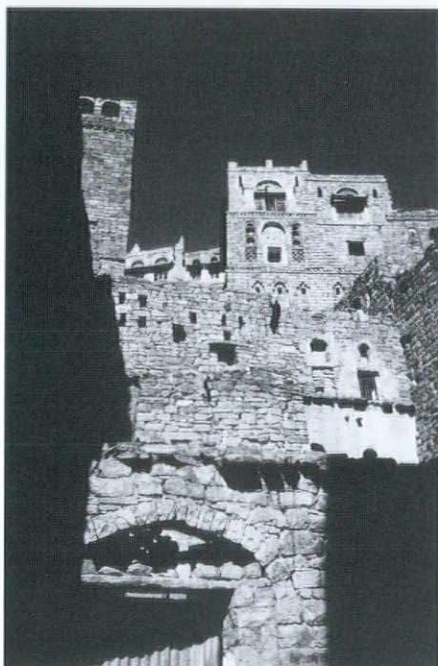


クーランの中心部、円筒形の監視塔とモスク。その周辺はスークゾーンとなっている。

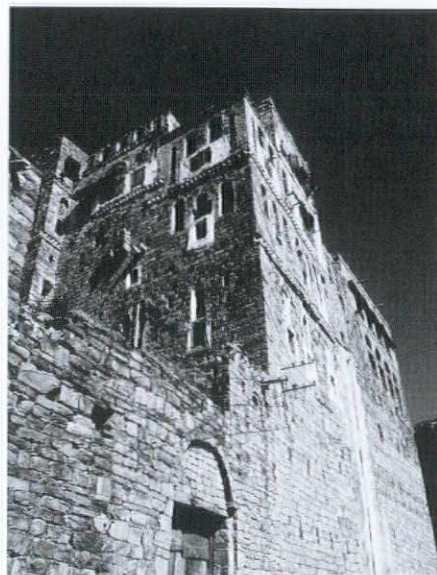
スーラ THULA



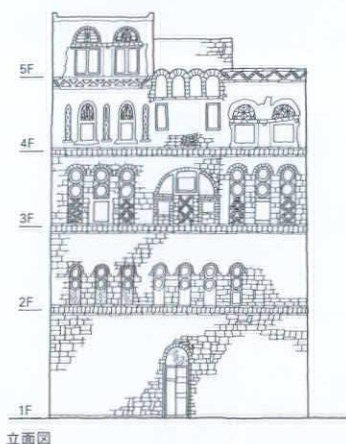
スーラ概念図



石造りの壁面がそそり立ち、道路を通る者に圧迫感を与える。



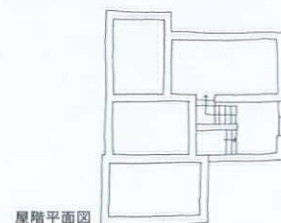
スーラの一般的な塔状住居。石造で組まれている。



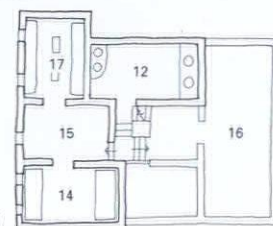
立面図

- 1: 玄関
- 2: アーチ
- 3: 家畜
- 4: 農器具庫
- 5: 石臼
- 6: 穀物倉庫
- 7: トイレ
- 8: 男性の居屋
- 9: 女性の居屋
- 10: 居間
- 11: ストアールーム
- 12: キッチン
- 13: ダイニングルーム
- 14: サロン
- 15: 前室
- 16: テラス
- 17: カートルーム

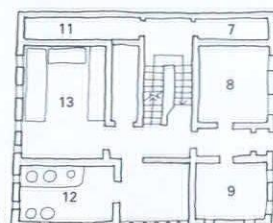
スーラは、サヌアの北西54kmに位置する。巨大な岩山を背にしているが、頂上部分は現在、軍事要塞となっており、接近不可能である。集落は、城壁で囲われ石造りの塔状住居が密集しており、スークは、城門の脇に広がる。守りの体制を強く示した集落景観となっている。



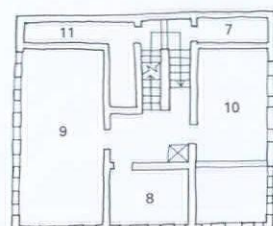
屋階平面図



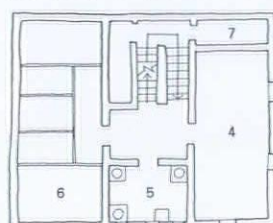
5階平面図



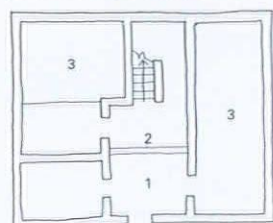
4階平面図



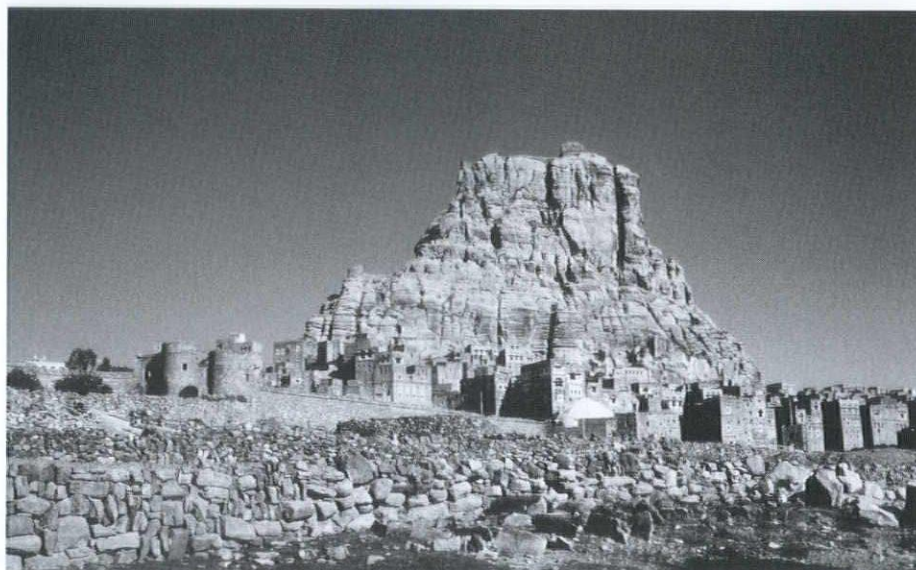
3階平面図



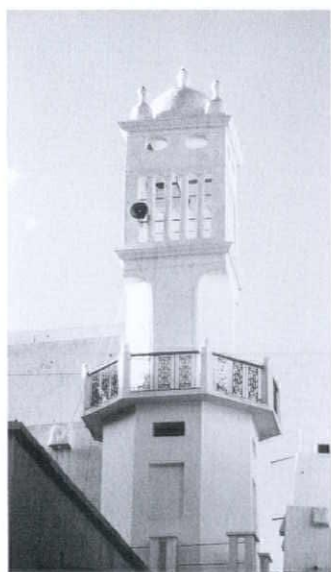
2階平面図



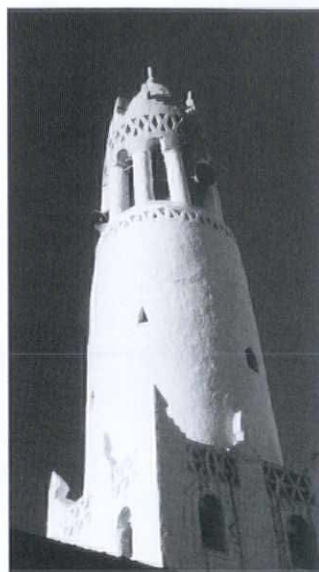
1階平面図



スーラの全景。後ろの岩山の上にミリタリーが陣取っている。



ハダラマートのシバームのミナレットその1



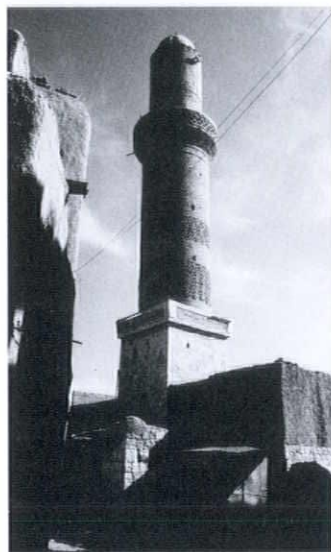
ハダラマートのシバームのミナレットその2



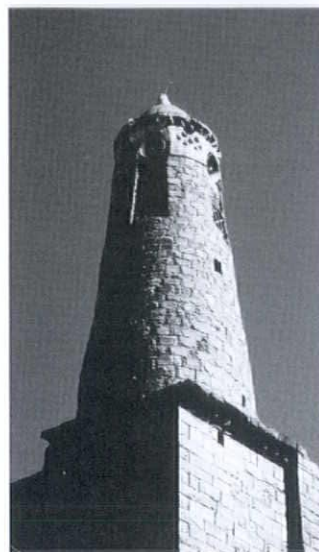
ハダラマートのシバームのミナレットその3



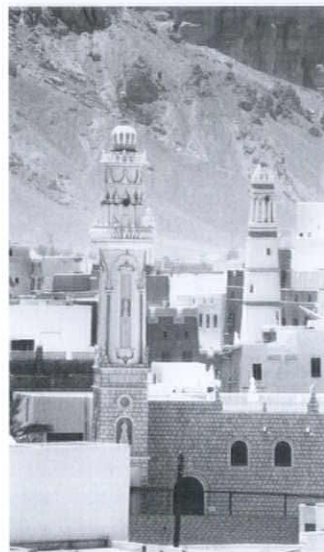
タリムのミナレット



サヌアのミナレット



スーラのミナレット



サユーンのミナレット



サヌア旧市街のミナレット



ワディ・ダハールの監視塔に付加させた住居

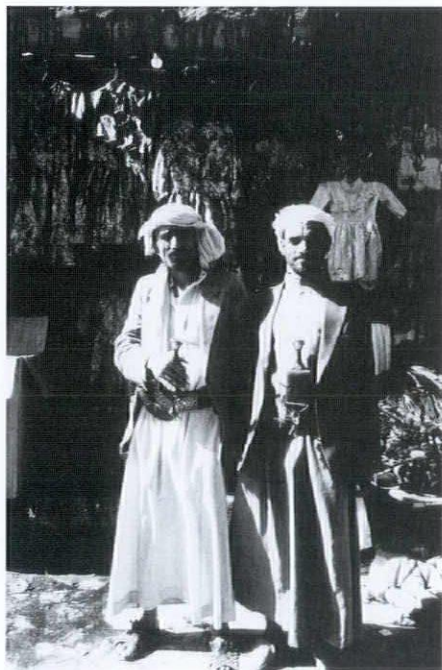


コーカバン周辺の風景

塔状住居の風景はイエメンでは当たり前となっている。しかし、同じイエメンの中でも、塔状の形態は地域によって作り方が異なり、風景も異なってくる。石造りで全部組み上げるものや、日干しのレンガで建設するもの、あるいは混合形式でとの構造的な違いだけでなく、カマリア窓の形や、漆喰を塗り込んで

いく表情の違いなど、微妙に集落景観は変化していく。それと同じようにモスクのミナレットについても、その意匠的多様性は驚くほどである。塔状住居群の中で、塔状のミナレットが立ち上がり、目印となるためには、独特なデザインを凝らさなければならないのであろう。日に5回のアザーン(祈り)がミナ

レットの上のスピーカーからきわめて規則的に流れ、異教徒である人間を絶対にモスクに入れないというイエメンは、まだまだしっかりとした戒律の上に成り立ったイスラム国なのであろう。



サヌア旧市街での男性の通常の服装。ジャンビアをさしターバンを巻く。

参考文献

- Dominique Champault, *YEMEN*, Phébus, 1993
 Jackie Jones, *THE VALLEY OF MUD BRICK ARCHITECTURE*, Garnet Publishing Limited, 1992
 Michael Jenner, *YEMEN REDISCOVERED*, Longman Group Limited, 1983
 Paul Bonnenfant, *LES MAISONS TOURS DE SANAA*, PRESSES DU CNRS, 1989
YEMEN ARCHITECTURE MILLÉNAIRE, Institut du Monde Arabe
 Fernando Varenda, *ART OF BUILDING IN YEMEN*, aarp, 1982
 Pascal Maréchaux, *SANAA: PARCOURS D'UNE CITÉ D'ARABIE*, Institut du monde arabe, 1987
 The Aga Khan Award for Architecture, *DEVELOPMENT AND URBAN METAMORPHOSIS Vol.1 YEMEN AT THE CROSSROADS*, Concept Media Pte Ltd Singapore, 1983
 Karl-Heinz Bochow/Lothar Stein, *HADRAMAUT*, VEB F.A.Brockhaus Verlag Leipzig, 1986
TOURIST GUIDE OF YEMEN ARAB REPUBLIC, Ministry of Information and Culture General Tourism Corporation
TRAVELLER'S GUIDE TO YEMEN, Yemen Tourism Company, 1983
LONELY PLANET YEMEN, Lonely Planet Publications Pty Ltd, 1988
 Joachim Chwaszcza, *INSIGHT GUIDES YEMEN*, APA Publications(HK)Ltd, 1992
 『ARCHITECTURE MAGAZINE at 1955OCT』、デルファイ研究所、1995
 佐藤寛『イエメンもうひとつのアラビア』アジア経済研究所、1994
 地球の歩き方編集室『地球の歩き方アラビア半島』ダイヤモンド・ビッグ社、1994
 森本哲郎、片倉もとこ、NHK取材班『NHK海のシルクロード第2巻ハッピーアラビア／帆走、シンドバッドの船』日本放送出版協会、1988
 NHK取材班『写真集NHK海のシルクロード第1巻地中海・ナイル・紅海』日本放送出版協会、1988
 『イスラム事典』株式会社平凡社、1982
 『トラベルダイジェストAPRIL 1989』トラベルダイジェスト出版株式会社、1989
 杉村公子『YEMEN私の愛するイエメン』光村印刷株式会社、1994

後記

もともとイエメンへの旅は1冊の本から始まった。それは“ART OF BUILDING IN YEMEN”である。10年以上心の中で暖めて、いつか行ってみようと思っていた。それが実現したのが、1994年の5月である。金尾、金子、入ノ内、小嶋夫妻、田中、芦川の7名のスタッフで企画をした。しかし、1990年に南北統一してから、不安定な状況が続くイエメンに入国をした次の日に3ヶ月間続く内戦に突入してしまった。1週間は、首都サヌアからの脱出のことばかりを考える苦しい時間が過ぎていった。日本大使館とドイツ大使館の好意によってアフリカのジブチに無事脱出をして事無きを得たが、中途半端で終わったこの調査を何とか完結したいとの願望から、1年後の1995年5月に再びイエメンの地に立つ計画を立て、ようやく実現することができた。芦川の単独調査となった。内戦の傷は、ほとんど見られなかったし、所期の目的をほぼ達した結果、今回の報告を掲載できることとなった。

アラブの最貧国といわれながら、イエメンの人々は明るく、親切であった。町ではジャンビア(男の装身具である短剣)をさす男達が闊歩し、トヨタ・ランドクルーザーが縦横に走り回る地域は相変わらず独特な山岳景観を示していた。今、サヌアの旧市街やハダラムートのシバームには、ユネスコの保存活動の手が伸びており、着々と調査をしているようである。近代化の波は、明らかにイエメンにも押し寄せている。サヌアの新市街では、高層の建物が増えていくであろうし、いずれ世界中の旅行者が訪れる国となっていくであろうが、その時まで、この素朴さと親切さ、古い伝統を重んじる人々の気風が保存されていくことを願いたい。(芦川智)

第1回調査スタッフ：芦川智、金尾朗、金子友美、入ノ内瑛、小嶋一浩、小嶋和佐、田中優香

第2回調査スタッフ：芦川智

作画協力等：横田智美、鶴田佳子、佐藤麻衣子
 イエメン情報提供：佐藤寛(アジア経済研究所)

写真+文：芦川智

繊細な色柄とソフトな質感で 空間をやさしく彩る、 ビニル床シートです。

学校や病院、公共施設などのパブリックスペースでは、よりソフトで温もりの感じられる空間づくりが求められています。こうしたトレンドにお応えし、ロンシールでは幅広い用途で活躍する汎用性の高いビニル床材として、ロンリウムナチュラルを開発。雲柄をベースに数種のチップを散りばめたソフトなデザインが、空間にやさしい表情を与えます。また重歩行にも耐える耐久性も備えながら、価格を抑えることによってコストパフォーマンスも追求したビニル床シートです。



ビニル床シート

ロンリウム ナチュラル

用途

学校・幼稚園等文教施設、病院・養護老人ホーム等 医療福祉施設、庁舎等公共施設の一般室・廊下・通路・階段、レストラン・喫茶店・デパート・ショッピングセンター・オフィスなどのロビー・エレベーターホール・湯沸室など。

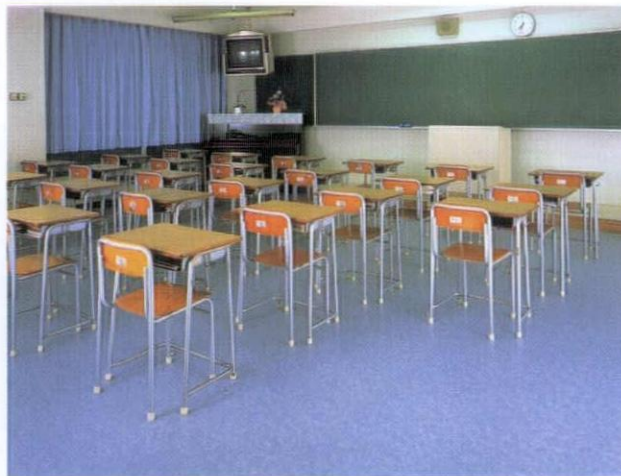
規格

- 12色
- 2.0mm (2.5mm) 厚さ×1820mm 幅×9m長さ
※受注生産品



特長

- 雲柄に加え、微細な繊維状・粒状など数種のチップが深みのあるデザインと温もりを醸しだしています。また、ピーチを思わせるソフトでやさしい質感を備えています。カラーは12色。さまざまな空間イメージにお応えできる多彩なラインアップです。
- 歩行時のショックをやわらげる適度な柔軟性・弾力性、さらには適度な防滑性を備えているため、快適な歩行感が得られます。
- 継ぎ目はスーパーシームシーラーによる液溶着ですから接合部が目立たず、一枚フロアのような美しい仕上がりで、かつ十分な強度を実現しています。また、下地によくなじむうえにカッティングも軽く、細部の施工が容易です。
- 重歩行に耐える、すぐれた耐久性を備えていますから、仕上がり時の美しさを保ちます。
- 酸、アルカリ、アルコール類、塩類などへの耐薬品性にすぐれています。
- 一体化した床面をつくることができるため、汚れが取れやすく日常のメンテナンスが容易です。



ときめきの生活空間をサイエンスする

ロンシール工業株式会社

●本社 〒130 東京都墨田区緑4-15-3

●大阪支店 〒532 大阪府淀川区西中島3-9-13 大北ビル

☎03(5600)1821

☎06 (304)2700

●営業所

札幌 ☎011(531)2602

青森 ☎0177(77)1155

仙台 ☎022(265)4771

新潟 ☎025(243)3791

大宮 ☎048(664)1511

土浦 ☎0298(32)8813

千葉 ☎043(246)5851

横浜 ☎045(662)7370

静岡 ☎054(251)3712

名古屋 ☎052(935)7063

金沢 ☎0762(92)1161

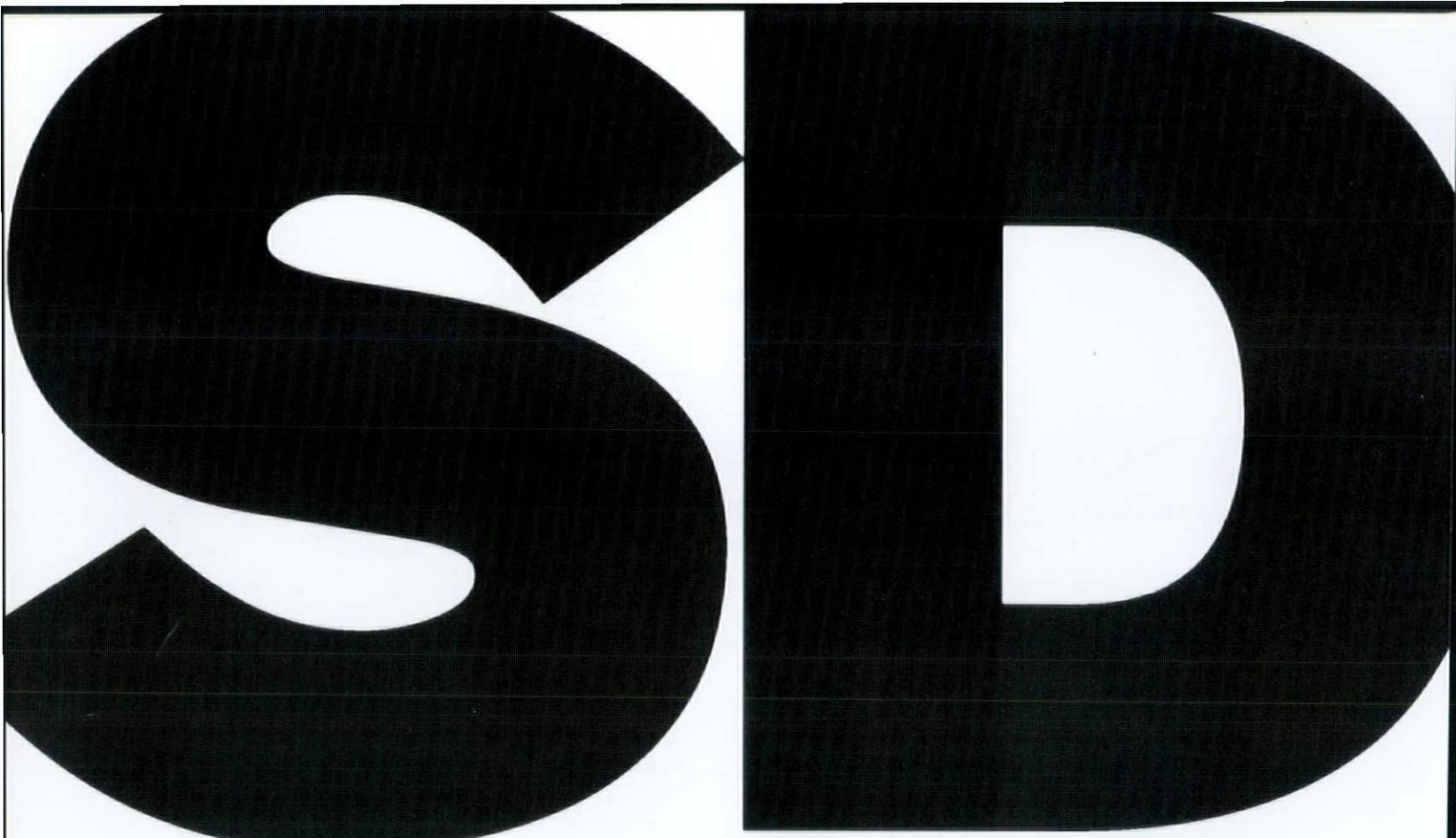
岡山 ☎086(231)6011

広島 ☎082(211)2700

高松 ☎0878(31)4177

福岡 ☎092(472)5857

鹿児島 ☎099(258)6571



SDレビュー1996

第15回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展



[東京展]

会期: 1996年9月18日<水>—9月29日<日>

12:00—19:00

会場: 東京都渋谷区猿楽町18-8

ヒルサイドテラスF棟 ヒルサイドフォーラム

[大阪展]

会期: 1996年10月3日<木>—10月8日<火>

10:00—16:00

会場: 大阪府南河内郡河南町東山

大阪芸術大学芸術情報センター展示ホール

[問い合わせ先]

鹿島出版会SD編集部

107 東京都港区赤坂6-5-13

tel: 03-5561-2555 fax: 03-5561-2565

大阪展: 大阪芸術大学建築学科合同研究室

585 大阪府南河内郡河南町東山

tel: 0721-93-3781

R e v



[入選者]

RE[]/Responsive Environment

城戸崎和佐建築設計事務所

黒木正郎十横田千晶/日本設計

佐藤光彦十横溝 真

三分一博志十西尾通哲十塚田哲也十土井一秀

高橋昌巳/シティ環境建築設計

長田直之十筏 真司十清水裕二/I.C.U.

西沢大良

宮沢 透

宮脇 勝

安田光男十杉山陽子

Justus Pysall十Peter Ruge/Pysall・Ruge Architekten

由田 徹十岡本美樹

吉松秀樹/アーキプロ

渡辺真理十木下庸子/設計組織ADH十三谷 徹十長谷川浩己/S.E.D.O.

15

[審査員]

香山壽夫(建築家, 東京大学教授)

渡辺邦夫(構造家)

内藤 廣(建築家)

妹島和世(建築家)

iew

[主催] 鹿島出版会SD編集部

[後援] 朝倉不動産株式会社

[協賛] ノールインターナショナルジャパン

[大阪展共催] 大阪芸術大学

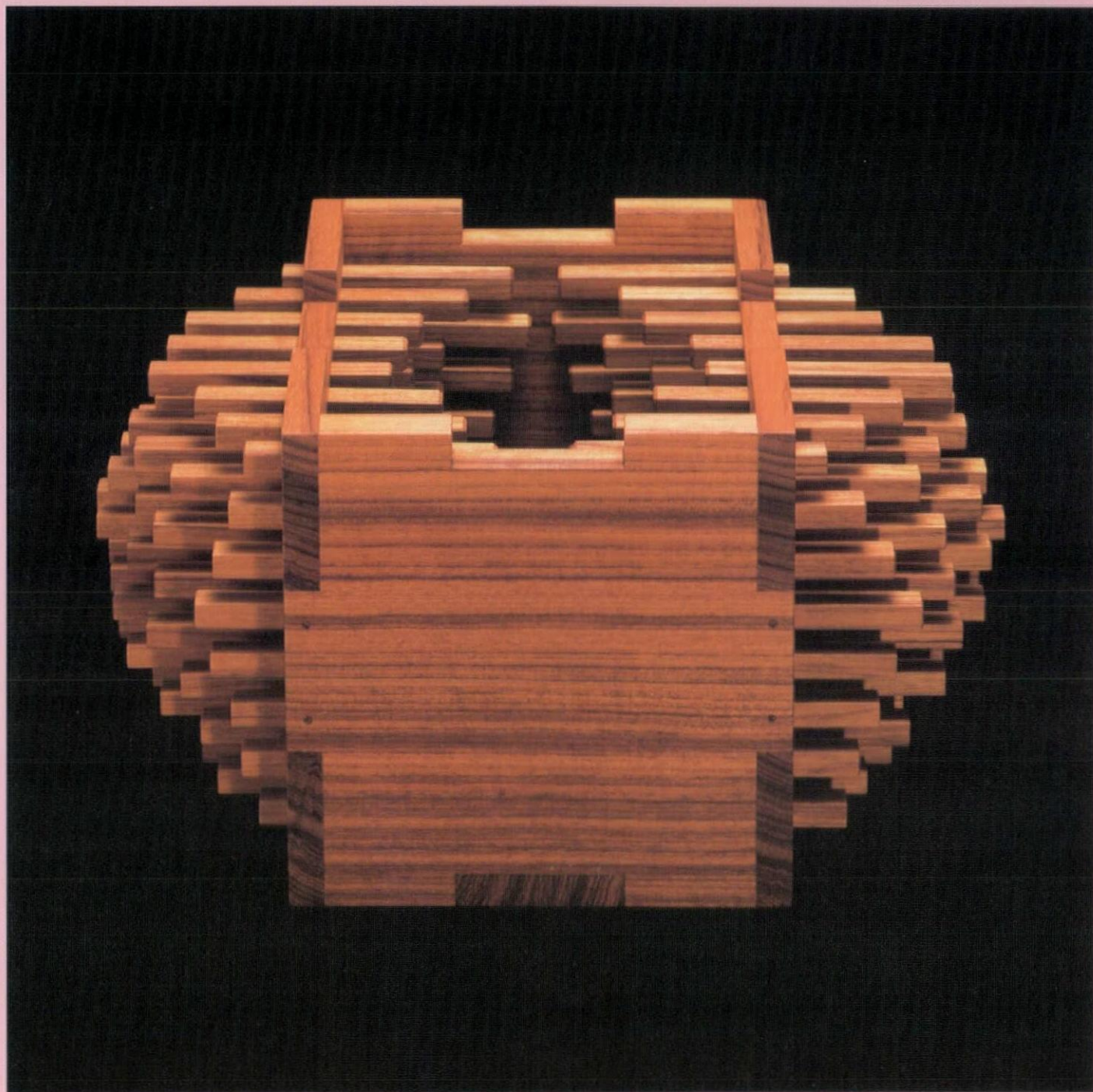
1 9 9 9 9 6 6

the 15th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings



戸村 浩

内部の謎



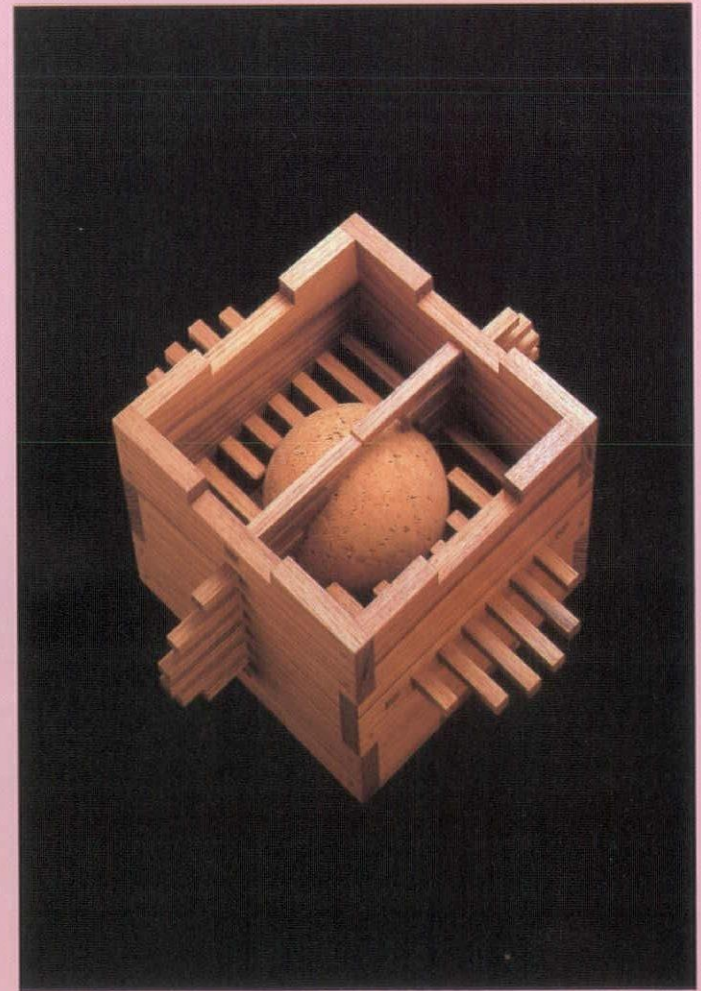
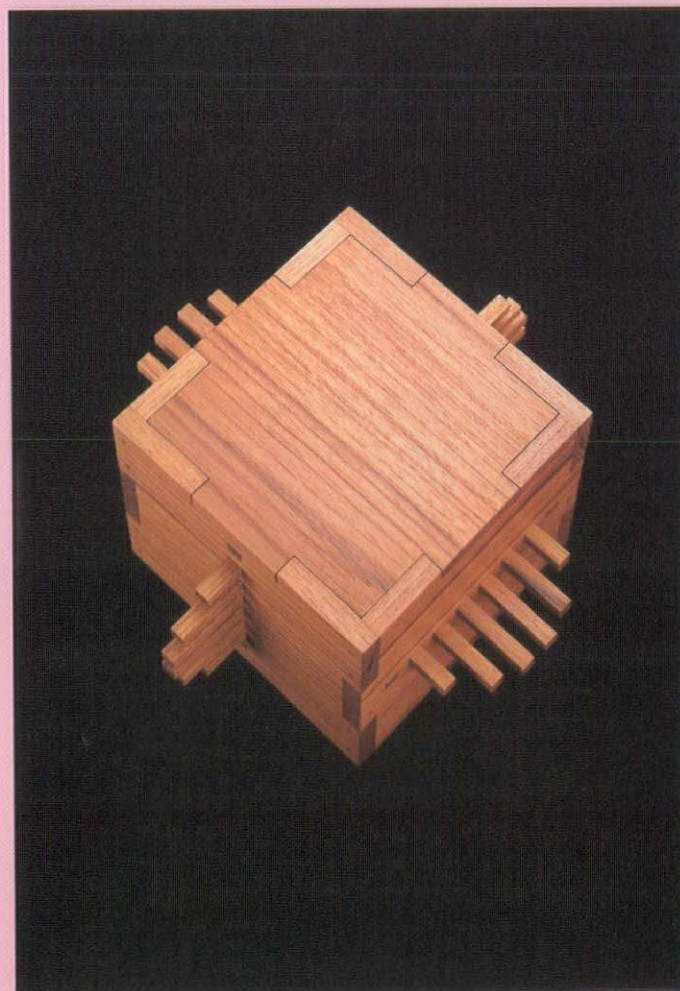
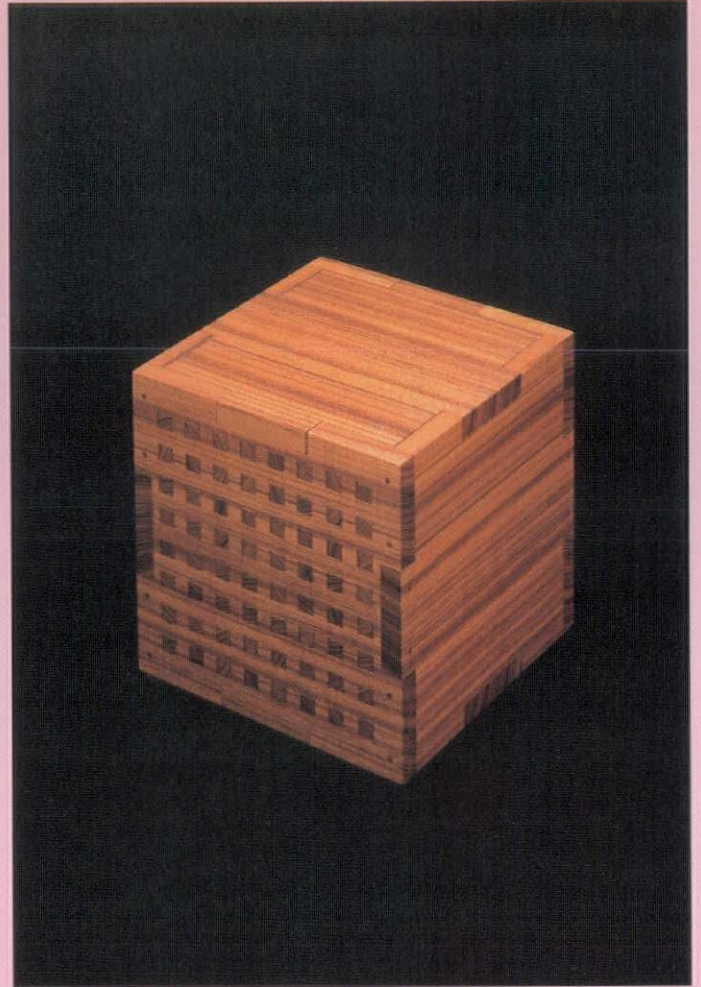
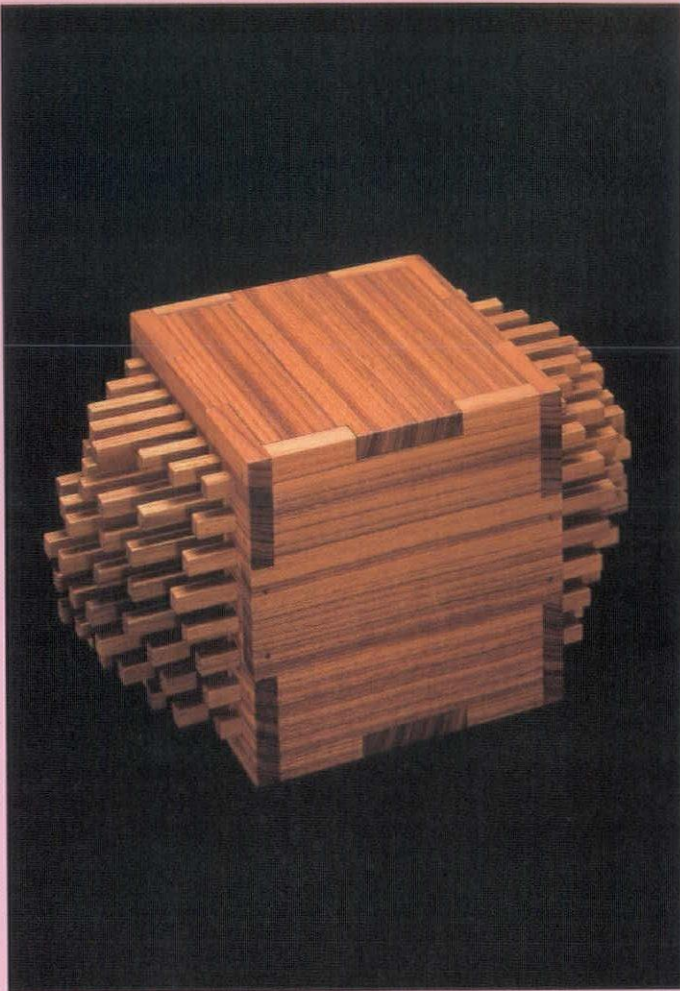
太陽系の惑星を間近に見るために放たれた探査機マリナーは、水星、金星、特に火星の映像を丹念に送ってきた。次なる宇宙探査機ボイジャーは、より遠い外惑星をかすめ、宇宙の謎を明らかにするべく無限空間へと旅立った。そして、木星、土星、海王星、天王星の様々な姿を刻々と送り続けて、新たな発見が相次いだ。木星にも薄いリングがあり、幾つかの新衛星も見つけられ、特徴のある表面の縞模様、渦巻き模様の大赤斑が克明に観察報告された。それは、何かが隠されている箱の外側を見ただけに過ぎないのだが、その箱の中を覗き込んで、

中味の秘密を暴いたかのような、妙な現実感があった。だが、木星の内部構造はアンモニアの雲に隠れて、今だ謎のままである。

「中味の見える木の箱」その立方体の箱の内部は、燃料棒のように突っ込まれた128本の角材で満載されている。この満たされて空っぽの木箱に、アルキメデスの原理のごとく物体を沈め入れると、内部空間は外部へと溢れ出て、中味の秘められた形をあらわにする。

右ページ下図も同じく、箱の4面から突き出た24本の棒が、中の形を保持し、また、暗示する。

●とむら・ひろし／造形美術家



そぞろ歩きの空間——水と光の出会いかた

照明探偵団・連続実践講座の第7回のテーマは「光と水のある風景」。「水」といえばヴェネツィアや江戸をはじめとする幅広いフィールドワークで歴史を紐解きながら、水辺とそこに生活する人々の都市論を送り続ける陣内秀信氏の視点を是非伺いたい、という強い要望で氏にご登場願った。

今回は、10年程前からブームになっているウオーターフロントの再開発を始めとする水辺への取り組みとその現状を再考しよう、ということが前提であった。夜になっても昼間以上に楽しく美しい水辺の景色が欲しい。都市生活の中で感じられる豊かな水と光、そして人間の幸福な関係を提案するのがねらいである。

東京の下町は、かつてヴェネツィアにも例えられるほどの魅力に富んだ活気溢れる水の都だったが、いつしか都市は水辺に背を向けるようになり、日常生活に密着した水との関わりは薄れてしまった、と陣内氏は指摘する。声高に叫ばれているウオーターフロントの実状はどうなっているのか、親水公園では人々は実際に水と親しんでいるのか、東京の水はどんな表情でいるのかを、まず探偵レポートの澤田が報告した。

隅田川に焦点を当て、永代橋付近から始まり、吾妻橋から桜橋に至る隅田公園、そして江東区の横十間川の親水公園周辺というコー

スをスライドを見ながら、報告を受ける。そこでわかることは、川辺に沿って水辺まで降りてゆけるプロムナードが完備していないことや、水に映り込む光はオフィスビルの蛍光灯やネオンサインの輝度に圧倒され、中途半端な状態で整った光の景色や闇が見られないこと、また、場所によっては歩くのにも不自由なくらい舗道が暗いこと、などが説明された。かなり大規模な「器」としての親水公園は存在するものの、そこに人が惹きつけられ、集まって賑わいの場をつくっている景色が見当らない。どうも夜に川風を楽しみながら散策、というまでに至っていないようだ。

また、照明探偵団が以前に行った相模川での水と光の実験が紹介され、テクニカルな説明がなされた。夜にも気持ちのよい水を感じるためには①見る人の視点を考慮する②水面の種類を考慮する③光の入射角を考慮する、の三要素が水を視覚化するための演出に不可欠であることを学んだ。

引き続いて、陣内氏自ら撮影された膨大なスライドの中から、今回のテーマに沿って厳選して頂いた120枚あまりの、都市の人と水の関わり方の事例が紹介された。イタリアに居住され、地中海、イスラム諸国を大きな愛情と情熱をもってくまなく調査された氏の話は一時を越え、期待にたがわず大変魅力に富んだ内容のもので、ヴェネツィアから始まりベネ

ト州、ローマ、イスタンブール、モロッコ、シリア、カイロへのスライド旅行は、臨場感にあふれる実に楽しい「感性の旅」であった。

陣内氏の語るヴェネツィアの魅力とは、「街が非常に感性豊かで、季節と一日の時間によって表情が常に変化する」ということだ。これは言うまでもなくこの街が水に囲まれているからで、水面の揺らぎや水蒸気による空気の流れとした変化は、人間の本質的なバイブレーションに合っているのではないかと、と言われる。

「光の反射でゆらめく水面や波紋を、橋の上に佇んでいつまでも飽きずに眺める。西日が落ちて行くときの遠近感を失った光のコンディションの変化、そして夕日が落ちた後の水面の色の変化。夜、運河沿いを歩くというのは本当に気持ちがいい、明る過ぎず、暗過ぎない闇がほどほどにある。闇の中の水面が照明で照らされて、きらきら輝く。石の舗道にこつこつ足音が響く。ひたひたと水のあがってくる音を感じて上をふっと見ると、満月がある。」

石も木材も大陸から持ち込んで作られたフィクションのような街なのに、自然と共に呼吸できる街、それがヴェネツィアだ。また、海を背景とする古代劇場、サルディーニャのノーラにおけるコンサートでの身震いするような感動の体験を語られた。

「古代のギリシャ人やローマ人は芝居を見る



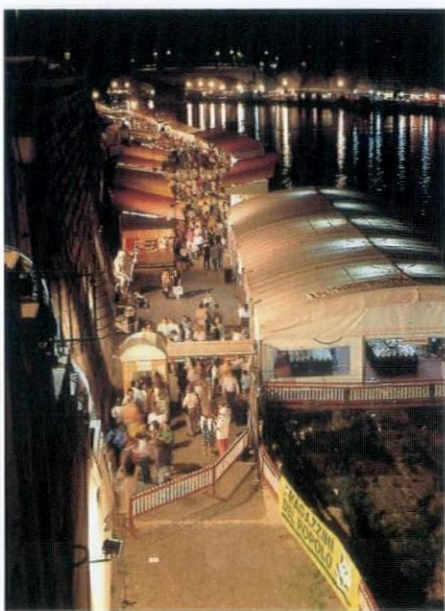
ヴェネツィアの光と水、我を忘れそうな瞬間



ヴェネツィアで一番楽しい、地元派のお祭り、観光客は殆ど見当たらない



月の光、潮騒の音、なんと幸福な舞台でありましょうか



水辺の賑わいを取り戻した好例、テベレ川

ときに地形を利用して斜面に客席を設け、海をバックにしていた。そこを現代風にアレンジして今でもコンサートを楽しんでいる。コンサートのピークにちょうど、満月が客席の軸線のところに来て、海の闇の中に反射が起きて輝く。そして、波の音がBGMのように聞こえる、なんという劇場空間。」

その他にも、ヴェネツィアの船下りのお祭り、芝居のあとの長い夜の屋外の楽しみ、広場の賑わい、テベレ川のお祭り、などが紹介された。テベレ川では、19世紀の後半に洪水から人々を守るためにコンクリートの高い護岸がつくられた。そのために人々から敬遠されていた水辺に賑わいを取り戻そうと、夏祭りを始めたそうだ。

そして、イスタンブールを入り口とするイスラム諸国の光と水の旅では、心の感覚を大切に、水を生かしていかに空間を演出してきたか、が紹介された。モスクやバザール、ハمامに見られる天井から射し込む光、中庭形式の無限大に抜ける空。公共の泉や住宅に取り込まれた噴水。迷宮の中に、そして乾燥して水の限られた地域で、人々の知恵がどのように閉じられた内なるパラダイスを作り上げていったか。

これらの実例を陣内氏と共に見ながら、生活の舞台として、光と水という原始的なものを象徴的に取り入れて、そのなかで感性豊かに過ごす在りようが実感として伝わってきた。

スライド旅行の最後で、東京に戻り、レインボブリッジが完成する以前の建設中のお台場公園からの風景が紹介され、この頃のおおらかでゆったりとした水辺が今は失われたことへの悔恨、「都市計画は未来指向だけではよくならない。夕暮れ時の時間帯の余韻をじっくり楽しめる街が必要だ。東京にはそれを味わう余裕がないように感じられる。人間の内面奥深くに降り立つという意味で、過熱気味のウォーターフロント計画はまずかったように思う。」と、コメントされた。

それと対比させて、1960年代の大川端、柳橋にならぶ料亭の華やいだ光の景色、「人間と水の親しい関係」がまだ存在していたこと、それを今もう一度取り戻そうとした数少ない成功例として、現在は取り壊されたが80年代の東京・芝浦インクスティック周辺を挙げられた。

最後に、照明探偵団が照明デザイナーとして、賑わう夜の水辺をつくっていくためにどんな提案をしているかを、これからの水辺をどうしてゆくかということも含めて紹介された。

フィレンツェのポンテベッキオ、パリのラヴィレット公園、セーヌ川、ロンドンのテムズ川、そのほかヘルシンキやリヨン、アメリカ、サンアントニオなどで、水辺照明がどのように考慮されているかをスライドで紹介したあと、私たちが手がけた博多のベイサイド

プレイスでの照明計画、特に水中照明の試みと手法が報告された。最後には、デモンストレーションとして「誘われる水辺」を意識して制作した、模型の運河にて船下りをするシミュレーションを納めたビデオが映された。

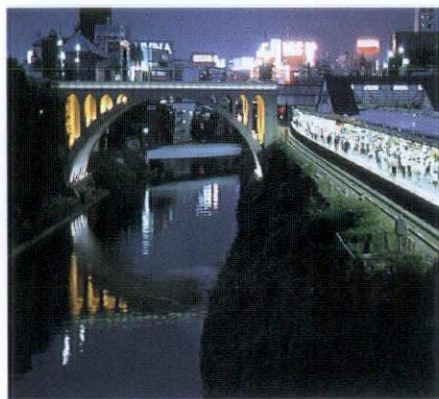
今回の「夜も水を感じていたい、気持ちのよい水辺をもう一度再生するためには何が必要か」という問いかけには「豊かな感性を持つ」という当たり前のようでありながら忘れられがちなこと、が何よりも必要であることを確認した。かつての豊かな水辺を奪った挙げ句に、その反省からウォーターフロントをつくりあげても、まだそこには人が集い、憩い、そぞろ歩く賑わいが見られないのは、探偵レポートを見ても明かであった。

陣内氏の指摘の通り、江戸の日本人は、季節や時間の変化に非常に鋭敏であったのが、明治以降、禁欲的な産業経済一辺倒にしたこと、国家がモラルで縛ったこと、などによりその感性が人々から次第に失われていった。一度失ってしまったものを取り戻すのは簡単なことではない。わたしたちが、日常的な街のそぞろ歩きを楽しみ、煩雑な中においても立ち止まることや佇むことの身体的な感性を持たなければ、器は用意されても街は息づいてはいかない、ということを改めて認識させられる講座であった。

●葛西玲子/LPA



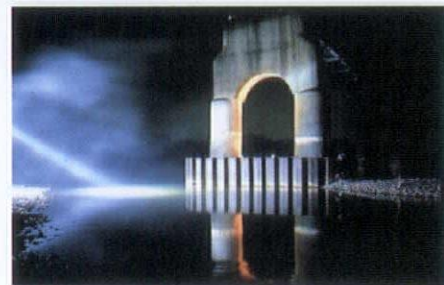
そぞろ歩きたくなるような博多・ベイサイドプレイスの夜



ライトアップされた聖橋。水辺に接近できるとなおいの、お茶の水駅

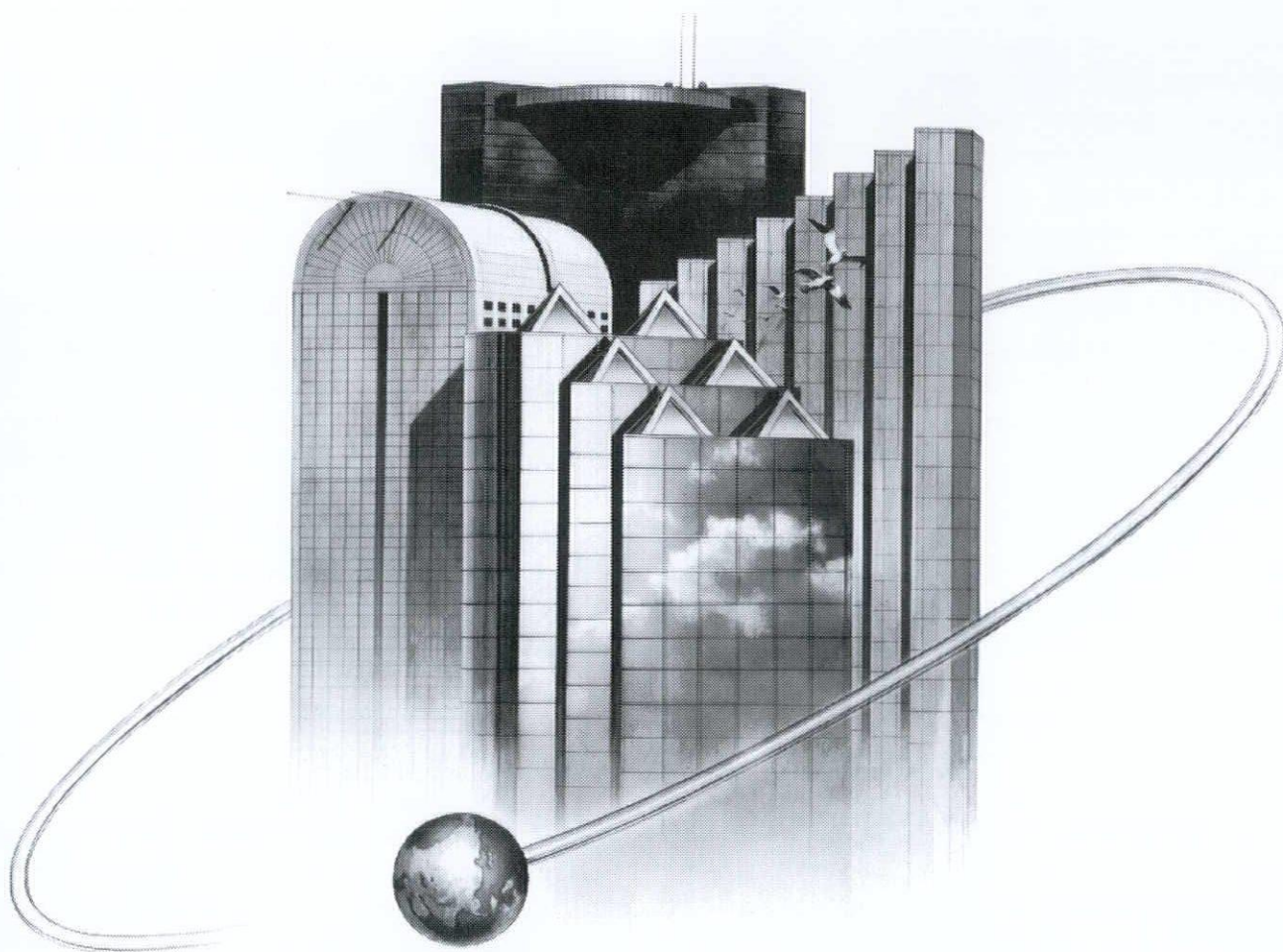


相模川での水の実験



水の精がむこうから現れそう...

快適創造



人と自然と機能が調和した理想の快適環境を。

人と自然、そして機能が調和した新しい快適環境を創造する。

それが三機工業のめざす総合エンジニアリングです。

都市、コミュニティ、産業施設…人を取りまくさまざまな環境について考え、

その理想を追いつづけている三機工業は、

いま、地球環境という視点にたって、すばらしい未来にむけての新しい環境のかたちを提案しています。



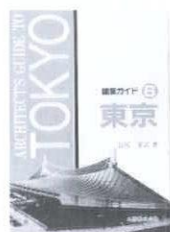
三機工業株式会社

〒100 東京都千代田区有楽町1-4-1 TEL.03 (3502) 6111

『建築ガイド⑥東京』

長尾重武＝著
A5判 128頁
丸善 2472円

江戸城を中心とした町割りから、明治維新以降の都市の成立まで、また巨大都市、東京の成立を解説するとともに、建築作品を100件を選び出し、紹介。敗戦後の復興や、東京オリンピックから臨海副都心まで国際的な影響を受けながら独自の意匠を生み出した建築作品を取り上げる。



『Anyplace』

磯崎新、浅田彰＝監修
A5判 315頁
NTT出版 3600円

2000年を前に、建築の状況を語り合う会議の内容を中心にまとめたもの。国際的に活躍する建築家、思想家、アーティストが、現代の芸術、建築と空間の問題をめぐって議論する。日本版には、浅田彰、磯崎新、伊東豊夫、柄谷行人による特別座談会「情報、空間、建築」を収録。



『現代デザインを学ぶ人のために』

嶋田厚＝編
四六判 292頁
世界思想社 2300円

社会的行為であるデザインは、今どのような形で、何を問いかけているのか、さまざまな分野の著者がそれぞれのデザイン論を展開する。冒頭に安藤忠雄のインタビューを掲載、柏木博、吉見俊也など15人が執筆。「デザイン」に対する認識を新たにすると1冊。



『美の条例—いきづく町をつくる』

五十嵐敬喜、野口和雄、池上修一＝著
A5判 288頁
学芸出版 2884円

マンション開発に「水を出さない」条例で対抗した、人口1万人の神奈川県真鶴町。そこでまちづくり条例や公共建築の建設に携わった著者らが、法律、都市計画、建築といったそれぞれの専門領域を超えて、徹底した民主的プロセスで真鶴町の「美」の基準を制定し、新しいまちづくりを成功させた過程を詳述。



『住まいを巡る世界旅』

茶谷正洋＝編
A5判 231頁
彰国社 2884円

タイトル通り、世界各地の住居を17人の著者がそれぞれ紹介する。その視線は、その土地に根差した住居という点で一致しており、東南アジアの集落、民家、イタリアの丘上都市、パリの近代建築、集合住宅など、取り上げられた場所や建物はバラエティに富み、興味深い。



『エコ・ハウジングの勧め』

小玉祐一郎＝著
四六判 155頁
丸善 1854円

自然と共生する住まいを追求して、パッシブデザインの研究を続ける著者が、日本国内および世界各地のヴァンキュラーな建築を訪ね、建築素材やその土地の環境を生かした「環境共生住宅」を紹介。建物の熱的性能の向上と設備システムの効率向上を、さらにそのバランスを取ることが重要と解く。



自然を征服しようとは思いません・自然と調和させるだけです

空気調和の
三建設備工業株式会社

本社 東京都中央区日本橋蛸薬町1丁目35番8号
☎(03)3667-3431(大代)
支店 北海道・東北・横浜・名古屋・大阪・中国・九州

『カステロフィリア』

高山 宏=著

作品社 290頁

A5判 3800円



評者=

岡田哲史

パラノイアが語るパラノイア

面白い本が出た。美術史家によるペーパーアーキテクト／ペーパーアーキテクチュアをめぐるエッセイである。18世紀のヨーロッパは、合理性を追求する精神がモノを分析し解明しようとした啓蒙の時代であったが、この本の試みは、その時代、合理と相反するはずの非合理が、実はコインの表裏の関係に過ぎなかったということ、紙の上に描かれた建築を通して見てみようというものである。著者は、建築が「合理の集約」であるという大前提のもとで話を進め、記憶術や遠近法を持ち出し、近代知が「紙」のうえに建築化されてゆく過程を書き綴る。そして合理性を追求するはずの理性＝建築家が、その狂気の仕業で建築を幻想＝非合理に変質させてゆく現実を検証し、ペーパーアーキテクチュアにおける自己言及のパラドックスを指摘する。紙の上には、その合理が幻想に転じてゆく転換装置があるらしいと看るのである。

この論旨を端的に換言すれば、建築家がその欲望のあまりスキゾフレニックに陥るか、はたまたパラノイアックに転じるかといった人間の本性に迫る問題を通じて、理性の時代の非合理性を暴く試みであるといえるだろう。実を言えば、その試みは必ずしも新しいものではない。当の18世紀には、ナポリの哲学者ヴィーコが人間学のなかで鮮やかなまでに言及していたし、今世紀にもまたIAUS(建築都市研究機関)の歴史研究が20世紀近代建築の見直し作業のなかで幾度となく掘り下げていた。その意味で、ほぼ数十年の年月を経た今、忘れかけていた頃に昔話が再来したといった感もある。しかしながら、面白い図版をここまで数多く収録し、楽しい語り口で仕上がっている本はそうそうない。著者の並々ならぬ情熱を抜きには本書の実現はあり得なかっただろう。著者自身のパラノイアが強烈な新鮮味をもたらしたこの著書の個性は、したがって高く評価することができる。

他方、本書が随筆という性格上どこまで論及すべきか難しいところだが、多少気になったところもある。それは、この本が取り上げるペーパーアーキテクトの背景が個々十分に語られていない点である。例えば素朴な疑問だが、彼らがなぜペーパーアーキテクトとして後の歴史に名を残すことになってしまったか、といった問いかけを満足させる説明が希薄なのだ。建築家が社会的存在である以上、社会と建築家とのあいだにはつねに何らかのポリテイクスが介在する。それを厳密に問わないまま、表象としての図を巧妙なレトリックの海に浮かべていてもやはり虚しい。建築を含めたあらゆる芸術行為に言えることだが、自己のポテンシャルを社会に認識させたいという欲望が働かざり、紙上のプロポザルにおいて理性が狂気へと裏返ることは決して珍しいことではない。ピラネージの時代に教皇国家が経済大国だったら、銅版画で「建築家」を名乗る必要などなかっただろうし、フィッシャー・フォン・エルラッハについても、当時のハプスブルク帝国に勢いがなければ、あの奇抜な大作を創作する企図どころか、そもそもその故国に帰る契機すら逸していたかもしれないのだ。

ともあれ、西洋建築の紹介がまだまだ十分とは思えない今日の日本の状況にあって、こういった刺激的な書物が歓迎されることはいうまでもない。したがって、ペーパーアーキテクチュアの凄みを若い世代の人々に見てもらいたいと願う著者の目論みは成功するだろう。残された問題は読者の側にある。つまり著者のパラノイアを楽しむだけの余裕があるかどうか。私自身は、二次資料で接本を重ねたエッセイも魅力的に感じるが、一次資料の探究から生まれる本格的な論著の方に期待をしたい。

●おかだ・さとし／建築家、コロンビア大学客員研究員

Metropolitan Library

9月の評者=

難波和彦

明治以後の日本の近代化と建築の変遷に関する本を読み続けている。

『近代とは何だろうか』は鶴見俊輔氏の対談集で、対談相手、時期、テーマが多様なので単一のモチーフを読み取ることは難しいが、鶴見氏特有の民衆的視点から捉えた日本の近代化が通奏低音になっている。竹内好、色川大吉との「明治維新の精神と構想」、竹内好、橋川文三、山田宗睦との「大東亜共栄圏の理念と現実」、橋川文三との「日本人の思想の揺れ幅」、谷川雁、松本健一との「戦後精神のゆくえ」を興味深く読んだ。日本人にとっては、明治初期の短期間を除いて、ナション(民族)とステート(国家)はほとんど自然存在のように一体になっているという竹内好の指摘は注目に値する。

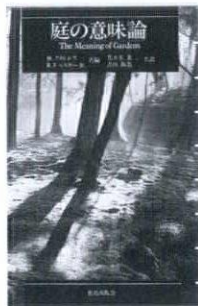
『近代知のアルケオロジー』は、あとがきにあるように「近代の日本において学術が、あるいは知識が、

ほかならぬこの近代の知として、いかなる言説的な規制をもって成立するか」を明らかにしたものである。民族学の柳田國男、支那学の内藤湖南、日本語学と国語学、竹内好と丸山眞男の近代化論、日中戦争と教科書問題などが批判的に論じられている。子安氏の考えは、かつてこの欄でも取り上げた(9106号)『保守革命とモダニズム』(ジェフリー・ハーフ=著、岩波書店、1991年)と重なり合っている。「近代性一般というようなものは存在しない。複数の国民国家があり、それぞれの国民国家が、それぞれ独自のやり方で近代的社会に変化するのである」。西欧をモデルとした一枚岩的な近代化論に対する批判である。

『保田興重郎と昭和の御代』は、戦前の日本浪漫派の中心人物で、戦後は転向者、戦争賛美者として批判された保田興重郎の再評価の試みである。福田氏

『庭の意味論』

マーク・フランシス、
ランドルフ・T.ヘスター・ジュニア＝編
佐々木葉二、吉田鐵也＝訳
A5判 301頁
鹿島出版会 4738円



評者＝
進士五十八

Garden design の哲学指南

最近の日本は、ガーデンブームだと言う。それもイギリス庭園であったり、ハーブガーデンであったり、いったい何がテーマになってのことかわからない。

とにかく「ガーデン」には、エコノミックアニマル日本から脱却して、心豊かな品のいい日本人に転身できそうな、何らかのヒントがありそうではある。

本書のサブタイトルは、Idea, Place and Action (思想、場所そして行為) である。

文字通り「庭 (ガーデン)」は、哲学者ら、造園家や地理学者ら、あるいは心理学者や社会学者らによって、思想として、場所として、行為として、捉えられる対象であった。庭には様々な形があり、暗喩が可能であった。

筆者も、ある芸術系大学院の建築専攻生に「愛の庭」や「庭の性」を本書のコピーで課題に出したことがある。「庭を暗喩として、あるいは文字通り性行為のための場所として讀めることは、旧約聖書に始まり、アラビアン・ナイトを経て、アンソニー・ヘビットの現代詩に至るまで、文学のテーマであり続けてきた」とか「庭とは、人間の楽しみのもとに、あるいは人間の楽しみのために自然がコントロールされている場所である。ジャングルを人間がコントロールの及ばない性の象徴、芝生をがんじがらめに縛り付けられた性の象徴とするなら、庭は統制のきく範囲内で性を楽しむことができる場所ということになる。」さらには「『偉大なる道』(高速道路)は、『壮大さを表す男根のシニフィエ』などの指摘は、庭園論を生々しい人間の生との関連で考える契機とするにはもってこいのテーマだったからである。

様式や意匠の暗記よりも、庭園そのものにこめられた暗喩を解きながらの方が、どんなにかGarden Designの本質に近づきやすい。

本書の編者らは、個人的、文化的、そして

政治的表現としての「ランドスケープ」の重要性といった、より大きな対象を考察するための足がかりとして「庭」を選んだ。ランドスケープ・アーキテクトという専門家がデザインした庭が、「かつてなく効率的、機械的、抽象的で、標準化され、多くの大衆にとってまったく意味を持たないものとなり、そしてアメリカ人の生活が抱えている重大な問題とはまったく無縁なものとなってしまった」。「専門家による『ランドスケープ・アーキテクチャ』のデザインは、時代遅れの形をした化石となってしまった」。

いわば本書は「庭に対する狭い見解に対する挑戦である」とし、「アメリカを埋め尽くしている工学的な発想とは反対方向の未来を指し示すもの」だという。

確かにその通り。本書の企画は見事に実現している。多種、多様、多彩な庭の意味を、49名の、それも多分野の著者の個性と見識によって論じている。本書は、「庭の意味論」の論点を次の6つに分け、全体で31章に構成している。

1、新しい信仰のための庭、2、力を映し出す庭、3、秩序としての庭、4、文化的表現としての庭、5、庭における個人的表現、6、癒しとしての庭。

ひとつひとつ紹介できなくて残念だが、考えさせられること、考えたいことを次々惹起させてくれる。こんなに豊富な本はついぞ読んだことがない。

最後に印象深い一言。「自然にも庭にも、それ自体がもつ本来的な意味はない。花も私たちににとっては本質的に善でもなければ悪でもない。」(ロバート・B.ライリー)

評者の好きな夢窓疎石の一言も引用させていただく。「山水(庭のこと)ニハ得失ナシ、得失ハ人ノ心ニアリ」。

●しんじ・いそや／東京農業大学教授

はハイデガーとナチズムの関係、保田の後鳥羽院論や三島由紀夫論などに焦点を当てながら、橋川文三や竹内好らによって定説化された日本浪漫派批判を覆そうとする。それは同時に、「日本的なるもの」の現代的再生の試みでもある。氏は後鳥羽院や藤原定家による新古今の美学と本歌取りの手法が、マクルーハンのメディア論や磯崎新のポストモダンな折衷的手法に通底すると主張する。こうした解釈を理解するには、戦前において保田が果たした役割を知らねばならない。保田の『日本の橋』は、あらためて読み直される必要がある。

『日本の建築と思想』は、日本で初めて本格的な建築思想を構築したといわれる伊東忠太の建築論を詳細に検証したものである。丸山氏は、伊東忠太が建築の美的価値と歴史的価値をナショナリズム(国粹)によって統合しようとしたことを明らかにし、「日本

では、美はその出発からしてイデオロギー的な役割をもって登場した」と結論づけている。先の竹内好の所論と関係づけて読むと興味深い。

『王の身体都市』は、日本の近代建築史と天皇制との関係を精神分析的な視点から解釈したものである。飯島氏は、伊東忠太、丹下健三、磯崎新、隈研吾という明治以後の各世代を代表する建築家の作品を取り上げながら、そこに通底する天皇制、すなわち母としての天皇との関係を脱しきれない幼児としての日本人の心性を読み取ろうとする。今ひとつ、つっこみが足りない感もあるが、飯島氏らしい思い切った問題設定だと思う。

今回取り上げた本を通して感じるのは、世紀末を迎えて、ネーションステート(国民国家)やナショナリズムの問題が、再び浮上しつつあるということである。

『近代とは何だろうか』
鶴見俊輔＝著
晶文社 3800円
『近代知のアルケオロジー』
子安宣邦＝著
岩波書店 3000円
『保田興重と昭和の御代』
福田和也＝著
文芸春秋 1700円
『日本の建築と思想——伊東忠太小論』
丸山茂＝著
同文書院 2060円
『王の身体都市』
飯島洋一＝著
青土社 2400円

情報とエネルギーの ネットワークをつくる 日立電線



情報やエネルギーを伝える技術を中心に、
人と人、人と世界を結ぶグローバルなネットワークをつくり、
「私達の住む地球をよめるくつむ」。日立電線は、いま、
快適で豊かな暮らしの創造をめざして多彩な活動を展開しています。
21世紀に向かって、ますます進展する情報・通信、エレクトロニクス、エネルギーの世界で
たえず革新を続ける情報・通信、エレクトロニクス、エネルギーの世界で
ひとつの大きな役割を担っているもの——
それは、ハイテク技術を駆使した日立電線の製品です。

日立電線株式会社 〒東京(03)3216-1616

お知らせ

熊本国際建築展 「くまもとアートポリス'96」

国際シンポジウム—都市デザインサミット
テーマ：環境・文化・ひと—熊本の未来とアートポリス
会期：11月2日(土)10:00～11月4日(月)12:30
会場：熊本県立劇場演劇ホール 熊本市大江2-7-1
基調講演：磯崎新
参加費：一般5000円 学生3000円
定員：1000名
見学ツアー
日時：八代コース11月1日(金)
阿蘇コース11月1日(金)
三角、松島コース11月5日(火)

参加費：各コース3000円
定員：各コース80名
申込：9月30日(月) 締切 JTB「くまもとアートポリス見学ツアー係」Tel.096-325-8118迄
問い合わせ：くまもとアートポリス'96実行委員会
Tel.096-383-1111 (内6215) Fax.096-384-9820

第1回代官山フォトコンテスト 「代官山ステキ発見」作品募集

テーマ：代官山エリアであなたがステキと感じられるもの
応募締切：9月15日(日) 必着 応募資格なし
応募方法：事務局に募集要項を請求
問い合わせ：「代官山ステキ発見」事務局フォトコンテスト応募係 受付11:00～17:00
Tel.03-5489-3705 担当/近江

エッグ・ギャラリー企画展 「wet+dry—情報と欲望のコンビニ」

メディアで語られる「建築」とは、その多くが図面・写真・理論で表現される資料としての建築でしかない。このような状況に対する問題提起と解決へのプロセスを示す展覧会である。
会期：9月30日(月)～10月19日(土) 11:00～19:00
日祝休館
会場：エッグ・ギャラリー 東京都渋谷区神南1-13-10
問い合わせ：エッグ・ギャラリー Tel.03-3780-5023

第1回建築フォーラム 「建築設計界の人脉とその構成」

日時：9月3日(火) 15:00～17:00
会場：中央工学校STEP 入場無料
東京都北区王子本町1-26-17 Tel.03-3906-1211
講師：近江栄 (日本大学名誉教授)
申込・問い合わせ：日本アスファルト防水工業協同組合事務局 東京都中央区日本橋久松町9-2
Tel.03-5644-7651 Fax.03-5644-0594

第5回ジャパン・アート・スカラシップ 作品募集

ジャンルに関係なく、空間を自由に表現するコンテスト。グランプリ受賞作品は青山・スパイラルガーデンにて展覧会を開催。
応募期間：9月1日(日)～10月31日(木)
応募資格：1961年以降生まれの者 国籍は問わない
応募方法：事務局に応募要項を請求
問い合わせ：「JAPAN ART SCHOLARSHIP実行委員会」運営事務局
107東京都港区南青山5-6-23スパイラル内
Tel.03-3499-3922 Fax.03-3498-9748

第2回建築アンデパンダン展作品募集

無審査、無賞を前提とし、出展者の自主的展示群によって開催される。「展覧会」という形式のみが提供され、出品者の自由な展示意志を促すもの。
会期：10月27日(日)～11月10日(日)
会場：西陣北座
京都市上京区浄福寺通上立売上ル大黒町689
呼掛け人：長坂大(京都工芸繊維大学)、馬場徹(建築少年)
参加料：5000円(出品料+カタログ制作費)
応募方法：80円切手同封の上、事務局まで応募要項を請求
問い合わせ：Mega内 建築アンデパンダン展実行委員会事務局 606京都市左京区高野清水町71
Tel.075-712-8446 Fax.075-712-6489

TAMAVIVANT'96「浮遊するP/美術と現実」

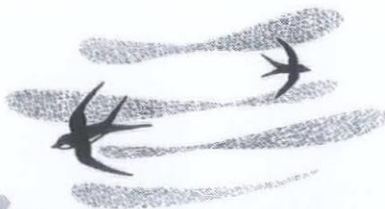
会期：9月27日(金)～10月11日(金) 8:00～20:00 無休
会場：多摩美術大学八王子校舎1号館ギャラリー
東京都八王子市鐘水1723 Tel.0426-76-8611
問い合わせ：多摩美術大学広報
Tel.0466-25-2463
ホームページアドレス：http://www.hama-net.or.jp/tamavivant/

INAXギャラリー大阪企画展 「ガウディのフニクラ—カタルーニャの曲線」

「フニクラ」とはカタラン語で「ガウディの逆さ吊り実験の曲線」の意味。巨匠ガウディは10年間にわたってこの概念を作品に採り入れた。
会期：9月9日(月)～11月23日(土) 10:00～18:00
水曜休館 入場無料
会場：INAXギャラリー大阪
大阪市西区新町1-7-INAX大阪ショールーム2F
問い合わせ：INAXギャラリー大阪
Tel.06-539-3518 Fax.06-539-3521

空気の歳時記

ツバメが渡ってきたか確かめたくて
入り江に近い河原を歩く。
頬に当たる風は冷たいが、
水面の眩さはもう紛れもなく春だ。



春

目をこらすと
何の稚魚だろうか
スイスイと元氣である。
何万年も繰り返されてきた
自然の鼓動を体の奥に
感じる瞬間。
ピュイー、ピュイー。
澄みわたった空気に、
待望の囁りを聞いた。

林道を逸れて、森へ深く入る。
額に汗をにじませながら、
一歩一歩標高を稼ぐ。

セミの合唱に負けじと

梢で声を

張り上げているのは

クロツグミだろうか。

樹齢は数百年に

及ぶだろう、

ブナの巨木を見上げると、



夏

突然、時間の感覚が薄れていく。
鬱蒼とした空気のなかで
息もつまるような濃緑の季節。

尾根を越えてくる風の冷たさで
季節の深まりを知る。

山の秋は短い。

頂から麓へ向かって

早くも赤や黄に色つきはじめた

林の中を歩くと、

よく南へ旅する渡り鳥に出会う。



秋

例えば、エゾビタキ。
ヒラリヒラリと木の葉のように
舞いながら
フライ&キャッチを繰り返す
この鳥が姿を消す頃、
あたりは冬の長い眠りに入るのだ。

休日。ちよつと早起きして

近くの山に足を運んでみた。

枯れ落ちた木の葉を

踏むたびに

ガサツガサツという音が

林全体に響き渡る。

見上げると

餌を探しているのだろうか、

シジュウカラの仲間の群れが

盛んに鳴き交わしながら

枝から枝へ飛び回っている。



冬

凍てついた空気のなかで
精一杯生きている小さな命。

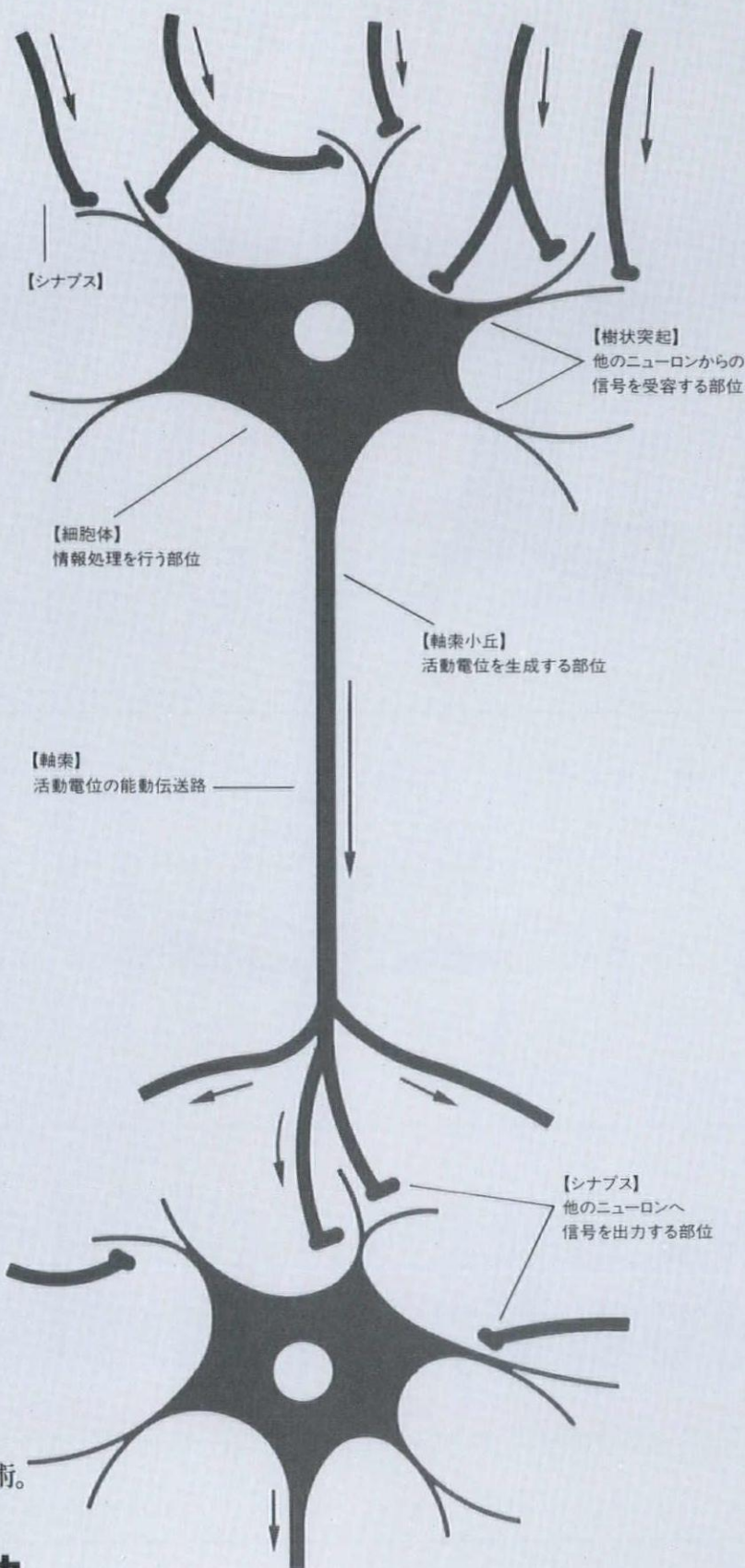
日本の四季の空気を、ずっと考えてきています。

◆ 新菱冷熱

SHINRYO CORPORATION

本社：〒160 東京都新宿区西谷2-4 ☎03-3357-2151 代 支社：札幌・仙台・千葉・横浜・名古屋・富山・大阪・広島・福岡

21世紀の空調は、人間の脳神経がお手本になる。



私たちは「ニューラルネットワーク」理論を応用した、次世代の空調システムの開発に取り組んでいます。誰もが心地よい空気を作り出すことは、本来、極めて微妙なコントロールを必要とします。もつと簡単かつ鋭敏に、人が求める快適さを感じできないだろうか。そのテーマに答えるべく、私たちは生体の脳回路に着目。脳の神経細胞が行う高度な学習機能や適応能力を応用することで、エア・デザインング技術の新たな主流となるシステム研究を始めています。

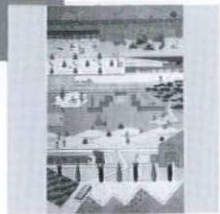
東洋熱工業株式会社 〒104 東京都中央区京橋2-5-12 TEL 03-3562-1351

時代の呼吸に応える技術。



東 熱

小川次郎
宋 知殷
高橋淳司
前田紀貞
山内彩子



最近、造園家だけでなく、建築家やアーティスト等によって設計された公園が海外の雑誌にぎわっている。そこで目に付くのが、建物とか植栽とか舗装といった区別なく、現代的な構成手法が用いられていることである。そのヴォキャブラリーは、ヴェルサイユの庭園のようなバロック的なものではなく、近代建築とかミニマル・アートのものである。要素そのものは植物であるということと、そのポジションの規則性、法則性とのずれが、人工と自然の境界が曖昧になった印象を与える。

パリのビュッショモンやロンドンのハイドパークなど19世紀につくられた公園には、どこか自然を模したところがあって、人工的であることがこれほどまでに強調されたことはなかった。それらは、「田園と都市」の対立モデルに基づく、都市に内包されたミニチュアの田園のようである。しかし、人工性を浮き上がらせたり、人工と自然の境界を曖昧にする最近の公園には、もはや田園という感じはない。むしろ、都市空間が連続した屋根のない施設のような雰囲気がある。こうした都市化された公園の在り方は、「21世紀の都市公園」を問うたラ・ヴィレ

ットが活かしていたのだ。公園は外国人労働者によって、都市のシステムからはみ出した活動がなだれ込むことのできる余白として発見されたのだ。それは、職能が染み込んだ身体による公園の再定義といって良いだろう。

公園というのは建築ではないから、一般的なビルディング・タイプ（以下BT）にあてはまらないが、こうした新しいモデルは公園をひとつのBTとして捉える視点を用意している。他のBTと比較すると、公園は建物がないという物理的な余白であるだけでなく、用途やプログラムがあるようではなく、ないようである点に特徴がある。つまり、二重の意味で都市の余白を定義するBTといえる。また、一般的なBT同士は互いに役割分担をしているのに対し、公園には明確な役割が与えられているのかいないのか、非常時を除いて判断としないところがある。がゆえに、建築的には必ずしも明確に定義されていない都市の活動がなだれ込む余白と成り得るのである。これは建築に囲い込まれることによって制御されたプログラムに対して、偶発性を含んで生成するプログラムを引き出す。また、公園という枠組みの中では樹木の配列で人工性を強調することと、逆にまったく手を入れない植生を作りだすことの違いは、それらが制御される水準の違いであ

海外建築情報リミックス

ト公園のコンペをひとつの転機としてもたらされたようだ。

ラ・ヴィレット公園のコンペに対するパリ市の要求は膨大で、その要項は本の体裁をとれず、スーツケースに納められていたそうである。結果はチュミ、コールハース、ヌーベルなど建築家による案と、コラージュなどの造園家（ペイザジスト）による案が対照を示し、コンペに盛り込まれていた「プログラム」と公園のオープンスペースの関係に注目した建築家の案が評価された。造園家の案は、広い敷地をもっともらしい物語で充滿させることで公園を定義するのに対し、建築家の案は既存の都市の活動がなだれ込むことのできる余白として公園を評価するところが新鮮だった*1。ここで注目したいのが、「余白」が必ずしも物理的な空白を指すだけでなく、建築によって定義できる範囲をはみ出した都市のプログラムを引き受けることによって、公園と都市との連続性を保証しているところである。「都市に内包されているが隔絶された田園」に代わって、「都市の余白でありながら都市と連続している場所」という公園の新たなモデルが浮上したのである。

余談になるが、実は東京にも一時期これに似た現象があった。週末の代々木公園には、イラン人などの外国人労働者が集まって独自のマーケットを開いていた。そこでは、ホコ天のロカビリーやパンクの兄さん達も、シシカパブを食べながら顔見知りのイラン人たちと挨拶を交していた。彼等イラン人は、休日になると公園にやってきては母国での自分の職能（床屋、肉屋、飲食店等）を

Theme: ビルディングタイプ その6「公園——余白の再定義」

る。このように公園は、プログラムや自然の環境に対する制御、非制御の問題を浮かび上がらせ、これまで都市の秩序を形成してきた制御と非制御の織り上げ方に対する批評を構成する。そして、他のBTに対する虚のBTとして、抽象性の高い場所を都市にもたらし。

〈ラ・ヴィレット〉では、プログラムという必ずしも特定の領域に縛り付けることのできない概念が、都市と公園の連続性を引き立たせる。しかし、ラ・ヴィレット以降の公園が、全て同様の方法に従っているとはいえない。それは、ラ・ヴィレットがあまりにも特別な公園で、あれほどの予算とプログラムの投入された公園がそもそもないことによる。だから、人間の身体性を前提にしたプログラムによって、都市との連続を図るラ・ヴィレットの手法に引っぱられ過ぎるのは危険だ。それも手法のひとつとして相対化されるべきなのだ。肝心なのは公園の「余白」の性格が、都市との隔絶ではなく連続に向けて組織されるという基本的なアイデアであり、それによって折り畳まれた制御、非制御のひだを解きほぐすことである。そのことは、コンテキストによって水準を変えながらも受け継がれているように思われる。最近の公園のデザインの変化は、こうした都市における「余白」の定義の変化に根差したものとはいえないだろうか。

アトリエ・ワン

*1：例えばコールハース案の説明は以下の通り。「パリ市から要望されたプログラムは、敷地に対し規模が大きすぎて公園としてのスペースを残せない程であった。提案したものは定義された公園をつくることではなく、建築的明快性とプログラムの不安定性を結び付け最終的に公園を生成していくことであった」。(a+u8810)

ビルディングタイプ(以下BT)を通して、建築に対する分析力を高め、建築の言説というものを何とか組み立てようとしてきた当シリーズでは、これまで都市/建築、建物/建築という切断に、BTを差し込むことにこだわってきた。そして最終回である今回は、BTに対して虚像のような存在である公園を、あえてBTとして捉えて議論してみたい。

コア・スタッフ'96
岩下暢男
今井公太郎
アトリエ・ワン
曾我部昌史
山本想太郎

近代以降の西欧の都市公園に関する認識には、ラ・ヴィレット以前・以後という切り分けが可能であるように思われる。19世紀に始まる大都市への人口の集中は、結果として劣悪な都市の居住環境をもたらした。都市公園は、こうした悲惨で劣悪な都市環境からの逃避の場所、すなわち都市のオアシスとして誕生した経緯をもつ。そこでは具体的な構成の手法として、草木を用いて自然もしくは田園をrepresent（再現）することが求められたのである。こうした西欧の伝統的な都市公園の在り方に対して、ラ・ヴィレットのコンペの要項は、都市に分散するプログラムを圧縮し集約化する場所として都市公園を位置付けている。その結果、来園者にはそこで行われることに積極的に参加すること、あるいは何らかのアクティビティを引き起こすことが求められることになる。つまり、ラ・ヴィレットには、19世紀以降、個々のビルディングタイプとして都市空間に流出した様々なプログラムを再編する装置としての機能が求められたのである。こうした要請に対して意識的な建築家、すなわちチュミヤコールハースは、グリッドやストライプなどの幾何学パタンの視覚的なレイヤリングによって、人々がランダムにアクセスすることの可能な透明な構成上のモデルを敷地全体にわたって与えたのである。こうして、人々のアクティビティにおける「偶然性」を誘発するべく装置化された公園において、自然（草木）は建築的に構成された環境の要素のひとつとして、フォーリーやベイヴメントと等価に扱われることになった。

Adriaan Geuze/West8のSchouwburgpleinのプロジェクト（図1）も、基本的にはこうしたラ・ヴィレット以降の都市公園の認識に沿ったものとい

える。具体的には地下駐車場へ出入りする自動車の動き、明滅する照明器具、可動の遊具、仕上げ面の素材の差異による光沢、上下動する植栽、電気的にコントロールされた噴水など、公園を構成する要素の絶えざる変化によって人々のアクティビティが誘発されることが期待されており、都市公園に対する現代的な戦略のひとつといえよう。これとは対照的にOosterschelde Kering (Schelpenproject) のプロジェクト（図2）においては、こうした視覚的なレイヤリングによるアクティビティ誘発型のシステムは用いられていない。なぜならこの計画では、これまでの都市公園とは違って、積極的なプログラムをもたないいわば「田園の公園」が要請されているからである。そもそも国土の大部分が低地であるオランダの国情から、この地方には戦後の長い期間にわたって大規模な治水工事が行われてきた。そして建設費用の超過を理由として、こうした大堤防の竣工後も建設途中で生じた貯水池や建設残土の山（人工島の様なもの）などをそのまま放置することが関係機関によって決定した。その一方で、建設当初は予想されていなかったことだが、こうした治水施設の水際のレジャー施設としての利用が近年にわかに脚光を浴びており、毎年大量の観光客がヨーロッパ中から押し寄せているらしい。そこで、オランダの治水局はエコロジスト達と協議の末、これらの施設の付近一帯をミニ・バイオトープ（生態系）として再生し、活用することを決定したのである。Geuze/West8はこうした条件に対して、ミニマムかつ効果的な手法で対応することに成功している。まず、残土の山を平らに均すことによって、堤防上

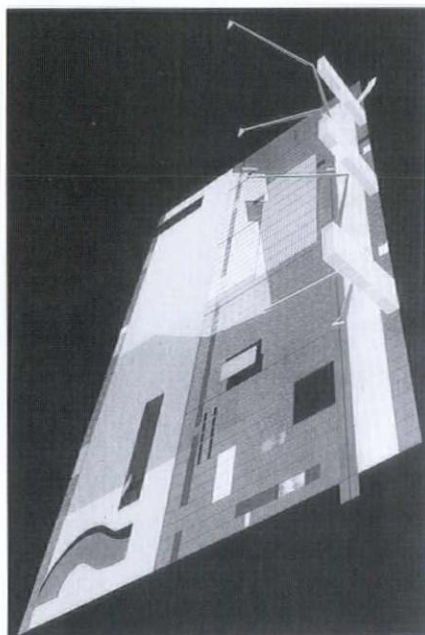
を通る高速道路からの沿岸の水平線の眺望を確保している（図2）。さらに、こうしてできた平地に、ストライプまたはチェッカー状に白と黒の貝殻——これらは付近の水産加工場の廃棄物で、従来なら沖合いに投棄されていたものである——を敷き詰めている（図3、4）。これは、ランドスケープ・アートとしての性格を持つとともに、明るい色の鳥は白い部分に、暗い色の鳥は黒い部分に惹かれるという「擬態」の習性を利用して、飛来する鳥類に集りに適した環境を提供することを意図したものである。

ラ・ヴィレット的都市公園が、人間の行為や活動に基くプログラムを、構成を決定する上でのパラメータとしていたのに対して、Schelpenprojectでは堤防上の高速道路を移動する視点（インフラストラクチュア）や鳥の視点（エコロジー）、また建設残土や貝殻といった都市的なスケールでの廃棄物（インダストリー）といった、多様で不連続な文化的価値をパラメータとして、それらの概念上のレイヤリングが行われている。前者が都市的なスケールでの人間の活動を一端個々の身体行為や活動といった水準まで還元化し、それらを図式的に操作しているのに対し、後者は極端にいえばモノ（貝殻）を提示するだけで計画を成立させる重層化した状況を鮮やかに切り出して見せている。このSchelpenprojectに見られる「身体性を帯びた人間」を前提としない多様な価値の織物=webとしての公園は、現在の所必ずしも都市公園とは呼べないかもしれない。しかし、これまでの視覚的な効果に基いたモデルによらない、新たな公園のタイプとして、ラ・ヴィレット以降の公共空間の在り方を示すものといえよう。

人間のいない公園

小川次郎

Schouwburgplein, Rotterdam, 1990-95
Schelpenproject, East Scheldt, 1991-1992
architect: Adriaan Geuze
"Lotus" 88, "Topos" 9303



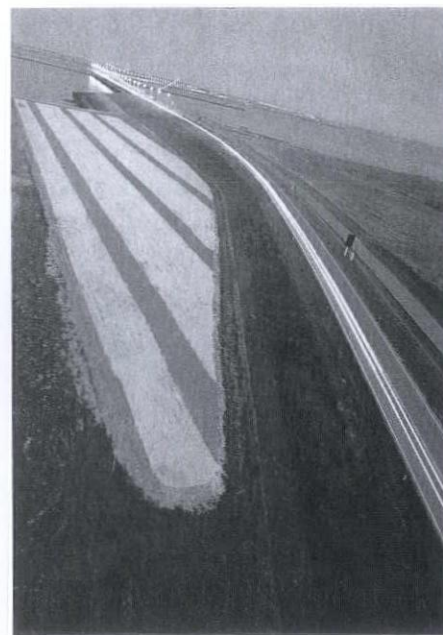
1



2



3



4

都市公園におけるランドスケープ・デザイン、なかでもいわゆるモダン・ランドスケープ・デザインと称される一連の作品は、その抽象的な幾何学形態ゆえに、しばしば1970年代を中心とするアースワークの作品群と関連した文脈で語られている。あたかも彼等こそが、キャンヴァスや台座から飛び出し、さらには美術館からも飛び出したポスト・ミニマリズム・アートの正統な継承者である、といった風にある。しかし一方で、この両者の間には明らかなギャップがあることもまた見逃せない。すなわちいわゆるアースワークの作品、例えばリチャード・セラによる〈Shift〉(1970-72年)では、作品の置かれる地形(フィールド)の「自然」としての性質と、作品(オブジェクト)の形態/素材における「人工」的な抽象性が対峙され、双方が強調されているのに対し、一方のモダン・ランドスケープ・デザイン、例えばピーター・ウォーカーによる〈日本IBM幕張ビルディング〉(1991年)では、オブジェクトもフィールドも、共に同様の抽象的な構成原理によってデザインし尽くされている。このような観点から我々が後者の作品を眺める時、何か自作自演のものを見ているような居心地の悪さを感じはしないだろうか?

話は変わるが、現在ワタリウム美術館でルイス・カーンとイサム・ノグチによる〈マンハッタン・リバーサイドパーク〉の設計過程を展示した展覧会が開催されている。そこでは、初期の案において、独立した遊具とそれらが散在した地面という形で明確に分離していたオブジェクトとフィールドが、設計段階を経るにしたがって、規模の縮小等の問題で融合し、全体が「建築的」になっていく過程と、その際の「苦悩」のようなものが示されている。カーンは最終的に自らの案を過剰であると感じ、逆説的な

意味であれ、それを誰かが壊してくれることすら望んだ。

これらふたつに共通する「居心地の悪さ」、あるいは「苦悩」は、都市の様々なビルディングタイプのなかで唯一余白としてのプログラムを持っている、言い換えれば固定化されたデザインを要求しない「公園」を、一方で我々は職能としてデザインしなければならないという矛盾に起因すると思われる。デザインをしないことが、プログラムの余白を表現するというのはあまりに安易な考えにも思えるが、一方で、特定の機能のない空間をグラフィック的にデザインし尽くすことに対して、「機能主義的」な観点から疑問が生じるというのもまた事実である。それでは、デザインされていないように見えるデザインとは、一体どのようなものなのだろうか?

El Croquis誌の61号に掲載された、E.トーレスとM.ラペーニャによるスペインの小都市ジローナの公園(1993年)は、私にとって、珍しく「デザインされている」と同時に「余白の存在を感じる」デザインであった。ここでは、その理由を多少弁証法的なやり方で考察してみたい。

この公園は、大きく分けてふたつの異なった部分から構成されている。片方は教会に面し、舗装の施された広場となっている。もう片方は3辺を道路に囲まれ、一面に植栽が施されている(彼らはこれを都市の中の「フラワーボット」と呼んでいる)。これらはどちらも様々な利用することができる——広場はもちろん、「フラワーボット」時には歩行者用の道路に、また時には読書のための絶好の木陰となる。公園には多くの彫刻が散りばめられている。道路を挟んで銀行に面する場所には巨大なコインが、他の

一角にはこの公園の計画が始まった年に生まれた少女の像が、という風に。

しかし、様々な意味が込められたこれらの彫刻は、この公園のプログラムには何ら寄与するものではない。むしろ、ここで注目したいのは、公園のふたつの部分——広場と「フラワーボット」——のそれぞれにおけるオブジェクトとフィールドの関係である。広場にはオブジェクトは存在しないが、フィールド(これは同時に地下駐車場の屋根になっている)は、着彩された菱形のコンクリート・パネルによって、きめ細かくデザインされている。一方、「フラワーボット」では整地されただけの、デザインされていない(ように見える)フィールドの上に、オブジェクトとしての木が抽象的なグリッドに従って配置されている。

全体として見れば、間違いなくこの公園は「デザインされている」。しかし同時に、フィールドとオブジェクトに分けて考えると、公園の一方は、他方に対して「デザインされていない」ように取れる。すなわち、ここではデザインの余白が、従来のような都市と自然の対比の文脈ではなく、公園自身の中に相互参照的に存在しているといえるのではないだろうか。

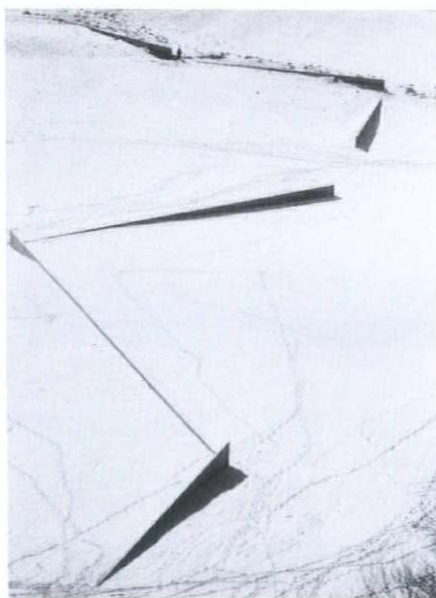
この公園の場合、このような二項対立的関係を生み出す直接のきっかけとなっているのが、広場の地下につくられた駐車場という明白な機能であることは興味深い。「余白」はそれ自身で定義されるものではなく、「充実」との差異によって発生する。余白という機能も、明確な機能(駐車場のよう)が併置されることによって、その「裏側に」発生し始めるのかもしれない。

並列された余白

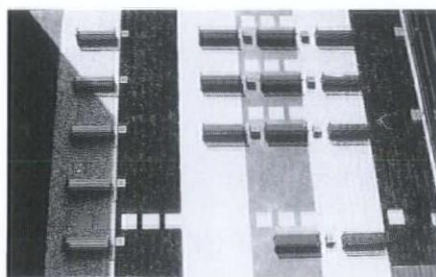
高橋淳司

Shift——1
artist: Richard Serra
"Richard Serra Sculpture", MOMA
日本IBM幕張ビルディング——2
landscape architect: Peter Walker
SD9407

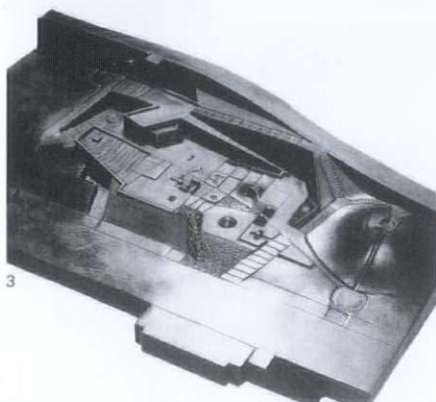
Riverside Drive Park Playground——3
designed by Isamu Noguchi + Louis Kahn
"Play Mountain Isamu Noguchi + Louis Kahn"
マルモ出版
Plaza de la Constitution de Girona——4
architect: Elias Torres & Martinez Lapena
El Croquis 61



1



2



3



4



4

1. 決定、コントロール

チュミのラ・ヴィレットが代表的な例ではないかと思うが、最近の公園は飽和状態の都市からこぼれ落ちたいろいろな意図(多様なデザイン・ヴォキャブラリー、理論、機能等)に満ちてきている。これらはその余白の空間に重ねられ、ハード(公園の物理的な要素)とソフト(そこで起こる、もしくは起こる可能性がある出来事や公園の背景にあるコンセプト)の両面で、人間の手が届く範囲、コントロールされる範囲が広がってきている。グラフィック・デザインのように綺麗な図面がそのまま現実の空間や自然に写されたような多様なエレメントは、抽象的なままで現実へ融解していない。また、そこでのアクティビティは、コントロールされた舞台の上の出来事のように、一種の綺麗事で終わってしまうようなつまらなさが隠れている。

2. 偶然・自由

公園は、都市における一種の余白(margin)なのかもしれない。そこには眼に見える形もなく、決まった機能もない。だが、公園が都市の方向指示器、または触媒として持っている力は、決して小さい(marginal)ものではない。公園は、あらゆるものの排除によって公園になる。経済的利益の排除、機能的な配慮の排除、所有主体の排除、使用主体の排除。この排除によって、セントラルパークや新宿御苑で一時的に過ごす都市民は、自然回帰の錯覚を覚えるのだ。公園という公共のオープン・スペースは、ある特別な自由を確保されている場所であり、そこ

で起こるイベントは自然、偶然、変化に対して開かれている。その点で、最近のミニマルなデザイン手法は、一見そういった「余白」「排除」に近いように見えるかもしれない。しかし、その還元プロセスの中で「自由」をも排除してしまっている点で、非常に人工的であり、また高度にコントロールされたものであると言えるのではないだろうか。

次に紹介するふたつの公園は異なるミニマルズム、つまり、手法のミニマルズムを見せてくれる面で興味深い例である。

3. 異なるタイプの排除・余白

The Parks of Louis Le Royは、ル・ロイによって少々変わった公園として計画された。Heerenveenにある〈The Ecological Cathedral〉(3ha)では、草が茫々と生えている中で半分崩れかけているようないくつかの構築物が建つ。それら小道やアズテック風のピラミッドは、1983年以降、ル・ロイやボランティアたちが素手、または手作りの原始的器具でこつこつとつくり上げてきたものである。作業はすべて無償で行われた。材料は工事現場や道路工事であまったセメント、煉瓦、芝生がついた土、砂等、高額で廃棄処理されるはずのものを利用し、植栽は地元の自生植物なので維持管理は必要ない。

この公園の生成過程には複雑な関係、プロセスの排除がある。つまり、デザイナー、施工会社、そしてテクノロジーは存在しないのである。公園がどのような姿になるかは、ル・ロイ自身も知らない。これは、予測不可能な新しい実験であり、自然や人間

等変化を加える要素、つまり未来に対して、オープンな意味する。「我々が公園に期待することは、開放、無法、記憶の喪失をユーモラスにかなえてくれることである」と言うル・ロイには、「方法」に対する批判的な態度が見られよう。

Hermanの牧草地

ここで紹介するHermanとSusanne de Vriesの作品は、公園と言うよりはむしろ、庭の形式を取った自然博物館に近い。彼らは、10年ほど前にEschenauという小さな町の近くに400㎡の土地を買い取り、過剰な人工肥料を含んでしまった土質を元の状態に戻すことを始め、さらに近くで採集した植物の種を撒くことで、その牧草地固有の生態系を再現した。周囲とは灌木の茂みでつくられた境界によって分離されていて、敷地内で特別に目に付くのは立入禁止のバラの領域や、急な天候の変化の際の来客者の保護になるシデの輪だけである。来客者は決められた路の上を歩く。年々、数種の植物が増加し、その増加による理想的な生存条件の成立に基づく動物、昆虫類の敷地内への移住することで、遠くからみてもこの土地は周囲の工業農業地とは異なる環境である事は明らかである。この保護されたパラダイスは、ひとつの皮肉にも思える。手を加えることによって「自然」を露にする。そこには保護され、コントロールされた混沌が存在する。このプロジェクトは、人工のプロセスの排除であり、同時に自然のプロセスの生きた博物館となっている。

方法の余白

宋 知殷

Louis Le Roy and his Pranks—1
"Daidalos" 59
Herman's Meadow—2
"Daidalos" 46



1



2



1



2



2

公園をいかにデザインすればいいか、という議論は近年盛んに行われているように思う。緑地に園路があって悪くない景によって構成された公園は、デザインの放棄であるかのようにしばしば批判される。オルムステッドのセントラルパークは、そうした超えるべき対象としての公園という語の代名詞として、しばしば取り上げられる。21世紀の都市公園の在り方を問いて物議をかもした、バリのラ・ヴィレット公園のチュミの1等案もまた、オルムステッドの考え方を名指して批判し、「緑の空間としての公園の概念はもはや現代の文化的公園に当てはまらない」と言い放っている。彼の既存の公園に対する問題提起は的を得ていて刺激的なものであったが、解として提出された「物質のシステム(点)」「動きのシステム(線)」「空間のシステム(面)」という3つのシステムと「植栽の網」という構成の論理が、あまりに明快であったがゆえにか、ここにはひとつの重要な見落としがあったように思われる。

チュミの指摘にも触れられていたが、公園は都市においても非都市においても、余白というか、あらゆるシステムの法からの避難場所になってきたことは間違いない。緑地や公園は、都市計画を行う際の善の切り札、論理の逃げ場として、また、フリーマーケットをはじめ、物売り、あるいは麻薬の密売者の唯一パブリックな商売場として、失業者の都市住居からの避難場所としても機能する。ギャラリーをもてない芸術家や劇場をもてない俳優、また、建物だらけの都市から鳥などもここに集まってくる。すると今度は健全な都市生活者もこうしたものを消費しにやってくることになる。公園は、そうした多様なレベル、種類の人や物、その他の生き物などの活動が複雑になればなるほど、その公園の許容する領域の都市に裏側から限りなく近づいてくるとい

る。しかし公園とは、住宅その他の用途の入り込めない都市の文化ゾーンと近似されるものなのだろうか。安全かつ清潔に、しかも正常にある状態を保ちながら公園を形成する要素が維持・管理されるためには、やはり、公園はそれ自体が都市を形成しなければならないのだろうか。オルムステッドの公園の思想は、20世紀になって顕在化する都市の社会的問題を予測してつくられてはいないが、ここには土地相応の自然に即した維持システムが確かに存在した。ラ・ヴィレット公園においては、積極的に都市的・文化的な要素が人の活動、流れをつくり出すシステムとして取り込まれたが、デザインの方から要素自体、あるいは公園全体の維持・管理システムについての積極的提案はなされなかったように思われる。

Papago Parkは、アメリカ合衆国のアリゾナ州の州都フェニックスとスコッツデールとテンペの都市境界に立地する。その多くの部分は、砂質の土壌の広がる乾燥地帯であり、1929年までに国家事業による自然公園(サボテン公園)として整備されたのに始まり、1941年に巨大なベンケイチュウ(サボテンの一種)を植えたことで、より見られることを意識した自然植物園として整備された。そして、1992年のCity Boundary Projectに至る40~50年間に、この広大な一帯は、こうした砂漠植物園の他、動物園、軍用地、ゴルフコース、スポーツセンター等を利用され、縦横に3都市を結ぶ道路も整備された。これに伴い周囲は都市化した。その反面、多くの植物は枯れ、25本のベンケイチュウも1本を残すのみとなり、公園部分は廃墟のようになってしまっていた。

City Boundary Projectの計画は、300ものコンベ案から選出されたもので、ランドスケープ・アーキテクトのスティーブ・マルチノとアーティスト

のジョディー・ピントによる。チュミの計画と比較するにはあまりに小規模でかつ立地条件も異なっており、それ自体は1960年代から盛んに行われてきた、いわばアースワークの出口としても位置付けられようものだが、ここには、公園に求められるもうひとつの最も重要なシステムが提示されているように思えてならない。新たに計画されたのは、フェニックスとスコッツデールの都市境界線上に位置するフェニックス側からの入口部分で、高さが6ft(約1.8m)で、650ft(約195m)を真っ直ぐに伸びる石の構築物と、そこから出る7つのテラス部分であり(植栽その他の整備も行われている)、この石の構築物は真ん中に溝が切られていてこの地域には希少な雨水を集める水路橋を成し、わずかな量の水がテラスにしたたり落ちる灌漑装置として機能している。これは、インディアンが古来用いていた運河建設技術に応用したもので、石材の不良品を集め、安価な材料を駆使して巨額の労働力で積み上げられたという。

これは、直接的に都市公園などに求められる集客力や公共性の問題とは関わらないが、その土地ならではの自然のシステムと公園との関係、実際の公園をデザインする方法のきわめてシンプルな思想をもった例であると思われる。都市計画的、あるいは計画学的論理、その他の様々な人の活動に関わるシステムの構築が重要なことは明らかではあるが、それ以前に、こうしたもっとも基本的な自然維持システムの論理の構築を再認識する時期に来ているように思われる。これなしでは、どんなに優れた公園デザイン論も片手落ちではないだろうか。公園が、あらゆる機能なき機能を誘発する場として機能するための必要条件として……。

自然維持システムのデザイン

山内彩子

Papago Park City Boundary
Landscape architect: Steve Martino & Associates
"Landscape Architecture"9211



アシンブトートによるこの怪物のような装置〈ステイル・クラウド〉は、公園、広場、映画館、図書館、ギャラリーなどからなる都市施設である。そして今、その計画地が「ハリウッド・フリーウェイの中央分離帯の上」という、まさに都市の「隙間」であることが今回のテーマに関連して非常に興味深い。

論を進める前にまず、ここで述べようとしている「余白」とは何か? から始めてみよう。いや、「余白」の再定義にあたって、この問いかけ方はよくない。私たちは、このように問うては永遠に事態が停止したままであることを気付かなければいけないのだ。「余白」とは、決して現前することのない未来に与えられる名であり、あるいは、私たちの認識からどこまでも逃れていく運動のことなのだから。よって、ここでの問いかけは「～とは何か」でなく「～は如何にして表出可能か」という方法で成されなければならない。加えて、ここで教科書的小さいおさらいをするならば、今問題としている類いの「余白」とは「働きとしての場所」ないしは「無の場所」と言ってしまうのもよいであろう。それは、函数 $F(X)=X^2$ の F (=Function: 働き) のように、それ自体としては非在であるが、何か ($X=3$) が代入されることでその応答 ($Y=9$) が表出してくるような「働きそのもの」(2乗するという働き) のことである。この「2乗する」という「働き自体」に、何ら実体があるわけではないにもかかわらず、それでもなお、確実に影響を及ぼし得る「基底としての場所」。言い換えればそれは、我々の意識が自身の中に、ある映像を思い描く時、その映像が表出してくるために必要とされる真っ白なキャンパス(意識の)にも似ていよう。このキャンパスの無としての在り方、ないしはある種の作用性こそが「余白」という言葉で定義可能なものに他ならない。「余白」

はいつも隠されたままであることによって可能性としてのみ機能し、あらゆるものに対して開かれている。それは「ただの何もない状態」(=「隙間」)と一見似ていて非なるものであり、「無限に他のものに成り代わり得る」という点で、すべての可能性を所有している。卑近な例として、TVの画面や龍安寺の石庭、ないしは能面などを思い起こしてもよからう。これらは、作動しない状態では何も映されることのない単なる「隙間」であるが、電波や意識や光といった代入物が挿入された瞬間、「無限に他のものに成り代わる」ことの可能な「余白」なのだ。

この点で、アシンブトートのこの作品は、そのスバルタンで過剰な面構えからだけでは批評不可能な地点に自身の意図を晒している。それは、外観上の一見至極モダンスティックな構成からのみ想像可能な機械的プログラムとは異なり、光学的装置や監視テクノロジー、可変式水族館、可動映画館といった、ある種のエレクトロニクス装置同士がコネクターで結ばれ得るようなより希薄な空間である。これらが現代情報都市の超高速の運動性と共振しつつ事件発生時の振動数を増幅させてゆくのだ。この装置の意図は、独身者機械的な「機能の余剰」とは明らかに異なるものであり、いわばそうしたモダンズムが捏造してしまった二元論的(母性構造や父性構造の捏造と除外の図式)な「向こう側」から帰還しようという決断の現れであると言ってしまってもよいかもしれない。

そしてさらに彼らは、そうした二者択一自体を生み出す基底にある(一元論的)「場所」ないしは「余白」を、超高速で疾走する運動性と共振させることで、出来事の反復・自己差異化を際限なく繰り返し、その酷使の結果としての「あらゆる可能性の喪失」=

「新たな余白」の(非)地点に勇敢にも賭けを挑んでいるかのようなのだ。繰り返せば、彼らの決断は従来の、都市の「隙間」(中央分離帯)を「働きとしての『余白』」として作用させる姿勢に変わりはないものの、しかしそれらを意味で「充満」させようといった善意や、あらゆるものを「消去」してしまおうとする禁欲的身振りのいずれかによって最終的には何らかの終止符を打ってしまうことを意味しているのではない。そうした二者択一システム自体を作用させる「場所」を、有限回の「濃い」事件発生フィールドとして捉えるのではなく、想像のみが可能な非在の「空白」に向かって限りなく共振の反復を機能させるゲームとしてこの装置を想定しているのだ。

であるから、この勇氣あるゲームに、もはや「アガリ」はなく、「アガリがないというルール」のみが、ただの中央分離帯を情報都市ロス・アンゼルス「新たな余白」たらしめることを可能にしている。そして、その報酬として彼らは、たかだか一種の「目眩」にも似たものをここで手に入れることを望んでいるだけなのかもしれない。

こう考えてみると、このオプティミスティックな「暴力的犯行」の計画された場所が、60年代ヒッピー文化発祥の地であったこともあながち偶然とは思えないのだが。

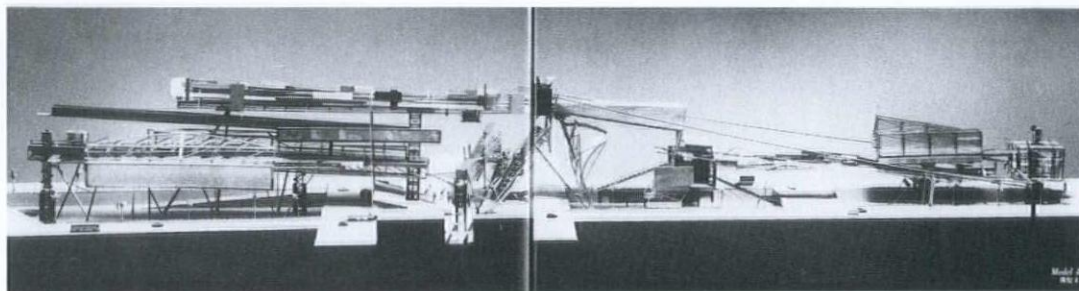
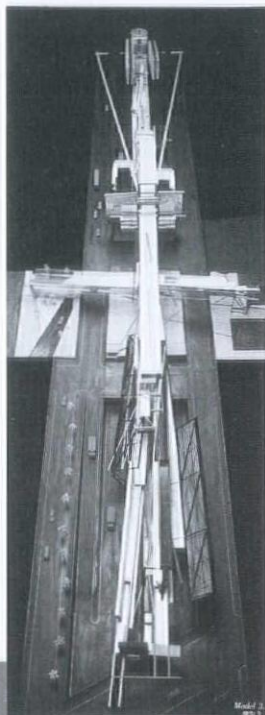
その名の通り、無限遠点においても決して交差することのない線の運動を示すアシンブトート(漸近線)は、この鉄の塊が永遠にロス・アンゼルス「明快な水平線と交差しないことを確認しつつ、そしてさらに、それへの返答が永遠に先送りされることを知りながらも用意している問いは多分こうである。

「もうすべての事件は終了したのか?」と。

余白のマシン

前田紀貞

Los Angeles West Coast Gateway/Steel Cloud
architect: Asymptote
a+u 9404





ル・トロネ修道院／写真＝堀内広治

9610

特集

中世の光と空間

——フランス中南部のロマネスク建築

キリスト教精神に裏付けられたヨーロッパ中世文化のもとに発展した教会・修道院建築。高い精神性をもって築き上げられたこれらロマネスク建築のもつ、荘重で力強い石造り建築の空間は、今もなお人々を魅了する。本特集では、幾何学・回廊・彫刻・石積み・イスラム・ランドスケープ等々のキーワードをかがね、クリュニー派、シトー会派を含めたロマネスク建築のもつ空間の解析を試みる。

[紹介予定建築]

ル・トロネ修道院、シルバカンヌ修道院、セナンク修道院、サン・マルタン・ド・ロンドル教会、サン・タンドレ教会、サン・ミッシェル・ド・キュクサ修道院、サン・マルタン・ド・カニグー修道院、他約30例。

[文]

香山壽夫、羽生修二、馬杉宗夫、西田雅嗣、河辺哲雄、山田幸正、渡辺道治、饗庭孝男

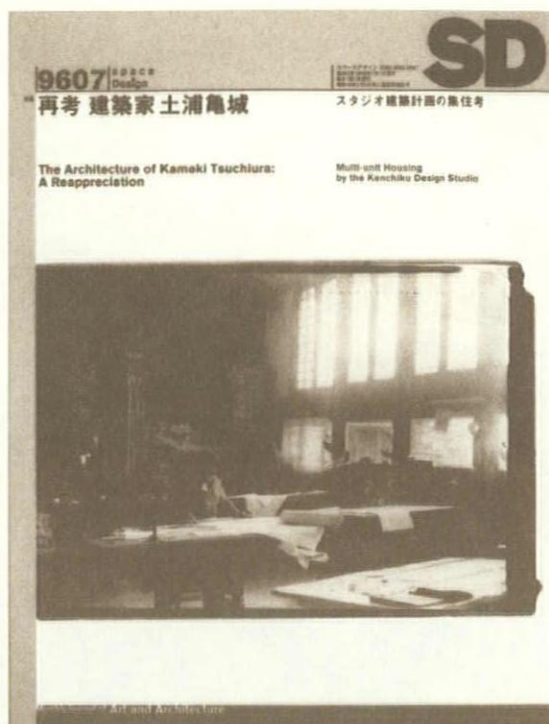
[写真]

堀内広治

連載：トムの時空形象学 13／戸村 浩

SD

バックナンバー



9607

特集

再考 建築家土浦亀城

本特集では、当時のモダンな社会、生活、文化を通してつくられていった、自邸を含む戦前、戦後の建築作品を紹介し、昭和初期モダニズムにおける、土浦亀城の建築の再評価を試みる。

〔作品〕

1. ライト・スタイルとインターナショナル

山懸邸、山本邸、大脇邸、谷井邸、土浦邸（第1）、土浦邸（第2）、トクダビル、俵邸、岩出邸

2. 都市生活と余暇

保坂病院、竹原邸、長谷川邸、野々宮アパート、強羅ホテル、国際観光会館

〔文〕

土浦亀城、西澤泰彦、岸和郎、小川信子、他

〔土浦亀城と同時代建築家たち〕

アントニン・レーモンド、遠藤新、吉田鉄郎、山口文象、前川國男、谷口吉郎

特集2

スタジオ建築計画の集住考

最新作FH・HOYA-IIを中心に取りあげながら、スタジオ建築計画の集合住宅における設計思想を紹介する。

〔写真〕 大野 繁

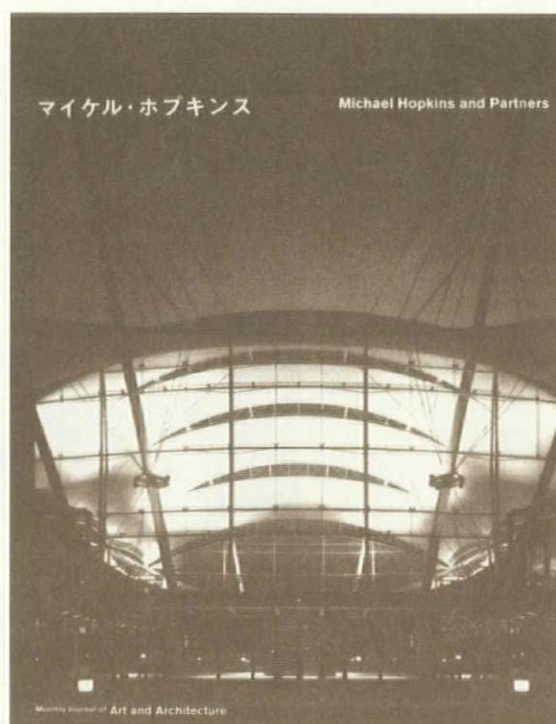
〔文〕 元倉眞琴、宇野 求、矢代真己、今川憲英、高間三郎、井上洋司

連載：apple tomology トムの時空形象学 10 〔文〕 戸村 浩

連載：ヤマトホテル巡礼 5 〔文〕 ホテル文化研究会、竹山聖

照明探偵団：連続実践講座レポート 5

定価＝1,950円／本体1,893円



9608

特集

マイケル・ホプキンス

フォスター・アソシエーツからの独立後、1976年の自邸設計を機にイギリスのハイ・テク派の一人としてデビューしたマイケル・ホプキンス。その後も一貫して「技術と空間」に関心を持ち「構造上の表現をクリアにすること」を心掛け設計を続けている。本号では、決してデザイン上の派手な細工に陥らず、素直な表現でまとい上げるM.ホプキンスの主要作品を、ディテールを含めながら紹介する。

〔作品〕

ホプキンス自邸、イギリス国税局新庁舎、グラインドボーン・オペラハウス、ブラッケン・ハウス、シュルンベルジェ・ケンブリッジ研究所デヴィッド・メラー事務所兼ショールーム、ローズ・クリケット競技場マウンドスタンド、新国会議員会館、トッテナム・コートロード駅再開発計画、マンチェスター市立美術館、プリストル2000ワイルドスクリーン・ワールド計画

〔文〕

ケネス・フランプトン、佐藤親英、難波和彦、マイケル・ホプキンス

光と空間の夢を訪ねて

ドナルド・ジャッドのチナティ財団と

ウォルター・デ・マリアのライトニング・フィールド

〔文〕 南條史生

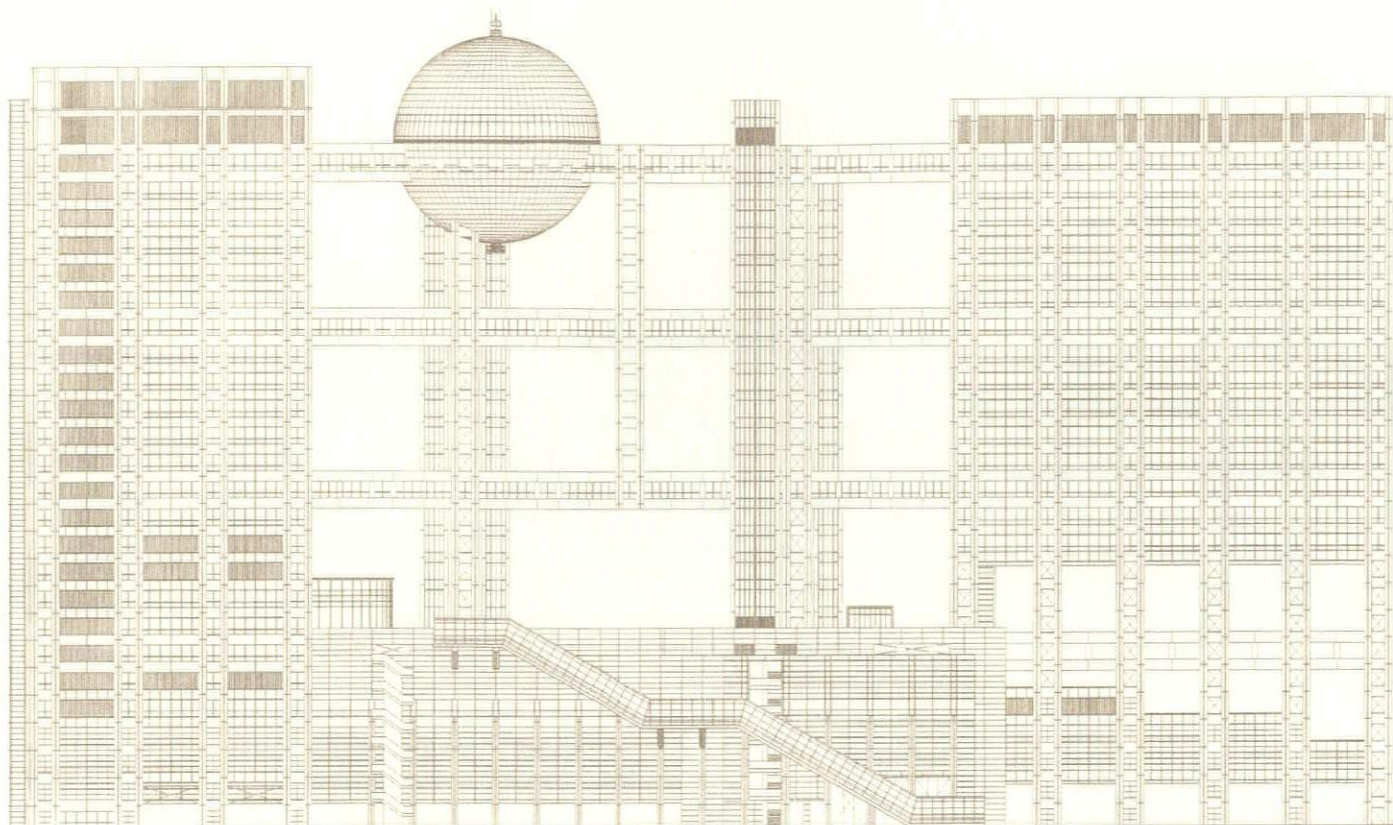
連載：

トムの時空形象学 10／戸村 浩

ヤマトホテル巡礼 6(最終回)／横川公子

照明探偵団：連続実践講座レポート 6

特別定価＝2,400円／本体2,330円



SD別冊29

判型・体裁：A4判変形・並製
総頁：168頁

フジテレビ本社ビル

1996年10月中旬発行予定

臨海副都心台場地区に建設されたフジテレビ本社ビルは、豊かな人間性と文化性を取り込んだ創造的な空間を、都心部地域では得られない恵まれた環境の中で実現している。それはまた次世代のオフィスビルとしての最新の機能と、躍動感溢れる美しさを備えている一方で、放送を中核としたさまざまなメディアの受信・発信基地として高度な安全性と最先端の通信技術を有する。

本別冊では、豊富な写真、多数の図面、文章などにより、さまざまな角度からフジテレビ本社ビルを紹介する。その中には、全体構成の詳細な検討過程、新しい構造システム、最新のスタジオの詳細、直径32mの球体のリフトアップ工法などが含まれる。

建築の設計、施工に携わる人はもちろん、新しい建築技術に興味を持つ人、都市の将来像、放送施設やオフィスビルの未来像に関心のある人などにとっても興味のある内容。

目次抜粋

[プロセス編]

臨海副都心事業とプロジェクトの始まり
基本設計から実施設計までのスタディ

[コンセプト編]

オフィス計画
スタジオ計画
構造計画
設備計画
防災計画
外構計画

[デザイン編]

基準階外装
球体外装
シースルーエスカレーター
1階シアター
展望室
大会議室
V4スタジオ
V9報道スタジオ・オフィス
DAVスタジオ
試写室
ラジオ・スタジオ
[施工編]

SD

SD別冊

既刊 好評発売中

SD別冊は、ひとつのテーマを深く、丁寧に掘り下げ、ユニークで役に立つ情報を提供します。



SD別冊25

近未来型集合住宅NEXT21

大阪市内に建設された集合住宅における環境共生をめざした実験のすべて。エネルギー、リサイクル、環境共生、都市居住、建設システム、素材など、あらゆる面から次世代の集合住宅のあるべき姿を求めて検討を重ねられ、実行された意欲的な計画。スケルトン(骨組)とインフィル(住戸)の設計を異なるチームで行う設計体制も注目される。その全貌を関係者が総力を挙げて執筆・編集。環境共生住宅の最前線を知るには不可欠の内容。文=内田祥哉、巽和夫、高田光雄、近角真一、高間三郎、深尾精一、他。

定価=4,500円

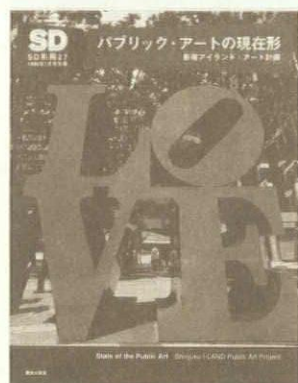


SD別冊26

アパートメントのインテリア

ロンドン、パリ、ミラノ、ニューヨーク、ウィーン、東京。世界の主要都市の、建築家が設計したアパートメントのインテリアを精選。全44例。予想外の素材を用いたり、アートを積極的に取り入れたり、自由闊達な平面構成を試みたり、厳しい制約のもとでも、新鮮な技法、柔軟な発想によって快適な住まいが得られることが知られる。家具やアートの選択から、本格的なリフォームのアイデア集としても役に立つ。文=石上申八郎、小林裕美子、小川守之、安田稔、他。

定価=4,300円



SD別冊27

パブリック・アートの現在形

超高層ビルを中心とした複合建築群「新宿アイランド」のアート計画。リキテンシュタイン、ビュラン、インディアナ、ルウィット、パオリニ、長沢英俊など、建築群の足元の公共空間を舞台に、現代抽象美術を代表する10人のアーティストが競作。彼らと設計者、アートコンサルタントの計画段階での共同作業から、製作、設置までを詳細に記録。本格的なパブリック・アート計画の実務を知るのに最適。文=六鹿正治、南條史生、柏木博、松葉一清、酒井忠康、国吉直行、他。写真=村井修。

定価=4,050円



SD別冊28

大学の空間

ヨーロッパとアメリカの大学23例と東京大学本郷キャンパス再開発。ケンブリッジ大学、ローマ大学、ハーバード大学、ベルリン自由大学、リヨン大学など、いずれも既存の施設や環境を十分に生かしつつ、新たなニーズに対応すべく、段階的なリニューアルを図っている先進的な諸例を、実地調査にもとづいて詳細に紹介する。キャンパスの移転や再開発はもちろん、より一般的に、街区の保存・再生の手引きとして有用。文=香山壽夫、岸田省吾、千葉学、野上恵子、駒田剛司、他。

定価=3,900円

〈改訂版〉

住まいを長持ちさせる100章

棚沢成明著

B6判 224頁 定価1,854円

一戸建住宅に住んでいる人に、これから購入を考えている人のために、少しでも長く住まうための維持・補修の手引書。家庭の医学書のように、構造別・部位別に傷みの原因を探り、その手当ての方法を図入りで述べる。

記憶に残る場所

ドンリン・リンドン、チャールズ・W・ムーア共著

有岡 孝訳

A5判 290頁 定価4,532円

180余枚の直筆スケッチと共に記憶に留めた世界建築の空間構成と感性について、リンドンとムーアの書簡形式で語る素晴らしい著作。空間の製作学ともいえる。欧米はもとよりイスラム・インド・中国・日本にも言及する。

新版 もめごとなしに住宅を建てる法 はじめて家をつくる人のために

島田良一、藤森正男共著 四六判 184頁 定価1,854円

賢く家の売買をする100章

石井勝利著 B6判 242頁 定価1,845円

マンションを長持ちさせる100章

棚沢成明著 B6判 224頁 定価1,854円

庭園の詩学

C・W・ムーア、W・J・ミッチェル、W・ターンブル・Jr.共著

有岡 孝訳 A5判 304頁 定価4,841円

建築の世界 意味と場所

C・ノルベルグ=シュルツ著 前川道郎、前田忠直共訳

B4変形判 268頁 定価8,961円

水の神ナーガ アジアの水辺空間と文化

S・ジウムサイ著 西村幸夫著 A5判 248頁 定価4,017円

SD選書

待望の名著復刊! 〈11点〉

永らく品切れでご迷惑をおかけしましたが、読者の皆様の強いご要望により下記11点を復刊しました。部数に限りがありますので、お早目にお申し込み下さい。

⑦ フランク・ロイド・ライト

アメリカの生んだ近代建築の巨匠フランク・ロイド・ライトが遺した偉大な業績を紹介し、その建築と思想との関連を語る、ライト研究の入門書。

谷川正己著

四六・230頁 定価1,854円

⑫ 新桂離宮論

桂離宮ほど多くの人がとを魅了し、論究され、日本建築・日本文化にさまざまな問題を投げかけた建築はない。本書は著者が小屋裏まで登っての調査をもとに新たな展開を試みて世に問う野心作。

内藤 昌著

四六・268頁 定価2,060円

⑭ 現代絵画の解剖

現代作家は何を求めて現代絵画を描いているのか、ユニークな分析と論理で現代絵画の特質をあきらかにする。現代絵画鑑賞の手引書。

木村重信著

四六・236頁 定価2,060円

⑮ ユルバニスム

レスブリヤーボー露書の一巻。ル・コルビュジェの都市計画の基本理念はすべて本書を出発点としており、ル・コルビュジェの警告は、年月を経た今日もまだ生きている。

ル・コルビュジェ著 樋口 清訳

四六・296頁 定価1,854円

⑰ 私と日本建築

著者は戦時中を除いて、わが国で活躍した第一線の建築家である。本書は彼の講演、評論11編を集めた評論集で、代表作60点の写真を付してある。

A.レーモンド著 三沢 浩訳

四六・260頁 定価2,060円

⑳ イタリアの美術

イタリア・ルネッサンス期からマニエリズム期の芸術家アルベルティ、ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ等の芸術理論を、彼らの作品・著作から論ずる。

A.プラント著 中森義宗訳

四六・252頁 定価2,060円

㉑ 環境とデザイン

アメリカのランドスケープデザインの第一人者である著者が、環境デザインに対する姿勢・計画案のプログラムづくりなど、環境とデザイン・プロセスの間にかかわりあうさまざまな問題を解明した、基本概説書。

G.エクボ著 久保 貞訳

四六・313頁 定価2,060円

㉒ 天上の館

イギリス建築史界の泰斗である著者の西洋建築史論文集。ゴシック建築から、アルベルティ、レンなどを経て、ル・コルビュジェに至る西洋建築の代表的エポックを大胆な史観に基づいて論説した名著。

J.サマーソン著 鈴木博之訳

四六・308頁 定価2,060円

㉓ キモノ・マインド

一外国人のみた日本人及び日本文化に対する興味ある批判の書である。著者は2年間日本に滞在、日本各地をくまなく旅し、執筆したもので、独自の皮肉とユーモアに満ちた興味溢れる書である。

B.ルドフスキー著 新庄哲夫訳

四六・250頁 定価2,060円

㉔ 住まいの原型 II

「住まいの原型 I」の続編。本書では、モンゴル、フィリピン、台湾、インドネシア、インド、エジプト、中南米など、15の地域の住居を取り上げ、各執筆者の視点から、住居本来の有様を紹介する。

吉阪隆正他共著

四六・264頁 定価2,060円

㉕ 続住宅論

人間と空間との新しい緊張関係をつくりだすあらゆる手がかりを、横ざって見た世界の〈共時都市〉の中に、民衆集落の調査の中に、自らの設計の中に求めて、一人の建築家の内部に燃焼する空間理念を謳いあげた評論。

篠原一男著

四六・230頁 定価2,060円

建築関連雑誌

ARCHITECTURAL MAGAZINES' BACK NUMBER FAIR

バックナンバーフェア

'96.10/12(土) ~ 11/11(月)

全国29書店
同時開催

■出品出版社・出品予定誌

- (株)エー・アンド・ユー [a+u]
 (株)鹿島出版会 [SD]
 (株)建築技術 [建築技術]
 (株)建築資料研究社 [住宅建築・CONFORT・造景]
 (株)建築知識 [建築知識・バトマガ・建築知識スーパームック]
 (株)彰国社 [建築文化・施工・ディテール]
 (株)商店建築社 [商店建築・Wind]
 (株)新建築社 [新建築・住宅特集・JA]
 (株)プロセスアーキテクチュア [PROCESS : Architecture・ジャパンランドスケープ]

※増刊・別冊含む

北海道
 ■札幌 丸善 札幌南一条店 4階
 (9/21~10/22)
 TEL.011-241-7254

東北地方
 ■仙台 丸善 仙台一番町店 1階
 TEL.022-224-8018

中部地方
 ■静岡 静岡谷島屋本店 2階 (10/12~11/下旬)
 TEL.054-254-1301
 ■長野 平安堂 長野店 2階 TEL.026-226-4545
 ■名古屋 丸善 名古屋栄店 2階 TEL.052-261-2251
 ■新潟 紀伊國屋書店 新潟店 2階 TEL.025-241-5281
 ■富山 BOOKSなかだ 本店 1階 (10/1~11/17)
 TEL.0764-92-1192

中国地方
 ■岡山 丸善 岡山シンフォニービル店 B1階
 TEL.086-233-4640
 ■広島 丸善 広島本通店 3階
 TEL.082-245-1869

四国地方
 ■高松 宮脇書店 本店 2階
 TEL.0878-51-3733

関東地方
 ■宇都宮 宇都宮ブックセンター 2階
 TEL.028-627-7700
 ■千葉 千葉そごうブックセンター 8階
 TEL.043-245-8331
 ■東京 八重洲ブックセンター 本店 3階
 TEL.03-3281-8203
 紀伊國屋書店 新宿本店 4階
 TEL.03-3354-0131
 三省堂 神田本店 5階
 TEL.03-3233-3312
 紀伊國屋書店 渋谷店 5階
 (10/12~11/2) TEL.03-3463-3241
 芳林堂書店 池袋本店 5階
 TEL.03-3984-1101
 ■横浜 有隣堂 本店 3階
 TEL.045-261-1231
 ■藤沢 有隣堂 藤沢店 4階
 (10/1~10/31) TEL.0466-26-1411

近畿地方
 ■京都 丸善 京都河原町店 3階 (11/1~11/30)
 TEL.075-241-2168
 ■大阪 旭屋書店 本店 4階 (10/1~10/31)
 TEL.06-313-1191
 紀伊國屋書店 梅田店 1階 (10/22~11/9)
 TEL.06-372-5821
 丸善 なんばOCAT店 5階
 TEL.06-635-3225
 ■神戸 ジュンク堂書店 三宮店 B1階 (10/1~10/31)
 TEL.078-392-1001
 ■姫路 ジュンク堂書店 姫路店 7階
 TEL.0792-21-3167

九州地方
 ■福岡 紀伊國屋書店 福岡店 6階 (10/1~10/31)
 TEL.092-721-7755
 ■熊本 紀伊國屋書店 熊本店 1階
 TEL.096-322-5531
 ■大分 本町見星堂書店 2階 (10/12~12/29)
 TEL.0975-33-0231
 ■鹿児島 ジュンク堂書店 鹿児島店 M2階
 TEL.099-239-1221

建築関連雑誌
 出版社9社の
 協賛により、

バックナンバー
 19誌を一堂に出品。

全国主要都市の
 29書店で同時開催。

※一部の書店では開催期間が異なります。



9505 Mega Architecture: Recent Works of Paul Andreu: Introduces some of Andreu's many monumentalscale buildings, railway stations, sports stadiums, and other works. Feature on **The Creation of the Foreign Settlement in Kobe and Its Development.** ¥1,950



9506 The Potential for Using Computers in Architecture: Examines how architecture is being influenced by the use of computers. Architects: Neil Denari, Peter Eisenman, Keiichi Irie, Toyo Ito, Hani Rashid, ARX, Kengo Kuma, Makoto Sei Watanabe, etc.. **Mysterious Design Drawing Exhibition:** T.Ara, F.Enomoto, S.Hisada, N. Iijima, E. Sotssass, S.uchida, etc.. ¥1,950



9507 Takahiko Yanagisawa: Art Museum Space and Detail: Features five museums by Takahiko Yanagisawa, who won the competition for the Second National Theater in 1986. Museums introduced: Utsubo Kubota Memorial Museum; Museum of Contemporary Art, Tokyo; Kazumasa Nakagawa Art Museum, Manazuru; Kiriama City Museum of Art; etc.. ¥2,700



9508 Urban Public Spaces: Features small public facilities designed by architects. Architects: Atsushi Kitagawara, Naoko Hirakura, Shuichi Kitamura, Toyo Ito, Waro Kishi, Kazuko Fujie, Atelier Zo, Koichi Nagashima, Mitsuru Senda, etc. **Digital Urban Design: The New Language for Design Cities:** Introduces new methods by Yanagida Ishizuka & Associates. ¥1,950



9509 Kenzo Tange: Kenzo Tange Associates: Focus on UOB (United Overseas Bank) PlazaTange's last skyscraper, and on the Shinjuku Park Tower which transforms the Shinjuku skyline. Introduces Makuhari Prince Hotel, Bay Square Yokosuka, Hiroshima Peace Center Complex, FCG (Fuji-Sankei Communications) Building, Gran Ecran (Place d'Italie), etc. ¥3,800



9510 Architecture of Response: Recent Works of Cesar Pelli: Introduces recent works by Pelli built around the world, especially in Asia: NTT Shinjuku Headquarters Building, Sea Hawk Hotel & Resort, Kuala Lumpur City Center, etc. **Tower Art in Tsutenkaku:** Introduces an art and architecture exhibition held at the Tsutenkaku Tower in Osaka. ¥1,950



9511 Itsuko Hasegawa: 1985-1995: Introduces 30 works by Hasegawa for 10 years. Works: Museum of Fruit, Yamanashi, Sumida Culture Factory, Ohshima-Machi Picture Book Museum, Footwork Computer Center, House in Kumamoto, Leaf House, Niigata-City Performing Arts Center, etc. Text: Peter Cook, etc. Conversation: Koji Taki and Itsuko Hasegawa ¥3,000



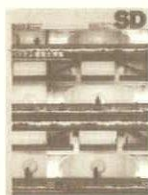
9512 SD Review 1995: Publishing the result of SD Review contest with comments from the screening committee. Participants: Toru Yoshida and Miki Okamoto, Ti-Nan Chi, Tom Heneghan and The Architecture Factory **Villa Romana:** introduce the villa and the gardens in Rome. **Transportation Design by Eiji Mito'oka:** Design of express train and ship ¥1,950



9601 The Architects' Record in the Pursuit of Urban Design: Introduces government's urban projects which are coordinated by architects in Japan: Kumamoto Artpolis by Arata Isozaki, Creative Town Okayama by Shin'ichi Ogawa, Nagasaki Urban Renaissance and Shiroishi Media Polis by Hideto Horiike. Text: Riichi Miyake, Naoyuki Kuniyoshi, etc. ¥2,800



9602 Italian Rationalism: The contemporary meaning of Italian Rationalism. Introduce six Italian architects: Franco Stella, Uberto Siola, Antonio Monestiroli, Arduino Cantafora, Marino Narpozzi, Nicola Di Battista. Works: House in Thiene, Hotel in Via S.Allende, Design for Spreeinsel, Polyptych of Ravenna, The New Cemetery in Flesso D'Artico, etc.. ¥1,950



9603 Contemporary Asia Series 2: A Panorama of Architecture in Vietnam: Architecture and Vietnamese City: Hanoi, Hue, Hoi An, The Champa Ruins in South-Central Vietnam, Ho Chi Minh. Themes: Dwellings of Vietnam's Minority Peoples, Vietnam's Industrial Parks, Contemporary Architecture Today. Text: Y.Shigeeda, S.Nakazawa, S.Muramatsu, etc.. ¥2,500



9604 Transformation of Ground and Light: Australian Architecture 1788-: Shows how Australian architecture has changed since the arrival of first settlers in 1788. Texts and photos: Tokyo Metropolitan University, Kobayashi Lab. **Next Generation in New York: Smith-Miller + Howkinson and Joel Sanders:** Latest works by New York architects. ¥1,950



9605 Architecture of Diversity and Harmony: Recent Works of von Gerkan, Marg and Partner: They are known for the winning of competition many times. Introducing their '90's works including competition designs. Texts: Masahiko Yamashita, Klaus-Dieter Waiss **The Sea and Architecture: Suzuki Ryoji's Latest Work:** Sagishima Project 'Ring', House in Sagishima. ¥1,950



9606 111 Chairs Designed by Architects: Reintroducing 111 chairs designed by overseas architects from 19 century to now. Architects: Adolf Loos, Charles Rennie Mackintosh, Antonio Gaudi, Otto Wagner, Eliel Saarinen, Walter Gropius, El Lissitzky, Erik Gunnar Asplund, Le Corbusier, Mies van Der Rohe, Bruno Taut, Charles Eames, Carlo Scarpa, Aldo Rossi, etc. ¥3,000



9607 The Architecture of Kameki Tsuchiura: A Reappraisal: Reintroduce Kameki Tsuchiura's works before and after world war II. Works: Tsuchiura House I and II, Tokuda Building, Hosaka Clinic, etc. **Multi-unit Housing by the Kenchiku Design Studio:** Introduce the idea of housing which Kenchiku Design Studio have kept showing new FH HOYA-II project. ¥1,950



9508 Michael Hopkins and Partners: Introduce the important works by M. Hopkins and Partners. Hopkins House, The Inland Revenue Centre, Bracken House, Schlumberger Cambridge Research Centre, David Mellor Offices and Showroom, New Parliamentary Building, etc. **Visiting Dreams of Light and Space: Donald Judd's and Walter De Maria:** Text: Fumio Nanjo ¥2,400



Space Design
Hardcover Edition
and Order Form

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. **SD** endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of **SD** is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to **Space Design** and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2560

Or mail the card to:

Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107, Japan
tel: 81-3-5561-2550

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card

Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:

- ☐ Please enter my SUBSCRIPTION to
Space Design,
starting in

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

- ☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of **SD**:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges (¥1,500 per order)
3. Postage (determined upon receipt of order)

Alvar Aalto

A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life: 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2

His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2

Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work: Tsukuba Center Building. Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake

Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980: Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2

13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Seiichi Shirai

Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Saseetsuko, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo

Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brought forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3

29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2

Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyo Ito

9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu

All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiro Hayakawa

His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii

His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany

Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989

Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoen Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut

Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition

Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix: List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections: Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates

Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

Kim, Swoo Geun

Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

Architects Own Houses of the World

Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrick Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

●

張床

ロンリウム ナチュラル

●

ロンシール工業株式会社



ロンシール工業株式会社では、汎用ビニル床シート、ロンリウムシリーズのプレーン（30色）、マープル（30色）、サハラ（12色）に新たに繊細な色柄とソフトな質感で、空間をやさしく彩る、ビニル床シート、ロンリウム ナチュラル、色数12色を新発売した。雲柄をベースに数種のチップを散りばめたソフトなデザインが、空間にやさしい表情を与える。また、重歩行にも耐える耐久性と、歩行時のショックを和らげる適度な柔軟性・弾力性・防滑性などを備えている。酸、アルカリ、アルコール類、塩類などへの耐薬品性にも優れている。継ぎ目はスーパーシームシーラー工法による液溶着なので、強度的にも優れ、また接合部が目立たず、一枚フロアのような美しい仕上がりを実現する。一体化した床面なので日常メンテナンスが非常に簡単である。このようなメリットを備えながら価格を抑えることによって、コストパフォーマンスも実現した。用途としては、文教施設（学校・幼稚園）、医療福祉施設（病院・養護老人ホーム）、公共施設（一般室・廊下・階段、レストラン、デパート、オフィスなどのエレベーターホール・湯沸室など）幅広く使用できる。

標準材料価格

2,600円/㎡

ロンシール工業株式会社

東京都墨田区緑4丁目15番3号

〒130 Tel 03-5600-1821

●

不燃断熱材

セラカバー S

●

ニチアス株式会社



集合住宅・マンションの厨房排気ダクト（スパイラルダクト）の断熱材として東京消防庁をはじめ各消防局の指導で、50mm厚のロックウール断熱材が通常用いられていた。ニチアス株式会社では、この断熱材をなんとか薄くし、ダクトスペースを狭くし、限られたスペースを有効に利用しようというニーズに応えるため、このたび、従来のロックウール断熱材50mm厚と同等の防火性能を有しながら、厚さがわずか20mmというスパイラルダクト断熱カバー、セラカバー Sを開発した。同製品は、断熱無機繊維をバインダーで円筒状に成形し、表面にアルミガラスクロス張ったワンタッチタイプの施工性に富んだ耐火断熱材である。

特長

- ①ダクトスペースを小さくできるため、生活スペースが大きくとれる。天井高さが60mm高くなる。
- ②ダクトスペースを狭くできるため建物の高さが低くなりその分コストが低減できる。
- ③施工は、ワンタッチでできるので、大幅な省力化、工期の短縮が図れる。
- ④切り欠きなど簡単にでき、施工も容易である。
- ⑤外表面がALGCで被覆されているため、水蒸気の透過を防ぐ。

ニチアス株式会社 工業製品事業部

東京都港区芝大門1丁目1番26号

〒105 Tel 03-3433-7200

●

乾式フカシ壁工法

三洋UL壁工法

●

三洋工業株式会社



三洋工業株式会社では、阪神大震災を契機とし、従来工法の欠点をカバーし、より安全性の高いフカシ壁の開発に成功し、画期的な工法、三洋UL壁工法を新発売した。構成は、軽量スタッドとランナーをベースに、接着剤を含浸させたスポンジから成っている。スタッド厚は10mmと極めて薄く、僅か13mmのフカシ幅を可能にした。ウレタン系接着剤を含浸したスポンジは、極めて短時間で硬化して壁面とスタッドを固着し、驚く程の強度を発揮するとともに、工法の乾式化と養生期間の大幅な短縮を実現した。

特長

- ①躯体面から軽量下地組仕上がり迄13mmのふかし幅が可能である。僅か10mm厚のスタッドがこれを可能にした。
- ②従来工法に比べ養生期間が大幅に短縮され、翌日はボード貼りができる。（従来の14日間を2日間に短縮）。
- ③従来工法は、湿式工法のためカビの発生に悩まされたが、UL壁工法は乾式工法のためカビの心配がない。また、結露も防止される。
- ④従来工法では、熟練した左官工が必要であったが、UL工法は、施工が簡単なため、初めての方でも施工できる。

三洋工業株式会社 営業部

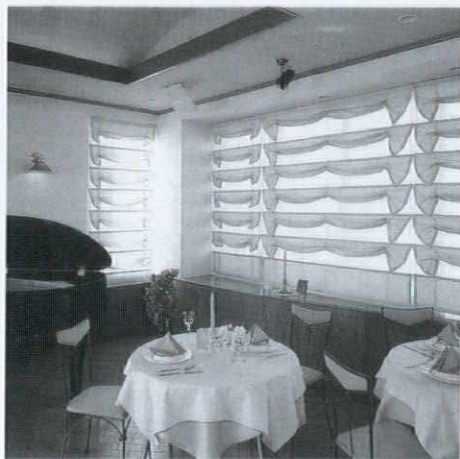
東京都江東区亀戸6丁目20番7号

〒136 Tel 03-3685-3452

カーテンブラインド

リサーチ

株式会社ニチベイ



㈱ニチベイでは、カーテンの美しさと、ブラインドの機能がいったいになったカーテンブラインド、リサーチを新発売した。

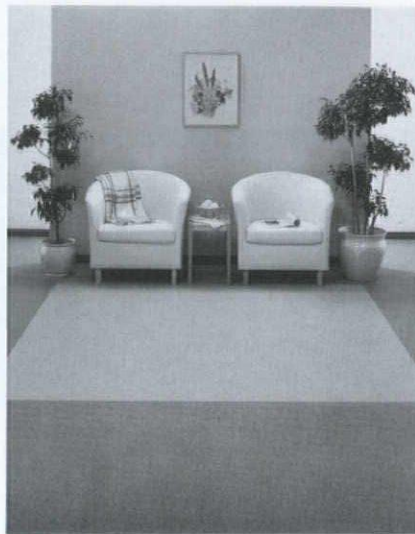
特長

- ①光を取り入れるベース（シースルー生地）と開閉できるフロント（不透明生地）により、調光、視線コントロールが可能である。
- ②スタイルは、バラレルスタイル、トライアングルススタイル、ウェーブスタイルの3スタイル。
- ③色柄は、フロント（不透明生地）35柄、ベース（シースルー生地）はフロントに合わせた15柄。組み合わせは、自由である。
- ④操作方法は、調光はコード操作、昇降はボールチェン操作である。
- ⑤生地は取り外して、洗濯が可能である。全て防炎品である。
- ⑥用途としては、住宅（リビング、リビングダイニング、寝室）・店舗（レストラン、喫茶店、ブティック、美容院）などに使用できる。

張床

スーラズキャビティ

株式会社タジマ



㈱タジマは、カーペット調マルチカラーにより、落ち着いた空間を演出する、重歩行用ビニル床シート、スーラズキャビティを新発売した。同製品は、保温性に優れ、暖か味がある。さらに、滑りにくいエンボス加工を施してあり、防滑性に優れている。そして、表層に特殊抗菌剤を使用しているため、床表面に落下、付着した細菌の発育、増殖を抑制し、常に清潔かつ衛生的に保つ。福祉施設（老人ホーム・ケアハウス・老人保健施設）、医療施設（病室・診察室・待合室・廊下）、商業施設（ブティックの売場・銀行のロビー・ファミリーレストラン）、情報施設（図書館・美術館・博物館・画廊）など幅広く使用できる。

寸法

2.0mm（厚さ）×1,820mm（幅）×9m（長さ）

色数

18色

価格

3,500円/㎡（工事費別）

旗竿

ウォールフラッグ
PWタイプ

昭和ボール株式会社



昭和ボール㈱では、ウォールフラッグ・シリーズに平行巻き上げ機構によるパラワーク方式のウォールフラッグPWタイプを新発売した。同シリーズは、ビルや店舗のエントランス、アーケードなど街並みに生命感を与え、ランドスケープを美しく演出する、機能性とデザイン性に優れた都市景観製品である。

特長

- ①パラワーク方式は、業界初の平行巻き上げ機構によりバランス良く旗を昇降する。
- ②巻き上げ時には本体にワイヤーが収納されるため、すっきりとしたデザインである。
- ③操作方法は、本体下部に設けられた昇降リングを、ハンドルバーを使って操作できるので、地上からでも昇降操作が簡単にできる。
- ④旗の取り替えがスムーズで、季節のイベントごとの空間演出など様々な旗を利用する場所に便利である。
- ⑤高級感のあるシルバーメタリック塗装である。
- ⑥サイズにより3機種。

価格

133,400円～177,800円

株式会社ニチベイ

東京都中央区日本橋3丁目15番4号

〒103 Tel 03-3272-2238

株式会社タジマ

東京都千代田区岩本町3丁目11番13号

〒101 Tel 03-5821-7731

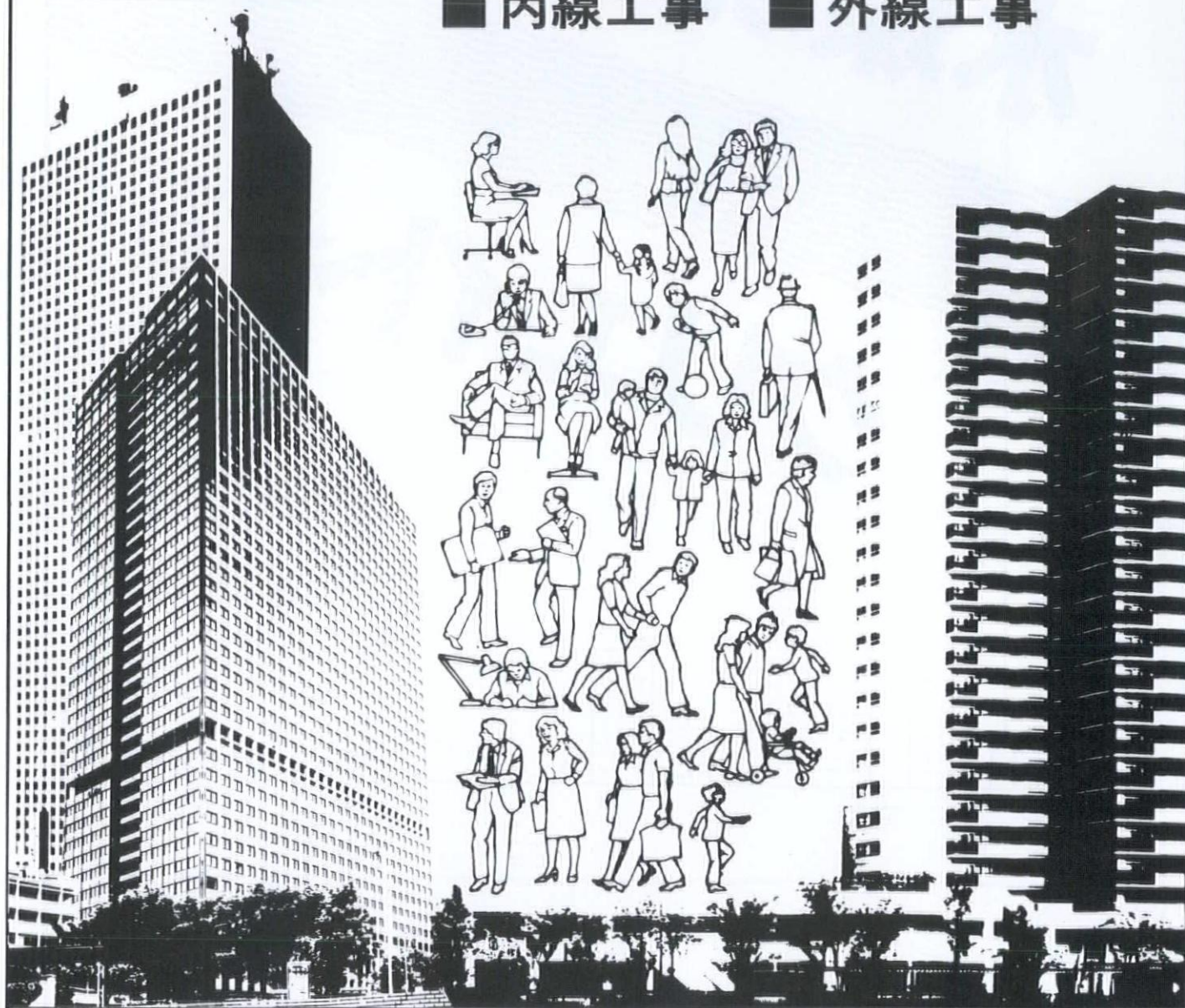
昭和ボール株式会社

大阪府堺市築港新町3丁目6番2号

〒592 Tel 0722-47-2211

技術と伝統の…

■ 内線工事 ■ 外線工事



東光電気工事株式会社

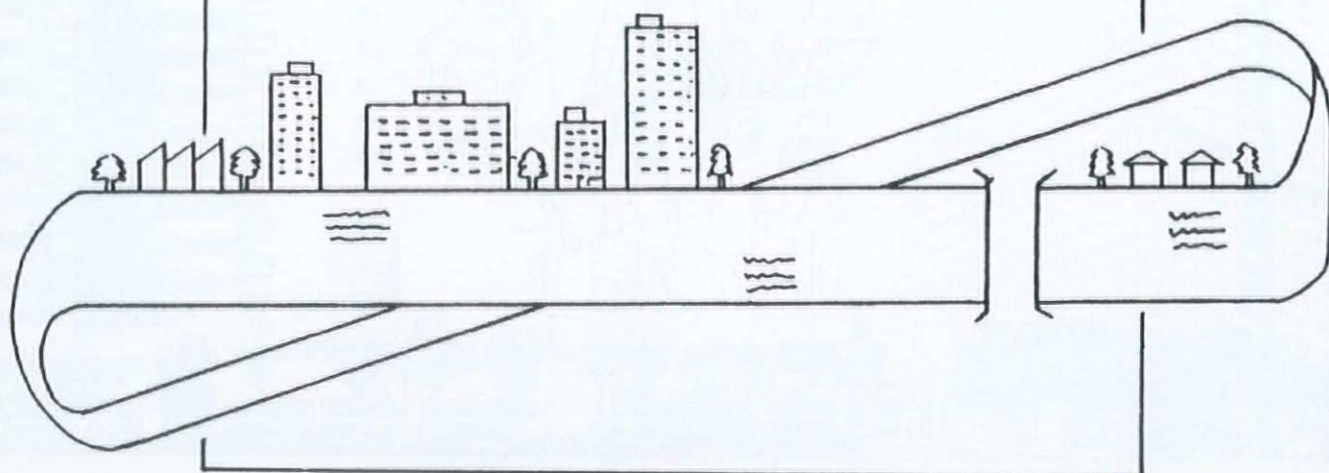
取締役社長 江 原 景

東京都千代田区西神田 1-4-5 千101 電話/東京 3292-2111

支社所在地/札幌・仙台・大宮・千葉・丸の内(東京)・新宿(東京)・横浜・名古屋・大阪・福岡

水環境を

クリエイトする



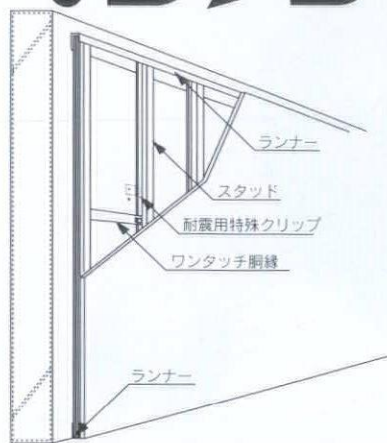
株式会社
西原
衛生工業所

東京都港区芝浦3-6-18
TEL.(03) 3452-7441 大代

支店/札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋

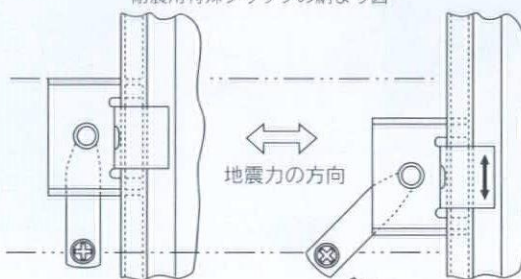
地震に強い!! 層間変位1/60に対応 マンテン® ジシンサク30 地震策 PAT.P

耐震用鋼製仕上材



耐震用特殊クリップを採用

耐震用特殊クリップの納まり図



通常の状態

地震力が加わった状態

耐震用特殊クリップはスタッドを
(レール代わりにして)上下運動する

鋼製天井下地材 ネールロック システム
鋼製間仕切り材 エコニースタッド パーティション システム

避難通路(階段室、エレベーターホール、廊下)には耐震壁が必要です。

【特長】

1. 壁厚の仕上り寸法が小さいので(30mm)、室内空間を有効に活用できます。
2. 外壁からの振動に左右されない「耐震用特殊クリップ」採用により、地震の振動による内壁面の損傷を防ぎます。
3. 壁の高さは3,500mmまで可能です。

考®

誠意・熱意・創意で生きる

株式会社 **マンテン**®

本社 〒556 大阪市浪速区日本橋東1-10-6 TEL(06) 644-2151
東京支店 〒136 東京都江東区亀戸 2-3-17 TEL(03) 3683-6151
札幌 TEL(011) 783-8661 横浜 TEL(045) 451-6245
名古屋 TEL(052) 661-9511 高岡 TEL(0766) 24-5506
福岡 TEL(092) 611-2180 台湾 TEL(001886) 2-719-9526

N 日章工業株式会社

- 本社 〒101 東京都千代田区内神田 3-11-7 (日立神田別館) ☎03-3254-3000
- 大阪支店 〒541 大阪府中央区高麗橋 2-4-6 (大正不動産ビル6階) ☎06-201-5704
- 仙台営業所 〒980 仙台市青葉区中央 3-2-27 (日産生命ビル) ☎0222-21-6989

日立製作所エレベーター・機電特約店
日立製作所OAシステム特約店
日立金属フリーアクセス、ハイベース特約店
旭化成建材パイル・ヘーベル代理店
大和ハウス工業代理店

施設商品

エレベーター・エスカレーター
立体駐車場設備(新明和工業)
バスユニット(日立化成工業)
住宅機器類
集中浄化槽
受水槽
ソーラー
受変電設備

自家発電設備
無停電定電圧定周波電源装置
ビル監視制御装置
冷暖房空調設備
通信設備
ターボ冷凍機・吸収式冷凍機
各種ポンプ設備・換気設備

OAシステム機器

パーソナルコンピューター
ワードプロセッサ
ファクシミリ
オフィスコンピューター

建材商品

AHSパイル
ヘーベル
フリーアクセスフロア

ハイスプリット・ハイベース
鉄骨
大昭和ユニボード

建設商品

クローラクレーン
ショベル
軽量鉄骨プレハブ規格建築物
軽量鉄骨系プレハブ住宅

OSAKI 

集中管理 だけじゃ物足りない。

かゆいところに手が届く、ビル管理システム **OSMAC-mini** 中央監視装置オスマック・ミニ

いまやビルは集中管理の時代。照明や空調も定時にON、OFF。無駄な手間も経費もかけず、ビルを一括して制御できるようになりました。しかしビルの機能は様々。テナントや企業、そこで働く人の事情も多様化しています。OSAKIは、ビル設備の制御を画一的ではなく、ビルの利用者一人ひとりのニーズに対応できるものであるべきだと考えています。中央監視装置OSMAC-miniは従来の設備機器のスケジュール運転に加え、各テナントからのコントロールで、スケジュール時間外の運転を可能にし、各テナントごとに料金算出のためのデータを集計できるシステム。ビルをもっと生き生きと活動させるための、隅々にまで神経が行き届いた管理を実現します。

特 長

- 基本スケジュール運転の他に各テナントから時間外操作が可能。
- 時間外運転時間は各テナント単位に積算され、1ヶ月毎に料金管理データとして印字。
- 登録された機器の運転時間を積算し、表示・記録。
- 全全停点数に対してスケジュールを任意に設定、年間の休日指定も可能。
- 全停点数最大48点、負荷監視点数最大96点と豊富な管理点数。
- 故障および警報信号を外に取り出せるので、無人管理が可能。
- 設定操作は画面との対話設定メニュー方式で、使い易いシステム。
- 盤内のケーブルレス化により小形・軽量・低価格。

主な仕様

- 定格電圧/100V±10% ●定格周波数/50Hz、60Hz共用 ●管理点数/運転監視入力…48点(増設タイプ96点)、故障・警報監視入力…48点(増設タイプ96点)、テナント操作入力…20点、免許制御出力…48点、警報移報出力(電力)…4点、警報移報出力(一般)…8点 ●表示/5×7ドット モノグリーン蛍光表示管 40×4行、運転時間表示、時間外運転時間表示、カレンダー表示、当日プログラム表示、システムテーブル内容表示 ●設定操作部/シートフラットキー、蛍光表示管との対話方式 ●記録/停電記録、状態変化記録、故障・警報記録、日変わり記録、時間外運転記録(日報、月報)、個別免許操作記録、運転時間記録、カレンダー設定変更記録 ●停電補償/240時間 ●外形寸法/壁掛形48点タイプ…600(W)×1100(H)×230(D)mm、壁掛形96点タイプ…600(W)×1350(H)×230(D)mm、自立形…600(W)×2000(H)×400(D)mm

大崎電気工業株式会社

本社/〒141 東京都品川区東五反田2-2-7
システム機器営業部第2課 ☎03(3443)7176

大阪支店 ☎06(373)2556 札幌営業所 ☎011(251)6622 仙台営業所 ☎022(223)3747 千葉営業所 ☎043(221)5714
横浜営業所 ☎045(664)5561 広島営業所 ☎082(243)1611 沖縄営業所 ☎098(832)7406

SD誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご用命ください（五十音順）

東京——東京都中央区銀座8-2-1

新田ビル (3572) 3381

FAX (3572) 3590

大阪——大阪市北区西天満3-6-8

笹屋ビル06 (362) 6515

FAX 06 (365) 6052

東京——東京都文京区湯島2-30-8

(3818) 1961

FAX 03(3818)1968

大阪——大阪市中央区淡路町1-4-9

昭栄ビル06 (231) 4548

FAX 06 (227) 0268

東京都中央区八丁堀2-1-10

ハヤシビル (3552) 8247(代)

FAX (3552) 8249

大阪——大阪市北区浪花町14-25

日本生命天六ビル06 (379) 1791

東京——東京都千代田区岩本町2-5-12

神田ポンビアンビル (3863) 6011(代)

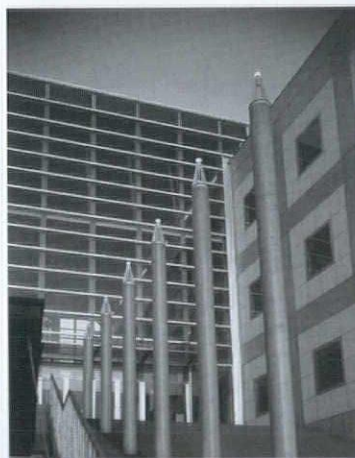
名古屋——名古屋市中区錦2-2-13

名古屋センタービル052 (221) 7641(代)

オ	大崎電気工業株	A18
カ	株関電工	表4
	鹿島	A4・A5
	軽井沢ホテル鹿島ノ森	A6
キ	株きんでん	A12
サ	三機工業株	116
	三建設備工業株	117
シ	新菱冷熱工業株	121
ス	住友電設株	A10
タ	高砂熱学工業株	表2
	大興物産株	A8
	ダイゲン株	A11
	大栄電気株	A11
ト	東陶機器株	A1
	東洋熱工業株	122
	東光電気工事株	A15
ナ	中立電気株	A9
ニ	日新工業株	A3
	株西原衛生工業所	A16
	日章工業株	A17
ヒ	ビーエス株	表3
	日立電線株	120
ホ	ホテルイースト21	A7
マ	松下電器産業株	A2
	株マンテン	A17
ヤ	山田照明株	A20
ロ	ロンシール工業株	109

表情多彩

照明は空間づくりの重要なポイント。
人々に、常に気持ちよく空間を利用してもらいたい・・・。
山田照明ではさまざまな条件やニーズを満たすために、
多種多様な照明器具を用意。ベストなあかりで、
ひとつひとつの空間を、個性的・機能的に演出し、
表情多彩な空間創造を力強くバックアップしています。



学校法人 サレジオ学院 (神奈川)



山田照明株式会社

本社/ショールーム 〒101 東京都千代田区外神田 3-16-12 TEL 03-3253-5161 横浜支社/ショールーム 〒220 横浜市西区南幸 2-20-1 TEL 045-311-1731
仙台支社/ショールーム 〒980 仙台市青葉区二日町 1-1-1 (ANDOビル) TEL 022-267-1630 大阪支社/ショールーム 〒542 大阪市中央区日本橋 1-21-23 TEL 06-643-3421
福岡支社 〒810 福岡市博多区店屋町 8-30 TEL 092-282-7635 名古屋営業所 〒460 名古屋市中区 5-16-14 (新東宝ビル) TEL 052-252-5161 札幌営業所 〒003 札幌市白石区菊水七条 2-61 TEL 011-811-2215
北関東営業所 〒370 高崎市緑町 3-14-8 TEL 0273-63-1442 千葉営業所 〒260 千葉市稲毛区緑町 1-25-14 TEL 043-244-2540 静岡営業所 〒420 静岡市西草深 2-3-9 TEL 054-247-0811
広島営業所 〒730 広島市中区十日市町 2-2-34 TEL 082-293-6119 鹿児島営業所 〒890 鹿児島市上之園町 4-14 (新和ビル) TEL 0992-58-0031 宇都宮出張所 〒182 宇都宮市海道町 818-2-1002 TEL 0286-60-1381
長野出張所 〒380 長野市三輪 2-9-27 TEL 0262-43-8420